

種子島民俗調査報告書(2)

西之表市の民俗・民具

第 2 集



平成 9 年 3 月

調査 鹿児島大学比較民俗学研究室
鹿児島民具学会種子島調査班

発行 鹿児島県西之表市教育委員会

表紙写真の説明

シュウタ突き。新暦1月15日、西之表市をはじめ島内各地で集落ごとにハマ祈禱が行われる。ハマ祈禱の仕方はいろいろあるが、丸い的を作って皆でそれを射たり、突いたりする。

西之表市^{びんなほんむら}現和本村の下之町^{しものちよう}では、現和小学校のそばにある菅原神社の前庭で、人びとが竹槍を持って、一人の人が投げる丸いワラ製のシュウタを突く。さいしょにうまく突いた人はその年の年男として賞讃され、突いたシュウタはその人のものとなり、床の間に1年間飾っておく。写真は昭和42年頃撮影したものである。

この行事は、集落にやってくる悪霊を弓や槍で射たり、突いたりしてやっつけるという趣旨である。ハマとは本来丸い輪のことをいうが、のちには「破魔」の文字をあてるようになった。

1月11日、^{いりん}栖林神社弓場^{いぼ}で行われる大的始め式も、農村のハマ行事と同じ趣旨の行事であるといえよう。
(撮影と説明、下野)



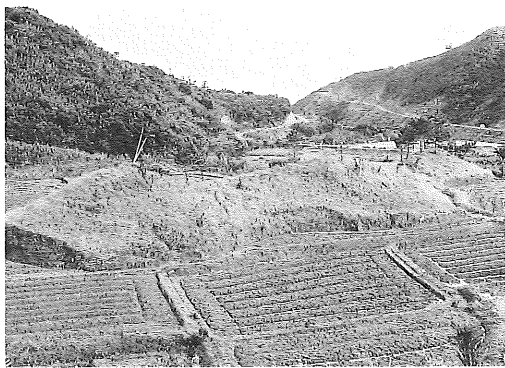
① 国上（くにがみ）の奥神社の本殿（聖壇）。山の神と観世音菩薩を祀（まつ）る。この山の神は種子島各地に祀る山の神の総本社。種子島栖林（せいりん）久基公の時代に整備された。平成6年撮影。



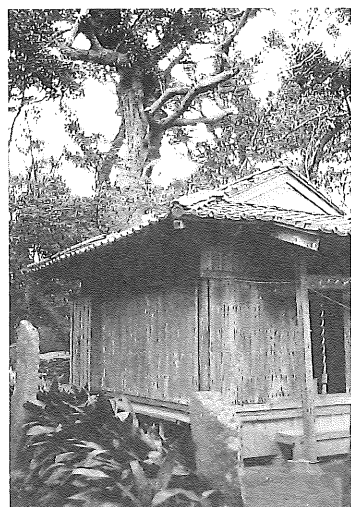
② 国上の中目神社本殿の聖壇と神木（椎の木）。右は拝殿。昭和43年撮影。



③ 国上の湊の牧の神。ソテツ林の奥に祀る。昭和43年撮影。



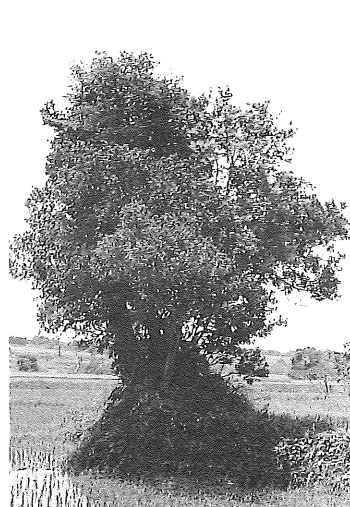
④ 立山の田の神山。古墳状の丘の真中の上に自然石を立てて祀る。昭和43年。



⑤ 国上の中目神社と神木。昭和62年。



⑥ 浅川の牧の神。松の大木に祀る。昭和43年。



⑦ 桃ン園の「田ン中野」のガロー山。平成6年。



⑧ 石堂の近く、西俣口の矢竹。平成8年。



⑨ 納曾のカズラ門と学生の調査に大変協力された上妻紀夫（としお）先生。昭和62年。



⑩ 寺之門神社の本殿。白砂と巨岩が美しく並ぶ。平成7年。



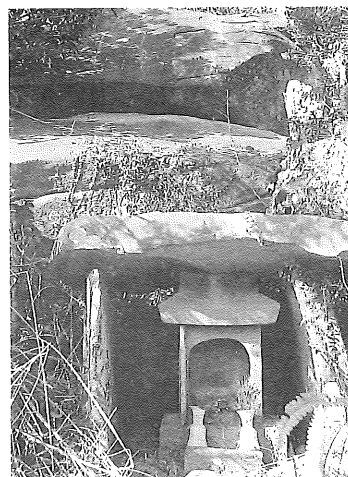
⑪ 武部（ぶぶ）の墓のヒトツバの根元の各一族毎の石塔。昭和57年。



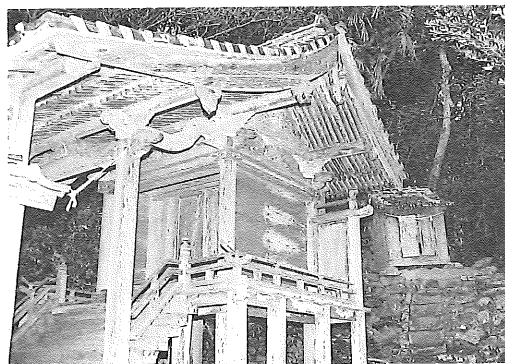
⑫ 軍場の山の神の奥宮。アコーの大木の下に石祠をおいて祀る。昭和60年。



⑬ 元は川迎のうつくしが峯にあったのを移した田の神。種子島唯一の石像田の神。小川伸太郎氏が祀る。池野の若狭ゴルフ場にある。昭和62年。



⑭ 安納のアマメガラ山頂の石祠。昭和42年。



⑮ 西之表市大崎の塩釜神社本殿。昭和60年。



⑯ 安城の諏訪神社。平成7年撮影。



⑰ カムキ（冠）を被って踊る人，花笠を被って踊る人，笹竿を持って回る「チョウ」の人。七夕に踊る横山盆踊りは，阿久根千代女を偲ぶゆかしい民俗芸能である。昭和43年撮影。



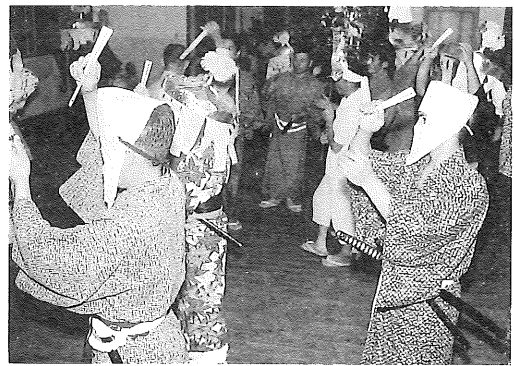
⑱ 仮面を被り，木挽きや木こりなどに扮装した人びと。庄司浦のヨンシー踊りの人びと。沖縄の宮廷の材木を山から伐り出す芸能の「国頭（くんじゃん）サバクイ」が伝来したもの。昭和44年撮影。



⑱ 風本神社の下の広場で種子島大踊りを踊る武部（ぶぶ）の人びと。昭和41年撮影。



⑳ 安納の棒踊りの人びと。昭和41年12月。



㉑ 横山盆踊り。昭和43年。



㉒ 庄司浦のヨンシー踊り（国頭サバクイ）の人びと。昭和44年。



㉓ 国上の久保田の棒踊り。昔、知覧の人から習ったという。昭和42年11月。



㉔ 国上小学校で「いたこ(潮来)出島」を踊る浦田の人びと。昭和41年11月13日。



㉕ 国上小学校で沖縄の「鳩間節」を踊る桜園の人びと。昭和41年。



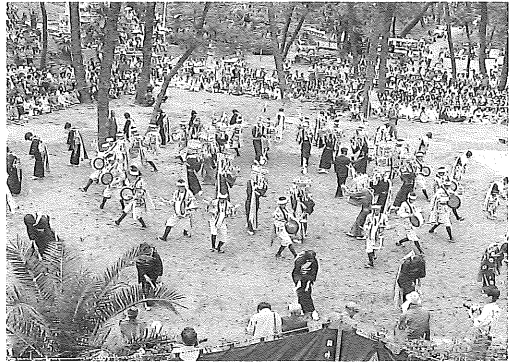
㉖ 種子島大踊りの「しむれば鳴る」を踊る武部の人びと。昭和42年。



㉗ 古田の獅子舞い。鹿児島県唯一の本格的獅子舞いである。昭和52年。



㉘ 深川の「めん踊り」。昭和43年10月2日、若狭公園にて。



㉙ 外回りを女性が、中は男性が踊る「住吉げんだら」踊り。昭和43年、若狭公園にて。

『西之表市の民俗・民具』（第2集）

調査 昭和五十六年（一九八二）〜平成八年（一九九六）
 刊行 平成九年（一九九七）三月

目次

表紙写真の説明（表紙裏——シユウタ突き）

口絵写真（聖地・神木・神々・民俗芸能・他）

西之表市の地図

発刊にあたって

『西之表市の民俗・民具』発刊によせて

民俗・民具誌の刊行によせて

『西之表市の民俗・民具』の発刊を祝して

西之表市長

西之表市教育委員会教育長

西之表市文化財保護審議委員長

種子島開発総合センター所長

榎本 修

鎌田 一正

檜原 定男

鮫嶋 安豊

五

六

七

八

『西之表市の民俗・民具』

『西之表市の民俗・民具』調査の思い出

元鹿児島大学教授・鹿児島民具学会会長

下野 敏見

八、人生儀礼

産育・トビウオ・饅頭と団子・葬列・民具

産育習俗について

妊娠から誕生儀礼まで

婚姻・その他

婚姻習俗の探究

人生儀礼（産育・婚姻）および民具

各地の人生儀礼

出産から婚姻、葬送まで

今屋 麻貴

橋元 健一

末吉 奈津子

高本 由紀子

江藤 なほ子

児玉 仁美

笹峯 隆行

一九

二六

三三

四〇

四六

五四

六三

六六

厄年・年の祝い・他	後藤啓子	七二
葬送儀礼の変遷	佐藤玲子	七八
種子島葬制の特色	濱川まゆみ	八五
死と葬式の民俗	有村月美	九二
葬送習俗の調査	濱田綾子(旧姓黒木)	九八
葬墓制	斧淵和永	一〇五
エビス・葬列・門松・民具	松村利規	一一六
墓の研究	竹野功	一二五
墓制について	渡辺一弘	一三四

九、信 仰

村落の神	鹿児島民具学会会員	砂田光紀	一三七
神社を訪ねて		日高文仁	一四四
西之表市東北部の神社	鹿児島民具学会会員	田中勉	一五一
聖域としての神社形態	鹿児島民具学会会員	砂田光紀	一六二
神社の構造と機能・形態		大石和也	一八五
農漁村の信仰		原田浩典	一九三
家をめぐる信仰伝承と丸木舟		斧淵和永	一九八
屋内神・その他		古林昭治	二〇六
家の中の神仏		姫野智雄	二二一
ふるさとの屋内神		田上美子	二二八
住居と屋内神および屋敷神		浜崎由美子	二三三
民間信仰		蔵田弓子	二三九
民間信仰と成立宗教		老泉俊樹	二四七
民間信仰		栗国恭子	二五二
屋敷森について	古賀朋子(旧姓野尻)		二六二
妖怪伝承の現状と問題点	鹿児島民具学会会員	溝辺浩司	二七一
種子島の心象風景―妖怪伝承	鹿児島民具学会会員	松村利規	二八六
シャーマニズム(モノシリの生態)		得田久美子	二九六

信仰―北部漁村の調査より……………古賀朋子(旧姓野尻) ……三〇二

漁業関係の俗信……………石川康浩 ……三一〇

漁村の信仰と儀礼から……………力丸哲子 ……三一六

船霊・俗信……………今村建治 ……三二三

西之表市のエビス……………鹿児島民具学会会員 松田誠 ……三二八

漁民信仰のケガレ観……………渡辺一弘 ……三三九

十、親族組織・社会生活・交易・他

親族組織……………神園博人 ……三四六

共同体社会と世界観―漁村と牧を通して―……………石川康浩 ……三五一

相続・隠居・分家と屋内神・屋敷神……………村岡やすみ ……三五六

社会生活……………中村明子(旧姓永松) ……三七〇

交 易……………谷口雄三 ……三七七

十一、子供の遊びと芸能

子供の遊び方の変遷……………中井美咲(旧姓引地) ……三八二

遊びと芸能……………若松まりか ……三九二

十二、民俗知識

人体の方言名称と民間療法……………鹿児島民具学会会員 渡山恵子 ……四〇〇

十三、口頭伝承

口頭伝承とその社会背景について……………鴻上正子(旧姓松岡) ……四〇七

伝説・昔話……………畑中京子 ……四一二

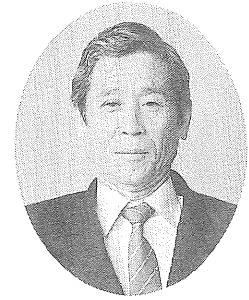
伝説と妖怪……………野間口美紀 ……四一六

民謡・正月行事・民具……………古林昭治 ……四二五

種子島の民謡について……………首藤純子(旧姓清水) ……四三四

種子島の民謡……………吉福優 ……四四三

編集後記……………四四九



発刊にあたって

西之表市長 榎 本 修

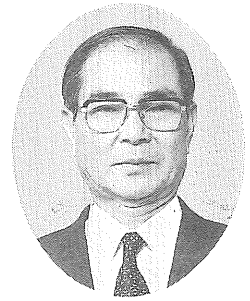
種子島は、その近海を流れる黒潮によって、太古から琉球・中国・東南アジア・西欧・そして日本の中央文化との交流により、多くの文化を吸収した島であり、文化の発祥の地であると自負いたしております。

私たちの祖先が、英知をしぼり、自然とのかかわりの中で育まれてきた貴重な民俗・民具資料は、市民のかけがえない共通の文化的財産であります。私たちは文化財の伝える自然愛や人間愛などの深い精神を理解し、郷土の良き伝統を生かして、文化的・教育的風土に根ざした地域文化の振興を図っていかなければなりません。

この度、元鹿児島大学法文学部下野敏見教授と比較民俗学研究室の皆さんの調査にもとづき『西之表市の民俗・民具』の報告書が編纂・発行されることになりました。数多くの貴重な民俗資料の掘り起こしがなされ、永い時代を懸命に生きてきた心豊かな先人の文化に感激するところです。

郷土の文化に学び、郷土のもつ豊かな自然との調和を図りながら、文化の香り高い特色あるまちづくりの一環として、本書が活用されることをお願いいたします。

本調査にあたり、下野教授をはじめご協力をいただきました多くの方々には深く感謝を申し上げます、報告書発刊にあたっての言葉といたします。



『西之表市の民俗・民具』発刊によせて

西之表市教育委員会教育長 鎌田 一正

種子島は、古代より海を通じての南島からの文化と、九州、本州の北からの文化が交じりあって独自の文化を形成してきました。

そして、我々の先人たちは種子島の風土に根ざした文化を創造し、子から孫へと幾世代にもわたって伝承してまいりました。

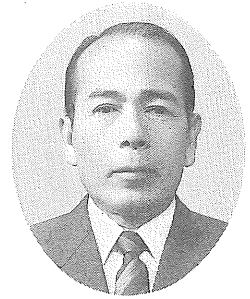
しかしながら、今日の日本は経済優先の大量消費国となり古くから各地域に伝えられてきた昔ながらの風俗、習慣、信仰、芸能等は急速に影を薄くしつつあります。

このような文化は、一度失われると復活が困難であるという宿命にあることから、これら先人の残した極めて貴重な文化を後世に正しく継承していくことは、現在生きている私たちの責務であると考えます。

文化とは、その時代その時代の生活の証しであり、その中で創造し伝えてきたものが文化遺産であるとする、西之表市には数多くの伝統文化が残存しているといえます。本書は、その中で重要かつ伝承しなくてはならないものを選択し、資料にまとめたものであります。

ここに、元鹿児島大学教授下野敏見氏をはじめ関係者のご協力によって永年待ち望んでいた『西之表市の民俗・民具』を発刊できますことは、まことに喜ばしいことであります。

今後、本書がふるさとの心を伝える財産として、また学術研究用として広く活用していただければ幸いと存じます。



民俗・民具誌の刊行によせて

西之表市文化財保護審議委員長 檜 原定 男

旧・鹿児島大学法文学部民俗学専攻の皆さんが十数年に及んで西之表市を調査された民俗調査記録がここに『西之表市の民俗・民具』として刊行されました。

種子島は南西諸島の最北端に位置し、その文化は沖縄・奄美など琉球の文化と西日本文化が混在する吹きだまり的な現象をもっており、貴重な民俗の宝庫といわれてきました。

しかし、昭和四十年代の高度経済成長を契機として、神社・仏閣の朽まいや住宅の構造・民俗行事等、加速度を増して消失していきつつあります。

人類の足跡は、文献による文献史学・土の中の埋蔵文化財による考古学・人類の医学的見地等による人類学そして生活習慣や民具等による民俗学などによって、年々明らかにされております。

南種子町において、三万年前の調理場跡を残す横峯遺跡が発見され、一気に二万年も種子島における人類発生の起源を古くさせました。

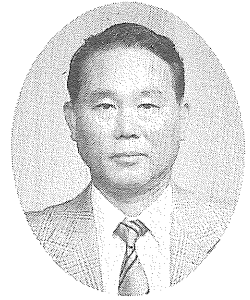
しかし、これらの人類がどのような生活を営んでいたかの全体像は長い年月とあらゆる学問の成果によって、少しずつ解明されていくでありましょうが、その解明のスピードは、消失のスピードからすると、極めて遅々としているといえます。

この書のように、今日の生活習慣等を通してその全体像に接近することができるとは、民俗学は大変大切な学問であるといえます。

更に、これらの先祖代々受け継がれてきた民俗文化財をこのように記録にとどめておき、後世に伝えて行くことも、われわれの最低限度の義務であります。

そんな意味からも、本市の古き良き姿が、この民俗・民具誌の刊行によって、末長く保存されることは誠に意義深いことだと喜びに耐えません。

せめて、今後、本書が本市を知るための参考書として、幅広く活用されることを念じる次第であります。最後に、この書の刊行にあたって、ご尽力された皆様から敬意と感謝を申し上げます。



『西之表市の民俗・民具』の発刊を祝して

種子島開発総合センター所長 鮫 嶋 安 豊

元鹿児島大学法文学部教授 下野敏見先生が昭和三十年代から種子島の民俗を調査されていたことは、種子島に住む人なら誰でも知っていることであり、今日、種子島の古い歴史等を調べる時に、どうしても先生の著書にお世話にならなければ理解できないほどに、先生の著書は種子島を知る「必須の参考書」といえます。

しかし、その先生の著書をして、すべてを調査し尽くすということはできないほどに種子島には豊富な民俗行事がある先生は云われます。

ここに刊行された『西之表市の民俗・民具』は先生が鹿児島大学に在勤中に先生の教室の民俗学専攻の皆さんが本市を長年に亘って調査をされた報告書の中から、抽出されたものであります。

その量はこの数倍にも及ぶ膨大なものであったことから、先生に無理をお願いして抽出し、このように二冊にまとめて完成したものであります。

この書を繙くと、各集落の協力者（古老の名前）はずでに逝去された人が大部分であり、再び聞き出すことの不可能な内容が多いことに気づきます。

延々と言い伝えられてきた事柄が今日完全に途絶えてしまったのだと確認を新たにすることです。民俗誌は常民の歴史であり、記録に残らない歴史でもあります。

私たちの西之表市の歴史そのものと云っても過言ではありません。

この刊行にあたって、ご尽力いただいた下野先生はじめご執筆いただいた皆さんに心から深甚の感謝を申し上げる次第であります。

末尾にあたり、今後、この書物が本市を知るための良き参考書として活用されんことを願いたします。

西之表市の民俗・民具
第2集

『西之表市の民俗・民具』調査の思い出

元鹿児島大学教授・鹿児島民具学会会長 下野 敏 見

昭和五十六年から十五年間、学生たちと西之表市内の民俗や民具の調査を繰り返す間に、たくさんの人と出会い、いろんな民俗を見た。調査団には、毎年ほど全国各地から民俗研究者が参加してくださってにぎやかに楽しい調査ができた。それらを思い出すままに記しておきたいと思う。

一、なぜ正月に調査を組んだか

正月は日本人が故郷に帰り、父母に会い、先祖を拜んでふるさとをなつかしむ時である。私共はこの時期を選んで種子島の調査日程を組んだ。それは、種子島の正月準備や正月行事を見るためであった。

種子島の正月は本土の南九州などよりも古い形のものが残っていて、ゆたかである。民俗学を本気で学んでみようという学生たちにとってはまたとないよいフィールドであり、勉強の場である。ふるさと帰省をがまんしての調査はおそらく生まれてはじめての親元を離れての他人の正月への参加になるだろうが、それだけに新鮮な印象を持つにちがいない、と、私は思ったのである。

なお、南九州や南西諸島の中で、種子島をもっとも多くの回数選んだ理由は、種子島は山や野、海、川があり、民俗が今なおゆたかであり、鹿児島大学のある南九州の地ともいくらかちがう民俗があること、また、人びとが親切であり、伝承者も多いこと、宿泊所の日典寺の住職御一家も親切で、その場所がとても見晴らしがよいこと、団長の筆者がかつて十五年間も住んで勝手を知った島であること、などなどであった。

年末の種子島を歩くと、人びとは正月準備に忙しい。まず、門松の準備や餅搗きなどがある。種子島の門松は日本の門松の中でもっともよく門松の本質を示しているのではないかと思う。

門木と称する門柱を取りかえて、その脇に椎の木やマテ、竹などを立てる。松は根引きの小松であり、門松の中心木ではない。中心は椎やマテなどの照葉樹である。門口の左右のそうした椎の木またはマテにシメナワを張る。シメナワは、七、五、三本のワラの垂れさがりをつけ、中央にダイダイまたは餅を箸に貫いてつりさげる。それにユズリハやウラジロの葉っぱをつける。門柱の脇には黄金色の葉のついたクヌギの木も差す。文字通り黄金を表すといわれる。門柱の下には海岸の潮砂を振りかけ、盛り上げる。

大晦日の夕方、以前は湊泊では正装した主人が膳にごちそうをのせて門木のそばにやって来て、「お門木さまに上げ申す」といって、オミキを注いだ。これは、門木（門松）の近くで誰かにごちそうを上げているのである。シメナワのダイダイや餅も外に向けてつりさげているので、外からやって来る誰かにごちそうしていることになる。その誰かがやって来るのは、地域によって少し違うけれども、だいたい大晦日の晩、一日の晩、七日の晩、十四日の晩である。大晦日は、日本中に散らばっている家族中が帰って来て一家で先祖を拝む夜である。一日の晩は、夜半に（二日の早朝）、白起しの若者がやって来る晩であり、七日はクサイモイ（福祭文）の子供や若者たちがやって来る晩、十四日はコノミヤジヨウ（蚕の宮じょう）の子供や若者がやって来る晩である。このように、外から何かが家を訪問するときに、門松のシメナワを張り、そうでない日には片方はずしてだらりと下げてある。これは面白い風習である。

トカラ列島では、七島正月というのがあって、正月の大晦日から七日まで先祖であるオヤダマを家に迎えて拝む風習があるが、種子島の場合も正月の先祖拝みは欠かさない。特に大晦日の晩は先祖を皆が拝む大事な晩である。こうしたことから、家の中で先祖を拝む大事な晩や外から祝いのための正当な者たちがやって来る晩は、外界の正当でない者（悪霊）が屋敷内に入らないようにシメナワを張ってシャットアウトしているのである。

その悪霊とは、正当な先祖でない霊、無縁仏のたぐいであろう。盆にも正当でない無縁仏に対しては、小皿にごちそうをちよっと入れて、先祖の膳のそばなどにおくが、それと似た習俗である。このように考えると、正月は、家の中で家族中の者のイキダマが一室に会して父母のイキダマに感謝し、かつ、シニダマである先祖たち、これをいいかえるとオヤダマたちを拜んで感謝する日だといえよう。

すなわち家の中では、イキダマ、オヤダマのタマ祭りが行われているのである。タマ祭りをして来年の無事を願うのである。そんな所へ、行き先がなく、腹のひもじい無縁仏（浮遊霊）がうろうろして入って来てはいけない。そんな霊には、門口でダイダイや餅を与え、主人がわざわざ膳を運んでごちそうを与えて、そして退散してもらおうのである、と、このように考えることができるのである。

種子島の門松はこのような正月原理を教えてくれる貴重なものである。

正月には漁村では「船祝い」と称して、船ごとに旗を掲げ、赤飯などの供物をして拜む。西之表市の湊泊や池田、洲之崎、住吉の浜之町、現和の庄司浦などでは、船祝い歌も歌われてきたが、湊泊と浜之町では今も昔からの船祝い歌を歌って祝う。

船祝い歌は、中世風の古い歌謡で、「綱ざらえ」「臚歌」などから成る。船頭と水夫が掛け合いで歌うのが基本で、声明調のメロディに包まれた貴重な歌である。この船祝い歌は、藩政時代の御用船の御船歌の系統の歌謡で、南九州からトカラ列島まで、各地に伝承していたが、今では種子島と薩南知覧の塩屋だけにある。塩屋のものは種子島から伝えたものといわれる。御船歌はかつて全国にあったがもう歌える所はなく、歌集のみが残っている。種子島の船祝い歌の「綱ざらえ」は正月の操船儀礼歌であり、全国的にみて薩摩藩以北にはなく、薩摩独特の古歌謡であ

り、大事にせねばならない。

私共は、毎回、日典寺の宿泊所に泊って、二日の日にはすぐ向こうに見えている瀬泊の船祝いをお願いして参加したのである。大きなガジュマルの茂る公民館の中にはたくさんのお供物がしてあって、人びとは幾列にも並んで坐った。当日は西之表市長さん（井元正流市長、次いで榎本修市長）も出席された。学生たちも（特に女子学生たちもその日は許可されて）、男性ばかりのこの浦の祝いに参加した。珍しい船祝い歌を聞き、のち宴の座ではいろんな民俗の話聞いて、学生たちは大きな勉強をしたのであった。

正月に実習調査をしたもう一つの理由は、大晦日の晩には、国上の野木之平や柳原などで、トシトイドンという仮面来訪神行事を見られることだ。トシトイドンは、明治十九年に日照りのため、甑島より集団移住して種子島にやって来て、野木之平や柳原集落を作ったのにちなみ、甑島の下甑村に今もある「トシドン」の行事をそのまま持ち込んだものである。甑島ではトシドンというが、野木之平などではトシトイドンという。これに似た行事は南九州周辺では、屋久島の宮之浦にもあって、そこではトイノカンサマといっている。

トシトイドンは夕食後、夜、行われるので、学生たちは数人ずつ組をつくって回った。トシトイドンもいくつかの組をつくり、分れて集落内の五〜七歳の幼少児のいる家を回ったので、それについて学生たちも回ったのである。トシトイドンは若者が仮面仮装して家を訪問し、幼少児を相手に説諭し、さいごに大きな鏡餅を与えて去る。南の種子島といえども、国上台地の十二月三十一日の夜は冷えて、サトーキビの間をサラサラとわたる風の音もわびしい。そんな暗い夜、懐中電灯をたよりに広い集落内を異装の神々といっしょにあちこち回ったということは、強烈な印象を与えたらしく、学生たちは鹿児島に帰ってからもくちぐちにトシトイドンの思い出を語った。

二、西之表市民俗調査と思い出の方々

民俗調査は、目で見、耳で聞いてノートし、撮影する作業であるが、耳で聞くとは目で見たものまたは想像できるものについて伝承者から意味を聞くことである。そして形のあるものは計測し、図を描いているいろいろ書きこむ。この作業の中で一番大事なことは人からいろいろ教えてもらうことである。例えば、少し知っていることでもさらに全く何も知らない謙虚な気持で、まだ書いてないノートが白いようにこちらの心も真っ白でなければならぬ。そんな気持で対応するとき、伝承者は心を開いて十分に教えてくれる。

学生の民俗調査の基本はここにあるわけだが、青春のまっただなかにいる若者はそれ自体、すでに民俗調査の基本を踏まえた姿であるので、伝承者は微笑をもって容易に口を開いて大事なことがらを次から次へと教えてくれるのである。

学生たちといっしょに回った十数年間の調査の日々、市内あるいは島内各地でたくさんのお世話になった。ことさらに伝承者という

と何か特別の人に聞こえるかもしれないが、実は伝承者とは私共に生活民俗を話してくださった老人たちのことである。老人なら誰でも伝承者だが、伝承者には三、四〇代の若い人もいる。そういう人は父母や祖父母などからいろいろ話を聞いてそれを記憶している人たちである。市内の各地にキラ星のごとく光り輝いている伝承者たち、私共に大へん親切に話してくださった老人たち、その数は故人を含めて三百人を越えるであろう。たくさんの伝承者にお世話になり、一人ひとりに思い出はあるが、ここではスペースの関係もあってもっとも心に残る人たちをとり上げさせていただく。

伝承者ではなく、島外から私共の調査に参加された方々も多い。東京、名古屋、大阪、鹿児島、沖縄、韓国、中国などから、そのつど何人かの研究者が参加され、いっしょに日典寺宿泊所に起居し、市内や島内を調査した。あとで研究者の中からも幾人か取り上げて印象をスケッチしてみよう。

「現和一番、榎本ヒガ女、作り鼻かよ出来鼻か」

と、種子島の代表的民謡の一つ「えんな節」に歌われた現和ミス・ナンバーワン榎本ヒガ女を身内の先祖に持つ榎本貞彦さんは、現和小学校の正門口の近くに住んで居られ、現和のことならなんでもくわしい方。

私共が行くと、いつも明るい声で迎えて下さり、たくさんの学生を相手にいろんな話をしてくださった。そして、物置の一室にはカンザー（背負いザル）を作りかけたままにして、学生にその製作技術をこまかに教えてくれるのであった。西之表市内の調査をするときには、必ず半日は榎本さんの家にあてた。現和の伝承文化を大切に思っておられる榎本さんは、それを勉強したい学生をいつも可愛がってく下さり、多くの学生がその薫陶を受けた。

西之表の納曾のつそは今なお種子島武家屋敷の面影が残る地で、しかも古い形式の道路、屋敷が残っていて貴重である。道路は一段低く掘り下げられ、石垣はサンゴ礁片を積んだ白い石垣が基本になっていて、それにチンチク（蓬菜竹）の生垣がのっていたりする。屋敷地のうち、家屋を建てる地は少し低く掘り下げて、台風被害を避けている。家は主屋は外から見ると一階建の平屋であるが中に入ってみると、中二階があって、そこは物品収納室になっている。近代になると、子供の勉強室にもあてられたようだ。

納曾の通称「カズラ門」は、上妻うづま紀夫先生おにの家のことである。上妻家は種子島の名門の家の一つで、かつては小牧坂の通称「森の峯」の上妻家と共に、上妻本家を主張していた。でも紀夫先生はそんなことにおかまひなく、上妻家当主をひきつがれ、カズラ門を守ってきた。

上妻家は北部九州の上妻郡の国司の子孫で、鎌倉時代に種子島の支配者大浦口氏の代官として赴任して来たといわれ、島間しままの上妻城（島間城）を築いたなどとされている。種子島氏よりも前にやって来た一族である。でも、上妻城と上妻氏とのつながりを示す史料は今のところ何もない。カズラ門の上妻氏は、同家系図によると住吉と深い関係があった。今も住吉には上妻姓の家が多い。これに対し、森の峯の上妻氏は、同

家の系図によると増田に関係が深かった。増田中之町には茶屋峯という所に山川石製の上妻氏ゆかりの石塔が何本も建っている。今となってはどちらが本家か分らないけれども、いずれにしても上妻家は種子島では由緒ある家である。

上妻紀夫先生は種子島実業高校の校長を勤めた方で、実に円満実直な、そしてやさしい方であった。屋敷の一隅は縄文遺跡でもあり、附近は発掘すれば今も遺物がいろいろ出土しそうな地である。三叉路の入口にカズラ門があって、その左脇には魔よけの石敢當が建てられていて、そこを入れていくと、右側に家が見える。筆者はもちろんのこと、学生も毎年、何人もお伺いして納骨をはじめ上妻家のことなど、民俗や歴史について教えていただいた。いつお会いしても、おだやかな気品にみちた静かな姿で、正確にいいいに話をして下さるのであった。学生への薫陶も深いものがあったと思う。

元市長の井元正流先生に筆者は在島時代から永年お世話になっている。熊毛文学会会長として昭和三十年代から四十年代前半にかけては歌人の長谷草夢先生と共に毎月、草夢先生宅のある田屋敷で歌会を催され、たくさんの方々が酒肴持参で集まり、歌を作って出し合い、合評するという楽しい会がづづいた。今、鹿児島で歌集『華』を定期刊行して活躍しておられる川涯利雄氏も初期の頃、このメンバーの一人として参加されたのであった。

時折、当時の島主家代表の種子島時哲氏ときさかや新城の笹川満堯氏みちたかなどと座敷を共にする機会があったが、そんな折にも井元先生は期せずしてユーモラスな話を二つや三つはされて、皆を笑わせ、座をなごやかにされた。そして、種子島の歴史や民俗についていろんな話をしてくださった。いや、先生は誰とでも、どこでも何人か集まると、得意のジョークを披露し、皆を喜ばせた。そのジョークは先生独特の内容のものであったが、筆者も聞くたびにいくつかメモしたけれどもあまりに多いので、驚きながらペンをおいてただただ感嘆している状況である。

一九九四年、先生は『種子島今むかし——見たこと・聞いたこと・思うこと』という名書を、先生が前々から親交のあった屋久島出身で東京で出版社を経営している松田好行氏の「八重岳書房」から発刊されたが、筆者が聞いたジョークはもちろんその他の傑作なジョークまで収録されていて、大へん面白く読みごたえのある本となっている。

鹿児島大学の文化人類学研究室の学生たちの種子島での民俗実習が行われ始めたのは、井元市長誕生後であった。市長さんには瀬泊の船祝いに出られたあと、檜原定男助役さんといっしょに日典寺宿泊所に来られて学生たちを激励してくださったこともある。またのちに井元市長のあとを継承された榎本修氏も学生の激励に焼酎の差し入れをしてくださったり、やはり瀬泊からお帰りの途中、井元先生や檜原助役さんと宿舎を慰問してくださったことがあった。学生たちはこのように市内各地の継承者や市民に温かく迎えられ、また行政サイドからも歓迎されて幸せな調査の日々を送った。

昭和四十三年、私共は筆者の企画をもとに市内の有志と話し合い、本格的な種子島博物館を建設すべく、井元正流先生を委員長にいただい

て、「種子島博物館」設置推進発起人会を開き、ついで委員会を開き、収集活動を始めた。その辺の経緯については、拙著『南西諸島の民俗 I』にくわしく記録してあるが、老人会や南島民俗研究会、その他各種団体の力を結集して、民具を収集し、当時の名越市長に陳情した。その頃、高重義好先生をはじめ現在博物館長の鮫嶋安豊氏、故川崎晃稔氏、その他幾多の有志と忙しい合間をぬって日夜相談し、収集・研究を繰り返した。その後、田上利男氏ほか、すぐれた方々の力を得て館の基本構想は決まり、井元市長の代に念願の博物館（種子島開発総合センター）ができた。そして文化人の河東瞭氏を館長とし、収蔵物の整備など進んだ。

そのうちに川崎晃稔氏と同窓で、夫人が西之表市に実家のある山口又雄氏も帰島され、高重先生や鮫嶋氏らと共に、「種子島を語る会」の主要メンバーとして、井元会長をいただいて活動をつづけ、今日に至っている。このように、井元正流先生は医者でありながら、種子島の文化活動に深く関与され、常に皆をリードしながら歩いて来られたのである。

なお、井元市長のあとをつがれた榎本修市長時代にも私共の調査はつづけられ、いろいろとご協力をいただいた。そして、本誌を発刊させていただくことになり、大へん感謝している次第である。

日典寺の宿泊所に世話になったことは、これまでたびたび述べてきたが、あそこは部屋はきれいで、長い廊下の向こうには榕城湾が一望で、右を望むと洲之崎や八坂神社の上の春日山が見え、左を望むと遼泊の港や村落、若宮平が見えている。目の前は砂浜で、近くには日典上人の供養塔が磯辺の岩の上に立っている。五百有余年前、宿泊所のある川迎の蔵野に生まれた日典上人は、法難にあってこの浜で死んだ。その御廟は宿舎のすぐ近くであって、日典御廟として本殿と拜殿があるという神仏混合の社になっている。

日典寺に宿泊した一週間のうち、一夜は日典寺住職山田永順先生の法話を学生たちにしてもらうことを習わしにしていた。日典寺の由来などの法話のあと、山田先生には学生たちと歓談していただき、今や懐かしい思い出となった酒宴が夜ふけまで催された。

日典寺ははじめの頃、ふとんが少なかったので、筆者の種子島高校での教え子の小川由美子さん（今、阿世知姓）が近くの川迎に住んで居られたので、そのご主人の阿世知重躬さんと共に遼泊の上にある鹿児島県西之表農業改良普及所からふとんを事前に借用して運んでもらい、実習後は、また戻してもらおうという大へんなお世話になった。毎年、ご好意でして下さり、学生たちは由美子さんと出会う機会がないのでその顔を見たこともなかったのであるが、隠れた功労者として私共は心から感謝し、ここに記録することにした。

三、思い出の研究者たち

種子島実習調査は、一週間、西之表をはじめ島内各地を回って民俗調査をし、現地でいろいろ考えて日本文化についての知識を深めること

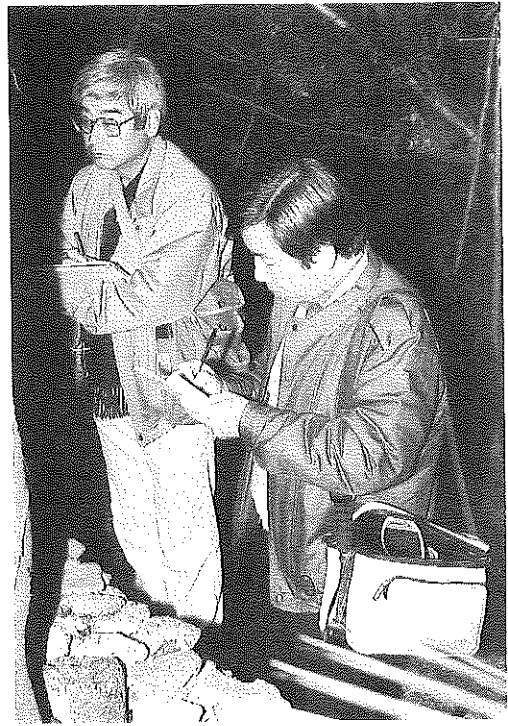
と、その研究方法を習得することに狙いがあったが、フィールドワークに手馴れた上級生と新入生を組み合わせて調査させるなどの工夫をしたが、指導者が筆者一人では大勢の学生を教えるには心もとないので、何かよい工夫はないかと思案した。そこで思いついたのが、全国におられる民俗研究者の先生方に呼びかけることだった。

種子島には戦前・戦後に宮本常一氏が来られ、のち和歌森太郎氏や竹田旦氏が来られ、次いで日本民族学会の岡正雄、ヨーゼフ・クライナー、中根千枝、他たくさん先生の先生方が見えられたこともあった。人類学の金閨丈夫、国分直一の諸先生方も広田遺跡の発掘などでやって来られた。しかし、その後、若手の方々の来島は少なかったので、豊富な民俗の種子島を調べられたらきつと先生方の研究にプラスするであろうと思った。また、先生方が調査されて、その後姿を見たり、あるいはその方法を見ることは、若き学生たちにとっては大へんな勉強になるであろうと思った。このことは先生方のためにも、学生のためにもよく、しかも現地の案内や宿泊は大丈夫であることだからよいことづくめだと思ったのである。それで毎年、来られそうな方を選んで呼びかけたところ、第二回目の昭和五十九年度から、毎年、各地よりいろんな先生方が参加して下さった。

昭和五十九年度には、草薺き民家の研究者の小林梅次先生、薩摩山川町のご出身で東京で教職のかたわら民俗研究で大活躍されている内田賢作先生、オシドリ人類学者でご本人は漁村を中心に研究されている国立歴史民俗博物館の高桑守史先生、ユニークなテーマで次々に成果をあげておられる成城大学の松崎憲三先生が参加して下さり、日典寺宿泊所でのミーティングは先生方のご発表もあって毎夜にぎわった。このときの先生方の玉稿は『南種子町の民俗』（平成七年三月刊、南種子町教育委員会）に収録してある。また、そのときは、福田アジオ先生の薫陶を受けた東京女子大学の学生関沢まゆみさん、名古屋大学の渡辺誠先生の教え子で考古学専攻の田中禎子さん（今、久保姓）と同じく佐藤つかささん（今、安田姓）も参加された。渡辺誠先生とは東京からの電車の中で、種子島でこんな実習をしますが学生さんで参加する方はいないでしょうねと申したら、さっそく二人を送り込んでくださった。田中さんは今、久保禎子さんとして、愛知県一宮市立博物館で民俗学も担当されて活躍しておられるのも種子島での御縁につながるのであらうか。

第三回目の昭和六十年暮から正月三日までの実習には、当時日本民族学会長であった山口昌男先生が参加してくださった。山口先生には東京で日本民族学会か何かの会の二次会で宮本袈裟男先生らと合流した折、筆者がじょうだんまじりに、「天下の山口昌男先生は大忙しだから魅力ある種子島の調査でも参加されないでしょうね」と申したところ意外にも興味を示された。そして、鹿児島大学法文学部での集中講義もお願いしたところ引き受けて下さった。

山口昌男先生の集中講義は大変興味深く、大勢の学生たちが熱心に聴講したが、講演会もしていただき、そのときは教官や市内の研究者たちもたくさん見えた。そのあと、種子島にいっしょに行っていた。先生はその頃テニスが好きで、毎朝、日典廟のコンクリート壁に向かっ



神祠をじっと見ておられる山口昌男先生
(左)とノートをとられる佐々木勝先生
(右)。軍場神社にて。

(二〇度入り)を少しずつたしなめられながら、歓談された。鹿児島港へ着いたときは、調査一行の無事を祝していつも万歳三唱をすることにしてはいたが、その時も万歳をすると先生も筆者も酔いが深いのを覚えたように記憶している。

佐々木勝先生は、山口先生と同じ期間に参加され、山口先生のよき相棒であった。佐々木先生は二ソの杜の問題やその他貴重な発表をしておられる方であるが、種子島の森神のガローヤマや西之表市軍場の山の神祭場などに興味をもたれ、発表された。先生は、第六回目の昭和六十三年暮にも来られ、学生たちに民俗研究の在り方についてその姿を通して教えられた。また、東京での民俗専攻大学生の卒論発表会の折、上京した鹿児島の学生たちを歓待して下さったこともあって、学生たちも感激していた。その中の一人松村利規君は、今、福岡市立博物館で学芸員として活躍している。

なお、山口先生、佐々木先生のこられた昭和六十年には、駒沢大学大学院に居られて勉強中であつた岩井洋さんも来られた。岩井さんは現在、大学に職を得て大いに活躍されているようである。

鹿児島大学の教官も参加されたが、現在広島大学におられる高谷紀夫先生や今も鹿大法文学部で文化人類学を担当しておられる桑原季雄先生も来られた。また、平成六年度は現在鹿児島大学法文学部で比較宗教学を担当している高松敬吉先生も参加された。鹿児島大学からは大学院で民俗学を勉強している学生や留学生たちも参加した。中国からの留学生張帆君、モンゴル留学生の阿莉塔さんや何艶さんもいた。第四回目の昭

て一人で打っておられた。学生との調査にも喜んで同行してくださり、いろいろ教えてもらったが、先生は種子島リュックサックともいべきカンザー(背負いザル)を買って、それを背負って歩かれた。カンザーは七島藪(三角藪、島名でミチシバ)製の四角い袋で、なんでも入れて背負える便利袋である。そして、カメラは持たれず、すべて気に入られた風景、人物、事物をスケッチされた。サラサラと認められても見事な絵であつた。山口先生は種子島を私共と楽しんで歩かれ、宿泊の夜も若き学生たちと談笑された。先生にとっては、種子島行はせわしい東京を離れての南島での一種の休暇であつたのかもしれない。住吉や海泊の船祝いにも喜んで参加された。「若狭丸」で西之表港から鹿児島港へ帰れる間中、私共と先生お気に入りの焼酎「しまの泉」二合瓶

和六十一年度には、琉球大学法文学部の津波高志先生の紹介でその愛弟子の宇都博一君も参加した。

第五回目の昭和六十二年十二月二十四日から十二月三十日まで行った調査では、韓国全羅南道の国立順天大学教授の崔徳源先生（現在、順天大学学長）が同行された。先生は当時、筑波大学教授であった北見俊夫先生の紹介で来られたのであった。崔先生は「力石」に興味を持たれ、安城の神社の庭で力石を見つけたときは大喜びであった。大声で声高に話される先生の印象は今も眼前にあるようで妙に懐かしいものがある。島内の森神のガローヤマもいくつも紹介したところこれも大へん喜ばれ、韓国の堂山によく似ているといわれた。

崔先生にとっては種子島のすべての民俗が珍しく、貴重だったようで、熱心に調査され、メモされた。宿舎での夜は先生がおられると一段とにぎやかであった。韓国の大先生にいろいろ教わって学生たちも大いに刺激になり、よい教訓となったようだ。

十二月三十日、若狭丸が西之表港を離れる前、私共は例によって、種子島郵便局の隣にある日高食堂でみんないっしょに昼食をとり、ビールで乾杯した。日高食堂には毎年、最後の日の船待ちのとき行って昼食をとる習わしであるが、その息子さんが鹿大工学部を出られたこともあって、奥さんもご主人も学生たちを可愛がって下さり、ビールのサービスなどしてくださるのであった。日高食堂で腹いっぱいになったあと、港に行き、出航を待つ。その年、船が岸壁を離れ、防波堤を避けて沖へ向かった。しばらくすると船は揺れだした。海はシケていた。それから二時間、船は佐多岬沖へさしかかると、そこは南から来る黒潮がぶつかり、皿の日でも白波が立ち海は荒れやすいのだが、崔先生を乗せたその日の船は、大きく、烈しく揺れた。

そんなときは、いつもは船室の畳の上に寝ているのだが、これまでの調査の無事を祝って私共は焼酎を手にしたので、崔先生も筆者も船室の壁に背をもたれて坐った。船はなおも揺れる。そのとき、崔先生は、「日本の船はむちゃだ。韓国の船長は慎重で、こんなシケた日には出航しない」といわれた。実は荒天でもその日の荒れ方は台風時のシケ方に較べるともの数ではなく、安心してよいシケ方であった。そこで筆者はいった。「そうですか。……崔先生、日本の海は黒潮が通う外海で、日本は太平洋の中にある島です。このくらいのシケはなんでもありません。ご安心ください。もし船が沈んだら、死ぬときはいっしょじゃありませんか。」

崔先生のお顔は少し青ざめて沈黙された。「しまった、あとの言葉はじょうだんが過ぎたかな」と思った。そして、「先生、日本の船長は荒海に馴れていますよ。台風前後のシケに較べるとこれくらいは舐めたいものですよ。大丈夫です。ご安心してください」となだめることだった。その後、別な年に筆者は崔先生と二人で朝鮮半島の南に点在する多島海の島々を二週間にわたって調査した、さらに一人で二週間ほど島々を回ったのであった。そして、何艘もの連絡船に乗り、麗水や木浦から島々へ向かった。不思議にそのときは舩に恵まれたが、「日本の海に較べると韓国の海はおだやかだなあ」と思い、佐多岬沖での崔先生の深刻なお顔を思い出すことであった。

種子島調査には、このほかにたくさんの方々に参加された。大隅半島に住まれ、九州はもちろん南島も各地を調査されている近藤津代志氏

や鹿児島銀行の支店長を退職後、母校鹿大の聴講生として勉強された田野辺昭穂氏、鹿大の法文学部を卒業し、院生としてフィールドワークのベテランとなっていた松村利規君や後藤啓子さん、成城大学ドクターコースに学んでいた石川康浩君、鹿大学院卒後加世田市役所で活躍している井上賢一君、このほか鹿児島県民具学会の松田誠氏や渡山恵子さんなどたくさんの方々に参加され、多彩であった。また、当時中種子町の養護学校におられた宮下春幸先生も参加してくださり、いっしょに調査したり車で学生を運んでくださったりした。

私共の調査ははじめは鹿児島大学文化人類学のち比較民俗学研究室の教官・学生を中心とし、それに先に記したような諸先生方や研究者が参加されたのであったが、あとは卒業生もまじる鹿児島県民具学会の会員も参加された。このようにして、この調査団はいつもにぎやかな構成であり、相互に刺激し合い、協力しつつ勉強した。この間、事故がなかったことを団長としての筆者は今、つくづくよかったと思い、毎年の学生リーダーの努力やその他一人ひとりの学生の心がけのよさなどに心から感謝するものである。そして、さいごに西之表市長さんや教育長さん、その他関係各機関の方々のご協力、島内各地の伝承者のたくさんの方々のご好意に対し、心からなる感謝のお礼を申し上げたい。

産育・トビウオ・

饅頭と団子・葬列・民具

今 屋 麻 貴

一、はじめに

今回、初めての野外実習にあたって、私は産育をテーマに調査することにした。出産と育児は婚姻と並び、女性の一生において本人が関与しうる、二大イベントといえるだろう。産育は既婚女性の大多数の者が経験することであるし、私も同じ女性の立場から、興味を持って調べられるのではないかと思ひ、このテーマで調査することにした。出産の調査では、主に出産に関する儀礼の具体的事例と、出産に関連する語の呼称の二点を中心に調べた。なお、サブテーマとして、トビウオと団子の二項目を調査した。

二、見学の感想

種子島は、考古学的には広田遺跡より日本最古の漢字を刻んだ貝が出土していたりと、歴史が古く、鉄砲伝来の島として私達にはなじみのある島である。歴史の古い島で、それだけに民俗資料も豊富であり、その中の数々の民俗資料にふれることができたと思ふ。

ガロー山は屋敷の守り神的性格を持つが、ガロー山に日本の神社の形成過程を見ることが出来るのは興味深いことであった。どこの

ガロー山にも海から持ってきた砂やサンゴなどが敷きつめてあり、その聖地としての意義を強めているのが顕著であった。ガロー山は森信仰をベースに巨樹信仰と伽藍信仰が習合して成立した信仰であるというが、海の信仰も背景に合わせもつという点はやはり種子島のその海に囲まれた地形からだろうか。

種子島に多く見られる石塔には、墓碑塔・万霊供養塔・共同祖霊塔があるが、中でも共同祖霊塔を祀る信仰は、日本人の祖霊觀念に根ざす信仰である。共同祖霊塔は、日本人の祖霊觀念の象徴であると共に、その詣り墓的存在は、現在の単墓制となる以前の両墓制としての意義をもっている。墓制の変化のある段階を示しているという点でも興味深いものである。

共同祖霊塔のように日本固有の祖霊信仰に根ざした石塔もあれば、石敢當のように中国經由で入ってきた、魔祓いの塔がある。能野里には不動明王石敢當と彫られた石敢當があったが、これなどは、不動明王という文字から密教の神の習合もみられる珍しいものであった。

以上、簡単に印象に残った幾つかのことをあげたが、種子島は史跡や民俗資料の宝庫である反面、種子島宇宙センターのような近代的施設も合わせ持つ島である。このことが象徴するように、種子島は歴史的にも古い文化に新しい文化を摂取、吸収し、独特の文化を形成してきたのではないかと思ふ。

三、調査内容・考察

1 産育について

(1) 産前

① 妊娠

妊娠のことをはらうら（はらんだ）といった。臨月の状態を今月腹といった（安納）。妊娠していることをはらうどるともいった。産婆の所へは五ヶ月くらいに行つた（国上中目）。現在では種子島でも産婆にかかることはなく、病院で出産するのが普通であるが、以前は産婆をトリアゲバーサン（現和浅川）、コボーバー（安納）と呼んだ。妊娠を知ると、産婆に知らせ、五ヶ月になると岩田帯というさらしの帯を産婆が持参して腹に巻いた（現和浅川）。

② 妊娠中の禁忌

妊娠中は火事を見てはいけない。アカゴ（生まれてくる子）にホヤケ（あぎ）ができる。妊娠中に、鍛冶をしている所へ入るとアカゴにクロジン（あぎ）ができる。

③ 安産祈願

氏神様 塩屋神社に祈願する（現和浅川）。

形之山神社に祈願。人形や赤子のヨダレかけを供える（住吉形之山・他）。

奥神社に焼酎を持参して祈願（国上中目）。

安納神社に着物をあげた（安納）。

初産の時だけ奥神社へ願かけに行く（庄司浦）。

安産祈願は、いつ行くかは決まらず、妊婦が一人で祈願しに行ったり、妊婦の母親、あるいは姑と一緒にいったりした。

(2) 出産

① 産室

産屋はなく、出産は家の奥の部屋である納戸で（国上中目）。家の奥の横座と呼ばれる年寄りの寝起きする部屋で（安納）。調査に行つたどの集落でも、家の奥の部屋で出産したということ、産屋があったという話はきけなかった。

② 出産・後産

産産・寝産などどのような仕方でも出産するか、ということは特に決まっていたわけではなく、一番楽な姿勢の寝産で出産した。出産の際は男子禁制である（現和浅川）という集落が多かったが、安納のように産産で出産したというところもあった。

後産は、イヤといい、姑が墓のそばに埋める（浜津脇）。

後産は、イヤノオといい人の踏まない床下に姑か母親が埋める。

ヘソノオは、箱に入れて大切にしまっておく（国上中目）。赤子のおむつのことはマッチーといった。

(3) 産後

① 産の忌

産の穢れを赤火または赤不浄という。出産後三日〜七日間くらい、赤子の父は漁に出られなかったり、塩で身を清めてから舟に乗った。現和田之脇では、出産があったことをはらうらといひ、出産があるとオシユエトリを行った。これは夫の役目で、満潮の時に波打ち際で三回禊をしてから、波の白い泡になっているところを茶碗などに汲んで家へ持って帰り、家の中を清める。行き帰りは誰にも会ってはならず、口もきいてはいけない。もし人に会ったりしたらやり直した。死の穢れであるクロビ（クロフジョウ）の時も同様にオシユエトリを行った。

産後三十三日間は産婦は外に出歩かず、豆腐・そうめん・白身魚など食べた。そうすると、血がさがるといわれた(現和浅川)。

他の集落も大体産後一カ月間、普段とは違う食事で、質素な食事をとる所が多く、飯と梅干と卵の汁だけという集落もあった。

② 名付け

名付けは生後七日目に内輪だけで行った。安納ではコポーバーに名付けをもらった、ということを書いた。

③ お宮参り・釜の日・御礼参り

三十三日目に、奥神社へ焼酎を持って行く。昭和四十年頃から産着なども持つて行くようになった(国上中目)。

熊野神社へ夫、姑も一緒に行った(浜津脇)。

赤子の祖母と女だけで氏神様に行った(現和浅川)。

産祈願をした神社や氏神にお礼参りの際に、産着など持参する例はほとんどなかった。

現和浅川では、生後二十八日目は釜めしといって、ごはんつぶを赤子の下唇につけて丈夫に育つように祈った。庄司浦では、生後三十二日(男)、生後二十八日(女)を釜の日といい、酒と刺し身と吸い物を用意し、大きくなるようにとか病気をしないようにという願いをこめて赤子の肩にごはんをのせ、ごはんを食べさせる真似をする。この時、神様にも酒を供える。この釜の日から赤子は人間の仲間入りをするという。釜の日を迎え、ヒがはれぬうちは、赤子を連れて橋を渡る時や外へ連れ出すときには、ヘグロまめといって、炭を赤子の顔につけたり、網をかぶせたりした。母親が畑で仕事する時も赤子には網をかぶせてそばに置いておいた。女の子は釜の日まで橋を渡らせてはいけなかった。浜津脇ではヒハレのしないうちで鍛冶屋のそばへ行くと、つく鍛冶もつかないといわれた。

④ 餅踏み・ジホー

国上奥や庄司浦では釜の日にジホーを行う例があった。ジホーとは釜の日に近くの寺でお祓いをしてもらうことで、庄司浦ではジホーの後、奥神社へ酒二合と賽銭を持って御礼参りをした。

餅踏みは誕生日を迎える前に歩き出した子にさせる。住吉では足引き餅という。

紅白の餅を草履を履かせた子に踏ませる(浜津脇・国上中目)。

子供用の草履の鼻緒に赤布を巻いて大きな餅の上で二〜三步、歩かせる(現和浅川)。

三日目と太陽の餅を盆に供え小さな藁草履を作り、それを子に履かせて餅を踏ませる。これは餅の粘り気ひきとめて悪祓いするため。小さな餅を三六五個(閏年の時は三六六個)作り、屋根に登り、自分の所から見える家に配る。踏んだ餅も配って食べてもらう。餅踏みの日に、男の子の場合は大工道具、筆、酒などを、女の子の場合は人形や裁縫道具を並べて子どもに好きな物を取らせ、子どもが手にした物によって将来の仕事を占った。これは頭の子だけに行い、産婆や子の両親の親、兄弟など主だつ人をよんだ(庄司浦)。餅踏みを祝い事として行う所と、厄祓いのためにするという所があった。中には足が丈夫になるようにという願いを込めて行うという所もあった。

以上が、今回の産育についての調査内容であるが、伝承者の年齢は五十代〜七十代で産した時は、昭和十年代後半〜二十年代という伝承者が多かった。

胎児や生まれたばかりの赤子の魂は不安定で未熟な状態である。この不安定な魂を保護強化するための禁忌や呪いが多くある。そうして保護されながら、出生後の儀礼を経て人間として社会的にも認

められていく。このように、母体に宿った新しい生命の魂が人間界へ生まれ出て、儀礼を通して一人の人間として安定化されるといふ魂の過程にも、日本人の靈魂観が表象されている。それは、生と死のどちらも人間の存在の根底に関わることだからである。

今回の調査では、産屋の存在について産屋があってそこで出産を行ったという話はきかなかった。また、出産後、食事の火を別の竈でたくという話もきけなかった。産屋については、産婆をコボーバーと呼ぶところもあり、コボーバーが子房婆のことであり、子房は産屋を意味するのではないか、という解釈がある。

2 トビウオについて

(1) トビウオ漁の仕方

○現和田之脇——馬毛島沿岸でのトビウオ漁は昭和四十年頃まで行われた。馬毛島には集落別に小屋があり、春から夏にかけてその小屋に住居して漁をした。女はテングサを採った。トビウオ漁は日没後に行われた。馬毛島沿岸では流し網という漁法で、ヨイトビが多く捕れた。多い時で、日に五〇〜六〇万尾の漁獲があった。田之脇近辺での漁は昔は流し網で行われたが、近年はうきしき網と最も新しい漁法の追い込み漁が行われている。

○浜津脇——トビウオ漁は三十年代まで行っていた。漁法は、まず人が潜ってトビウオの来る方向を見定め、その方向に網を入れ前からすくう方法であった。その場合、舟は二隻一組となり、船の間に網を張って魚を追い込んだ。多い時で一日五斗の漁獲があった。

(2) トビウオの種類

カクトビ・ホントビ(ヨイトビ)・アカトビ・アオトビ

(3) 捕ったトビウオの食べ方

塩で一夜漬したのち日干しする。味噌煮、つけあげなど様々な食べ方をする。

(4) トビウオの処理

捕れたトビウオは大体平等に分配され、その配当のことをアタリという。

(5) トビウオにちなむ信仰

○住吉浜之町——トビウオ漁は五〜六年前迄、行っていた。トビウオ漁が行われる度に、トビウオの首を折り、二匹ずつ合わせたものを二組、機関室に供える。そのトビウオはその後船主が持って帰る。また、捕れたトビウオは恵比須様にお供えする。このトビウオはベンザシが持ち帰る。この時同時に必ず大ソテツ(住吉神社の鳥居から一〇〇メートル程北の国道の側にあるという)にもトビウオをお供えする。理由、由来は不明である。

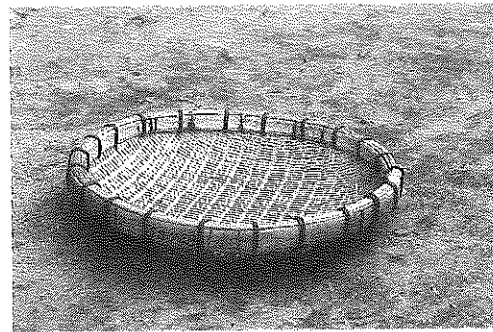
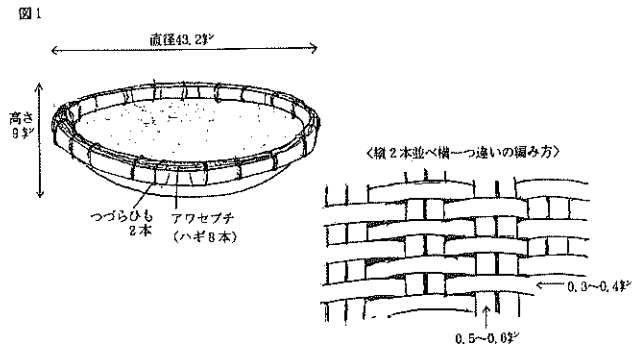
○浜津脇——夜、海が光ることをリンという。リンとは海の妖霊である。そこでトビウオがとれる。住吉ではリンが出ることをシキがかかるといふ。

3 饅頭と団子(国上中目の例)

(1) 饅頭の種類と作り方

- ふくらし饅頭——麦の粉に砂糖と炭酸を入れて蒸す。
- 米の粉饅頭——米の粉に砂糖とこしあんを入れて蒸す。
- よもぎ饅頭——よもぎと砂糖と米の粉を混ぜて蒸す。
- かたあし饅頭——からいもと砂糖で、からいもあんを作り、それを澱粉を加えてかたあし(椿の葉)をかぶせて蒸す。

ヤサイゾーケ (丸口箆) (西之表市現和下之町)



もっとも機能する底を表皮にしてあるなど丈夫に作られている。目が細かいので、粒の小さなものを入れるのに適している。

(2) 彼岸・節句と団子・饅頭

- 彼岸——米の粉団子 (彼岸団子) を供える。
- 三月節句——よもぎ餅。
- 五月節句——あくまき (竹の皮にあく汁につけた米を包む)。
- 盆——長まき。しゃにん葉 (マキ) に練った米の粉をのせ、ミチシバ (三角藪) でぐるぐる巻きにして水炊きする。それとは別に舟にみたてたユリの根にマキの茎を舟の櫓としてつけたものを作り、長まきと一緒に墓石の上にのせる。ユリの根の舟にはホトケさんが乗るといふ。

4 神道の葬列

現和田の脇では、偶然にも葬列に出くわし、墓地までの葬列、そして墓地に着いてからの埋葬を実際に目にするのが出来た。田之脇の集落のほとんどの者は法華宗で神道の者は二三人しかいないという。ここで遭遇した葬列は神道の葬列で、亡くなった方は、お婆さんだった。

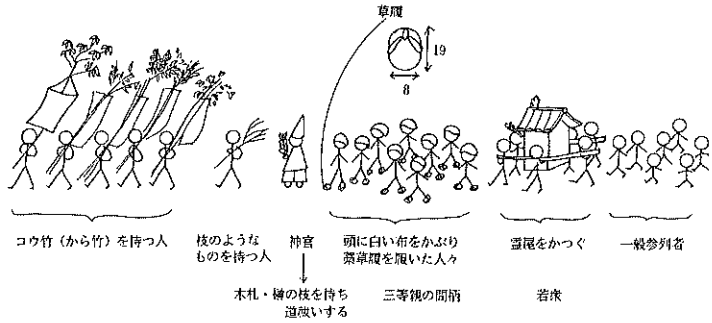
○葬列の順序——①五く六人のそれぞれコウ竹 (から竹) を持った男。コウ竹には赤・白の布旗がついていて、旗には親族の名や神道用語のようなものが書かれていた。②箆のような木の枝のような物を肩に担いだ男。

③神官。神官は神の枝と木札を手にし、道被いしていた。④頭に白い布をかぶり、草履を履いた人達。死者と三等親の間柄にある者だということだった。その草履が皆、とても小さいことに気付いた。後で、墓の出口にぬぎ捨てられた草履を測ると、皆同じ大きさの長さ一九センチ、幅八センチの小さな物で十三足分あった。⑤霊

屋を担ぐ男達。霊屋には神の枝がつけられ、霊屋の左右に木棒 (守り木か?) が逆棒につけられ、男が四人で担ぎ、他に二人の男が左右から霊屋を支えるようにしていた。霊屋を担ぐ男達は、片手だけで担ぎ、もう一方の腕は隣で担ぐ者と肩を組み合っていた。この肩を組み合い担ぐ姿は印象深かった。⑥近親者以外の参列者。

およそ百人程の葬列であった。残念ながら、葬列の先頭が墓に入る時、どのような入り方をするか見ることはできなかった。次に見たのは埋葬である。神官が死者の霊に対し、呪の言葉述べると、お骨が埋められ、その上に霊屋を置いた。この穴は村の若い衆が宗

葬 列 (神道の場合) (西之表市現和田之脇)



派を問わず、朝早くに掘っておくそう、埋葬が終わると早く帰ってしまう。コウ竹を持つ人の一部や霊屋を担いでいたのはこの若衆のようだった。埋葬が終わると、近親者の挨拶があり、その後皆帰った。参列者が帰る時は出入口を通らずに、墓地の横の斜面から出て行った。その時、親族は履いていた草履を一カ所にぬぎ捨て、持参していた履物に履き替えて出て行った。参列者が帰った後、霊屋の所へ行って見ると、霊屋は南向きに置かれ、周囲に旗の下げられたコウ竹が立ち並び、神官の持っていた榊・木札が霊屋の屋根の所

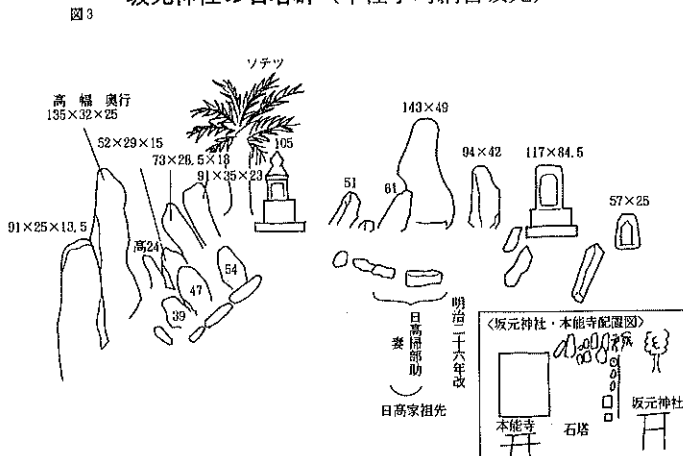
田之脇では、ほとんどの者は法華宗で、神道の者は2~3人しかいないという。亡くなった方の親族にあたる者達の格好は頭に白い布をかぶり草履をはいたものだが、草履は墓地を出る時にぬぎ捨てて行く。(昭和62年撮影)

5 今回の実習に参加して

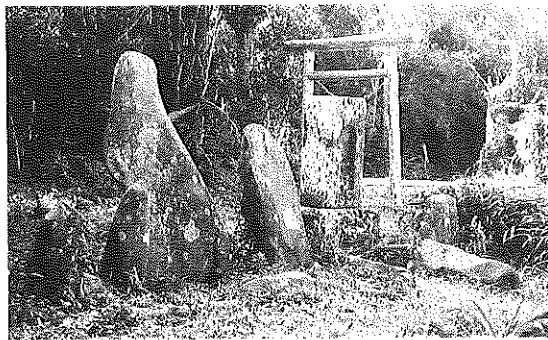
に置かれていた。担ぐ時に使用された棒、穴掘りに用いられたと思われる鍬やスコップ、筥、網が霊屋の後ろに無造作に打ち捨ててあった。

今回、私は初めて民俗調査なるものを行ったが、民俗調査の難しさを実感したように思う。聞き書きと観察調査を行ったが、それは思う以上に時間と労力を費やす調査であった。聞き書きについては、私のような不慣れな者にとって、まず伝承者を探すこと自体が難しいことのように思われた。例えば、最終調査日のこと。その日の予定では、海辺の漁村沿いを南下しながら調査することになっていた。しかし、最初の集落でも次の集落でも村人に聞き出した長老格の老人は不在であった。他の男達はほとんど漁に出てしまっているという。その日は最終の日であったし、あせりを感じつつ次の集落へと先を急いだ。とぼとぼと歩く私達を時折り追い越して行く車を目で追う度、時計が気になる長い道のりであった。次の集落で私達はそれまでの不作の原因を理解した。そこでは、葬式が済み、今まさに出棺せんとするところに出くわした。先の集落で訪ねて行った老人も参列者の中にいた。思いがけなく、葬式の場に居合わせ、私達は記録の必要を感じ、試みたが、許可も得ずに写真を撮ってもよいものかどうか、誰に許しをもらえばよいのか迷った。とりあえず、写真は撮ったものの、墓に到着後は、近くで観察することは難しかった。この出来事を経験して私は、葬送儀式の一面面ではある

坂元神社の石塔群（中種子町納官坂元）



入口に向かって右に坂元神社，中央に石塔，左に日典寺系列の本能寺という配置である。写真は寺の方から撮ったもので，坂元神社の鳥居が見える。



坂元の日高家，徳永家，長深田家の先祖供養の石塔（拝塔）である。日高家の石塔が一番多い。盆には昔は一晩中経をととなえていたが，今はしていない。信仰団地として一ヵ所に，寺・神社・先祖供養塔が存在する形態は非常に珍しい。

とは異なる次元の存在である、ということとを常に頭に置いたうえで、より調査される側に近付こうと努力し、如何に近付くことが出来るか、これが調査者に要求されることだということを痛感した。

四、最後に

私の種子島の人と地に対する感想であるが、下野先生のおっしゃっていたとおり、人情の厚いよい所であったという印象であった。鹿児島から船でわずか四時間間の島であるが、アコーなどの亜熱帯性植物が生い繁り、海は透き通るように青く、しばしばエキゾチックな気分にとらわれた。島の人は概して人情に厚く、行く先々で親切なもてなしを受けた。また、島の人の言葉であるが、その穏やかな氣質を示すが如く、のんびりとしたように思う。

今回の実習は、一週間と短い期間であったが、民俗調査の合い間には種子島の風光を楽しみ、下野先生をはじめ学友達との交流も深まったことと思う。そして、崔先生との出会いも貴重な体験であった。大学時代の思い出として、この実習中に学び体験したことは種子島の美しい風景と共にずっと心に残ることである。

(昭62・12・24〜12・30調査)

が、場の雰囲気を感じ取ることができたと思う。このような観察調査において、場の雰囲気を体感する為に、より詳しく調査する為には、まず調査者が自ら身を投ずることが必要であると思つた。葬式は祭りや芸能と異なり、個人（死者）のプライベートに触れる度合いが大きいと思う。そのような葬式を民俗調査の対象として調査しようとする時、遺族らに調査目的、民俗調査であるということを通して理解してもらわねばならない。場に身を投ずるといっても、あくまでも調査者は調査をする側なのであって、調査される側

産育習俗について

橋元健一

はじめに

今回の種子島実習では、安納、下能野、形之山にて、種子島における産育習俗について話をうかがってきたわけだが、いかんせん、調査期間が短かったことと、年末年始の忙しい時期でもあったことに加えて、思いのほか伝承者探しに苦労したことも重なって、大変不満足な調査となってしまった。

実は、今回の実習にあたり私が掲げていたテーマというのは、もつとスケールの大きいものであった。今、冷静になって考えてみると、わずか一週間（実質二、三日）の短い期間で調査しきれるような問題ではないのだが、ここでそれがどういふ問題であるのかについて、簡単に触れておきたい。

産育習俗については、今回の種子島以前にも、屋久島、奄美でも調査してきたのだが、その資料を整理し、関連文献を読みあさっているうちに、様々な問題点があることに気が付いた。そのなかでも特に興味深く思われたのが、「産育儀礼と葬送儀礼の類似」という問題である。そもそもこの問題を私に提示してくれたのは、今は亡き坪井洋文氏が、その論文「日本人の生死観」において表した一つの図である。それは、人間の一生——一生といっても、生まれてから死ぬまでだけでなく、一旦死んでから祖霊化し、再びこの世に

生まれ変わってくるまでのサイクルを一つの円グラフのなかに収めたものである。この図は既に多くの人に知られ、様々な評価、批判がなされてきているが、産育儀礼と葬送儀礼との間に類似点を見出した彼の業績はたたえられるべきであろう。

この坪井洋文氏の「日本人の生死観」という論文は残念ながらまだ読んだことがないのだが、そういった「産育儀礼と葬送儀礼の類似」という問題、そして、それに絡んだ「日本人の再生観」については、多くの民俗学者、文化人類学者によって研究がなされており、なかなか奥の深そうな問題である。今回私が掲げていたテーマというのは、まさにこの問題であり、種子島における産育儀礼と葬送儀礼を調査し、その類時点を見出すことで、その奥に潜む世界観、再生観といったものをほんの少しでも垣間見ることができればいいと思っていた。

これは今までもずっとそうだったのだが、調査に行く時には、いくつかのテーマなり問題点なりを掲げ、それに対する自分なりの答え、結論というものも持っており、実際に調査して、事例を集めることによって、その答えなり結論なりを立証したいと考えながら出掛ける。これがよくないのかもしれないが、実際に調査してみると、伝承者は、必ずしも自分の期待しているようなことは答えてくれず、結局事例だけが沢山集まって、それをまとめることもできずに終わってしまう。今回の実習では、その悪いところが最も顕著に表れてしまった。産育儀礼さえ十分な調査ができず、葬送儀礼に至っては全く話を聞くことができなかった。

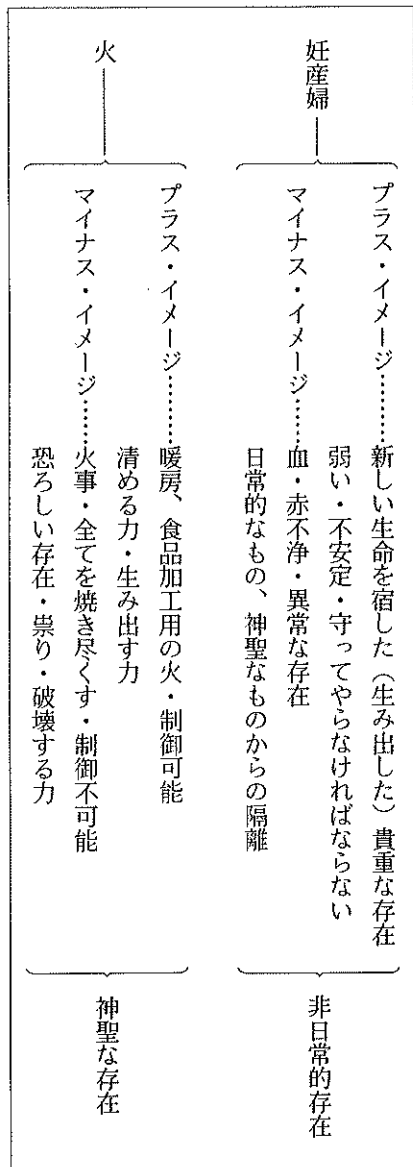
そういうわけで、今回のレポートも一つの大きなテーマにそったものでなく、個々の事例に関して若干の考察を試みただけのものである。実習前に掲げていたテーマには、結局触れることができなかった。

ったわけだが、この問題については次の機会にもっと時間をかけて調査、研究してみたいと思っている。

一、妊娠中の禁忌

妊娠中の禁忌について、安納で聞いた話では、「妊娠中の女性は、イカやタコを食べてはならない」そうで、もし食べると、生まれてくる子供は指が、八本なり、十本なり、沢山生えて生まれてくるといわれていたそうである。これは、この事例だけでも興味深いものであるが、同じことを下能野で聞いたところ、そういった俗信はないということであった。つまり、こうした俗信が、種子島のどこにも存在するものではないということである。周知の通り、安納は農村であり、かたや下能野は漁村である。考えてみると、漁村でありながら、その恵みであるイカやタコを食べないというのは不自然なことである。安納が農村であるが故にこうした俗信が生まれてきたとは考えられないが、漁村である下能野に見られなかったということから、こういった、一つの小さな俗信にさえ、その村落の生業体系といったものが大きく絡んでいるということが想像できる。村落の文化が形成される過程での、生業体系の影響というものは、かなり大きいのではないだろうか。

また、下能野では「妊婦が火事を見ると流産する」という俗



信があった。他にも、「妊娠中に火事に出会うと生まれた子に赤ホヤケができる」(下野敏見著『西之表市民俗誌』)とか「妊娠中に火事に出会ったら、顔をのんぼり(下から上へ)洗うとよい」(同)など、妊婦が火事を嫌う俗信は、種子島の各地に見られるようである。

火が産のケガレを嫌うと考え、食事の火を家族と別にしたり、出産後の女性がかまどに近付いたりすることを忌む事例は全国各地に広く見られる。が、その一方で、昔産屋でお産をしていたときには、産婦を暖めるために火を焚いたという。こういった各地に見られる事例から考えても、どうも「妊産婦」と「火」との間には、複雑な関係がありそうである。そこでこの問題について、少し考えてみたい。

「妊産婦」と「火」との関係を考えるためには、まず、両者の正確な位置付けというものが必要であろう。私は、「妊産婦」も「火」も両義性を持った存在であり、それぞれに、プラスとマイナスのイメージがあると考える。それを、以下の図に表してみた。

少々強引な分類かもしれないが、この図式に従うならば、「妊産婦」は、良きにしる悪きにしる日常からかけ離れた非日常的な存在であり、「火」は、制御できれば役に立つ存在であるだけに、神格化されやすいと考えられる。とにかく、この二つの存在に共通して言えることは、どちらも日常的な俗界とは区別されるべき存在であるということであり、その区別を明確にするために、様々な禁忌が設けられていると考えられるのである。そして、「妊産婦」と「火」との間に設けられる禁忌や俗信の中では、両者はそれぞれに立場を変えながら登場してくる。妊婦が火事を見ることを忌む俗信では、神聖なる存在である「火」をマイナス・イメージをもった「妊産婦」から守ろうとしているようにもとれるし、マイナス・イメージをもった「火」からプラス・イメージをもった「妊産婦」を守るようにもとれる。また、産婦を暖める「火」というのは、プラス・イメージをもった「産婦」を守るための、プラス・イメージをもった「産婦」を清める意味でのプラス・イメージをもった「火」ともとれる。このように、「妊産婦」と「火」との関係を考える場合には、両者が両義的な存在であるということを見ることができ、無視することはできないのではないだろうか。

二、安産祈願（願立て）とお礼参り（願ほどき）

安産祈願では、形之山で興味深いものが見られた。形之山には形之山神社（地元の人々は、葉山様とか、八幡様とか呼んでいる）という、種子島では有名な安産の神様を祀っている神社がある。この神社は、もともと一つであったものを今の場所と、馬毛島に分祀し

たもので、馬毛島の方は葉山神社と呼ばれ、漁業の神様として祀られているそうである。現在の形之山神社は、海岸沿いの目立たないところにあり、脇の方に追いやられたような感じだが、もともとの形之山神社は、もっと村落の中心部に近いところにあったそうである。ただ、ちょうど殿様の通り道の脇にあり、失礼にあたるということで、その神社の前を通るたびに馬を降りなければならぬことを、殿様が億劫がり、それが現在の分祀のきっかけになったということである。

形之山神社には、近辺の村落からばかりか、島内の各地、時には島外からも祈願者が訪れるそうであるが、拝殿内を見ると、なるほど祈願者が絶えないことをうかがわせるような様相である。まず目につくのは、拝殿内の柱や壁に掛けられた無数のよだれかけや、小さな着物である。それぞれに子供の名前と生年月日、そして、「元気で良い子に育ちますように」などという願いが書かれている。

これは、子供が無事に生まれて三十三日がきたときに、お礼参りとして子供を連れてきて、そのときにお供えするのだそうである。

お供え台の上には、十数個のこぶし大の丸い石、コップに入った焼酎、ビニール袋に入った塩が並べて置いてあり、その奥には、花瓶にサカシバが差してある。台の下の段には、何十本もの小瓶に入った焼酎が供えてある。また、台の下の斜め後方にも、二十数個のこぶし大の丸い石が置いてある。

伝承者の話によると、これらの石や焼酎は、安産祈願の願立てにお供えしたものであり、石は、海岸から拾ってくるそうである。願立てをするときには、この石と、焼酎と蠟燭をもって参り、焼酎はお供えとして少し注いで残りは家に持って帰り、ケナー（家内）中でお神酒として飲んだそうである。なぜ海から拾ってきた石を供え

るのかは分からないそうだが、これは古くから行われていたそう
で、安産祈願に限らず、戦争中には、出兵した男たちが無事に帰っ
てくるように祈願するときにも供えていたそうである。

安納では、安納神社へ、米と焼酎とお賽銭をもって願立てをし、
無事に子供が生まれたら、二十八日目に、産婆さんと親戚と家族と
赤ん坊全員でお礼参りをする。この日には家でお祝いをしたそうだ
が、床さんに、箕を立てておき、その傍らには、弓矢と、たらいを
供える。たらいの中には、炊いた米粒と、赤ん坊のおばあちゃんの
髪の毛を入れておいたそうだが、この日に、赤ん坊のおばあちゃん
が赤ん坊を抱いて、産婆さんが、その子の唇に噛み砕いた飯粒を塗
ってやったということである。

赤ん坊の名付けのときに箕に向かって矢を射る儀礼は、奄美諸島
を中心とした南西諸島に見られるが、宮中や公家の古い記録には、
七夜に鳴弦の儀という式が行われていたことが記録されており、宮
中では現在でも行われているといわれる。また、名付けに限らず、
赤ん坊の成長に際して、弓矢が登場する儀礼は全国各地に見られ、
弓矢の象徴的機能について考えてみる必要があるそうである。ま
た、箕については、今回の実習にも参加された民俗学者の佐々木勝
氏によれば、靈魂を鎮めるという意味で用いられるのではないかと
いうことだったが、これについても一概には言えないところがある
だろう。こういった儀礼に登場する民具の象徴的機能についても機
会があればこれから色々調べてみたいと思っている。

安納では、この二十八日目に来るまでは、原則的に外に出てはな
らなかつたのだが、忙しい農家ではそういうわけにもいかず、二十
八日が来ないうちに赤ん坊を連れて畑に出ることがあった。そうい
うときには、赤ん坊を木陰などの涼しいところに寝かせておき、悪

魔が悪戯をしないように、赤ん坊の枕元に、左縄（注連縄）を置い
たそうである。こうしておくと思魔がたまげて（驚いて）近寄って
こないそうだが、ここでも、注連縄の象徴的機能というものが問題
になってきそうである。注連縄というと、まず真っ先に、正月に家
の門口に張る注連縄を思い出すが、これは、外側から悪いものが入
ってこないように張るのだという説や、正月の歳神を迎えるためだ
という説など、諸説が飛び交っているようだが、神社に張られてい
る注連縄などは、前者の説が当てはまりそうである。また、単に、
外の世界と区別するための境界の象徴としてもとらえられるのだ
が、この、赤ん坊の枕元に供える注連縄にも二つの意味付けができ
そうである。一つには、外部から悪いものが入らないようにするた
め、すなわち、赤ん坊の枕元に注連縄を置くことによって、ある種
の結果を作り出すという考えであるが、これなら、枕元に置くより
も、赤ん坊を囲むように輪を作ったほうがよさそうな気がする。も
う一つは、注連縄によって、異界（あの世）との境界を作って、靈
魂の不安定な赤ん坊が、異界に戻ってしまうことを防ぐという考え
で、伝承者の言葉に従うならば、前者の方が当てはまりそうだが、
後者の考え方が変化したとも考えられる。いずれにしても、二十八
日がたつたいうちは、赤ん坊がまだ弱い存在であると考えられてい
たということが想像できる。

下能野は、形之山の隣に位置するので、形之山神社で安産の祈願
をする。また、生後三十三日目には、初宮参りとは別に、お寺に参
って、師匠（坊さん）から、お祓いをしてもらう。これをジホー
（授法）といった。

三、産後の禁忌

安納では、産後二十八日目に来るまでは、神社や、仏壇などを拜んではならなかった。月経期間中も同様に拜んではならなかったよなので、神仏が、血の汚れを嫌うと考えていたことが分かる。

形之山では、産後三十日の間は、仕事をしてはならなかった。また、川に行つて洗濯をしてはならなかった。川に限らず、水に触れることを強く禁じていたようである。いずれも産後の女性の体の状態を考慮したものであるということであつたが、どういふ理由からにしろ、出産後一定の期間は、忌み籠つていなければならなかったといふことであろう。また、水に触つてはならないといふのは、ただ冷たいからというだけではなく、不浄な状態にある産婦が、水に触つて、水の神をけがすことを避けるためではなからうか。実際にこの形之山では、ある人が、堆肥を触つた手足を、井戸の付近で洗つたら体調が悪くなり、モノシリに見てもらつたところ、「水神の祟りだ」といわれたそうである。この人は、モノシリの指示通りに塩と大豆と焼酎を井戸に供えたら体も良くなったそうだが、こうした事例からも、水の神という觀念が存在していたこと、その水の神を汚したら祟られると考えていたのではないかと想像できる。

このように、先程触れた妊娠中の禁忌と共に、出産後にも様々な禁忌が設けられているわけであるが、両者はそれぞれ異なった基盤の上に立っているように感じられる。妊娠中の禁忌には、弱い存在である妊婦を守ろうとする意識が強く感じられ、出産後の禁忌には、産婦を不浄な存在とみなし、神聖なるものや、日常的なものから引き離そうとする意識が強く感じられるのである。ここで、先程の「妊娠中の禁忌」の項で示した図式を思い出してほしいのだが、

あの図式にそつて考えると、出産前の妊婦にはプラス・イメージが、出産後の産婦には、マイナス・イメージが強く意識されていたのではないかと考えられる。もちろんそれぞれにプラス・イメージ、マイナス・イメージがまったくなかつたというわけではないだろう。妊娠中の女性を不浄とみなすような禁忌習俗も見られるし、出産後の女性を弱い存在とみなしている意識も感じられる。ただ、全体的に見た場合、先のようなことが言えるように思えるのである。

四、へその緒、後産の処理

形之山では、へその緒をテース（大黒柱）の敷き石の脇に埋めていた。神社にお供えする人もいたそうだが、ほとんどの人が、埋めていたらしい。埋めた後には、海岸から拾つてきた丸い石を上置いたそうである。人や犬猫が踏まないように床下に埋めたのだそうだが、こういった事例は、屋久島や奄美では全く見られなかつたので、非常に興味深く思われる。一方、後産の方は、家の周囲の、不潔でなく、人の踏まないようなところに埋めた。

一般的には、へその緒は大切なものとして保存され、後産は汚れたものとして捨てられたり埋められたりする例が多いが、地方によってはへその緒を汚れたものとして捨ててしまつたりするところや、後産を大切に保存するところもあるようである。しかし、へその緒や後産が、かつて赤ん坊の体の付属物であつたことは明らかであり、埋めたり捨てたりする場合にも、場所を選んだり、埋めた後に石を置いたりするなど、それなりの配慮がなされているようである。へその緒や、後産を汚いものと見なす考え方は、産の汚れとい

う觀念からきた一時的なものであり、これらが、赤ん坊の生命や、成長、性格形成に強く関わっているという考え方は基本的にあるのではないかと思われる。

また、へその緒や、後産も民具同様、象徴的機能というものを無視してはならないだろう。小松和彦氏は『異人論』の中でそれに触れ、後産＝包衣（エナ）は、あの世からこの世への旅装束である藁笠の象徴としてみなされているとし、実際にそれを裏付けるような事例を紹介している。へその緒や、後産の処理が、このような象徴的機能に従っていることは十分に考えられることであり、注目すべき点である。

五、餅踏みの儀礼

下能野と形之山では、ムコウツキ（一年目の誕生日）が来ないうちに歩いた子に餅を踏ませた。形之山ではこの餅のことをアシヒキモチという。餅の形は、下能野では月形、日形、形之山では丸い餅で、下能野では、親戚の健康な夫婦が、赤ん坊に草履を作ってくれ、赤ん坊に、その草履を履かせて踏ませた。この餅踏みの儀礼は、赤ん坊が歩いた時点で行っていたそうである。

なぜこういった儀礼を行うのかについては、はっきりした答えは聞き出せなかったが、こうした餅踏みの儀礼のように、一年目の誕生日が来ないうちに歩いた子に餅を踏ませたり、背負わせて転ばせたり、その他、何らかの儀礼を施す例は全国に広く見られる。これらの儀礼にはそれぞれに意味付けができるようだが、今回は、細部まで聞き出すことができなかったので、細かい分析をすることはできそうにない。ただ、こういった儀礼が、現に行われていたという

ことは、早く歩き出した子に対する何らかの意識があったということであり、それを導き出して、全国の例と比べてみる必要があるだろう。

おわりに

今回の種子島実習で、私が、自分自身のテーマに沿ったものとして調査することができたのは、大体これくらいである。ただ今回は、二年生の指導に当たったりしたことあって、自分自身のテーマ以外にも色々な話を聞くことができた。このレポートでそこまで紹介すれば、ただでさえまとまりのないものが、よけいひどくなってしまうようなので、今回は省かせてもらうが、これらも含めて、今回集めることができた全ての資料は、決して無駄にはならないだろうし、また、無駄にしたいとは思っていない。そういう意味では、今回の実習も大変有意義であったといえるだろう。

種子島での調査は、これで二回目だったのだが、前回はまだ不慣れであったことに加えて、やはり年末の忙しい時期にぶつかったために奥の深い調査はできなかった。今回もまた不満足な調査しか出来なかったわけだが、種子島には、まだまだ魅力的なものが埋もれているように感じるし、気候的にも人間的にも大変温かいところなので、機会があれば今度はもっとゆとりをもって、じっくりと調査してみたいと思っている。

伝承者名（敬称略）

安納 芝 トメ (M35・3・5生)
 下能野 能 塩 敏 (T15・7・16生)
 形之山 遠 藤 サキ (S4・2・10生)
 平野 曈 則 (T14・6・11生)
 平野 新之丞 (M36・6・2生)

参考文献

大藤 ゆき著『児やらい』（岩崎美術社、一九八二）
 小松 和彦著『異人論』（青土社、一九八七）
 下野 敏見著『南西諸島の民俗Ⅰ』（法政大学出版局、一九八

〇

妊娠から誕生儀礼まで

首藤 純子(旧姓 清水)

一、はじめに

今回、種子島の西之表市を中心に、産育習俗(妊娠・出産とその儀礼)についての資料を集めることができた。私が調査した中では昭和三十年代半ばにはもう殆どの出産は、病院で行われており、それにまつわる儀礼、その他もなくなりつつある。

今回の調査は、大正時代から昭和三十年代半ばまでの話である。妊娠や出産や、それに伴う儀礼から少しでも、人々の、産にまつわる観念を明らかにできたら、と思う。

二、概要

妊娠から出産と、時間の経過をおって記述する。

1 妊娠と出産まで

① 安産祈願

妊娠がわかると、大抵五か月まで、おなかが大きくならないうちに、安産祈願へ行く。集落の氏神と、安産の神の祀られている神社の両方へ行く。安産の神が祀られているのは、調査地であげられたのは、国上の奥神社と住吉の形之山神社であった。現和地区では、

国上まで歩いていき、身重な体で大変な重労働だったという。参拝の際には、オハタという白布に父母の名と安産の願いをかいたものを奉納する。

形之山神社は女の神様といわれる。拜殿には、旗や一つ身の着物が掛けてあり、願成就の際のもので、子どもの名と生年月日、父母の名がかかれてある。拜殿には、酒、洗米、塩と共に、海の石と思われる丸い石がおかれてあった。

② 帯かけ

妊娠三、五か月くらいの間は白い布を一条腹に巻いた。女性はお腹が大きくなることを恥と考えて巻いた例もあるが、多くは胎児を大きくしない方が安産であるという配慮からである。

③ 妊娠中の禁忌

○ 食事に関する禁忌

妊娠しているときには、タコ、イカ、エビ、カニなどのものは食べてはいけないとされた。それぞれの形態から、手足が分かれる、腰が曲がる、毛深くなるとされた。また新米は成分が強いのではない。その他、灰汁の強いもの、刺激の強いものも、体に悪いとされた。

○ 火事に関する禁忌

火事を見たら、顔を水であらって腹をなでるといい。そうしないと子どもに黒ホヤケ(痣)ができる。

○ 葬式に関する禁忌

妊婦は死人のそばへいってはいけない。肉親であってもいけない。妊娠七か月だった伝承者の、祖母が亡くなったときも、そばにいかなかった(浦田)。

妊婦が死人のそばへいくと死人はたちあがる。その時は死人の頭

を箒で三回たたくとよい。その箒は家の中で使うものである。それで外を掃いてはいけない(安納)。

死人の側へ行くと生きかえるので、葬式へ行ってもいけない(武部)。

葬式は行ってもいいが死人の寝ているオクノマはいけない。近づくとき死人は生き返る。鶏の羽根をむしって殺し、毛を火にくべようとしたとき妊婦が通ったら、鶏は走りだしたという伝えがある(安納)。

妊婦の夫は、葬式の際、死人のからだをふくオクノマへ入ってはいけない(形之山)。

○俗信・胎教

おなかがつながったようになると男だという。予定した日より四、五日一週間しても生まれなときは女だという。

妊婦が悪口を言ったり、盗み、悪さをすると、子どももそういうことをする子ができる。

侍の人形などを見ているとしっかりした子ができる。

2 出 産

○場所

産室はナンドである。たたみは取り除く。下は竹や板が張っていて、水が落ちてよいようになっている。葬式の前の、死人のからだをふく湯灌もここです。

ナンドはシモノザ・オクノマとも呼ばれる。ジロノマの奥に位置する。ジロノマの隣りでオモテノザの奥(田の字型の一角)という例もある。ふだんは物置であり、寝室であった。

だいたい昭和三十年代まではここでお産をした。西之表市百年史

によると、明治維新以後母屋の外に産小屋をつくることはないという。

○分娩

ナンドの床に、ポッターと呼ばれる布切れを敷き、その上に坐る。

坐産と寝産は、調査した中では半々であった。明治生まれの女性はほとんど坐産で、大正生まれ以後は寝産が主流である。天井から帯や縄を下げて力をいれる。夫の手を握って分娩した人もいる。

「最初のお産のとき、そばに夫がいたときは、最後のお産までいなくてはならない」といういいつたえがある。また陣痛がくることを「腹がツメグス」という。

○産婆、実家と婚家・夫

産婆のことは古いいい方で、コボーバーサンという。集落に大抵一人はいたという。

現和には、武部などに二人産婆がいた。しかし現和は広く、夜のお産になると産婆が行けないこともあった。経験のある産婦だと、家族だけで生んだ。このような時手伝ったのは姑、夫であった。中でも夫が力繩の代わりになったり、胎盤をとったりする事例も多く、夫の介入の大きさが特徴として挙げられる。

国上・住吉では、産婆の外に姑、そして実家の母親の介入がみられた。出産場所も、初産は実家というところが多い。初産を婚家でする場合にも初産のときだけ実家の母親が手伝いをする。この場合、夫は手伝わない。禁止というわけではなく、労働力が足りていなかったらという。

浦田では、夫は妻が出産のときは、その当日は海へ漁をしにいってはいけないとされる。しかし今は病院で出産なのでそのようなこ

とはない。浦田では葬式のときに、集落中の人が仕事を休む。また、産婦は「けがれているから」三十三日間神社へ行ってはいけないという。このようなことから、出産のとき夫が休むことを考えると、ふだんの作業上の危険が伴う生業には、出産・人の死など、けがれているものに対しての慎みを守り、安全な操業を願って忌にもったものと思われる。

○食事

出産の後、産婦は産室ですすが、安納では、その産室で別にカマドをつくって、火をおこし食事を別にしたという。しかしほとんどが、家族と同じところでつくったものである。

○出産後の安静・禁忌

(武部)「カマの日(二十九日)まではナンドで寝ていなくてはいけない。」「後でよくない。」と聞いたが、仕事が忙しかったり、手伝いをする女の人が家にいない場合は、一週間〜八日で働きにできた。

(安納)産後一週間は夫、子どもが家のことをしたが、忙しかったので後は働いた。

(安納)産後は一週間は休んだが、早い人では三日でもう働いた。こういう人は産後の血の道が悪いとして、頭痛が絶えないという。

(安城)十五日間休んだ。早くアガリすぎると悪い血があがるのでいけない。酢は血がクダルので、食してはいけない。

(形之山)一週間はヨコザでまっすぐに寝た。子宮が元に戻るよいうに、とのことだった。三十三日間は姑が仕事をし、産婦は休んでいなければならない。

(浦田)三十三日がトオルまでは休む、という。からだを大事に

して「ナマナ」がトオルまでは休む、という。三十三日間は産婦も子も外出しない。

○乳

ネギを食べると乳がでる。魚を食べるとよいといういい伝えを聞いた。

もし乳がでない人は、同じくらいの子がいる人に、もらい乳をしたり、おもゆを与えたりした。乳を飲めない赤ちゃんがいたときには、最初の乳が余るが、この乳を外に捨てたりして、その上の人が踏んではいけないとされた。

3 流産と死産

○流産

家の北の方角の床下に埋める。

ナンドの下に埋め、犬がほり返さないように石を置く。

○死産

一日でも生きていれば、墓を設ける。

産婦共に難産死したときは一緒にいれる。腹に胎児がいる場合は、腹に帯を巻く。または、カヤの葉をとってきて、生のまま左縄(縄をなうときに左巻きになるようにする)をつくり、これを腹にまき、棺(樽)に入れて胎児がでてこないようにした。これには昔話がある。葬式のとき、先の世のお金として、棺にシキビの葉を入れる。このシキビの葉をもって、一週間ずっとアメを買いにきた女の人がいた。おかしく思っついていたら、女の人は霊屋に入っていき、そのおなかの中には赤ちゃんがいたという話である。

4 へその緒と胎盤

○へその緒

へその緒は母親のへそから指二本分、子どものへそから指二本分のところを指でまきつけ、血をきってからはさみで切る。切った後は日光に干し、紙に包む。粗末にはいけないとしてヒツ（タンズ）の中や、ナンドのすみのふだんの着物を吊る竿にかけておいた。このほか、胎盤といっしょにヨコザの床下に埋めることもある。とっておいたへその緒は、妊娠しない人が煎じてのむと子がでさるといふ。

○胎盤

胎盤のことを、イヤノオという。とりだした後、布切れに包んだり、チョカに入れたりしてヨコザの床下に埋める。現和では北の方角（台所）の柱の下のすえ石の近くに埋める。どの調査地でも人が踏んではいけないとされ、人が踏むと子が夜泣きするといふ。また犬や猫がほりかえさないようにと、瓦や石などを積む。ほりかえずと子どもは病気になる。胎盤は実家で生んだ子どものものでも婚家の子どものものだから、婚家に埋める。また生きている子どものものだから焼いてはいけない。

5 誕生後の儀礼

○願成就

浦田は産後三十三日がすぎてから新しい一つ身の着物をつくって奥神社へ奉納する。浦田神社へも行く。浦田神社は浦田の氏神である。「女は産後けがれているので、三十三日がすぎてからでない」と神社へ行ってはいけない。という。南種子町郡原地区でも、産後三十三日たないうちは神社へ行ってはいけない。行くのは氏神で

ある郡原神社である。また住吉形之山でも産後三十三日をすぎてから、お産の神という形之山神社へ行く。願成就に一つ身の着物に子の名を書いて奉納する。現和では奥神社へ行く。男の子は産後二十九日め、女の子は二十八日めである。生児はこのときはじめて外出する。安納では氏神の神社へ行き、お祓いをする。米、焼酎をもって、産後二十八日めに行く。

○釜祝い

武部では男の子は産後二十九日、女の子は産後二十八日めに五升炊きの大鍋でメシを炊く。これを、カマノメシという。仏様に供え、赤ちゃんに食べさせる真似をする。頭をなで「親は百まで子は九十九まで」と唱える。このとき頭の毛を切り、包んで保管する。安納では、産後二十八日めに大釜でカマノメシを炊く。親戚を呼ぶ。庭に箕を内側をこちらへ向けて立てる。夫の父は袴をつけ、弓矢を用意する。夫の母は赤ちゃんを抱き、坐る。夫の父が「ナイシか、ノシカ」（男か女か）と聞いたら「ナイシでござる」と夫の母が言う。そして箕にむかって弓矢をひく。三回くりかえす。また、三つ足のタライに、カマノメシをオカユにし、ねずみのフンをいれたものをいれ、新しくくしをそれにつける。そしてそれで赤ちゃんの頭をなでる。これは大正時代まであったが、後、集落で廃止になった。同じく安納ではカマノメシは、赤ちゃんの髪につける儀礼のみで親は食べてはいけない。食べるとモエクサの病（全身ヤケドのようなもの）に生児がかかる。現在でも産後二十八日めに、カマイワイをする。ごはんを炊き、親戚中で祝う。

○名つけ祝

名つけ祝は、生後一週間（七日め）に行う。三十三日めの願ほどもきの後に行うところもある。名を書いた半紙を柱に貼り、その下に

お膳をすえ、家族、親戚で盃をくみかわす。このとき食い初めともみられる儀式もある。その家族の中や、親戚中で、なるたけ年配者のおばあさんが、生児の口にめし粒をつけ、おばあさんにちなんで、「長生きするように」と願う。

○モチフミ

モチフミまたはモチフマセという。初誕生より前に歩くと不吉である。親元を早く去るといい、アシヒキモチと称した餅をつき、草履をはかせてその上に立たせて厄を落とす。餅は紅白の二つの餅であったり、大きな丸餅一つであったりする。三六五回搗くと決まっているところもある。モチフミが終わった後は、悪魔除けと称して家の屋根から見える範囲の家に餅を配る。

○悪魔除け

生児は、一才の誕生（次の正月まで、とするとところもある）まで一つ身を着る。その一つ身の背骨に沿って三回並ぬいし、端は少し余らせて結び目をつくって垂らす。一つ身の着物は背ぬいが成人の着物のようにならないので、悪魔よけにする。

○授法

法華宗の洗礼のようなもので、八得という着物を着せて、法華宗の寺で、まじないをしてもらう。生前していない人は、死んでからも死体があるうちにする。多くは一才までにする。

三、比較・考察

1 妊婦の禁忌について

先にあげた妊婦の葬式に関する禁忌は調査地すべてに同じような俗信があげられた。これらの共通点は妊婦のもつパワーとでもいっ

たものが死人に及ぼす影響力であるといえる。そのパワーは妊婦の夫もつものである。これは、「出産当日は夫は漁へでてはいけない」（国上）とする俗信で、産の忌が、産婦、子どものみでなく、夫にかかっていることからわかる。

これらの禁忌でわかるのは、胎児に対する影響よりも、死人に対する影響の方を怖れていることである。

これに対し、産育習俗資料集成を見ると、「葬式・死人をみると黒ホカケ（痣）ができる」とする俗信は全国にある。「妊婦が会葬すると子は難産・死産する」というものも多い。死人のもつ忌が胎児にかかることを怖れている俗信は日本全国にみられるものなのである。石塚氏は、「ここで大事なことは結局そうした行為によって体がけがれるかどうかではなく、いわば生長する魂に対する他の魂からの影響ということであろうと思われる。」という。いまだ不安定で、他からの影響によってどうにでも変化する新しい魂の中に、いまや体をはなれ、まわりを浮遊している魂が入りこんでは大変である、といった考えがここにはある。

それでは、西之表での俗信はどうであろう。妊娠のもつパワーの影響力を怖れた事例は他にもある。先の産育習俗資料集成での「妊婦のいる家で病になると大病になりやがて死ぬ」という事例には、この考えが色濃くあらわれる。

産火と死火との混交を嫌う観念がある。奄美大島では「死者は人びとに靈魂をわけてくれるが、生児は人々から靈魂をうばう」とし生児の影響力の怖さをいう。また「産の忌は死の忌よりこわい」というそうである。こういった観念が根底にあると考えると、妊婦のもつ死人への影響力はまだ見ぬ子どもの魂に対する怖れにあるのではないかとも思われる。子どもの魂に影響する雜魂を怖れる気持ち

とこの観念は矛盾するようでもある。が、しかし、未知のものへの怖れと、逆にそれを大切にする気持ちとのまざりあいといえるのであろうか。今後とも検討していきたい問題である。

2 流産の処理について

流産したときには、形がない、名前がないなどの理由で、墓は設けない。土葬がふつうに行われていた時代には、焼くことも忌まれていた。先にあげたように、流産、早産の場合はほとんどが家の床下に埋める、ということだった。こうした事例は全国にも多い。家の床下や軒下に埋めるほか、墓地の一角にうめたり、岩手県盛岡地方のように、川へ流す例もある。他の人に知られないようにとの思いもあったであろう。しかし、墓にうめないのは、死人とはみなさず、まだ人間になっていないと考えていた、と考えるのが妥当なのではないだろうか。この前提にもとづいて考えると、靈魂でもある胎盤を人のふまないところに埋めるという種子島の事例は、さわらぬ神にたたりなしというのではないが、たいへん消極的でもある靈魂を守る方法といえるのではないか。

3 出産後の安静、禁忌と儀礼について

まず、表1を参照してもらいたい。調査地五か所での出産後の安静と誕生後の諸儀礼についての日数とおもな要素をあげてある。

安静の期間については、安納・現和と住吉・国上とで分かれた。この二か所すつは、伝承者の年齢が似ていることをあげたい。このちがいが、年齢によるものか、地域によるものかなどはこれだけの資料ではいえない。住吉ではこの期間を「三十日右左」と称している例がある。産後ひと月を目安にしたのだろうが、性別で期間がき

まっているのはおもしろい。

この期間は「安静」と銘うったが、生児すら産室をでることを禁止したところもある(浦田①)。浦田には漁港がある。出産当日、夫が漁へでることをきらったり、産婦はこの期間がすぎないと神社へいくことを禁じたりでかなり産による「けがれ」への意識が強いと思われる。

産婦はこの一定期間は外出してはいけない。

この一定期間——禁忌の期間が明ける祝いほとんどがカマの日(カマイワイを行う日)となっているのも興味深い。今は産婦も同じメシを食べるが、以前は別火で食事をつくった例は多い。けがれているものとそうでないものとの区別なのである。今ではそのような事例はないが、カマノメシは、それまで、別火で食事をしていた者のけがれがとれ、一緒にたべるようになるという忌明けの意味がこもっているであろうか。カマ祝は、そういった産婦の忌明けの

表1

場所	武 部	安納①	安納②	浦田①	浦田②
安静の期間	29日		33日	33日	33日後
カマの日	29日(男)28日(女)	28日	33日		33日後
願成就	29日後	28日後	33日	33日後	33日後
カマの日の素	食い初め	名つけ 鳴 弦	名つけ	名つけ	

性格であるといえる。

カマ祝では種々の要素がみられる。宮中では鳴弦の儀という儀礼がある。屋久島では、三日、五日、七日の命名のときにするという。安納では、三十三日のカマ祝にする。

またカマ祝いのとき、生児の髪にこのカマノメシをつける。髪をきるなど、初生毛に関する儀式も含まれる。元服などをみてもわかるように髪をゆうとか、そるとかというのは一つの儀式の象徴でもある。鳴弦や、初生毛そりは、名つけ祝いと深い関係がある。名つけ祝いは以前、鳴弦や初生毛そりなどと共にカマ祝の中で行われていたのではないだろうか。そしてまた「出し初め」とも関連があったのではないか。生児にとっても、カマ祝は一つの区切り目であったことがわかる。

四、おわりに

科学的知識のなかった頃の妊娠・出産と、それにまつわる諸儀礼は、そのまま人々の靈魂観と不浄観といったものを伝えている。

現在は病院でお産をし、その始末がすべて人まかせである。妊娠・出産は忌むべきことでもけがれていることでもない。しかし、その中でも区切り、区切りに行われる儀礼には、前時代的ともいえる要素が色濃い。

今回は資料も乏しく、十分な調査とはいえない。しかし自分としてはこれを一つのステップと考えてこれからの産育習俗の足がかりにしていきたい。

伝承者一覧（敬称略）

名前	住所	生年月日・その他
柳 ミヨ	西之表市現和武部七二二六	M 35・5・21
芝 トメ	西之表市安納大平三八六	M 35・3・5 子11人 軍場生まれ、神道
中園 ヨシ	西之表市安納下郷一五〇	M 22・10・11
古市 カズ	南種子町下中郡原二九七七	T 13・3・20 茎永生まれ
長野 シズ	西之表市住吉形之山	M 43・2・14
小田原ユキ	西之表市住吉形之山二七〇五	T 1・10・4
林 ウラ	西之表市安城	
国浦 シノ	西之表市国上浦田一	T 5・12・10 寺ノ門生まれ
国浦 コト	〃	T 12・6・20 浦田生まれ、真宗

婚姻・その他

末吉 奈津子

今回、種子島フィールドワークに至って、婚姻をテーマにすることにしました。婚姻は身近な問題、話題、習俗でありながら商業ペー
ースに流され、伝えられ望ましいと思われていた形式がまったくと
言っていないほど消え去り、ほんのわずか家庭の中での作法に、その
形骸化されたかおりが残るのみである。それで、今回おたずねした
方達も今は既に式場で簡略化され興味本位なやり方が加えられた状
況を前置きされ、とつとつと語って下さいました。では、聞き取り
調査での事例などを、以下に述べたいと思います。

まず【相手の決定】から始まるのですが、これは、年代が新し
いせいか（主に戦前・戦後）、または本来その姿であったのか、ま
だこの段階ではわからないのですが、恋愛を婚姻のきっかけとする
ものの割合が強制的結婚を生み出す可能性のある見合よりも、多か
ったということです。恋愛関係、ネンゴロになった兩人を親が認め
ぬ場合、住吉では友人が「手引き」をして結びますが、その後、
娘方の両親が認めなければ式は挙げずに終わります。男方の親な
ら、女性の忍の字ですごすしかなかったといわれます。そして見合
の場合ですが、互いに知り合った若者同士でも仲人（ナカウド、ナ
カダチ）をたてて、娘方に男方からラブコールを送ります。もし
て、乗り気になれば見合へと続くわけですが、その中で好まれる

娘、若者の条件として、まず血筋、家柄（生活力）だったそうで
す。これは自分や身内にも望ましい一般的な条件だと思います。一
番はつきり判定しやすい基準でもあるわけです。このことは、家同
士の結びつきを思わせる反面、我が子の苦勞を思いやる親の愛とい
うものを感じさせます。適齢期は女性二十才前後、男性二十五〜六
才。今より少し早い位で、あまり違いは感じられない。仲人の選出
対象は、村落の名士、世話役だったりしますが、仲人は媒灼人とも
よばれ元来は、その字から女性の役目だったのではないかと思いま
す。心理的にも話をもちこまれる娘さんは安心信頼できたのではな
いでしょうか。折があれば、他県の女性の媒灼・仲介人の有無もみ
たいです。ところで仲人は娘方へ三〜四回通い見合の約束を取りつ
けます。縁談が成立すれば一生親戚づきあいをします。ここに至っ
て兄弟間の嫁とりの格差をたずねたのですが、労働力の必要性から
長男、次男以下も早目に嫁をもらえよう親は願ったそうです。長
子単独相続の点から特に長男に力をいれるというのは、本質的表
象的には、あまりみられなかったらしい。

次に縁談が成立した後【結納の儀】に移るのですが、大安吉日
を選び花婿不在で嫁方の家で行われます。この不在には嫁と家との
対面（家に嫁ぐというのを前提とした）を暗に示すものがあるよう
に思います。魚二尾の腹合わせの作法があり金銭も布団一組分位の
志を納めたそうです。返しは洲之崎では、ないということでした。

次は【式】「嫁サンモライ」とも呼ばれて婿養子をとるケース
は娘ばかりの家で、主に嫁入りが多かったそうです。式の当日、嫁
迎え（嫁モライ）をしますが、これには焼酎、米等を婿、親、親
戚、仲人が持参して午前中に行われます（浅川）。婿側は縁側に座
ります。嫁方では「お別れの膳」と称して盃をまわし万能祝歌であ

るめでた節ますだ節を歌います。この時のこの儀式を洲之崎では、「ミツメ」と称するそうで、これはその響きから後述する里帰りの「ミツメイワイ」等を連想させます。これは単なる誤解かのように思ったのですが、この時国上地区では「カオミセ」と言って、いながら嫁方の親戚・隣人の前を婿が通りますから、嫁の「カオミセ」を「ミツメ」という意味で用いてきたのではないかと思えます。

その後、嫁の家の出方ですが、浅川では玄関から、国上などでは葬送の時のように縁先から出ます。縁起が悪いなどと思わず二度と帰りませんの意味からだそうです。その嫁入り行列の規模は二十名位嫁と婿方のみ（浅川）、四十名位の両者とその親族（国上）の例をききました。この行列で花嫁が何に乗るか、徒歩だったのかというのをきけず残念だったのですが、この行列の主人公ともいべき花嫁にいたずらをする例をききました（国上）。実行するのは両者の友人であり、水をかけるのだそうですが、これは悪意なき祝福をこめたもののように他村からの嫁入りの時の例から「我村の限りある主婦の地位が又一つ横取りせられたといふ心わるさが、幽かながらも一致して現はれたもの」（『定本柳田國男集第十五巻』S 38、柳田國男、P 既より引用す）という嫉妬解釈とはまた違った物を見た気がしました。これに対する婿へのいたずらは聞けず不思議だった。嫁まぎらしの例も聞けず元来それが存在したのか否か推測する事もできません。がしかしこれは多分ほんの一例にしかすぎないのだと思う。花婿は水かけを避けるため「ソレミチ」をする。時にはダミーさえ用意される。とてもユーモラスではほえましい光景です。次に嫁の道具送りはその行列と共に運んだとききました。以前聞き知った話では道具は生家に置き主婦（刀自）の座を継承した時初めてもちこむという例をきいたがこれは裏をかえせば、ある程度生家と

嫁との強いつながり、つまり女性の生産労働力の必要性が強く認められていた事を立証すると思うのだが四十〜五十年前のここでは既に云々されなくなっていたのだらう。次に婚礼出席者の席順は血の近い順から並びますが、これは暗黙の了解で認識されていたそうです。夫婦盃は三三九度、親同士親戚は同じ盃ですとまわしのみをします。それが終わると、ますだ節めでた節が歌われ、それからヒザをくずします。婚礼をしきるのは仲人です。若者は、二部屋ぶつとおして作られた式場には入りきらないため祝いの膳には着きませんが、ここでも塩茶を飲ませるいたずらが洲之崎であったそうです。その晩の若衆の宴では、竹のサオに糸を垂らしワラで作ったヘワをくくりつけ、その上に空の一升焼酎ビンに乗せ、両者に差し出し酒とさかなをさいそくします。このヘワは女性器、ビンを男性器とするそうで、その夜のひやかしてもあり、子孫繁栄を願う心もこめていたそうです。これで酒を得た若者は庭先でどんちゃん騒ぎをして破壊行為をするそうですが、その家ではそれは祝いだからと大目に見るそうです。しかし、これも言い換えれば一種のいたずらではないかと思うのです。先にも述べましたが、いたずらにはその原動力として一つ嫉妬があります。ここでも集団嫉妬の現象としてのいたずらではなく純粋な祝いと（多少ねたみ羨望の要素は入ると思いますが）、娯楽の少なかつた若者達の羽目の外せるひとときだったのではないのでしょうか。

次におたずねしたのは【通婚範囲】についてでした。交通手段の発達している現在と比べて昔はやはり、娘さんが嫁入りするにしても、その行先・距離は重要視され問題として意識下にあったのではないかということからでした。しかし予想に反して、それは全島に及ぶということでした。しかしそれは大体、種子島の地理的中

中央にあたる隣接する地区できいたため、その島の南北の距離というものに対して他の端部の地区と比べるとやや態度が柔軟であったためではないだろうかと思つたのです。けれど念のため比較的若い女性でしたが、池田地区での噂話でも他の地区のことをおききしたいとたずねたところ、南からでも北からでも島では、それほど結婚を限定するようなこともなく、自由に行き来していたというのです。安心できるいい縁があれば、どこでも嫁がせてやりたいと思う親心だけの結果ではないような気がします。しかし好まれる娘・若者というところでも一般的に血筋（ここでは主にある種の病気もちの家系とか精神系統のことについてでしたが）、富が重要視されるためどこかに集中あるいは、不均等に分散されている可能性もあると思います。

次に【婚礼以後の儀礼】についてですが、主にどこでも嫁と姑が嫁入り先の近所十軒位の「リンポハン」を回るそうです。いわゆる「カオミセ」に当たるものと思います。どうぞよろしくという意味で行われます。前述のとおり婿の方は既に「嫁迎え」の時「カオミセ」は落ませてあります。

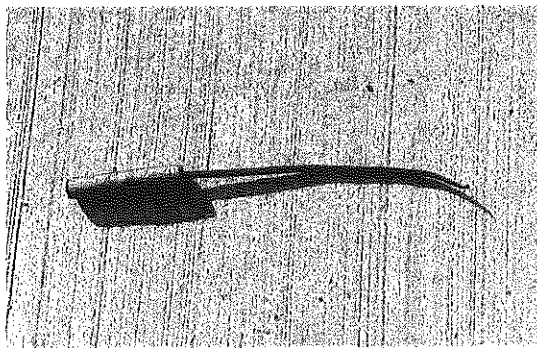
次は【離婚（リエン）】についておたずねしました。離婚夫人の名称についてですが、主に「デモドリ」でした（洲之崎、池田）。しかし、いとこ同士婚や強制結婚の話の多かった住吉では少しだけさかもしませんが、八〇九割程度のそのような夫人を生み出しているためか、「サラカンメ」という一風変わった名称がありました。日本全国どこかに似た名称もあるのでしょうか、他例をしないため由来も意味もさっぱりわかりませんでした。しかし、これはとても不思議な響きがあり、この種子島フィールドワークの中で特に心に残る生きた一単語となっています。

聞き取り調査ではこれしかきけず、少し物足りなく思うのですが、きっとそう思うのは種子島の方達が、皆さん嫌いな顔もせず教えて下さり、快い思い出だけが残っているからでしょうか。今回のことで自分の要領の良し悪しが、人の口を重たくも軽くもさせるという事も痛感し、様々な勉強になりました。

サブテーマと見学の感想

十二月二十四日到着後、すぐ西之表の御拝塔（オハートウ）墓地（種子島家墓地）を拜見しました。御拝塔は字の表すように「拝む」塔であり、墓地下には人骨は無く、その人骨は別の墓でまつられている、いわゆる両墓制をとっている形式なわけです。薩摩領主型である石祠堂型墓地や五輪塔型墓地、ホウキョウイン塔などを見ました。鹿児島島や山川石の黄色は、けっこう目立つ存在です。

今回のフィールドワークは、石、しかも巨石との付き合いが非常に多く、しまいは目が慣れすぎて「石」の感覚はマヒしてしまい、変な感じが残っています。その代表格が石塔で



ク シ(串) (中種子町浜津脇)
柄の長さ14寸、刃の金串の長さ33寸。先端は平たくて少し曲っている。ナガラメ(トコブシ)、タコなどをとる。

す。ここでみた石塔は四十九年忌後の祖霊を集団でまつるものでした。盆(十五日)には石塔まつりが行われたり、この時は石塔を拜んだ後、個々人の墓にお参りするそうです。これは、私には初めての話で、ちょっとした、カルチャーショックを受けました。しかし、考えてみれば「墓が増えていくばかりでは、生活空間が減少する一方のはずだが」という杞憂に少しばかりストップを与えている現象でもありうると思うのです。浅川では、きちんと古い年忌あげ済みの墓石は、まとめて供養後たおすそうですから、墓場の収容数、面積は、ある程度まで一定でうけいれられるわけです。種子島開発総合センター(西之表)では、十六世紀中頃の鉄砲伝来ゆかりの話や民俗資料をたくさん案内していただきました。ここでは米にかかわる話がとて興味深かったのです。赤米の伝説を今に伝える葦永の宝満神社と、白米の伝説を伝える北の浦田神社の対比が、多岐に渡って徹底していて驚きさえ感ぜられました。玉依姫とウガヤフキアエツノミコト。妻(女)と夫(男)。赤と白。海神と陸神。そして南端と北端の対比。これが伝説伝承であったとしても、細長く決してせまいとは言えない島で見事に正確に対比せられた話が出て来たことは、高度な知識を背景としていることが強くうかがえます。

そして秀吉の朝鮮侵略の影響をうけた能野焼は、すかし彫りがあり、鋸歯文由来の波状文が組みこまれている。赤茶・黒の独特の色合い。これに対する沖繩の焼きものは、その土壌のためにサンゴがちらちらとみえるのが能野焼きとの違い。

次に案内していただいたのは「石敢當」でした。殊に寺ノ門の石敢當は、六七坪の石塔に「不動明王石敢當」とかかれ、他のそれらよりも一風変わった場所にあるように感じた。これには少し恐ろし

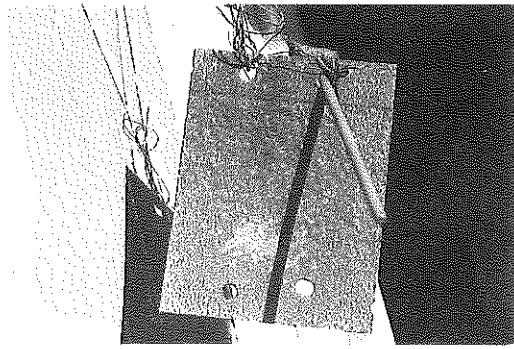


ククリ (中種子町浜津脇)
今は網も化学繊維で作ってあるが、その昔は、何で作ってたのか。単純な疑問がうかぶ。大きさは47寸×47寸。

い由来もあって、「魔」から屋敷地を守ってくれるように置かれるはずのものが、タタリを及ぼす力をもっていて恐れられたというのは意外でした。しかし、二面性をもつという例はよく聞く話でもある。矛盾をどう解釈すべきか。これは容易ではありません。一月十九日には「勝負の破魔」でまつられる以外、神格化を避けるためまつられないそうですが、なぜ神格化を恐れるのか少し理解しかねます。理解できないのはその意味が推測できない勉強不足からですが。

次は巨樹信仰にかかわることについて、書きとめたいと思います。元来、寺の建物を守る地神が伽藍(ガラン)から種子島では屋敷地守りの「ガロウ」となったそうです。ここは女人禁制の所が多いそうですが、先生のご指示により「学生は中性」の言葉を頼りに案内していただき入っていきましたが、やはり何かこわがらせるものがありました。

まず、最初にガロウ山に入っていた時には、元来は何を対象としてまつているのかわからなかった、いえ誤解してしまう位に今



報知用のかま（中種子町竹之川）

偶然通りかかった方が教えて下さった。カ
ネで、鉄板を利用したもの。集会や火事な
どを知らせる。

やった解釈は、無知
な私にすうっと、
とけこんでいくよう
でした。
樹木から「神木」
を選びまわっている
が、江戸時代には、
ほこらを作り次第に
神格化され、木が枯
れると樹木を信仰し
ていたことは忘れら
れそのうち立派な神
社ができる。ああ神

は、それが違うものに移ってしまっているのです。なんとも
はや世界の文化の流れ移行をここに凝縮してみているような気がし
ました。今や本土型の巨樹信仰が種子島化して、森の中の巨樹の下
に、菊面石（サンゴ）を大量に配し潮井（シュエイ）を供える。巨
樹は主にタブの木、アコウの木、ソテツであり、サンゴは参拝毎に
一つずつ持参する、砂、じゃりで作ったツツや海水のお供え、つま
りシュエイは海の浄化力を信じているからであり、これらは森信仰
や巨樹信仰、海の信仰などが混在していることを示しています。最
初にみた徳瀬のガロウは顕著な社もみえず、サンゴが信仰対象にみ
えたぐらい樹木の方は大きくても目立たなかったのです。向井里へ
行くと、ここには石のほこらがあり、中には石のご神体が入ってい
たのです。周囲四層のタブの木の巨樹の下、それはまつられていて
見る者の目は、そちらに向かざるをえません。ここで先生のおし

社っていうものはそういう生い立ちがあるのかもしれないのだと思
うと、今まで拝殿で拝んでいたものの実体を誤解していたことにふ
と気付き、参拝の意味を考えこんでしまいました。下野先生は一つ
の説だからといわれましたが、頭の中に深く刻みこまれたのでし
た。ここにみられた細長い石のご神体ですが、崔徳源先生（現在全
羅南道の順天大学学長）の韓国の解釈では種子を意味するという話
をお聞きしましたが、日本では何か、しっくりこないような気がす
るのです。もちろん感情論でしかないと思いますが……。しかし、
海外の事例もひくと様々な解釈がふえて、広い視野でものごとが見
られて、とてもわくわくします。その後、いろいろな神社を案内し
ていただきましたが、拝殿と神体が美しい清流をはさんだりしなが
ら遠く離れていて、自分の田舎にもこのような分離状態のものが高
だ残っているのだろうかと考えました。これから先は拝殿にいなが
ら真の神の依り代である神体を、心にながきつつ拝みたいと思っ
た。

次に恵比須様についてふれたいと思います。浜津脇でまつられて
いた恵比須神社は、ご神体は海石で若者が海から引きあげた時に、
二度とも同じ石だったためそうなったことでした。この横脇
には農業従事者が虫などを供養するように、大漁だったイワシを供
養する塔がありました。ほこらに入っているものとそのまま岩の上
にたてまつられているものがありました。恵比須様はその海中に
いたため、持ち合わせている同族の力で魚を呼びよせる大漁の神だ
そうです。バスの中から、磯の岩の上じっと海をみつめるかのよ
うに鎮座するそのご神体をみたとき、ほのぼのとしたものが、こみ
あげてきました。

それと崔先生のテーマでもありました「力石」ですが、岡山神社

(安城上之町)に伝わるように、力を授かることの意味から成人男性の証明に至るようになったのは、わかりそうなことなのですが、これが至る所になり、中には、わからなくなったように放置してあるものもあり、私は崔先生が「力石ですか？」ときかれるまで全然気付かないようなことも多く困った状況でした。変な話ですが、それによって、それまで「力石」を話の上でのだけの存在のように思っていたものが、ずっと手元に落ちてきたような錯覚に陥りました。気になるのは、世界でのその存在の有無、その分布、発祥地。発祥が同じであるなら、その根源的意味の移りかわりなどです。

以上、今回強く感じたことをのみ書いたので、皆さんとまわったものからは、大分もれがあり、単なる感想文のようになりましたが、とても勉強になりました。

婚姻習俗の探究

高本 由紀子

一、はじめに

正月三日間を中心に、種子島の「婚姻」について勉強させてもらった。人々は、島独自の婚姻形態を形成してきたわけだが、文化の変遷過程で様々な文化が融合し、取り除きながらきた。そのため多くの特徴や、問題点が浮かび上がってきた。そういったことに注目していきたい。

さて、種子島は『タネ国』といわれ、古くから稲作が盛んに行われ、生活必需品は全て島内でまかなうことができる豊かな島である。その中で人と人がどう結びつき、連綿と続いてきたかを述べていきたい。

調査は一週間にわたり、北は浦田から南は里まで、島内を広く歩いた。しかし、調査は八つの集落にとどまり、調査の不足な点も残るのが残念ではある。

二、概要

1 恋 愛

(1) 適 齢 期

男が適齢期にさしかかると、「あんたも年頃だからそろそろ嫁さ

んを養わんか。」といい、親戚や知人を介して話を進めるものであった。戦前は比較的早婚で、男は二十二〜二十四才、女は二十才前後で結婚した。終戦直後は男は三十才をこすこともあり、女は二十四、五〜二十八才までに結婚し、晩婚であった。

(2) 通 婚 圏

現在では全く関係なくなったが、時代を遡るほど、集落内婚の傾向が強い。また、親族の中から相手を選ぶことが多く、西俣では集落内での結婚を勧め、「親戚が多くなると困る」ので、なるだけ近い所から選んだという。また、立山でも兄弟、親族関係の中から選択することが多く、集落内ほとんどが親戚だということであった。西俣も立山も共に農村で、立山は特にこの傾向が強かったらしい。

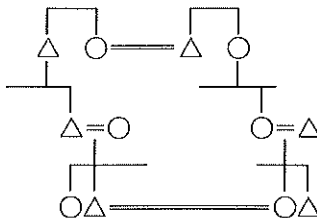
親族関係の中から、選択する例を二例示しておきたい。(下図)

(3) ヨ バ イ

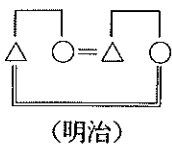
昭和初期までヨバイは盛んに行われていた。集落内ばかりでなく、一〇歳以上離れた他集落まで足をのほすこともあった。

現在では青年団となっているが、以前は青年会があって、男は十五、六才〜二十五才まで加入していた。女は処女会に加入していた。定期的に青年会と処女会の連合会があり、女の情報を交換したり、男女が顔見知りになる機会であった。青年会はいわゆる若者組

例②



例①



であるが、後に述べる婚礼を妨害する役割をもつ、かなりの権限を部内で持っていたと思われる。

① 浜之町・瀬泊・浦田（漁村）

夏に戸を開け蚊帳をつつて寝ていると、若者が長棒で、「おきれ、おきれ」とつつく。驚いて逃げることもあり、日頃好ましいと思っている人には寄っていった。ヨバイでは性交渉をもつことがほとんどだった（浜之町）。

子供の代（昭和二十年頃）にヨバイは盛んであった。「ぬっすどか（盗人か）」といって追いだされたという。また何人も若者がよって伊閑（一二歳程）まで夜遊びに行くことがあった（浦田）。

中種子の牧川（一二歳程）、現和（一〇歳）、安納、花里崎まで足をのばした。夜までに目的地へ着くように昼から出かけ、顔見知り呼び出し、女の家へ案内してもらったという（瀬泊）。

② 西俣・立山・里（農村）

夜忍び込み、女と仲良くなる男の方が人（親戚）を頼み、「通うような仲やから、養わせてもらえんかな。」という話をつけてもらった。また、女は男がヨバイにいつ頃くるだろうかと覚悟するものであった（西俣）。

往来で冗談を言ったり、男同志で「こんどあのおなごんとけえいってみよう。」と話しをし、尋ねて歩いたという。夜、親にわからないようにこっそり戸を開けて入ってくる。戸の軋みを消すために水や小便をかけた。現在のように畳が全部屋に敷かれていたのではなかった。足音を消すために鴨居に手をかけ敷居を伝っていた。非常に用心深く行われていたのである。男にとっても女にとっても一種のスリルを与えるものであった。寝ている女の後ろから抱きつくと、女は驚き騒動して追い払った。女親に追い払われた若者

が仕返しをすることもあった。馬を放したり、居間の真中に不浄のものを撒いたり、便所の穴に大石をはめ込むなどのいたずらをした（立山）。

若者が何人かで集まり、女の家泊まって遊んだ。また、親が了解している場合は公然と寝て遊んで朝四時頃帰ることもあった（里）。

③ 中目・野首（士族集落）

昭和九年大日本青年団が組織されてヨバイの風習はなくなったという。四く五人集まれば、「走ってみようか」と馬を駆けさせた。いきおいで島間あたりまで走り、村に知り合いがいると、女の家内した。彼らが目覚めると、土地の者が通わないようなオカチメンコのところへ案内されていた。と笑話もついていた。また、親が怒って追ってくることもあり、証拠に禪を握られていたという（中目）。

④ その他

ヨバイでは性交渉をもつことが多く、妊娠することもあった。その場合、墮胎するか、あるいは女親が育てたり、また結婚にいたることもあったが少なかった。妊娠しても厳しく責任を問うことはなく、自由恋愛が尊重されていた。

恋愛は比較的自由に行われ、結婚へ発展するケースもまれではなかった。本人同志で取り決め、人を頼んで親と交渉した。反対されると、「ハシル、ハシラセ」といい「バキキを走らせてきた。」といつて女を連れ込んだ。男親は喜んで迎え入れたものであった。また男が友人の家に女を連れて逃げることもあり、子供でもできると親が承諾してやった。式はあげなかったという。

士族集落では昭和の初期まで武家の風習が残っており、上流士族

には衆達といひケラー（家来）がいた。戦後は廢止されたが、主人家からケラーの家に嫁入りすることはタブーであった。

(4) 感想

種子島の一部では自由恋愛が尊重されていた。女も男もヨバイによって相手の素質を見極めた。しかし、不思議なことに結婚は親の取り決めによるが多かった。つまり、恋愛は自由で本人同志の意志が尊重されるが、結婚では原則として親の意志が尊重されるといふ矛盾した二つの形態が併存していたのである。

2 婚 姻

(1) 顔見知り

原則として、結婚は親の取り決めによるもので、親が行けという時は反対できなかった。十七、八才の時、男の祖母が「この子をば養うてやろう。」と言ひ二年程つき合つて結婚したという（浜之町）。他集落から嫁をもらう場合は、人のうわさを聞いたり、親戚の紹介で嫁を探した。男の家が人を頼んで女の方と交渉をし、女にその気があると男女を会わせる。話が合つと結婚ということになる。親の取り決め反抗する者もあったが、叔父などが中に入つて説き付けた。結婚するまで相手の顔を知らないという事もあった。また、好きあつて本人同志で取り決め結婚することもあった。その場合、親戚に仲介してもらひ親の承諾をもらう。

(2) 婚 礼

婚禮は三段階形式になっている。嫁とり↓嫁入り↓里帰りの形式である。

① 嫁迎え

「ゴゼムカエ」といふ名称は現在使われていないらしく、聞くこ

とはできなかった。

「盃取り」といひ夜行われる。晩に仲人と男親が、焼酎とお金を持つて嫁方へ「盃」をさしに行く。「シュウトジョウ（男親）に盃をさす。」この日婚禮の日取りを決める。「はやい日はいかん、ゆるか日がいい。」「荒い日はいかん。なきた日がいい。」といつてうさぎのような静かな日ということと卯の日が適していると考えられていた。終戦後しばらく家で結婚式をした（立山）。

婿、両親、兄弟、叔父母が参加し、婿方が四角の盆に紅白の餅を三十個ほど分けて並べてもつて嫁方へ行く。餅は参加した親戚にくばり、余りは近所にくばった。また、仲人とオヤンシ（男親）が焼酎三合、米一升をもつていき、嫁方では御馳走を用意している（里）。

「盃」あるいは「嫁とり」といっている。仲人、婿、両親、兄弟が嫁とりに行く。婿方は焼酎一升、魚二尾、米一升、餅を持ていき、嫁方で晩にふるまわれる。嫁方からお返しはない。この日、式の日取りを決める。（「日もらい」）（西俣）。

夜にこっそりと盃をかわした嫁方へ行く。婿が仲人と「雑餉」といって、焼酎三合、米一升を持っていく（浦田）。

「嫁もらい」といひ、焼酎をかんびんに二本、米を一升持つていく。これを「一升二杯」といふ。お金を白紙に包んで扇型に折り、お重の上に重ねて一緒にもつていく。婿と両親と仲人がきて嫁が盃をさす。この日に婚禮の日取りを決める。両家の都合や、先祖の死んだ日を除き、一、三、五、七の中から決める（浜之町）。

親戚の中から仲人をたてる。婿と男親が嫁方へ米と焼酎（一升二杯）をもつていく。嫁が盃をさす。そのまま嫁を連れて帰ることもあれば、二、三日おいて日を選んで式をあげる場合もあった

(野首)。

顔見知りの時とは別に仲人をたて、仲人が結納(酒、魚代)を持っていき、嫁もらいに行く(中目)。

以上が「嫁もらい」の内容である。集落により多少異なっているが、ほぼ同じである。

「一升二杯」という呼称は、浦田ではザッショウ(雑餉)であった。文献を見ると「雑餉」という例がある。祝い事や、あいさつにもっていくものを「雑餉」と呼んでおり、結婚の場合だけ特別に「一升二杯」と呼ぶようになったと思われる。結納金は一切なかったが、麓(府元)と漁村の浜之町でお金を包む風習があった。仲人は、親戚の中からはばのきく人を選ぶ。あるいは友人や村の有志、学校の教師(最近)に頼んだりする。仲人は、両家の仲立ち、嫁入りの日取りや祝いの品の取り決めなど八割がた責任をもつ。

②嫁入り

嫁入りは二段階に分かれている。嫁の出立ちと、婚家へ入ることの二段階である。

仲人が嫁を迎えに行く。草切りにいく仕度をして風呂敷包み一つで、夜に嫁入りした。婚家には庭から入る。着がえは、祝い事などがある度に着がえに実家に行った。以前はなかったが、昭和に入った時には「水かけ」をして花嫁にかけた。「花が枯れないように」かける。そのため傘をさしていた。婚礼を夫方であるが、途中若者が、竹竿にエゾウケをさげて家の中にさし入れ、御祝儀や御馳走をもらう。あまりしぶると、仕返しに家の中に土をまかれることがあったという(立山)。

以前は里でも水かけがあった。婚礼の最中に、女達が手拭いで顔を覆って男装し、仮装行列のようになって踊りながら、竹やつとを

もって家の中にさし入れた(里)。

仲人と一緒に風呂敷包み一つで行った。普段着の中でいい服を着た。途中若者が水をかけたが、「帰って来るな。」という意味があったという。両親・兄弟がついてくる(西俣)。

人に知られないように晩に嫁に行った。「花が枯れないように。」花嫁に水をかけた。婚礼の最中に「テトリ」やへつを若者達が投げ込み、焼酎、魚をのせてもらった。また、「落ちつくように」石垣を壊したりした。大正になってめったにあばれなくなったという(浜之町)。

仲人が嫁をむかえに行く。若者が何組かに分かれ、花嫁に水をかけた。また、夫方の石垣を壊したり、馬を放したりした。婚礼の最中に竹竿をえんからさし出し焼酎をくくりつけてもらった。後日、親戚まわりをする人もいた(野首)。

仲人が嫁を迎えに行った。提燈をさげ、両親兄弟がついてきた。角かくしをした。昭和の初期まで行われていた(中目)。

嫁入りは、ひっそりと行われ簡単なものであった。嫁入道具などはなく、仕事着を持って行くだけだった。婚家には玄関から入るところが多かった。

③里帰り

「ミツメ」、「三日戻り」などと呼ばれ、婚礼から三日後に夫婦そろって里帰りをした。婿は餅や、米を持って行った。女家では御馳走を用意している。二日程泊まり、遊んで行くことが多かった。

立山では夫婦、親、兄弟が一緒に行き、花嫁は餅をバラに入れ、頭にのせてもっていった。その他に、鉢に魚を二尾入れ、にしめ、焼酎を持っていった。浜之町では「三つぞろえ」といい、お金、反物、焼酎など三つそろえてお礼にいったという。

(3) その他

① 略奪結婚

南九州などでは、明治後期まで、略奪結婚が黙認されていたが、種子島でも稀に嫁入りの途中で、仲間を頼んで連れさったり、娘をむりやり連れて来たりした。

② 出産

立山や西俣では、初子の出産を里でする。出産間際に帰り、二十日程で婚家に戻り祝いをする。次子からは婚家で生んだという。他の集落では最初から婚家で生むことが多かった。

③ 隠居

長男が嫁を迎えると隠居することが多かった。また、二〜三人子供が生まれてからする場合もあり、一生同居することもあり、各家の都合で決まったようである。

④ 嫁の仕事

草切りに、次の日から行った。姑には一切の仕事をさせないのが一般的であった。人によっては、姑が家事、嫁が畑仕事をするという分担があった(立山)。立山では、「ヒハツオ」といい舅に飯を一杯毎日もっていき、正月、盆、三月、五月、七月、九月の節句には米一升、焼酎三合をもってお礼を言いにいったという。

⑤ 離婚

「この家ではつとまらない」と思えば、嫁はだまって里に帰った。

(4) 感想

終戦後、現在の華麗(?)な婚礼へと変化したのが、それ以前は結婚式とは簡単なものであった。こっそりと嫁入りが行われ、風呂敷包み一つで嫁に行くのが、麓(府元)を除いて普通であったのだ。現在は、結婚式は人生の一大イベントであるが、昔もそうではあっ

たが、婚家の家庭生活に入ることであり、家から家へ移動することであり、個と個の結びつきはあまり重要視されていなかったこともあるが、婚礼の式自体は、他の祝い事と同じ程度に行われていたようである。

三、考 察

1 婚礼形態について

日本の婚姻は、大きく分けて婿入り婚と嫁入り婚である。種子島の婚姻形態は、婚姻生活の場が夫方にあることから嫁入婚だということが出来る。しかし、「ヨバイ」の存在や、初婿入りが行われること、実家との結びつきの強いことから、婿入り婚から嫁入り婚への変遷がうかがえる形態が残っている。こういったことを、これから例をあげながら考察してみよう。

種子島の婚姻は原則として親の取り決めによる。が、昭和初期まで盛んに「ヨバイ」が行われていた。恋愛は自由であった。ということは、結婚を目的としない「ヨバイ」が行われていたことになる。少々極端ではあるが、親に反対することはできなかったのであるから。いわば、父権制の強い家父長制的傾向を持ち、かつ同時に婚前交渉があった、二つが併存していたのである。「ヨバイ」と多少類似しているものに「試験婚」がある。どちらも婚前交渉を通して、互いをみきわめ配偶者を選択していく機能をもっている。ただし、試験婚の場合は、直接相手の家庭生活に結びつき、あくまでも親が判断する。「ヨバイ」は当時者同志の自由意志によるもので、個人と個人の結びつきであった。試験婚とは異なる。婿入り婚の形態を取っている所では「ヨバイ」が盛んである。婚姻形態そのもの

がヨバイの要素をもつ。「ヨバイ」は、古くは平安の都で行われており、この時婿入り婚であった。このことから、婿入り婚から嫁入婚への変遷の過程で「ヨバイ」の本来の意義がうすれていき、残ったと考えられる。では、なぜ結婚に結びつかない「ヨバイ」が残ったかということは、「ヨバイ」が婿入り婚の要素の中で配偶者選択という重要な役割をしていたから、その重要性ゆえ失われず、のこったのかもしれない。しかし、結婚に結びつかないからといって「ヨバイ」を否定することはあまりに短絡的であり、今後考えてゆかねばならない問題だといえる。

武士階級の嫁入り婚の普及がそこにはあったわけだが、種子島の土族集落では、昭和九年大日本青年団が組織されるまで「ヨバイ」が盛んであったという。土族においては、それが結婚に結びつくとはまずまず考えられない。これは主人家とケラーとの厳しい上下関係からもわかる。嫁入り婚が下層へ普及したように「ヨバイ」は上層へ普及したのではないかと考えられる。

次に、嫁が夫方に移っても衣類の大部分は実家に残しておく慣習がみられるが、これは嫁が実家との縁を長く断ち切らないことを示している。また、初子を里に帰って生む習慣がありこれも結びつきの強さをうかがわせるものである。実家で出産しない場合も、世話の実母がすることが多い。ただし、祝は夫方である。

また、種子島では婚礼後二三日して里帰りをする。この里帰りは「ミツメ」と称され、全国的にある儀礼で、中国まで広がる。この里帰りにには瀬川清子の分類がある。①新婚当初、頻々として里の手伝いに帰るもの。②やはり新婚後数年、多くは年数回その都度相当の期間に帰って自分や子供の衣服の調製修復に当てるもの。③二〜三年程まで出産にあたって相当期間帰るもの。④嫁入り直後の

儀礼的な里帰り。⑤正月、盆などの節句の里帰り（瀬川清子 一九五五）。以上の五つである。種子島のミツメは④にあたる里帰りである。では、なぜこのような儀礼が残っているのだろうか。以前は実際の意味をもっていった儀礼であったと考えられ、婿入り婚における嫁の実家の結びつきが、儀礼化した「ミツメ」の中に残っているのではないだろうか。

また、嫁入りの前に仲人と婿と両親が嫁方に「盃」をとりに行くとき、焼酎、米、餅等を持っていくが、婿入り婚（通い式）の「樽入れ」に共通したものである。この儀礼は、婿入り婚の儀礼化し残った一つの慣習であろう。この「通い式」でも物品や金銭を結納としておくることはない。種子島でも現在は結納を行うが以前はまったくなかったといえる。

このように、まだ今後の考察が必要とされるが、婿入り婚から嫁入り婚への変遷があり、様々なことが残っているようである。その理由としては、通婚圏の広がったことや、父権性の強い武家社会の嫁入り婚の影響が考えられる。また、種子島は豊かな島であり嫁の労働力を実家に拘束する必要がなかったことも、理由の一つとしてあげられるであろう。

終戦後は日本全体の変化の中で、より華やかな結婚式、花嫁が主人公になった結婚式へと変わってきた。それ以前は、時代を遡るほど結婚式は質素で、今とくらべると単に女が家から家に移ることであった。種子島の「婚姻」をみてきて感じたことは、婚姻は個人の結びつきというよりは、労働力の移動であり、経済力の安定である。そして、若い男女が義務もあるが、様々な権利をもてる年齢階梯へ移行することであったのではないかとということである。

2 水かけ儀式について

嫁入の道中に、それを妨害するような儀式がある。なぜ、そのようなことが行われていたのであろうか。結婚は通過儀式の一つとして考えられている。花嫁が実家から婚家へ移行する道中はもともと不安定で悪霊が憑きやすいと考えられていた。そのため覆面をしたりするなどして、花嫁を守る風習が各地にある。

夫家に入る時は先ず火を跨いで入る儀式がある。多くは「魔除け」のためといわれ、各地にある。火をつけた稲藁や灰なりを跨ぐのであるが、これは浄化の儀式とみることが出来る。その根底には産婦を火にあて、不安定なものを安定へと再生する呪術があるが、「水かけ」はそれと似た意味をもっているのではないだろうか。この「水かけ」は全国的に行われている習俗で、若者達が道々花嫁に水かけをするのである。これを再生の儀式とするにはまだ考察が不十分であるが、今後「火」の儀式とともに考察していく必要があるだろう。

また、沖繩には火の神信仰があり、嫁が実家から火をもってきて取り替える習俗があり、「火」が夫家への加盟を象徴している。種子島では火の神信仰と嫁入りの関係する儀式を聞くことはなかったが、「火」も「水」も主婦があつかい祀ることから、「水」にもこういった加盟儀式を考察することは可能であろう。正月元旦の若水汲みは男が行うが、女が行う場合がある。しかし、まだ問題があり考察していききたいと思う。その他に、家の石垣を壊す習俗があるが、以前は各地で行われていた。壊された石垣はあとで新しく修復されることになる。これは新郎・新婦の再生を意味する儀式といえないだろうか。

四、まとめ

これまで、種子島の婚姻についてみてきたわけだが、それらは士族階級の上層の婚姻形態と、下層のものが互いに影響しあって形成されていったといえる。

自由な恋愛（特に「ヨバイ」と親の取り決めによる結婚、三段階形式の婚礼儀式、嫁の実家への結びつきなど中世以前の通い式の婚礼形態のなごりなど、伝承されてきた独特の文化があり、文化が様々な外の文化と融合しながら変化している一つの例であるといえる。こういった変化の中で種子島の人々は自分達にあった婚姻形態を形づくってきたといえる。その婚姻形態もまた、時代の流れに沿って形骸化し、よくある華やかな結婚式になっていた。

最後に、一週間もの間民俗調査に協力して下さい、手助けして下さい。下さった種子島の各地のみなさんに感謝し、お礼を申し上げます。

参考文献

- 『九州の祝事』明玄書房 一九七八年
- 『日本民俗大系三』平凡社 一九五八年
- 『日本民俗学講座二』朝倉書店 一九七四年
- 『人生儀式三』有精堂 一九七八年
- 江守五夫著『日本の婚姻』弘文堂 一九八六
- ファン・パール著『互酬性と女性の地位』弘文堂 一九八〇年

伝 承 者 一 覧 (敬称略)

名 前	生 年 月 日	住 所
榎 本 定 彦	M36. 4. 16	西之表市現和本村
遠 藤 惣 八	M35. 8. 13	〃 現和西俣
田 上 ま つ	M26. 2. 16	〃 立山本村
小 川 タチエ	S 2. 2. 25	〃 立山
サメシマ キサ	T10. 10. 25	〃 立山御牧
長 田 実	S 2. 10. 5	南種子町平山浜田
山 野 チ ヨ	M34. 1. 8	〃 平山浜田
宮 里 重 治	M39. 3. 28	〃 茎永中之町
寺 内 静	T14. 6. 5	〃 里
上 妻 フ ジ		〃 里
上 妻 宗 美	M34. 8. 18	〃 里
河 東 不 凡		〃 島間上方
大 木 ハ ナ	M39. 5. 4	西之表市浜之町
西 田 覚 一	M36.	〃 野首
キヨモト モト	M33. 10. 22	〃 浦田
上 妻 綱 利	T 6. 3. 19	〃 中目
上 妻 タ ミ	S 2. 1. 14	〃 中目

人生儀礼（産育・婚姻）および民具

江 藤 なほ子

一、はじめに

種子島を訪れるのは初めてであったため、今回の実習は大変楽しみであった。実際に訪れての印象は海は美しく、自然の豊かな、すばらしい所であるというものであった。

今回の私のテーマは、人生儀礼の中の「婚姻」、「産育」である。「婚姻」は以前の実習で調査を行ったことがあるため、それと比較しながら調査を進めたいと思った。「産育」は初めての調査であったため、聞くことが何もかも新鮮で興味深いものであった。この二つのテーマを通して昔の生活習慣を知ることがは現在を生きるにおいても大事であると思われる。

三日間という短い調査期間と、私自身の勉強不足のため不十分な点も多いが、調査できただけをまとめていこうと思う。

二、地域別実態

1 産 育

① 西之表〔瀨泊〕

◎妊娠

・妊娠している人を「オオハラを抱えている」などと言っていた。

妊娠という言葉あまり使わなかった。「ハラランダ」などと言ったりした。

・妊娠中に火事にあつたら触ったところに子供にホヤケ（しみのようなもの）ができるといわれていた。

・妊娠を知ったとき、何ヵ月かに祝いはしなかった。

・安産祈願は、日典寺や住吉に願かけに行っていた。する人もいたし、しない人もいた。

◎出産

・嫁ぎ先で産んだ。長男は実家で産んだ人もいた。

・カミノザの北側の、ヨコザで産んだ。

・寝産であった。

・隣の集落に何百人もとりあげたという、いい産婆さんがいて、その人にとりあげてもらった。産婆さんが来てすぐにカマでお湯を沸かしそれを木のタライに入れた。産婆さんは片一方の手で上手にとりあげた。

・産婆さんは、免許があつた人であった。タライに湯をとって水でうすめて、あびさすものであった。お湯は婚家のお母さんがハガマで沸かした。

・産のとき夫は漁に出ているいなかった。

・夫は、ずっと枕元につきっきりで力をいれる加勢をしてくれた。

・こういうことをしてくれる人は少なかつたかもしれない。

・後産は、ヨコザの床下に穴を掘って小さな壺に入れて埋めていた。古い急須やヤカンに入れて埋めるといふ話も聞けた。

・ヘソノオは小さな箱に入れてもっている。

・出産祝いにご飯を一緒に食べたりした。

・出産後は、すぐに働くときは良くても、年をとってから悪

くんだりするので休まねばならなかった。三十日は寝床で休んでいた。

・出産後に実家に戻ったりはしなかった。実家からお祝い金として何百円かもらった。

・名付け祝いを七日か、一カ月以内のどちらかにし、ちょっとした御馳走を食べた。名付け親を頼む人もいた。

◎成長

・産まれてから三十三日に厄払いに行き、願をほどこに行った。

・節句のときは、こいのぼりをたてたり、人形を飾ったりした。親類を呼んで祝いをした。

・誕生日には、ちょっとした御馳走をした。誕生日の前に歩いた子供に餅を踏ませた。普通の餅を十二個、三日月の形をした餅を一個、お月様の形をした餅を一個、お日様の形をした餅を一個並べて作ってもらった赤い鼻緒の草履をはかせて踏ませた。その餅を屋根にのって配るといいと言われていたが、親戚や隣近所に、ただ配った。餅を背負わせて歩かせるのは、こちらではないが聞いたことがある。

・子守は、ひい婆さんがしてくれた。子食いひもは白いサラシの帯であった。

・ゆりかごは店に糸でできたようなものが売っていたが、魚とりの人から網をもらって主人がハンモックのようなものを作った。

・オシメはユカタのあがりで作った。川下やタライで洗った。

・産着は生まれる前に二重ね、三重ね作っていた。まず、肌着を着せて次にネルの着物を着せて、その上におばあさんの古い着物をつぶして綿を入れて作ったものを着せた。

・赤ちゃんは動いて抱きにくいのでマキブトンといってザブトンの

大きいようなものを作って、それにくるんで抱いた。

・ネンネコといって袖がなく邪魔にならないものを仕立ててくれる人がいた。自分で作る人もいた。汚さないように大事にすれば何年でも着れた。

・七五三は特になかった。

・子供が七つになったときに、ひもときをする。紐付きの着物はもう着ないということで、つけ紐のついていない、帯を別につける着物を着る。男の子も女の子もしたが特に女の子には綺麗な帯をあげた。ちょっとした御馳走を食べるといこともした。

② 西之表(洲之崎)

◎妊娠

・産まれるまでずっと働いていた。重い物を持つてはいけないといわれていたが、臨月でも働いた。

・三ヶ月くらいになったら産婆さんが木綿の白い帯を巻いた。

・住吉に願かけに主人が行った。

・初めての子のときだけ、腹が太くなってから形之山のお産の神様に願をたてにいった。

◎出産

・長男は実家で産んだ。後は婚家で産んだ。お姑さんが手伝ってくれた。

・寝間で産んだ。

・寝産であった。

・産婆さんにたのんで産んだ。自分一人で産んだこともある。産まれてから産婆さんがお湯で洗う。おなか痛いといるときにお湯を沸かして、産まれたら産婆さんがきれいにあびせてくれる。昔は産婆さんが家に来て毎日きれいにあびせてくれた。産婆さんは種子島

に今でもいる。

・みんな婚家で産んだ。産婆さんがいて、腹が痛くなつて旦那さんが迎えにいつてくれた。

・お湯は旦那さんのお母さんが産婆さんがきてから沸かした。たやすく産まれた。木のタライにお湯をいれて赤ちゃんをいれた。

・夫はお産のとき漁にでていたり、いてもびっくりして逃げたりしていた。

・お祖母さん、産婆さんがいて、夫は漁にでていた。

・ヘソノオは乾燥させて箱に入れてとっておいた。胎盤などは昔は土葬であつたので墓所に持つていつて自分の家のお墓の後ろに穴を掘つて埋めた。

・ヘソノオも胎盤も床下に埋めた。

・出産祝いはしなかつた。

・出産祝いは長男のときだけした。スイモノなど三品料理でお祝ひした。

・出産後一週間もしたら炊事、洗濯をした。

・出産後一カ月もしないうちに働いた。二、三週間もしたらまかないをした。

・出産後に子供を連れて里には帰らなかつた。里は遠いので、めつたに帰らなかつた。

・出産後子供も連れて里には帰らなかつたが親が見に来た。

・名前は自分達でつけた。

・名前は一週間以内につけなければならなかつた。お祖父さんがつけた。

◎成長

・願ほどきに子供が産まれてから一、二年経つて住吉に行った。

・餅踏みは今でもする。足形みたいな形の餅を二個、お祖父さんの作った草履をはかして踏ませた。背中には、風呂敷に包んだ一升餅を負わして歩かせる。そして、紅白の餅を親戚に配つた。健康でありますようにという意味があつた。

・誕生日の前に歩かなかつたので餅踏みはしなかつた。

・子供いひもは、サラシであつた。

・子供いひもは、白い木綿の帯であつた。その帯は妊娠中に腹にまいていた帯を使った。コカリオビと言つた。

・オシメはユカタをといつて作つた。一反で八枚くらいできた。タライで洗つていた。

・オシメは白い木綿で自分で作つた。

・産着は自分で縫つた。下に着るジバンも自分で作つた。

・仕事るときに赤ちゃんを背負えるちゃんちゃんこを自分でつくつた。袖がなく赤ちゃんだけをくるむ感じのもので仕事がしやすかつた。中に綿を入れた。

・ネンネコをモスの帯をといつて作つた。コンゴバオリをメイセンで作つた。

・七つ祝ひをした。ちょっと御馳走をして親達を呼んだ。

・七五三はしなかつた。

・親戚の人に頼んで帯ときしてもらつて、お金を包んでもらつた。昔はみんな着物であつた。ツケヒモの一方をといつて、帯を買つてしめさせていた。

・一月七日に七草祝ひをした。親が子供を連れて七軒の家をまわつた。

2 婚姻

① 西之表〔瀟泊〕

◎配偶者選択

・恋愛結婚もあったが、親が決める場合もあった。漁師集落なので馬毛島に漁にいらっている間に親がお嫁さんを見つけて来ていて、漁から帰って来るとお嫁さんがいたという話もあった。

・夜遊びが終戦当時まであった。昔は乗り物がなかったので歩いて現和や住吉などにいらっていた。男が女の方に遊びに行くものだった。昔は板戸ばかりであったのですぐに入って黙って遊んで帰った。年頃になっても誰も来ないのもいけないので親は遊ばせていた。

・結婚適齢期は男も女も、十七、八であった。夜遊びで子供ができて結婚する人も多かった。二十歳くらいで家にいたらあまりよく言われなかった。

◎結婚式

・ほとんどがしなかった。

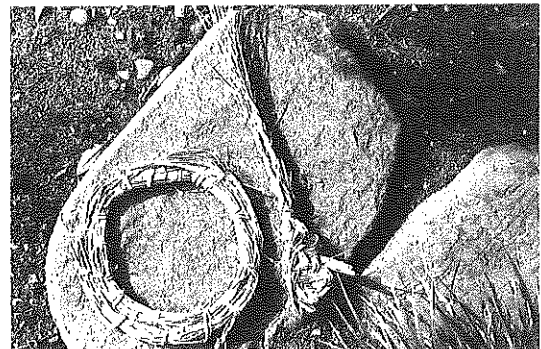
・子供の頃に結婚式を見に行ったらお嫁さんは普通のハンテンを着て、フロシキ包みもっていた。

・他の集落から来た嫁さんを見に行ったりしていた。式の日には若者達がお祝いに来た。ヘワ、テトリ、ナベスケ、ザル、空の一升瓶を縁先から突き出す。ヘワ、テトリ、ナベスケは若者達で作った物でお祝いとしてあげていた。そしてザルには御馳走を入れ、一升瓶には酒を入れて若者達に渡した。

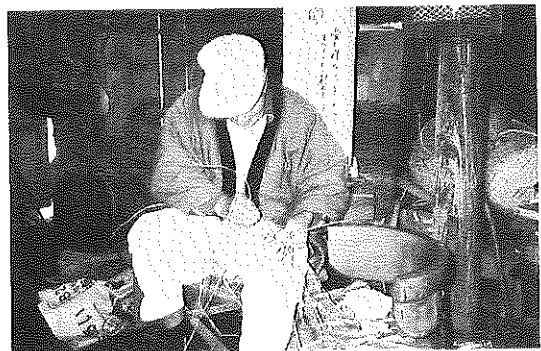
◎式後

・離婚は当たり前であった。婿を知らないで嫁に行くので親は気に

「民具……ヘワ作り」



ヘワ(左)……なべの下に敷く。
テトリの片方……ナベつかみに使う。



ヘワを作っている様子

入らなかったら帰って来いといっていた。入ったり出たりが激しかった。

② 西之表〔洲之崎〕

◎配偶者選択

・親が決める場合も恋愛結婚もあった。結婚適齢期は十なんぼ〜二十くらいであった。

・旦那さんが兄さんの知り合いであった。嫁にいけと言われて行った。自分で相手を選ばなかった。

・仲人は親戚の人に頼むことが多かった。仲人さんは年をとってからも親のようであった。ナカダチとよんだ。

・旦那さんのお父さんが仲人をした。

◎結納

・十円くらいとお米、魚を仲人さんが夫婦連れでもって来た。お祝

いをした。御馳走やお酒をだした。その時に式の日取りを決めた。結納から式まで一ヵ月以上あった。すぐにはなかった。

・重箱包みに餅、お菓子を入れたものを婿さんと婿のお母さんでもって来た。

◎結婚式

・結婚式は結婚式と言っていた。

・結婚式をしない人も多かった。同じ集落同士の場合は結納の時に婿と嫁がお酒を交わしただけであった。親戚中が集まって祝いをした。

・親戚だけで簡単に婿の長男の家で式をした。

・夜に婿さんと仲人さん夫婦が迎えに来た。嫁の両親と婿が盃を交わした。嫁は家をでるとき挨拶をした。

・親戚みんなで嫁を迎えに来た。十人くらいだった。ちょっとお膳を出した。婿と嫁で盃をとった。

・婚家までは歩いて行った。嫁の親、親戚も一緒にいった。夜だったので提灯を灯して行った。

・嫁入り行列のとき若者達が水をかけるいたずらをした。

・婚家には玄関から入った。

・嫁入り道具は、お布団を一重ね、衣類、タライを一つと身の回りの物でダンスやナガモチはなかった。式の日に嫁さんの兄弟達が運んだ。

・嫁入り道具は、シナカバン一つ持って来た。

・式を挙げる部屋は特に決まっていなかった。仲人さんは前の方に座った。式は仲人さんが進めた。婿の親と嫁が盃を交わした。婿と嫁も盃を交わした。料理は鶏や魚の簡単なものであった。式とき嫁は客にお酒を注いで回った。

・近所の人が見に来たりした。現在六十歳くらいの人の頃は若い人達がカゴを竹にくくってお酒や御馳走をもらいに来て、公民館で食べたり飲んだりした。

・婿は紋付き、嫁は普通の着物で持っている一番いいものを着た。

・髪形はなにもしなかった。衣裳替えはなかった。

・裾模様の入った留め袖を着た。柄ものを着る人もいた。髪の毛は結われないで、ただ曲げるだけだった。

・式が終わったら嫁はすぐに片付けたり、洗い物をしたりした。

◎式後

・近所や親戚に二、三日してから挨拶回りに嫁と婿で行った。

・里帰りは一週間くらいに婿、嫁、婿の親、仲人さんでした。泊まらないで御馳走になって帰った。ミツメ祝いと言った。子供を産むときには帰った。

・里帰りは二人で帰った。すぐには帰らなかった。

・離婚は多かった。姑さんが厳しかったりしたので。

③ 伊関〔沖ヶ浜田〕

◎配偶者選択

・恋愛結婚がほとんどであった。

・ヨバナシという二人きりの話があった。その辺から始まるものであった。

・恋愛結婚で親の反対があってもゆくゆくは結婚した。嫁盗みはたまにはあったが仕方がなくて親は許した。嫁を盗むこと「ヨトツタ」と言っていた。

・結婚適齢期は、だいたい十五〜二十歳くらいであった。

・仲人はシヨウバンニンと言った。そのとき、そのときのユウフクな親戚関係の方に頼んだ。仲人の責任は生涯であった。

・通婚圏は、よそに行ったり、よそから来たりで特にどこの集落からとは決まっていなかった。

◎結納

・婿と婿の親達と仲人さんで来た。物やお金のない頃だったので、焼酎を三合と米を一升あげた。ちょっととした祝いを集まった人達だけでした。メデタ節をみんなで歌った。

・結納のときに仲人の立ち会いで双方の都合のいい日に式の日取りを決めた。

◎結婚式

・夜に婿、親、兄弟、仲人で迎えに行った。お酒と料理がいくらか出され、嫁の親と婿が盃を交わした。

・嫁入り行列は嫁の親戚なども一緒に十人ばかりで歩いて行った。夜であったので柄のついた提灯で照らして行った。

・嫁入り行列のとき石垣をくずしてみたり、つき臼を転がすなどの若者のいたずらがあった。

・嫁は婚家に入るときは玄関から入った。

・嫁入り道具は結婚式の後にお嫁さんの親戚が運んだ。

・式はカミノザという床の間のある部屋でした。縁側の方に嫁、嫁の親戚が座った。

・婿と嫁で盃を交わした。婿の親と嫁も盃を交わした。

・料理は海が近いので魚があった。

・衣装は婿は紋付き羽織袴、嫁は普通の着物であった。

・儀式が終わって嫁はみんなに酌をして回った。そのとき衣装替えをした。

・サシイレといって若者達が縁側の方から、物干し竿にバケツをくくり付けたものを差し入れて、何かくれというので、有り合わせの

物をあげた。何もいれなかったり、余計に入れないと少ないとい

て周囲を荒らしたりした。若者達は祝いとして、自分達で作ったテトリヤヘワをあげた。

◎

・挨拶回りは小さな集落なので特にはしなかった。重立った親戚には行った。

・里帰りは近くであったので行ったり来たりであった。

三、項目別のまとめ

1 産 育

◎妊娠

◆祝い

・妊娠を知ったときや、五カ月目や七カ月目に、祝いをするという事は、あまりしなかったようである。三カ月目に白い帯を巻いたということを知ることができた。

◆妊娠中の禁忌

・妊娠中の禁忌などは特に厳しく守られてはいなかったようである。重い物をもってはいけなとかは言われてはいたが、実際子供が産まれるまでずっと働いていたようである。妊娠中に火事にあつたら子供にホヤケができるということを知ることができただけである。

◆安産祈願

・安産祈願は、日典寺や住吉や形之山などに願かけに行ったということである。だいたいしていたようであるが、しない人もいたということがある。

◎出産

◆出産場所・方法

・長男は実家で産み、後の子供は婚家で産んでいたということが聞けた。産む部屋は、寝間やカミノザの北側のヨコザであった。寝産であった。

◆産婆

・産婆さんに頼んでいたところが、ほとんどであった。免許をもった人もいれば、まったくの素人だった人もいたようである。だいたい姑さんがお産のときはいて、お湯を沸かしたりしていたということである。

◆産のときの夫

・お産のとき夫は漁に出ているいたりして、その場にいらないというのがほとんどであったようである。

◆後産・ヘソノオの処理

・ヘソノオは箱に入れてとっているところがあるがほとんどだが、胎盤などと一緒に埋めたという話も聞けた。胎盤などは出産した部屋の床下に小さい壺や古い急須、ヤカンに入れて埋めたということである。お墓の後ろに埋めたという話も聞けた。

◆出産後

・三十三日まで寝床に休んだという話や、一週間もしたら家事をしたという話もあった。

◆名付け

・名前は自分達でつけるところが多かったが名付け親を頼む人もいたということである。一週間以内に名を付け、祝いをしたという話もあった。

◎成長

◆宮参り

・子供が産まれてから三十三日目に、かけた願をほどきに、いったということである。そのとき、子供の厄払いをしたということである。

◆初正月・初節句・百日目

・節句のとき祝いをしたという所もあったが、ほとんどのところでは、初正月や初節句や百日目には特に何もなかったようである。

◆誕生祝い

・ちょっとした御馳走などをしたということである。誕生日前に歩いた子供の場合は餅踏みをしたということである。踏ませる餅の形や数にはそれぞれ違いがあった。作った草履をはかせて踏ませるということである。餅を背負って歩かせるとい話もあった。また、そのとき親戚や近所に餅を配ったりしたということである。

◆子守りの方法

・子負いひもは、白いサラシの帯であった。妊娠中に帯を巻いていたという人はその帯を子負いひもに使ったということである。その他、赤ちゃんを抱くためザブトンの大きいもののようなものを作ったという話も聞けた。赤ちゃんを背負ったまま仕事ができるように袖がなく赤ちゃんだけをくるむものがあったということである。それをネンネコと呼ぶところや、ちゃんちゃんこと、呼ぶところがあった。

・オシメは木綿やユカタで自分で作っていたということである。産着は赤ちゃんが産まれる前に自分で作っていた。肌着なども作っていた。

◆七五三、あるいはそれに相当する祝い

・七五三はしなかったというところが多かったが、七つ祝いや帯とき、ひもときをしたという話を聞くことができた。七草祝いをしたという話もあった。

2 婚 姻

◎配偶者選択

・親が決めるという話もあったが、恋愛結婚がほとんどであったようである。夜遊びやヨバナシがあったという話が聞けた。嫁盗みがあったということはあまり聞くことができなかった。適齢期はだいたい十五〜二十歳くらいであった。

・仲人は親類の人に頼んだというところが多かった。呼び方は、いろいろとあった。仲人の責任は生涯であったという話が聞けた。

◎結納

・結納はしなかったというところもあった。結納品はお米や酒や魚などであったということである。ちょっとした祝いをしたということである。結納のときに式の日取りを決めたということである。

◎結婚式

・結婚式をしなかったというところもあった。結婚式の呼び名は特になかったようである。

・嫁迎えは夜に婿と婿の親、兄弟と仲人で行ったということである。嫁の家では料理やお酒が出された。婿と嫁の両親が盃を交わしたということである。嫁は家を出るときは挨拶をするということである。特に儀式のようなものはなかったようである。

・婿の家に向かうときはみんなで歩いて行ったということである。嫁入り行列のときの若者達のいたずらとしては、水をかけたり、石

垣をくずしていたり、つき臼を転がすなどが聞けた。嫁は婿の家に入るときは玄関から入ったということである。

・嫁入り道具は結婚式の日に運ぶところや式の後に運ぶところがあった。嫁の親戚が運んだということである。嫁入り道具は聞いたところによると、まぢまぢであった。

・式を挙げる部屋はまぢまぢであった。カミノザという床の間のある部屋で挙げたという話を聞いた。

・衣装は婿は紋付き羽織袴、嫁は裾模様の入った留め袖を着たという人や、持っている一番いい着物を着たという人も多かった。髪形は特になにもしなかったということである。

・婿と嫁は盃を交わした。また、婿の親と嫁も盃を交わした。

・料理は鶏や魚の簡単なものであった。嫁は客に酒をついでまわったということである。そのときに衣装替えをしたという話もあった。

・若者達が祝いといって自分達が作ったテトリヤやヘワをあげ、その代わりに、物干し竿などにバケツやザルなどをくくりつけ、御馳走やお酒を入れてもらっていた。御馳走などを入れなかったり、少なかったりすると周囲を荒らし回ったという話もあった。

◎式後

・里帰りをする日は聞いたところによりまぢまぢであった。一週間後に婿、嫁、仲人、婿の親で帰って祝いをしたという話もあった。

それをミツメ祝いといったということである。

・離婚は、けっこうあったということである。

四、総括

1 産 育

産育の事例を全体的に見て、妊娠中の禁忌や祝い、出産後の祝いなどは、それほど重きを置いていなかったように思った。まずは日々の仕事が大事であったのであろう。そう思うのは、重い物を持つてはいけないとか言われてはいても実際は出産の直前まで働いていたことや、出産後も、すぐに働いたりしていたことからである。嫁の婚家における労働力は、重視されていたように感じられた。

また、興味深い事例は、胎盤などの処理の仕方である。三日間という調査のため、あまり多くの方から聞くことができなかったため地域や時代差を比較することはできない。聞くことができた事例は床下に埋めるということと、お墓の後ろに埋めたということである。その中でも床下に埋める場合小さい壺に入れたというのと、古い急須やヤカンに入れたという違いがあるのが興味深い。

2 婚 姻

以前の実習を参考にしながら調査を進めたので、昔は親が結婚相手を決めている場合が多いだろうと思っていたのに反して、恋愛結婚が多かったというのに驚きを感じた。

そして若者達と婚姻の関係が深いものであるということも今回の実習においても感じられた。嫁入り行列の際に見られる水をかけた水、石垣をくずしたり、つき臼を転がすなども面白いが、祝いとしてテトリやヘワをあげる代わりに御馳走やお酒をザルなどにいれてもらうサシイレというものが大変興味深かった。婚姻において若者達の存在はかなり重視されるべきものであろう。

五、最後に

三日間という短い調査期間であったため、地域差や時代差を比較できるほど十分な調査ができなかったことが残念であった。しかし、初めて種子島を訪れ親切的な伝承者の方々に出会えたことは大変貴重なことであった。

また、年末の忙しい中に訪れたのにも関わらず、大変親切に伝承者の方々は質問に答えてくださったので、とてもうれしく思いました。昔の生活習慣を知ることの重要性を改めて感じる事ができました。

お話を聞かせてくださった伝承者の方々、日典寺の方々にご心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

伝承者名簿（敬称略）

西之表	海泊	坂 中	ミチ子 (S 7・11・25)
		松 木	吉 彦 (T 7・5・1)
		家 子	(T 15・4・17)
洲之崎		横 林	ツヤ (M 44・10・1)
		中 島	末 次 (T 2・5・8)
			ミツエ (T 5・10・5)
伊 関	沖ヶ浜田	沖 田	次 郎 (M 43・7・4)

各地の人生儀礼

児 玉 仁 美

一、テーマ設定の理由

以前、人間の葬送に「埋甕」という風習があり、乳幼児の遺骸及び胎盤を甕に入れ、それを人の踏み固める場所に埋葬していたということを知ったときにある驚きの気持ちが湧いた。遺骸や胎盤という神聖なものを足で踏む箇所に埋めると罰があたる、という気がしたからだ。しかし別な感覚に触れるにつれ、却って彼らの他世観やそれに連なる感覚などに興味を覚えた。

従って最終的には葬制・墓制に関するところを調べていきたいが、今回の調査はまだ自分の焦点が定まらずに散漫な結果になってしまい、自分で收拾できなくなり非常に苦しくなって反省している。

二、本論

1 事 例

採集した通過儀礼の事例から産育・年祝い・婚姻のことについてここに記す。

(1) 産 育

①産前——氏神様に参詣して安産祈願するところがある〈島間〉。

また海辺の村の庄司浦では妊娠四、五カ月の頃に国上岬に在る神社（オクノムラの神社と呼んでいたそうである）に安産を祈願に行ったということである。

②出産——以前は全島にサンヤと称する産小屋があったそうだが、今回の調査では南種子町の原チヨさん（89才）から聞いたものだけであった。母屋に近いところに小さなサンヤを設け、産後一週間はそこで飯を二合ずつ炊いて食したということであった。サンヤから母屋に入ります場合はヨコザからというふう定まっていたそうだ〈広田〉。それより少し新しくなると特別なサンヤを設けず本宅のオクノマ（奥の間）を寢室に充て〈庄司浦〉、ユゴザ（蘭莫座）を敷いた産産が行われたそうであるがそれ以前、とりわけ産の重時は鴨居に紐をぶら下げてそれに纏まっていたの産産も多く行われていたそうである〈島間〉。お産の難儀さを表すのに「子持ち腹をこらえるか、燠の上に尻を握うるか」「どげな強か男でも女のお産の力を出すことはできない」などという言葉が伝えられている〈島間〉。不幸にして死産であったときは水子墓に埋葬した。島間上方の河東家の墓地には戒名のない一回り小さい墓が幾基か今も祀られていたがこれが水子の墓だということであった。

産婆は、現在ではおおかた助産婦や病院がその役割を果たしているということであるが古くはコボーバーと呼ばれる女がそれだった〈島間、広田〉。広田の原チヨさんは、自分は産んでいないが姉妹のお産を何度も手助けしたものだと言った。素人でも助産の心得のある者が産の世話をしたのである。庄司浦ではコボーバーの呼称でなく、サンバという名のみ聞いた。

③産後

・産祝い——南種子の広田では生後三十三日目を「カマの日」とし

てこの日に命名する。ケナーブラ（男女の親戚）が集まりオシメ（煮染め）、メシ、焼酎、お吸い物などの御馳走をオシキ（折敷）に並べ盛大に祝った。この日までは赤子は外に連れ出してはならず、止むをえず外出させる場合は額にヘグロを塗り、また背に綱を巻く、などした。こうするとメンコウ（悪魔）が赤子に触ることができないのだとされた。釜祝いはまた西之表の庄司浦にもあったことが聞けた。こちらは、男は生後二十八日目、女は生後二十九日目とされ、この日は茶碗一杯分の飯を炊き、それを赤子に食べさせる真似をし、これを通して初めて一人前と見做したそうである。「大きな川を渡らないように、他人の家に行かぬように」という願いをこめてこうしたのだということだ。ここでもやはり「釜の飯」の日まで赤子は外出を許されず外へ出る場合には「トージヤレ トージヤレ」と唱えながらマッケン（額）にヘグロを付けて貰ったということだ。

・名付け祝い——釜祝いと同時に名付けをする所もあったがそれ以外には、特に釜の日とは言わず生後三十三日目に行く、というところがあった（島間）。身内だけ集めてお宮参りをした。ここでは安産祈願の願立てを解く。願はどきも行ったが、これは氏神様に親の齢数の御賽銭を供え御灯明をたてるものであった。赤子はやはり三十三日目までは外出を許されておらず、止むを得ない折は玄關からでなくキタントグチ（裏口）から出入りすることになっていた。甕島系の集落、野木之平では名付け祝いは生後一カ月目に小寺に出向いた。小寺では集落の長老が御経を読んだということである。

・歩き初め——野木之平では歩き始めた子には一升餅を踏ませる「お餅踏み」が続いている。また生後一年以内に歩いたら餅を背負わせ、それで歩いたら皆で大喜びしたそうである。

(2) 年祝い

・七五三——西之表市庄司浦では七歳の一月七日に七草をした。吸い物、サス（シ）ミ、鶴亀や松竹梅の炒り粉菓子で祝うと同時に「オビトキ」の祝いも行ったそう。子供がそれまで着ていた着物の帯を解き二本のうち一本は本人に、もう一本は親戚にという具合に分けたそうである。そうして着物の帯は親戚から贈られるしごきのものに替えられたということだ。また中種子町の浜津脇上之城辺りでも七五三のときに帯を片方だけ解いたそうである。

・くさいもの——採集は一件で、南種子町広田の事例だけである。十五になった正月七日の晩に二歳入りしたのであるが、その儀の後に四十五歳以下の青年達が夜明けまで歌いまわったという。各戸訪問して歌ったのであるが、去年一年のうちに死人の出た家だけは除く習わしであった。門松の立っていない家がそれである。以下にその歌い文句を記す。伝承は広田の堂原次三郎さんによる。

福祭文

クサイモノやドーリヨ

いつもより今年は門の松が栄えた

おおにわこにわの芸を見てやれば

金銀のまりがかかりた

四方の隅々にいずみだけがたとうて

黄金のみしゃくで くみとうた

祝う者にとりては

銭と米を祝うよ

これのお家の身内に

銭花が咲ききて

黄金花が吹きまった

西三条四条には白金の山をつき

東三条四条には黄金のまっぼう追い出し

とんびたからが飛んでいて

飛んでもくろう 言いていこう

ふうきまんぶく とくあれば

みょうがねばなをたまえよ

今日のお祝いおくみあれ

(3) 婚 姻

・南種子町島間の事例

媒灼結婚が多数であったが、ハシル人も居たということだ。結婚式は盛大であった。まず女の家で吸い物、焼酎、鶴亀の粉菓子などの御馳走で祝う。吸い物は四、五回かわったというから、長時間に及ぶものであったらしい。そこに男の方から本人、兄弟、おじおばなど（所帯をもつ者に限る）がサカイジユウ（重箱）に紅白の餅を入れたものを手提げて嫁を迎えに来る。男の家では女のところの馳走に煮しめが増えたほどの「ずい御馳走」を用意していたという。花嫁の衣装は裾模様紋付き、黒の留め袖、被り物は無し。男は紋付きで両者とも草履をはいた。持ち物は柳行李に詰めて持って行ったという。

・南種子町広田の事例

男の方でナカダチをたて、女の方に伺いに出向いてもらった。全く知らない人から嫁に請われることもあったそうである。ナカダチが来て即時了承するのははしたないとされたため、三日ほど間を置いてから返事するのが常だったそうである。婚約が成立するとその日の夜にイエイリという祝いをした。御馳走を男の家で用意する。女は一旦実家に戻るがその三日後に正式な結婚式を挙げる。これを

ウツチャゲと呼んだ。

・中種子町浜津協の事例

これは昭和二十四年の例である。親戚がまず仲立ちをして、その親戚の家に男を連れて行き、そこで縁談をもちかけられた。そこで新たな仲裁人を立て女の方に当時三十五円を持って行ってもらい、婚約が成立してから一カ月後に結婚式を挙げたということである。女を男の家に連れて来るときは新郎、新婦は馬車に乗った。嫁入り道具に箆箆一棹、整理箆箆、布団などがあつたそうである。

ここで一件「いたずら」を聞いた。途中で男の友達が水をかけるいたずらをしたということである。男の家についてからは焼酎、吸い物、さしみ、煮つけ、鶴亀、松竹梅の菓子など供した宴を催したということだ。花嫁の衣装は黒の紋付きに御太鼓だった。

(昭56・12・25〜昭60・1・3調査)

参考文献

西之表市史編纂委員会編『西之表市百年史』（西之表市教育委員会）

中種子町郷土誌編集委員会編『中種子町郷土誌』（中種子町教育委員会）

木下 忠著『埋甕―古代の出産風俗』（雄山閣出版）

『日本民俗学事典』（弘文堂）

出産から婚姻、葬送まで

笹 峯 隆 行

一、はじめに

今回の西之表市の調査で私が掲げたテーマは『人生儀礼』であった。この『人生儀礼』というテーマで調査するのは、私自身今回で三回目である。にも拘らず、調査する度毎に新しい事例の発見がある。地域が違えばそれだけ違った事例を聞くことが出来る。

目覚ましい科学的発展を遂げた現代、それに呼応して人々の生活、慣習もその様相を変化させてきた。顕著な例として出産を挙げると、昭和の中頃までは自宅、実家で出産するのが普通であった。が、今日ではそのほとんどを産院で行っている。例えば葬送について考えてみても、かつては土葬が中心であったが、現在では火葬が主流である。

当時の西之表市の『人生儀礼』をもとに、当地の基層を成す文化を僅かばかりではあるが考察してみたい。

二、事例のまとめ

1 住吉 浜之町

① 産育儀礼

・妊娠のことは『オオハラ』と言っていた。

・妊婦が火事を見ると赤ちゃんに『ホヤケ（＝痣）』ができると言われていた。

・安産祈願は形之山神社。

・出産場所は主に横座（＝寝室）であり、神棚のある部屋での出産は禁物であった。

・後産は『イヤノオ』と言われ、北の戸口の床下に埋めた。

・臍の緒は壺に入れて、北の戸口の床下に埋めた。

・妊婦は出産後、三十一日経ったら普段の生活に戻れた。三十一日経たないうちは風呂にも入らなかった。

・宮参りは『ヒアケ』を待って行った。

② 婚姻儀礼

・結婚相手は親同士の合意のもと決められた。

・仲人は集落の有力者が務めるのが主だった。

・結納品は米、餅、焼酎であった。

・嫁迎えには十人程度で行った。

・嫁入り道具は風呂敷包み程度の衣類等だった。

・三日目に里帰り（『三ツ目の祝い』）をし、実家には泊まらずにその日のうちに帰った。

・嫁盗みは、娘は乗り気であるがその両親が反対している場合が多く、嫁盗みが行われると『ハシツタ』と言っていた。

③ 厄 年

・厄年は男女とも三十三歳と四十九歳。

④ 葬送儀礼

・葬式は『ソウレイ』と言っていた。

・死後直ちに北枕にした。

・死の通知は先ず部落会長へ届け、葬式の段取りを部落会長と相談

した。

・通夜とは言わずに夜伽と言った。

・柩は桶(桶屋に発注する)を使用した。

・柩の中には遺体とともに茶の葉、お金十二文、米(少量)、土産などを入れた。

・埋葬用の穴は隣組などで掘った。

・出棺の際、柩は縁側から出された。

・墓地では僧により読経が行われ、親族、集落の人々による礼拝がなされた。

・墓地から帰ってくると、出棺の際に予め門に用意していた塩で清めた。

・位牌は男の子供のぶんだけ分ける(親が亡くなった場合)。

・古くなった位牌は僧による読経の後に焼き捨てる。

2 西之表 小牧

① 葬送儀礼

・葬式の際に、故人の一生を詠み込んだ長歌を謡う。

・埋葬用の穴を掘る人数は偶数と決められており、大体四人で行った。その際、豆腐を持って行き一、二口食べ、残りは墓穴に埋めてくる。

・家族の人数分のコサングケを切ってきて、その先に灯籠をつけ草履を履いて墓地に行く。草履は墓地に置いてくる。

・五十日経つまで、毎日夕方に膳を供えに墓地へ行く。

3 現和 浅川

① 産育儀礼

・妊婦は「オオハラ」と言っていた。

・産婆は「コボウ」と言っていた。

・後産は「イヤノオ」と呼び、布に包んで北の戸口の軒下に二〜三尺穴を掘り埋め、上から石を載せた。

・産婦は出産後二週間休んだ。

・三十三日経たなければ神様にお参りできなかった。

・誕生後一年経たないうちに歩いた子供には餅踏みさせた。

② 婚姻儀礼

・仲人は婿方の親戚から選ばれた。

・結納品は米一升、焼酎五合だった。

③ 葬送儀礼

・集落には町頭まちがしらと呼ばれる二人の祭祀を担当する者がいる。この町頭は葬式には出席せず、香典を出す場合には自分の金は包まずに他人から借りて出した。

・死亡の通知をすることを「シビを伝える」と言った。

・湯灌に使用したお湯は北の戸口から捨てた。

・柩は箱型であった。

・柩の中には遺体とともに、米、茶、お金などを三角袋に入れて納めた。

・出棺は玄関からであった。

・死者の着物は白木綿の袖のないもので、その家の最年長の女性が縫った。

・墓地から家に帰ってくると、予め門に準備しておいた塩で身を清めてから入った。

4 現和 武部

① 産育儀礼

- ・妊婦は『オオハラ（＝大腹）』と呼ばれた。
- ・妊娠後、五ヶ月目の戌の日に産婆に腹帯を締めてもらった。戌の日は予め産婆の方から知らせてくる。
- ・新婦が火事を見たら赤ちゃんにホヤケができると言われていた。もし見てしまった場合は、顔を洗う際に下から上へと普段とは逆に洗うと良いと言われていた。
- ・産産は『イヤノオ』と呼び、北の戸口の床下、又は寝間の床下に埋め、上から瓦を被せた。
- ・産湯は北の戸口から捨てた。

② 厄年

- ・厄年は男女とも、十九歳、二十九歳、三十九歳であった。

③ 婚姻儀礼

- ・結婚相手は親によって決められた。
- ・仲人はたいてい、婿方の親戚から選ばれた。
- ・結納の品は『一升二杯』といって、米一升、焼酎二合、魚一對が送られた。
- ・嫁迎えには仲人が赴いた。嫁の家では嫁が両親と別れの盃を交わした。
- ・嫁は仲人の後をついて嫁ぎ先に向かう。道中、集落の青年達が悪戯をする。花嫁に向かって『花が枯れないように』と水を掛ける。『清めの水』という意味合いがある。
- ・嫁入り道具は、式当日には仕事着を三通りほど持ってこられるだけだった。

- ・結婚後三日目に『三ツ目の祝い』が嫁の実家で行われる。その日

に有りったけの道具を持って嫁ぎ先に帰る。

- ・『三ツ目の祝い』では紅白の餅が搗かれ、親戚に配られる。
- ・駆け落ちは『ハシル』と呼ばれた。駆け落ちをした場合には、男性側の親が女性側に対し、詫びを入れた。

④ 葬送儀礼

- ・葬式は『ソウレイ』と呼ばれた。
- ・土葬は十年程前まで行われていた。
- ・寝間の奥に竹を興行き五〇枚、幅二尺程に渡してあり、その上で湯灌を行う。お湯は自然と床下へと流れ落ちる仕組みになっている。（図①参照）

- ・柩は樽型であり、遺体とともに焼酎、米、茶、お金十二文、数珠などが納められた。
- ・柩は縁側から出された。
- ・死後、三日の祭り、七日の祭りが行われる。七日の祭りは子供の数だけ行われる（初七日、ふた七日…）。七日の祭りが終わるまでは、男性は髭も剃らなかつた。

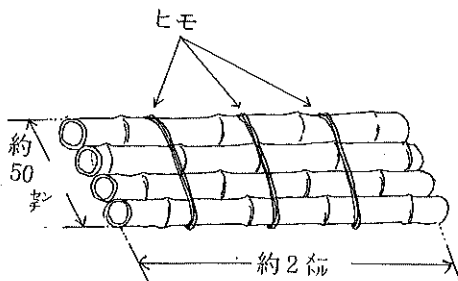


図 ①

三、各事例についての考察

1 産育儀礼

妊婦のことは全集落とも殆ど『オオハラ』と呼んでいた。それは妊娠に伴い腹部が大きくなるからというのが、一般的な通念である

ようだった。

臍の緒、後産、産湯を捨てる場所は、北の戸口という返答が得られた。何故かという問いかけに対して、明快な解答は得られなかった。しかし、北の戸口というのが不浄のものに対して何らかの意味を持っていることは計られる。

2 婚姻儀礼

配偶者の決定については、どの集落でも当地人には決定権はなかったようである。しかし、唯一の反抗手段として嫁盗みが挙げられる。嫁盗みは『ハシル』と呼ばれていたようである。その語源については聞くことは出来なかったが、大変興味深いところである。

3 葬送儀礼

葬送儀礼に関しても北の戸口が重要な点を占めている。湯灌の湯を捨てる場所として挙げられている。これも不浄なるものである。

柩の形は集落で様々であった。しかし、これは桶屋の存在や、経済的理由、時代的差異が関係しているのではないかと思われる。

また、これは『住居』の専門分野になると思うが、事例中にも再三出てくる『北の戸口』というものの存在である。この存在意義はどのようなものであるのか詳しく調査できなかったのが心残りである。

四、やぶらに

船窓から間近に迫った種子島はエメラルドグリーンの水面にその影を映し、なだらかな稜線を澄んだ蒼空に広げていた。

初めての種子島は見る物、聞く物、感じる物全てが新鮮であった。そしてその反面、鬱蒼とした森の風景に、田畑の向こうに望める家並に、紺碧の海を渡ってくる潮風にどこか懐かしさを感じた。

今回の調査は年末に伺った訳だが、種子島の皆さんは正月準備の手を休め、私達の問いかけに快く応じて下さった。暖かいお茶や甘い黒砂糖を勧めて下さり、体だけでなく心も温かく、熱くなった。初めての種子島は私に大変優しく接してくれた。お世話になった伝承者、協力者の皆様、並びに日典寺の皆様には感謝の気持ちでいっぱいである。

また今回はリーダーという大役を任せられた訳ではありますが、経験浅い若輩者の私に対し御指導、御鞭撻、御協力下さった下野・高松両先生、先輩方また二年生の皆さん、有り難うございました。

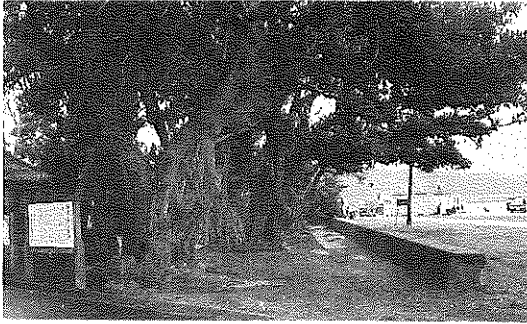
参考文献

大塚民俗学会編『縮刷版』日本民俗事典 一九九四年 (株)弘文堂

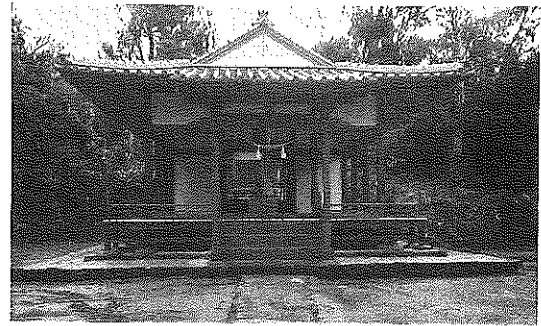
伝承者・協力者名簿(敬称略)

大字	小字	氏名	生年月日
住吉	浜之町	長野実栄	T 4・4・21
西之表	小牧	下村達雄	T 12・7・5
現和	浅川	河野通一	T 13・8・11
武部	柳炭	小牟田コテ	T 4・12・2
	西柳	本炭シズ	S 11・4・10
	川	峰義	M 44・3・8
	子	エ	M 42・10・22
	島		T 14・4・17

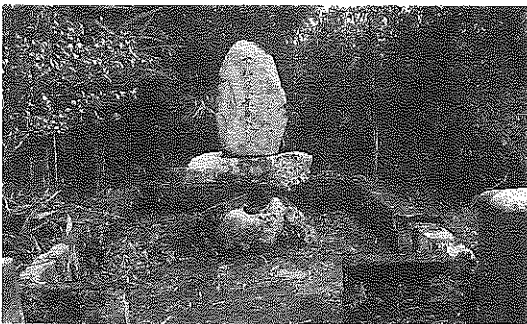
「防潮林・神社・墓地」



ガジュマル防潮林（住吉）



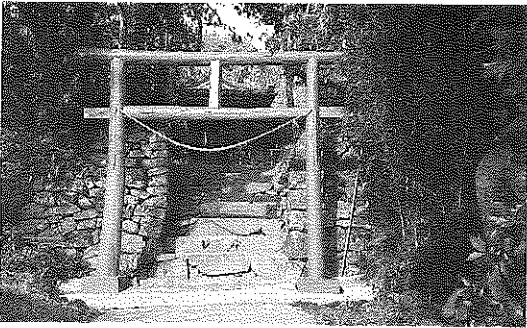
住吉神社（住吉）



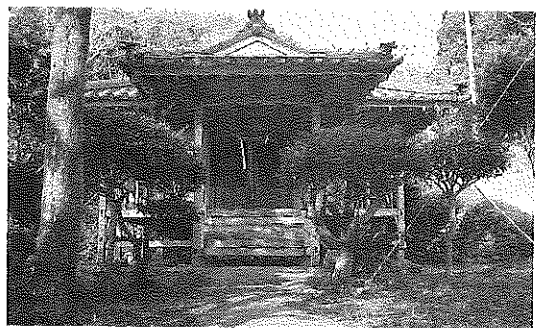
サンゴ石の墓石（西之表）



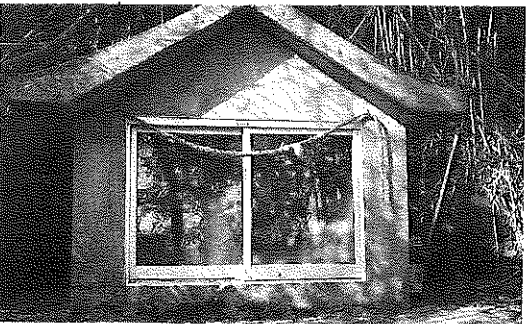
墓地の風景（西之表）



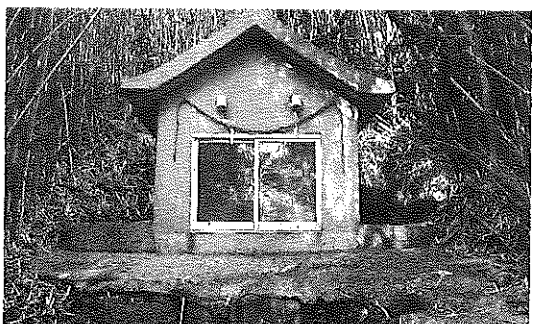
浅浪神社：鳥居（現和／浅川）



浅浪神社：拜殿（現和／浅川）



浅浪神社：本殿（現和／浅川）



浅浪神社：恵比須（現和／浅川）

厄年・年の祝い・他

後藤 啓子

1 安納・軍場

① 厄年

厄年は数え年の男四十二女三十三。伝承者の家は神道だったが、近所に法華宗本蓮寺があるため、厄年に限らず毎年ここでお祓いをしてもらう。経をあげ、札を書いてもらいお札をする。この日を星祭りという。この札は主人は亭主柱に、夫人は床柱に貼る。その他床の間や玄関にも貼る。三月三十一日に供養が行われる。一年間使った札を川に流し、海まで難なく流れたものはよし、流れなかったものはきれいなところで焼くとのこと。

又、なぜ厄年があるかという質問に、運または巡り合わせが悪いからではないか、とあった。

② 成年式

伝承者の父親の時代には数え年十五才に大祭（新暦十月二十二日に今も行われている。）で五尺のふんどしをし、相撲を取っていたという。

（以上 鎌田ナツさん T8・3・20生による。）

2 西之表・池野

① 厄年

男四十二女三十三が大の厄。自分の気持ちの持ち様だと伝承者。

朝晩神棚を拝み、月に一度邊泊の安徳神社に参拝するので、自分は神仏に守られている。厄など気にしないとのこと。

② 年祝い

伝承者の兄が米寿の祝いをした。会宅（公民館）を借り百人ほど集まった。赤いちゃんちゃんこに帽子。喜寿や還暦はあまり盛大にはやらない。米寿が最後の祝いだとのこと。

③ 成年式

四月に青年会入り。焼酎を持っていく。女子は処女会入り。

④ 名付け祝い

ナメカという。生まれて七日目に親戚や近所の人が集まって祝う。表の間に卓を並べ、家の奥のほうに主人及び親類、縁側のほうに客が座る。上座から父方の祖父母、母方の祖父母、夫婦、親類の順に座り、式のはじめは新生児を父方の祖父が抱いており、丈夫であるようにと焼酎を口に当てる真似を三回する。式の最中は子どもは寝せておく。

生まれて一週間以内に名をつけるが、その際祝い紙に名前を書き床の間に貼る。

⑤ 宮参り

男三十三日女二十八日で日がハレる。宮参りには、初めての子であれば新しい訪問着を作る。これは染物屋に家紋を入れてもらうよう頼み、自分で縫ったり、頼んで縫ってもらったりする。丈夫に育った子の物であれば次の子に着せるが医者にかかった子のは着せず新しく作る。参るときは夫婦と舅、または嫁だけと舅で。この家では花里の伊勢神社へ行っていた。西之表では一番の高神様という。孫の代までは行った。又この日には「釜の飯」と称して釜で飯でなく湯を沸かしてなめさせるといふ儀式を行う。

この日を過ぎればどこにでも連れて入っていいが、これ以前には神様が嫌うと言って家より外に出さない。「神様に当たる」と言うが、この「当たる」は雲隠れのことであるという。畑の脇などに日がハレる前の子どもを寝かせておくとふっと消え、探しているうちに元のように寝かせてあるという。子どもの父親は子供が生まれて一週間は砂糖の釜やサトウスメには近寄らない。又母親は産後二十一日間は寝ている。昔は二十一日以前に縫い物をしたら目に触ると言われた。しかし一週間くらいで気分がいい人は働く。産後はアク物（油物、アクのあるもの）は食べるなど言われた。伝承者は、アクが乳にいくからではないかという。日がハレるといふのは子どもが丈夫になったということではないかとも言っておられた。

⑥ 足引き餅

満一歳になる前に歩きだした子どもは、その日のうちに餅をつきぞうりを作って履かせ、抱いて餅の上に立たせる。その餅は子どもが丈夫になる様にと切って親戚や近所の人などに配る。

⑦ 誕生祝い

満一歳の誕生日に、男の子なら学用品だけ、女の子なら学用品と裁縫道具をお膳において取らせる。その際運んだもので、この子は将来勉強が好きになるとか裁縫が好きになるとか言う。子祝いという人もいる。

⑧ 七五三

男女とも区別無し。宮参りをする。里の祖父母を呼んで夕食を一緒に食べる。伝承者は厄払いの一つと言われた。帯解きの祝いはしない。

⑨ 養い親

丈夫である様にと親しい健康な家族に頼む。特に「塩焚き船人フヤキフネ」

たのむもんじゃ」と言って、士族の家は漁師に頼んでいた。正月に士族のほうがタキモンを持って頼みに行き、正月の品をいただいて帰る。潮風に当たっているため漁師は丈夫だと言うことから。

(以上 池野キヨさん M37・3・10生による。なお二十三歳のときに川迎から嫁ぎ、親が自分にくれたことをそのまま子供にもしたと言う。)

3 西之表・城

① 厄年

男四十二女三十三。昔は男女とも「苦」との語呂合わせで九のつく歳は厄年だとされた。特に四十九は大の厄と言う。この時、本人の誕生日や前年の歳の暮れに道路に四九円、四九〇円などお金を撒いた。皆に苦勞を分け合って貰うためだと言う。一月十五日に破魔祈禱が行われ、悪魔ばらいをする。班のものが一箇所に集まり、和尚さんが行う。

何故厄年があるかとの質問に、昔からの言い伝わりであり、一生のうち何回か厄がくる。確かに当たっているとのこと。

② 年祝い

八十八の米寿は派手に行く。赤いちゃんちゃんこを着る。

この際の膳は、吸い物、刺し身、酢の物、豆、煮付けなど品数を奇数にする。

③ 成年祝い

青年会は十五、処女会は十六、七から。青年会入団の際に豆腐八丁、焼酎一升もっていく。

④ 名付け祝い

生後一週間で行う。親戚、知人、隣近所が集まって。祝いが始ま

ってから祖母が子供を抱いてくる。

⑤ 宮参り

お寺へ行く。男三十三日女二十八日、大きな竈に火を焚いて湯を沸かし、子供の口に浸す。

⑥ 餅踏み

満一歳になる前に歩きだした子供は、餅をつき風呂敷で包み背負わせぞうりを履かせ餅の上に親が乗せる。その餅は切って屋根の上から撒く。病気や怪我をしないように今でも行われる。

⑦ 帯とき・七草祝い

一月七日に帯を替える。本人と親で七軒の知人を回り、七草がゆをもらってくる。

⑧ ヤシナア親(養い親)

城では漁師に預けるとは言わない。若い店の奥さんが幼い頃生死に関わる事態になったが、母方の親戚であるヤシナア親に抱かれた瞬間不思議なことに元気に泣きだしたと言う。

(以上 上妻スエさん T5・11・25生による)

4 納官・浜津脇

① 厄年

男四十二、女三十三、男女共に十九歳。十二年毎の生まれ年には何かあるというので家など造るなど言う。一月十五日西之表日典寺で被い祈禱をする。

町田ツギエさんは集落の希望者で祈禱して貰った高野山のお札(実際は讃岐四国霊場八十一番日峯寺)を送ってもらう。母の代からこうしているという。

また、厄年は熊野神社で被ってもらおうという人もいた。この人は

広い家に近所の厄年の人が集まって歌を歌ったり踊りをしたりする
と行っていた。

何故厄年があるかとの質問に、昔からの言い伝えだから気にするし、清めたら気持ちがいい、何十年に一度巡ってくる機会にぶちあたると言う「回り」になっている、といった意見が聞かれた。

② 年祝い

八十八の祝いが主である。その他の六十、七十七の祝いなどはあまりしない。赤いちゃんちゃんこに赤い座布団。

③ 成年祝い

数えの十五で青年団に入る。一月七日に門口に戸主と十五歳のものがでてクサイモンを歌ってもらう。女子は中学卒業(十五、六歳)くらいから処女会に入る。

④ 名付け祝い

生後一週間。名付けが法律で一週間と決まっているからであるという人もいる。親戚、近所の人達を呼んで祝いをする。

⑤ 宮参り

男女とも三十三日。又一ヶ月という人もある。式では長生きするようにと父方の祖父母がまず抱く。膳の吸い物には、豆腐、葱、魚と三つの具を入れる。母親の日がハレるといいう人と、子どもの日がハレるといいう人がある。大概熊野神社に参る。

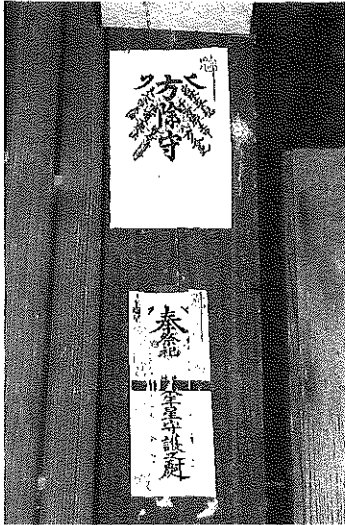
⑥ 足引き餅

満一歳になる前に歩きだすと、足が強い様にと餅に乗らせる。お祝いである。

⑦ 誕生祝い

満一歳の誕生日に十人くらい近所の人を集め、年長者と共に祝う人もある。

「人生儀礼関係」 (お札, 伝承者, 神社)



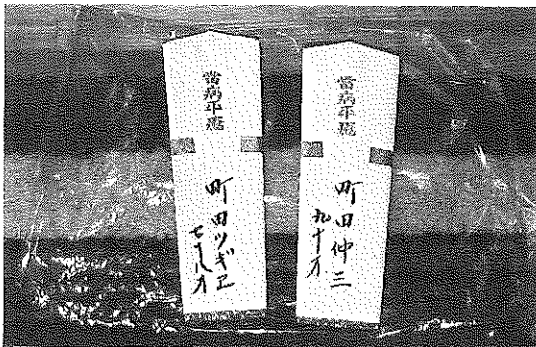
① 軍場の鎌田ナツさん方のお札, 近所の本蓮寺で書いてもらったもの。上は玄関のそばの柱に, 下は床柱に貼ってあった。厄年に限らず, 毎年お札をいただく。



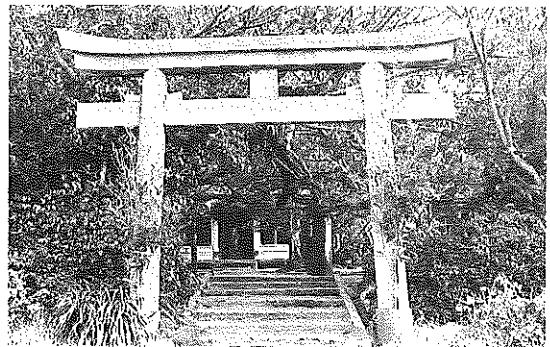
② 池野の池野キヨさん (伝承者)



③ 浜津脇の町田ツギエさん (伝承者)



④ 讃岐四国霊場81番日峯寺の札
集落の希望者がまとめて頼み, 送ってもらう。(町田ツギエさん方)



⑤ 浜津脇の熊野神社
皆, 坂井熊野神社とは姉妹の妹の方の神社と言っていた。
宮参りの日などに参る。

⑧ 七五三、七草祝い

数えの七歳になったものは神社に参る。三、五歳になったものの祝いは特別にはしない。一月七日に着物の付け紐を取る帯ときが行われる。また、七件の親類や近所から七草がゆを集める。

(以上 町田ツギエさん T3・10・18生、田中ハツエさん M41・12・20生、桑原シゲさん M39・2・11生、鎌田カツノさん T2・11・25生、倉内清則さん T14・9・20生による。)

5 国上・寺之門

① 厄年

男四十二、女三十九。厄払いや一年の厄落としてはした事がない。病気に気を付ける。

何故厄年があるかとの質問に、身体の移り変わりの年だからと答えられた。

② 年祝い

八十八歳の祝い。赤いものはしない。

③ 成年祝い

青年団入り、処女会入りともに十五歳から。

④ 宮参り

男女とも三十三日。ケガレが無くなる日。家族みんなで寺之門神社へ参る。特別御馳走はしない。

⑤ 足引き餅

満一年経たないうちに歩いた子供にはゾウリを作り餅を踏ませる。その餅は親類に分ける。家族だけで行う。せっかくの祝いのためのゾウリなのに、その葉ぞうりを焼くとのこと。

(以上 落合一秀さん M44・5・17生による。)

サブテーマとして民間療法を挙げていたが、今回は資料が少なかったためレポートの中にはいれない。

しかし、一つ実際に父親がタニ(タイ)を治す祈禱師だったという方がおられたので、その例を示す。

タニは、鉞やナイフを当てて擦りながらお経の様なまじないを唱えて治す。夜明けと同時に始めるが、それは祈禱が日が上がるときが効き目があるということからである。

(以上 浜津脇 有馬稔雄さん(父親は有馬清さん) S10・2・20生による。)

6 考察・まとめ

① 厄年

厄年という考え方はもともと陰陽道からでた説で、平安時代には既に盛んになっていた。陰陽道では厄年は十三、二十五、三十七、六十一、八十五、九十九とされていた。これは大体十二年の倍数周期となっているので、十二年毎の生まれ年(十二支)を祝う観念があったとされる。十二年毎の厄年を「祝う」としたが、厄払いをする厄が転じ福となるということからとされている。奄美や沖縄などではこの年を年祝いとしている。

特に男の四十二、女の三十三は大の厄とされるが、「死に」「散々」の語呂合わせから来ている。その他七五三や十五歳なども厄年とされている地方もあるが、それはちょうど災厄に遭い易い年なので厄年と混同されたものである。また、七五三の子供が神事に関する資格を得るという例も見られる。厄年と拾い親の関係も興味深い。

種子島で数か所調査したところ、どの地区でも男四十二、女三十三の厄というのは聞かれた。生まれ年も厄年であるからお祓いに行

くという人もあった。しかし十三、二十五……というのは聞かれなかったのでもとの陰陽道よりも語呂合わせによる厄年のほうが広く行き渡っていると見える。九が付く年、四九等が厄年だという人もいたが、これは「苦」、「死苦」の、やはり語呂合わせから来ているのだろう。

何故厄年があるのかと質問してみたところまず昔からの言い伝えだから、というのが誰からも聞かれた。法華宗の説教のなから厄年について言われた人、一生のうち何回かやってくる機会にぶちあたる「回り」とか「運」になっているという人、からだの移り変わりのする時だという人等様々だった。確かに伝承者のいう通りであると言える。

特に城で金を四九円、四九〇円など撒くと言うことを聞いたが、甌島でも十数年前十字路にお金落ちていたと言うことを聞いたので(村岡)、島に残った習俗なのかと思う。

② 年祝い

六十一還暦、七十古希、七十七喜寿、八十傘寿または中寿、八十八米寿、九十卒寿、九十九白寿、百上寿。男の六十一、七十七、八十八を厄年とする地方もある。種子島では八十八の米寿が主で、ほかの祝いは殆どしないとのこと。昔は八十八歳まで長生きする人は珍しかったので、年祝いは殆ど行われなかった。八十八歳のときは赤いちゃんちゃんこに帽子に座布団といういでたちで祝う。一般に子供に戻るからだと言われるが(二度わらし)、確かなことは分からない。

③ 成年祝い

昔でいう元服のことであるが、種子島において武士の子は十六で元服し島主に面接を許された。女子は鉄漿つけ(増田節より推測さ

れる)、漁村においては浦入りといった一人前になる儀式が行われた。

今回の調査で数え十五歳の青年団入り、年齢は様々言われたが、大体中学卒業程度に行われる処女会入りがどの集落でも聞かれた。城の青年団入りの際の八丁の豆腐にはどのような意味があるのか疑問が残る。

④ 宮参り・子祝い

男児三十二日、女児三十三日で日がハレるとというのが普通とされているが調査では色々な日が聞かれた。男女とも三十三日目というのが多かったが、これだけバラバラに伝わっているところを見ると、余り日は重要視されていなかったのではないかと思う。池野の池野キヨさんは旧姓鮫島で父親がお城に出入りしていたというから、武士の家では細かい儀式が伝承されていたと思われる。

⑤ 足引き餅

満一歳になる前に歩き出すことを普通嫌う。早く親元を離れる(早死にする)、親を凌ぐというからであるが、後者は親にとって嬉しいことではないかと思う。また足が強くなる様にとの願いを込めて餅を踏ませる。

この餅をブツサキモチ、一升鏡という地方もあり、これを背負わせてわざと倒したりする。南種子町では、乳児の背中にカンザアという袋状の運搬具を背負わせるそう、今回の調査では城で風呂敷に餅を包んで背負わせる以外に何かを背負わせる例はなかった。餅を踏ませる際ソウリを作るが、このソウリを焼くという人もあった。

何故餅なのかということをおなりに考えてみると、餅は正月などめでたいときにつくもので祝いと深く関わっていると思う。それと

満一年の記念すべき日の行事と重なったのではないか。

南種子町ではこの餅踏みの際に学用品を正面に置き、それを取らせとれを取るかによって将来を占うが、池野では満一歳の誕生祝いに行うと言われた。

このような一年目の祝いに長野県岡谷市の子供を箕の中に立たせ「シイナは舞い出る、実は残れ」と唱えるものがある。

⑥ 七五三

男子は三、五歳、女子は三、七歳に氏神にお参りするのが一般的で、古くは髪置き、袴着、帯解き等が行われていた。医学的にも、三歳で言葉解し、五歳で知恵づき、七歳で歯が生え代わるという時であり病気にもかかり易い。この時期を乗り切るようにと七五三があるが、調査においては七五三には男女の区別が無く七歳の祝いが特別で三歳、五歳の祝いはあまりしない。七歳になると帯解きをするところがあるが、何より鹿児島特有だと言われる七草祝いをずる家が多い。一月七日に七歳の子供が七つの菜の入った粥を七軒のうちから集める。七ずくめであるが、祝いは奇数を重んじるということが根底にあるのだろうか、それとも日本古来、七という数字は縁起が良いのであろうか。七歳迄は神様だと言われる。

⑦ ヤシナア親

南種子町においては一般に漁村↓農村、農村↓漁村という関係が多いが、調査において武士の家では養い親を漁村に求めるといいうが、一般人は特にしなかったと聞いた。

城の若い奥さんの話が面白かった。

参考資料

『平成三辛未年 かごしま暦』

『南種子町郷土誌』(S 62)

『瀬戸内町誌』

『日本民俗学講座』

種子島開発総合センター 郷土資料室壁がきより『人生儀礼』

※増田節の「野間じゃ藤六かめ、増田じゃ周けさ女、納官小村の十
三かめ女ナイ」は十三鉄漿かにひっかけて歌っている。

伝承者・協力者(敬称略)

安納	軍場	鎌田	ナツ	(T 8・3・20生)
西之表	池野	池野	キヨ	(M 37・3・10生)
城	上妻	スエ	(T 5・11・25生)	
	今平	フミ	(S 2・2・28生)	
納官	浜津脇	町田	ツギエ	(T 3・10・18生)
		有間	稔雄	(S 10・2・20生)
		田中	ハツエ	(M 41・12・20生)
		田中	栄吉	(M 40・7・1生)
		桑原	シゲ	(M 39・2・11生)
		鎌田	カツノ	(T 2・11・25生)
		倉内	清則	(T 14・9・20生)
国上	寺之門	落合	一秀	(M 44・5・17生)

葬送儀礼の変遷

佐藤 玲子

一、はじめに

自分は、種子島西之表市内の集落において現在行われている葬送儀礼を現在、という視点で調査してきた。しかし、事前の下調べ、資料の読みが浅く、調査もはなはだ不十分な結果になってしまった。大いに反省すべき点だ。得ることのできた少ない資料の中から、過去と現在との比較を通し、その変遷の様子を観察し、将来の展望まで自分なりに考えてみたい。葬送儀礼は、個人にとって人生のクライマックスの儀礼で、死者の靈魂の問題と儀礼をとり行う生者達の問題でもある。死は、生きているものにとって不可避である。それならば、この儀礼も姿を変化させながらなくなることはないのではないか。将来はどのような姿を呈しているだろうか。以下、葬送儀礼の順序に従って見ていきたいと思う。

二、死の前後の通夜

1 死の予兆

「死人がある前は線香の匂いがある（住吉）とかカラスが家の附近に集まってガアガア啼くという」（註一）。そういった俗信は、信じる、信じないにかかわらず、現在も人間に不安な心理を及ぼす。

カラスが変な鳴き方をしたり、家の方へ向かって鳴いたりしたら、何か不吉な事の前ぶれではとやはり気にするということが聞かれた。

2 死の通知

現和本村では、人が亡くなると、当人という役目（毎年交替する）の二人が電話で連絡をする。現和庄司浦では、長頭の二人が、一軒一軒フレてまわる。祝い事ときには一人でまわるということだ。当人にしても長頭にしても、フレ役の名称ではなく、集落内の責任者である。死者が出ると、部落会長に連絡が行き、部落会長は班長に連絡する。班長が集落の人々に、通知をする。というのが一般的のようであった。その際、電話を利用することもあること、二人でフレてまわることを気にすることもなく一人で行うこともある点が現在の様子である。

3 香 奠

班長が死の通知をしてまわる際に、集落としての香奠を集める事がきかれた。

国上の寺之門や浦田では、香志といって一軒につき百円ずつ集める。住吉浜之町では無常講といって、一軒につき百円ずつ集める。米や野菜など食料品を集めることはないようである。突然生じる葬式は、多くの人の手伝いを有していたため、それだけの食料が必要であった。そのため、他家から食料品を出してもらっていた。香奠は、このように食料品の贈答であったようだが、それが金銭に変わってきたという。住吉浜之町において、この無常講を廃止していいのではないかという話も出ているようだ。香奠の本来の意味を考

えらうなづけけないこともない。また、これとは別に、個人としての香奠も葬式の日に包むということであった。

4 葬式の準備

① 住吉浜之町（法華宗）

この集落は七十八軒が十班に分かれている。葬式を出した家の班と、隣の班の二班において互助される。女性は焚き出し、男性は旗竿を取りに行くことなどである。葬儀屋が関係してきたことによつて、草履作り、棺作り、死者の衣裳作り等の仕事はなくなり、男のする仕事はないということだった。

② 国上寺之門（神道）

九十二軒九班に分かれている。葬式を出した家の班において互助される。女性は焚き出し等家の手伝い、男性は旗竿等を取りに行く。草履作りは老人の仕事で、死者の衣裳は、三人または五人で、老女が縫う。

③ 現和庄司浦（法華宗）

納骨堂はまだ作られておらず、イケホリは集落の戸主達が行う。霊屋や寝棺も、大工の奉仕で作っている。草履は老人達が、死者の衣裳は親戚の年配の女性を作る。女性は焚き出しの仕事があるが、今は、仕出し屋に頼むこともあるという。

④ 大 崎

一家に一人ずつ集まり、準備を手伝う。墓地の掃除、イケほり、旗竿取りなど。埋葬穴は、適当な深さだけ掘る。死者の衣裳は女性が、草履は老人が作る。棺は葬儀屋から購入する。

まだ葬儀屋がなかった時には、棺、死者の衣裳、草履等、全て村の人々の協力によって作られていた。葬儀屋が関係してきたことに

より、特に男性の仕事はなくなってきたようだ。若い人達は、草履の作り方を知らないという話だったが、将来はこれも葬儀屋にまかす事になるのだろうか。納骨堂が普及してくると、霊屋や旗竿などはどうなってしまうのであろうか。

5 湯 灌

死体の置かれたヨコザで、近親者数人で行う。昔は裸になっていたようだが、今は、普段の作業着を着たままで行う。庄司浦では、その人達は縄を肩に斜めにかけているということである。使用する水は、水道からくんだものをわかす。使用した水は、家の裏の方とかあまり目立たない所に捨てる。特に捨てる場所は決まっていな

6 通 夜

ヨトギ（寺之門）とかツヤ等という。人が亡くなった晩に、親類、集落の人々が集まり夜十二時くらいまで行う。

三、葬 式

昔は土葬であったが、早くは十数年ほど前から、最近では二、三年前から、全て火葬になっているということだ。葬式当日の午前は親類の者だけが集まり、師匠によりお経が唱えられ、その後火葬場へ出棺となる。その際引導を渡す。火葬場までは、霊柩車が利用されている。遺骨は家に持ち帰られ、午後から集落の人々も集まり告別式を行う。そして野辺の送りとなる。土葬であった頃と比べて午前中に密葬を行い、告別式には遺骨が捧まれることになり、副葬品

は火葬の棺の中におさめている点が変遷している。

1 死者の衣裳

先にも述べた様に、集落の年配の女性が作った衣裳ではなく、葬儀屋から購入したものを着せる事例も多く聞かれた。大崎では、生前のいい着物を着せた上に集落の女性が作った白い着物を着せる。住吉形之山（真宗）では、生前のいい着物など思い思いに着せるそうだが、火葬の際、燃えないといって、着せないこともあるという。

2 副葬品

① 住吉形之山（真宗）

米、三六五円、針に糸を通したものを、手を通していない浴衣。

② 現和庄司浦（法華宗）

米、お茶の葉、お金一二〇円。

③ 国上寺之門（神道）

お茶の葉、お金一〇円

以上のように、ここで見る限り、法華宗、真宗、神道いずれも、先の世の銭としてお金を副葬している。シキビの花、枕、杖など副葬する事例は聞かれなかった。しかし、副葬品も、死者の衣裳と同じく、火葬の際に燃えにくいものはなるべく入れないようにしているようだ。

四、野辺の送り

① 住吉形之山（真宗）

①僧侶②遺骨（近親者がもつ）③写真④旗、花輪、供え物を持つ者。

葬式道は特に決まっていたわけではない。昔、葬列が門口を出るとき、ササを棺に向かって投げる習慣があった。これは仮門あるいは、笹の門と呼ばれていた。死者が本門から出るのをきらって仮の門から出す主旨だったという。しかし、今はしていない。親類の女の人は白い布を頭にかぶる。

② 住吉浜之町（法華宗）

①旗持ち②師匠③遺骨④写真⑤供え物を持つ者。

野辺の送りの前に部落会長がほら貝を吹き、集落民に知らせる。親しかった者は葬列に加わる。葬式道はなく、本通りを通る。葬列に参加する身内の男性は首に、女性は頭に白い布をつける。草履は家族の者だけが履く。草履は墓場に置き、裸足で帰るのが本来のようであったが、今は帰り用の靴を用意しておきそれを履いて帰る人もいるということだ。

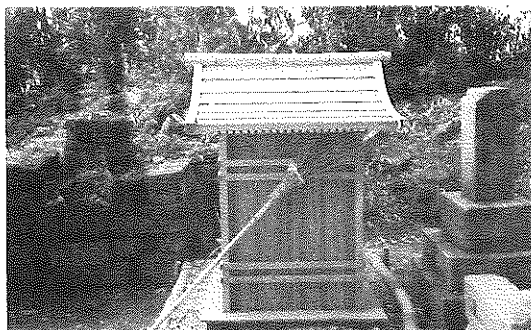
③ 現和庄司浦（法華宗）

ここでは先頭に灯ろうがくる。先の道を迷わぬようにと、ロウソクの火をともし。出棺のときは家の門口の両側に、集落の人々が立ち並び葬列を見守る。葬列に参加する親縁の人は、別れの飯を少しずつ食べて行く。

以上のような事例が聞かれた。メシカンメ娘は霊前に供えてあった飯をカンメで縁から出し、イケと一緒に埋める役目をする近親の女のことである。今では、この名称を聞かない、知らないという昭

和生まれの方もいた。

墓場に置かれた草履を国上寺之門で見たが、鼻緒の指の方の所から白い紙がまきつけてあった。南向き（神道）の霊屋の裏にホーキ



タマヤとホーキ（西之表市国上寺之門）



チョウチン（西之表市国上寺之門）

が取り付けられていた。霊屋の周りには紅白の旗が、またチョウチンもつるされていた。旗の色は、西之表市内で見た限り紅白二色のみ、数は親戚が贈るものだからまちまちであるようだ。しかしほとんどの集落が、納骨堂に切りかえてきているようで、霊屋の必要もなくなるだろう。

野辺の送りから帰ったら、門口に置いていた水と塩で清めて家に入る。

五、埋葬以後

1 喪

① 住吉形之山（真宗）

葬式の翌日を三日目と言い、三日まつりは翌日行っていた。今は、それは葬式の日に行っている。七日まつりはトリアゲといって、親戚、集落の人も集まる。ふた七日、み七日、四十九日にもまつりを行う。

② 住吉浜之町（法華宗）

現在、三日まつりは葬式当日に行っている。ハライギトウをし、翌日にはもう漁に出かける。初七日には、通知を出して、集落の人々は、個人として香典を包むということだ。ふた七日、み七日、三十五日、四十九日とまつりが行われる。

③ 国上寺之門（神道）

葬式当日に、三日のまつり、トリアゲをする。神官によるハライギトウ、葬式に携わった人々が来て食事などする。一週間は墓参りをする。初ダイヤ、四十九日にまつりを行う。

④ 安納大平（神道）

葬式当日に神官を呼び三日まつりを行う。一か月程は神社への参拝を避けている。

⑤ 現和本村（法華宗）

葬式当日にハライギトウ、集落の人も参加しての食事など、三日まつりを行う。七日まつりは必ずしも七日目ということはなく、十日目にすることもある。四十九日のトリアゲまでは、祝い事には参加しない。百日のまつりも行う。

⑥ 現和庄司浦（法華宗）

葬式の晩の三日まつりで忌をはらしてもらい、翌日には漁に出る。七日まつり、四十九日のトリアゲ、これは親戚だけで行う。

以上のように、現在では三日まつりを葬式当日に行っている。翌日にはもう漁に出るなど仕事をすらすらだ。また、住吉浜之町では、「七日まつり」という言葉の代わりに、「初七日」という言葉が聞かれた。忌期間の短縮は、死に対する恐怖や不浄感といった意識が薄れてきたこと、生活に不便であることにあるのかも知れない。

2 年忌まつり

① 住吉形之山（真宗）

一、三、七、十三年忌までで終わる家が多い。

② 住吉浜之町（法華宗）

一、三、七、十三、十七、三十三、四十九年忌に行う。

公民館で行う。

③ 現和庄司浦（法華宗）

一、三、七、十三、二十三、三十三、四十九年忌に行う。

普通は四十九年忌をテアゲといっているが、最終年忌は、今ではまぢまぢである。

④ 国上寺之門（神道）

一年忌はしない人もいる。三、七（七年忌はめったにしない）、十三年忌、そして四十九年忌が最終となる。テアゲ後も命日には弔いしてもらおうということだった。

以上のように、死後のまつりは、最終年忌の時期が早まってきていたり各家庭の都合により、同じ宗派においてもまぢまぢのようである。今の時点では、テアゲした人の墓石は倒し、共同祖霊と

して集落中一緒にマツル事も行われている様だが、納骨堂の普及によりその習俗は失われていくであろう。

六、盆行事・祖霊観について

1 盆行事

① 住吉形之山（真宗）

八月十三日、朝は墓掃除をする。初盆の家には、集落の人からチヨウチン等が贈られる。仏を迎える日で、御馳走やチヨウチンに火をともし、もてなす。十五日は日が沈まないうちに墓に連れて帰るという。十四、十五日の両日中に法華宗の家には師匠がまわる。

② 住吉浜之町（法華宗）

十三日の晩にチヨウチンを明かし、十四日未明にはチオンチンを持って墓場に行く。「うちへ帰ろう」などと声をかけ、仏を連れて帰る。仏壇には、朝昼晩と家族の食事と同じ精進料理を供える。十五日には、午後三時ぐらになるとツノマキやナガマキ、ユリの根を土産と持って墓場まで持っていく、ナガマキは墓石にのせてくる。

③ 現和庄司浦（法華宗）

盆の期間中に師匠が各家をまわって供養する。回向という。それに対し集落では金銭でお礼をするし、また米や麦が収穫されたときも寺頭が寺に持っていく。

『種子島民俗』によると、四十九年忌を経ない死霊を祭る行事、共同石塔つまりテアゲ後の祖霊を祭る行事、と精霊をそれぞれに祭り分けているとある。また、来世観については水平的来世、垂直的来世、半月の旅で、先の世から近くの墓場に通じる、といった

様々な考え方が混在した複雑な来世観であるという。

残念ながら、現在、石塔祭りがどういふふうに行われているのか、調査出来なかった。

七、まとめ

以上現在の葬送儀礼を概観し、気付いた点、問題と思われる点を、取り上げてみる。

過去の資料と比較して、一番の変化と思われるのが、葬法である。土葬であったのが、十数年前から火葬になっている。これは、衛生的見地から行政側の指導、また、土地がなくなってきたことなどによるものだろう。しかし、葬制の概観はそれほど変化はないように思う。火葬は、後で骨拾いをするようになる。現在、西之表市では遺骨は家に持ち帰られ、告別式が行われる。墓場までの野辺の送りも行われている。現和の庄司浦では、火葬場からそのまま墓地に行き、埋葬する人もいたという話が聞かれた。伝承者の方も、この方法に同意されていた。そうになると、告別式は火葬の前に行われることになり、野辺の送りの光景も消えてしまうことになる。葬儀屋の葬式への関与が今より深くなるなら



子どもの墓（西之表市大崎）

ばそういった簡略化もありえるかもしれない。しかし、これは人々の意識の持ち様によって一番左右されることかもしれないので、安易に予測は出来ない。

次に、香奠の問題を通して、過去、意味があつてなされた事が、現在において、その機能や意味をなしていないような事例が廃止されていくのではないかと思う。伝承として、慣習的になされていたものであるが、現在において人々は無意味だと思ってしまう。住吉浜之町で、集落の人々によりそういった話が出ている限り、無常講は廃止されるであろう。

第三に、葬儀屋が葬式に、ずいぶん関係してきていたように思う。それは、集落の人々が行ってきた葬式の準備において良くわかる。以前は、七人組、五人組といった葬式組があり、葬式において大きな役割を担っていたようだ。現在でも、班や集落などの互助は行われているが、住吉浜之町で聞かれたように、男性は旗竿を取りに行くだけという様子である。草履、死者の衣裳、寝棺等、葬儀屋から購入する事が多くの集落で聞かれた。将来は、全ての集落でそうなっていくのかもしれない。

第四に、生者の死に対する恐怖や、不浄感が薄らいでいるようだ。死の通知の方法や、湯灌の際など、また葬式当日に三日まつりを行い、忌をはらす事などに、それがうかがえる。死後のまつりも、略される事もある。つまり、生者の生活の都合によるのか、また、火葬になったことにより、副葬品もあまり燃えない物は納めなくなったり、シキビの葉など納める事例は聞かなかつたことなど、死者に対する観念も変化してきているのではないかと思う。お金を納めたり、針を納めたりすることは、なくなってしまうのではないか。

第五に墓の問題である。火葬の普及によって、納骨堂も普及してきている。また、これは土地がない事も関連しているようだ。墓の向きは、法華宗が北、真宗が西、神道が南というのが一般的であるが、墓石が入り組み、参り易い方を向いていて、同じ宗派でもバラバラという墓地もあったほどだ。納骨堂になって、一番影響してくのが、祖霊観ではないか。四十九年忌をすぎた人の墓を倒し、共同祖霊を祀った石塔も、必要なくなってしまう。また、霊屋を使用することもなくなるであろう。長屋式の納骨堂も見かけた。これは、向きが統一しているので、宗教や信仰に対する認識も薄らいでいくのではないだろうか。

以上のように、西之表市内の葬送儀礼の現状を過去と比較しながら、自分なりに問題点をとり上げてみた。実際に都市での、無機的で能率化されたような葬式の姿しか知らなかった自分にとって、調査してきた葬式の一連の姿は、驚きで、神秘的にさえも思えた。葬式の際も、死霊の祭りにおいても、過去のものとは姿を変えながらも、死者、あるいは死者の霊魂に対する、手厚い配慮がなされているようだった。

しかし、種子島における民俗の変遷という目で見て行くと、貨幣経済の発達、通信機関の発達、マスコミの流入等、様々な要因により、伝承されてきた民俗、そして人々の世界観は変貌している。死者に対する思いやり、あるいは死の穢れの観念が薄らいできて、葬儀屋という葬式の専門屋が、能率化した葬儀を行っても、もう一度、葬式の本来の意味、あるいは死について考え直す時期かもしれない。これは、我々にとっても、また、その民俗を伝承していく人々にとっても言えることであろうと思う。

(昭60・12・26〜昭61・1・3調査)

参考文献

- ・註1 『種子島民俗』第十九号
- ・福田アジオ・宮田登編『日本民俗学概論』（昭和五十九年 吉川弘文館）
- ・『日本民俗事典』（昭和五十八年、弘文堂）
- ・編著『民俗調査ハンドブック』（昭和五十八年 吉川弘文館）

種子島葬制の特色

瀨川 まゆみ

一、はじめに

初めて野外実習として種子島で調査を行った。調査した集落は現和庄司浦、安城立山、下中真所、西之表納曾、国上湊、住吉浜の町の六ヶ所である。

葬制ということで頭の中には常に『宗教』のことも入れておかねばならない。五百年位前から種子島に定着してきた法華宗、そして廃仏毀釈等の影響もかなり受けているのではないだろうか。そんな中で種子島の葬送習俗がどのように行われてきたのかつかんていきたい。又、宗教による違いも各項目毎に検討していきたいと思う。

二、種子島の葬制

1 死から葬式まで

① 死 体

死んだら奥の間（ヨコザ・納戸）に寝かせる。隠居で死んだ場合は本宅に移す。死体の向きは宗教に関係なく北向きである。資料によるとヨコザとジロン間との間に戸板を横に立てて仕切り、遠い人は下の座から拝み、近親者は奥の間に入って拝むということである。

② 湯 灌

奥の間でユカンをする。畳をはぎ、水が漏るよう竹を敷いて、湯を少しずつかけて体を拭いてやる。ユカンは一番身近な人、その家の主人が死んだ時は妻や子供が三、四人で行う。湊では死んだらすぐ軽く行水させて着替えさせ、葬式の日、神官が来る前に手拭きで体を拭いてやる。軽く行水させることをユカンと言うのである。その際、部屋の隅では松明をたく。ユカンする人は左に結った縄をたすき代わりに使う。真所では湯を二つの釜で沸かし、それを一つにして使う。何故、二釜なのかは分からないということである。通夜の前にユカンする所が多い。

③ 死者の服装

立山、湊では集落や親戚のおばさんが作ってくれる白い着物を着せる。納曾では生前着ていた物からいい物へと変わりつつある。着物を着せる時は、左前にして着せる。男の場合も女の場合も。それで立山では、男の人が普通の日に左前に着物を着ていると周りの人からからかわれるという。仏教の場合、手に数珠を持たせる。両手は、神道は下におろしていると資料にあるが、湊では宗教に関係なく組ませて胸の上ののせている。

最近では宗教にとらわれず、神道だから白い着物ということも薄れて、いい着物（晴れ着）を着せる傾向が何われる。

④ 納棺（入棺）

納棺のことをニツカンという。死体は息子や身内の男が棺に入れる。棺が立方体なので屈葬。そのため、納棺する前に足を曲げて帯で寄せておく。住吉浜の町では「寄せた帯はとっとけ」といって、この時使った帯は捨てずに持つておく。

⑤ 副葬品

死体と一緒に棺の中に入れる副葬品として立山（法華宗）では米、茶、十二文、薪として柏の木、これらを三角巾で包んで入れる。この三角巾は死人に着せた着物と同じ反物から作ったもの。真所（神道）では米、茶、茶碗、急須、杖（竹に白い紙を巻いたもの）、着物、神の葉（ない時はシイの葉を使う）を死体の脇にバラバラに入れていく。湊（神道）では米、茶葉、十二文、酒を白い布で作った袋に詰めてから入れる。

こうして見ると、宗教による違いは見られない。挙げるとするならば神道で神の葉をいれること、日蓮宗で草履を入れる（庄司浦）ことである。

死者があの世界を旅する時に使うといわれる十二文の「十二」という数字は一年十二ヶ月からきている。今でもその名残りとして一二〇円入れる所が多い。又、納骨（昔、武士が住んでいた）ではキセルや櫛なども入れていた。

死者があの世界へ行き着くまで、そして着いてからも困る事がないように、生きていた時と同じ生活が出来るように家族が考慮して入れていることが伺われる。

⑥ 葬式準備

集落や親戚の者が協力的に手伝ってくれる。

・イケ掘り

墓穴をイケといい、集落の若者が掘る。妊娠している妻を持つ男は掘ってはいけない。立山では深さ五尺に掘る。真所では深さ一丈。湊では深さ一丈二尺、丸く（直径一丈）掘る。この地域は砂地のため大きめに掘っておかなければ崩れてしまうのである。

・草履作り

ゾーリは集落の老人が四、五足（ごく身内の分だけ）作る。普通のゾーリとは異なり、鼻緒に白い紙を巻きつけるようになっていく。このことから鼻緒のことを真所ではカミオと言う。ゾーリはごく身内の者だけ墓に履いて行き、帰りはそこに脱いで裸足又は別に用意していった履物を履いて帰る。このゾーリを履いて海に行くと魚がよくとれると資料にある。立山では二足しか作らず、一足は死者のために霊屋にあげる分、もう一足は一番身近な人（その家の主人が死んだ場合はその妻）が履く。最近では葬儀屋に頼んで作ってもらうようになっていく（納骨）。

この他に薪、旗を立てる竹、松明、棺を担う木を手分けして取りに行く。神道の場合、霊屋に飾る注連縄も作る。

以上見てみると、若者から老人まで準備することがきちんと分担され、スムーズに事が運ぶようになっていく。又、皆積極的に行っている。

⑦ 通夜

ツーヤと言う。真所（神道）では前夜祭とも言つ。親戚や集落の人が来て一晩中線香をあげる。死者の冥福を祈り、家族を慰めるという点は今も昔も変わらないが、時間的な事を言う、徹夜することとはなくなり夜中十二時頃できりあげる所が多くなっている。男には酒などを出す。翌日の葬式や出棺の打ち合わせをする。

2 葬式から埋葬まで

① 葬式・出棺

葬式は死亡した翌日、午後一、二時頃から行つ。霊前の膳には飯、野菜を煮た物、果物等を供え、飯には箸を二本、まっすぐに立

てる。普通一膳であるが真所では二膳供える。米、大豆、塩の膳と飯、吸い物、煮付、果物の膳。前者をハチのボンと言う。住吉浜之町では霊前の飯の他に、炊いた飯の残りをツノマキにして墓に持って行き、棺を入れてからイケの中に投げ入れる。資料によると神官又は僧侶が読経して別れの祭りをを行い、最後に別れの盃を一同にまわして終わる。

棺は上の座の縁から出す。その後、膳を頭の上にのせた女の人ややはり縁から出る。昔はこの女の人をメシカンメ娘と言っていたが今はそう呼ばれることもなく、伝承が消えたものと思われる。又、今は男女関係なく身近な人が持つようになっていて、棺を出したら縁の方に向けて二人でホーキではわく。

② 葬 列

墓に着くまで並んで行く。その順序は湊（神道）では旗、神官、写真、位牌、棺（霊屋の周りは赤と白の布を縫い合わせたものを巻き、棺を担う木には白い布を巻く）、膳（その家の嫁が持つ）、近親者。

住吉浜之町（法華宗）では旗、位牌、写真、膳、棺、近親者。

納曾（神道）では先導者、旗、花、位牌、写真、棺、神主、近親者、一般者。

尚、納骨の火葬の場合、告別式をすませ火葬場に行く時は従兄弟位までの身内だけで遺骨と花だけ持って行き、家に納め告別式の後、上の様な順序で納骨堂へ行く。この時は集落の人も参列する。従って二度告別式をする事になる。真所ではホーキが先頭に立つ。ホーキは竹の笹で作ったもので集落の人がひいて行く。道をそうじするという意味があるそうだが、悪魔払いという意味もある。又、この地域では墓に着くまで霊屋の上に（三〇坪、五〇坪おき）米

やお金（一、五、一〇円たまに一〇〇円）をまきながら行った。

以上見てみると、順序は多少異なるが葬列しているものは共通している。資料にあるような松明、提灯というのはなかった。おそらくなくなったものと思われる。そのうちホーキも同じ様な運命をたどるのではないか。

死者の家族の者は頭に一尺弱の白い四角の布をかぶる。立山ではヤクキューテという。

③ 埋 葬

昔は墓に着くと六道のまわりをまわった。湊では六回、住吉浜之町では一回。資料には、まわる間に「引導渡し」といってお経をあげるとある。住吉浜之町では死んだ人の幽霊が出てこんやうにということから六道まわりする。これには六道をまわり、死者に家の方角をわからなくさせるといふ意味もあるのではないだろうか。今は行われていない。

お経を上げた後に棺を入れる。その時膳の飯もイケの中に投げ入れる。立山では棺を入れる前に酒をまく。清める意味があるらしい。棺を入れた後は、身近な者が土を一握りして棺の上に投げ込む。湊では喪主（家を継ぐ者）だけが後ろを向いて鍬で三回砂を入れ、後は集落の人がうめる。これにはもうこれ以上、不幸がないよいうにといふ意味がある。棺の向きは法華宗は北向き、神道は南向きである。

真所では昭和六十一年八月に土葬を行っているが、五、六年前あるいは二、三年前から火葬にかわってきている所が多い。その理由として場所がなくなってきた、共同墓地ができたことが挙げられるだろう。

つけ加える形となるが、納曾では棺の周りに木炭を敷きつめてい

た。ガスを吸いこむ木炭は臭気止めの役割を果たしていたのである。せいたくな墓（金持ちの人の墓）ほど多く入れていたという。

3 埋葬以後

① 喪・死霊の祭り

死者の供養祭りは次のようになっている。真所（神道）では十日、四十九日、百日。立山（法華宗）では初七日、二十七日、三十五日、四十九日。湊（神道）では三日、十日、フタ七日、三十日（初ダイヤという）、ミ七日、ヨ七日、四十九日、百か日。住吉浜之町では初七日、三十五日、四十九日。湊の三日祭りは葬式当日に行う。ちょうど墓から帰ってきたという意味で帰家祭りとも言う。昔は死亡して三日目（葬式の翌日）に行っていた。又、十日祭りは親戚や友達を呼んで盛大に供養する。今日でケガレを払う、喪から離れるからネという意味がある。初七日は親戚の者だけで行う。四十九日も。

以上見てみると、法華宗の初七日、神道の十日の祭りと四十九日は必ず行われているようだ。仏式の場合、初七日、フタ七日、ミ七日、ヨ七日、四十九日。神式の場合、故人となった日から十日目毎に十日、二十日、三十日、四十日、五十日、百日と行われるはずであるが、今は二つが混合している。特に神道はかなり仏式で行っている。又、ミ七日、ヨ七日は念の入った人はするがフタ七日までの人が多い。神道も仏教も死者の冥福を祈る気持ちは同じであろう。

② 年忌祭り

庄司浦（日蓮宗）では一、三、七、十三、十七年忌が行われ、三年忌に墓石をたてる。石立てという。真所（神道）では一、三、十三、三十三年忌を行う。三十三年忌はもうしないという所が多くな

ってきている。祭壇を設けて写真、位牌をかざる。神職も呼ぶ。納骨（神道）では五、十、五十年祭を行う。最後の五十年祭の時に墓石をタタム。それまで花や線香をあげていたが、五十年たったら参るだけでいい。湊（神道）では一、三、七、十三、四十九年忌を行う。一年忌には三等親位まで、三年忌は遠い親族が集まって盛大に供養する。四十九年忌に墓をタタム。タタムというのは前にも出てきたが、石塔を横に倒し台石の上のせておくこと。家によっては台石も全部取り払ってしまう所もある。その場合、棺はそのまま埋めておく。湊ではテアゲと言う。この時位牌を焼く人もいる。住吉浜之町（法華宗）では一、三、三十三、四十九年忌を行う。ここでも四十九年忌をテアゲと言う。

以上見てみると、神道も仏教も多少は異なるがほぼ同じように供養祭りをしていると言える。納骨は仏式を取り入れず神式のやり方で行っている。早い所では十三、十七年忌、遅くとも四十九、五十年忌、大方は三十三年忌で年忌供養を終わっている。

墓石は三年目（三年忌）に建てる。今は一周忌に建てる所が多い。

4 祖霊観

死霊は四十九年忌をすますと祖霊の仲間入りをするという。その間、多くの供養祭りをを行うことになるのだが、年忌祭り毎に死霊は清められていくということが資料にある。そのように考えるなら、年忌祭りは祖霊になるための準備段階と言えるのではないか。下から上に階段を上る時のその一つ一つの階段が年忌祭りにあたるのではないか。

祖霊に対し人々がどのような観念を持っているのか資料を参考に

して述べたいと思う。

例えば盆の精霊招きでは、精霊は旧七月一日に先の世を出発し十三日に到着する。そして十六日先の世へ出発し三十日に帰り着くという。約一ヶ月でこの世と先の世を往復する距離に先の世はあると言え。又、他界観はあの世への往生思想を強調する仏教が生み出したもので、人々の頭の中には極楽浄土（阿弥陀仏の居る世界）があり、極楽に行きますようにと供養するのである。

三、南九州（鹿児島県本土、宮崎県）との比較

通夜を鹿児島県本土では「看病」と言う地域があちこちに存在しているが種子島では聞かれない。又、死人は必ず一晩は看病するものだという県本土の考えに似たものとして、死人は二十四時間たつてからでないと埋葬出来ないという考えがある。もしかしたら生き返るかもしれないという思いが両方共にあるものと思われる。

死人は奥の間（納戸）に北枕に寝かせるとするのは共通して言えることである。その場合、宮崎では枕元に逆屏風を立てることになっている。種子島では戸板を横に立てて奥の間とヨコザ、ジロン間の間を仕切るといふがある。屏風と戸板、物は異なるがどちらも同じ源にたどり着くのではないか。屏風にしろ戸板にしろ元々あるべき姿でなく逆さであったり横に倒してあったりしている。

死者の着物は本土では三人で縫い、宮崎では親戚の者が少しづつ針を加え数人で縫う。種子島では二人で縫う所があり、人数は異なるが一人でないという事は共通している。

湯灌の方法は同じようなやり方である。湯灌に使う湯については宮崎では二つの釜で沸かすが、二ヶ所で沸かすことになっている。

種子島では二釜で沸かすという所があり、二ヶ所で沸かす所もどこかにあるのではないだろうか。県本土では、湯は枕飯を炊いた釜を洗わずに水を入れて沸かす所があり、枕飯を炊いた釜もそれほど大きいものではないだろうから他でも沸かしていたのではないだろう。共通していることと言えば、水を湯で暖める形をとること。それで普段は洗面器などに水を入れてから湯を注ぐものではないという。

草履は棺を担ぐ人（県本土ではモイ人という）、家族の者が履くという点は共通して言えることである。又、埋葬が終わると墓地入口に脱ぎ捨てる点も。本土ではモイ人は片足は草履、片足は素足という所や、モイ人は行きだけ草履で他の参列者は行きも帰りも素足という所もある。このことから素足で行くのが古い形で、草履を履くのは発展した形と言えらるだろうと資料にある。この草履を履いて山の狩りや海の漁に行くという獲物が多くとれるというのは県本土、種子島共にある。

葬列について。本土や宮崎では松明を先頭にもってくる所が多い。種子島でも以前はそうであったろうが、今は略されてなくなっている。大根占町では松明、ホーキ、灯籠、一般旗（紅白）、神聖御膳、銘旗、墓標、棺、大麻、斎王、親族、一般会葬者の順。宮崎の仏式は松明、花籠、花輪、旗、導師、位牌、棺、天蓋、御膳、墓標、家族親戚、一般会葬者の順になっている。省略されたり、順序が違っているが同じような感じではなからうか。道案内、悪魔払いの意味をもつ松明やホーキはなくなりつつある。このままでは伝承が消えてしまう恐れがある。

忌については、ほとんど同じと言えよう。七日目毎に七週忌（四十九日）まで小刻みに供養する。初七日、ヒト七日、フタ七日、ミ

七日、ヨ七日、イツ七日、ム七日、七週忌に家族や近親者が集まって、家に僧侶、神官をよんで読経供養する。行う日は家、場所によって若干の差異はみられるが、県本土、宮崎、種子島において簡素化される傾向がある。

年忌祭りも忌と同じ様なことが言える。行うのは一、三、七、十三、十七、二十五年忌などで、最終年忌は三十三、四十九、五十年忌となる。簡素化され十七年忌で終わる所もあるようだが、宮崎で三代目が百年忌を行った家もある。最終年忌後は宮崎では神に帰る。極楽に行くと言われ、魂はなくなり消え去ると考えられており、県本土では神になる。シバ仏になる。ウツガンサマ（内神さま）になる等と考えられている。いずれも完全に成仏したことが伺われる。

四、奄美・沖縄との比較

奄美では名瀬を除き、今なお土葬が行われている。埋葬して肉がなくなつた頃、墓を掘り骨を取り出して洗い清め、再び埋葬する。この洗骨を改葬と言う。する人はその妻、又は姉妹か伯母に限られているが、最近では血縁の最も近い人達が行うという。改葬は死後三年又は七年の内に行う。

沖縄の葬制については洗骨という改葬が知られている。沖縄の人は死後、洗骨してもらうことを願う人が多いようだ。年忌はほぼ本土と同じく一、三、七、十三、二十五、三十三年忌と行う。三十三年忌がすむと死霊は神化して祖霊にまで高められ天に上るとされている。

洗骨は南島古来の風習であり、沖縄本島、久高島、奄美大島等で

みられるが種子島には風習としてはない。ただし、奄美群島から移住してきた集落にはあつたとされている。このことから洗骨改葬は元々、種子島にはなく奄美から伝わってくる可能性はあつたが、伝承が途切れて結局は伝わってこなかったと言えないだろうか。

五、まとめ

種子島の葬送習俗について死から埋葬するまで、年忌祭り、祖霊観と見てきたわけだが、人は死んでも大切にされていることが分かる。どうしてこんなにもするののか、ということ考えた時、自分もいずればそうしてもらおうからということも挙げられるが、祖先を敬い、尊ぶ気持ちがあるからではないかと思う。宗教別に法華宗、神道、日蓮宗と比べてみたが、本来なら異なるはずであるが、あまり違いはみられなかった。今では神仏混合している所が多く、特に神道の家では仏教の影響を受けていろいろ行っているとと思われる。

次に南九州、奄美・沖縄と比較してみたが、種子島は本土からの影響を強く受けていることが伺える。もちろん奄美も本土の影響を受けているわけだが、沖縄からの影響は奄美で止まり種子島まで伝わりきらなかったようだ。

葬制を調査して、人は生きている間もそうであるが死んでもからも大切にされていることが印象に残った。そして、一つ一つの動作や物にも意味があるのだと分かった。現在、火葬が普及して土葬が少なくなり、葬送習俗に関しても簡素化しつつある。後々まで残ってほしいと思うのは当然、気持ちとしてあるのだが、意味のある動作や物を把握して今一度行ってほしいと思う。

参考文献

下野敏見著『南西諸島の民俗Ⅰ』（昭和五十五年、法政大学出版局）

鹿児島県立中種子高等学校地歴部編『種子島民俗』第七号、八号、十号、十三号（昭和三十五年、三十五年、三十六年）

西之表市『西之表市百年史』（昭和四十六年、西之表市）

『南島民俗』第十九号（南島民俗研究会）

下野敏見編『増田の民俗誌』（昭和五十九年、中種子町立歴史民俗資料館）

『九州の葬送・墓制』（昭和五十四年、明玄書房）

『日本民俗学大系第一巻沖繩』（一九七四年、角川書店）

赤田光男著『祭儀習俗の研究』（昭和五十五年、弘文堂）

死と葬式の民俗

有村 月美

一、はじめに

初めてということもあって何もわからないままの実習だったので、十分に調査できなかったのが心残りである。文化人類学、特に民俗学において必要不可欠なフィールドワークを体験して、この学問のおもしろさのようなものが、わかった気がした。今回私は種子島の葬墓制について調べるつもりだったが、時間の関係で墓制についてはほとんど触れることができなかったので、ここでは葬制についての問題だけを述べたいと思う。

調査地としては、住吉の浜之町、現和、安納の大平、湊の四ヶ所である。

葬式というのは、人間が通過する数多くの儀礼の中で最後の儀礼ともいべきものであるし、避けられない関門でもある。よって、その儀礼に対する本人あるいは周囲の人々の感情には、注目すべき点がある。私としては、葬式という通過儀礼を学ぶうえで、儀礼に反映するこのような感情も同時に理解したいと思っっているが、先に述べたように、なにぶん不十分な調査であったため、そのことは次回調査にまわしたい。

二、本 題

1 死前後から埋葬まで

① 死の予兆

死の予兆とは、即ち死ぬ前にある一種の知らせのようなもので、よく知られているのは鳥の鳴き声とか、犬の遠吠えなどである。今回のどの調査地でも、鳥（ここではカラスに限定されている）の鳴き方に関する予兆は必ずあった。例えば、カラスが北を向いて鳴く、違った鳴き方をする。カラスの鳴き声が悪いなどである。他にも、住吉の浜之町の伝承者がその祖母から聞いた話で、かなり古いものだと思うが、月の横に星がついているとそれは不吉な知らせだ、というのがあった。こうしてみると、死の予兆というのは、とかく自然界の現象と関連づけて考えられている。死期が迫っている病人にとっては自然界のちよっとした変化が非常に重要であり、それを自分の死の知らせと考えるのも無理はないだろう。

② 死の直後

死を確認したあとまずすることは、ほとんどの所が北枕にして奥の間（納戸）に寝かすということだった。その他おもしろい事例として、住吉の浜之町では奥の座に死人を寝かすというのは同じであったが、長男もしくは一番近い身内が、あととりするひも、というひもをちぎり、それで死体をしばって、半畳の畳をあげた所に二つ折りにしたごさを敷いて、その上に寝かすということである。その寝かし方も、土葬の頃は屈葬であったためその状態でしばらく、仏教は起きたとき顔が北向きになるように頭は南向きで寝かせ、神道ではその逆だそうである。このひもで死体をしばるという行為は、屈葬の体制をとどめておくのと同時に、何か呪術的要素もあったにち

がない。

これ以外にも死直後の儀礼として「枕飯」がある。これは現和の一例しか聞くことができなかったのであるが、常時と違うナベ（カマ）で炊いて供え、その後は捨てる。一般に枕飯は「死者の善光寺参りの弁当」と言われているが、現和ではくわしくは聞けなかった。

③ 湯 灌

どこでも共通して、二つの釜に湯をわかしそれを一つにして湯灌に使っている。そして普段は二つの釜でわかした湯を一つにして使っていないという葬式においての凶事一般の通念がみられる。湯灌を行う人については、一般に身内が奥の間で、安納ではアラナワのたすきをかけた一族の男が行う。その湯は普段出入りしないウラ（北側）から、もしくは日のあたらない軒下に捨てるそうである。ここで疑問に思うのは、死の忌を最も恐れる身内がなぜ湯灌にあたってはそれを行うのか、ということである。やはり身内の身体を他人にさらすことを恥と思うからであろうか。

④ 死者の装束

古い時代には、わざわざ作っていたのであろうが、今回の調査ではどこも特に作らず、持っているものの中で一番上等な着物を着せるということであった。現和では、その上に道に迷わないようにと、チョッキのようなもので、字がたくさん書いてあるものを着せた。また住吉の浜之町では、土葬の時代は一番の身内が背縫いをしていたそうである。

⑤ 納 棺

棺桶は現在ほとんどが寝棺であるが、昔は木製の座棺であった。集落の大工につくってもらったそうである。どの集落でも、手伝い

はあるにしろ一番の身内が入棺を行う。一緒に入れる物としては、その人が生前着ていたもの、使っていたもの、その他お茶、お米、お金などを入れる。お金にいたっては十二文というのが共通している、冥土の小遣いという名目であった。「なぜ十二文なのですか」という質問に対して、住吉の浜之町の伝承者が答えてくれた一年、つまり十二ヶ月分というのは非常に興味深い。それならなぜ一年だけかという疑問が湧いてくる。ここでいう一年というのは、世間でいわれている死者の旅の期限を表しているのだろうか。その他、現和、安納の事例に、身内の人が棺内の死体の頭上にヒエとよばれる白い布をかぶせるというのもあった。これは、葬列で身内がかぶる白布と同じ意味あいのものであろう。入棺のあと蓋をとじる方法も、安納では金物を嫌い、石でくぎを打つし、その一方で住吉では、一番近い身内が金づちでくぎを打つ。全国の事例に金物を嫌いをほがして紐でくくるところもあることから、本来は、金物を嫌う」という通念が存在していたのではないか、それが効率や安定性の問題から今日のような姿になったと考えられる。

⑥ 出 棺

いよいよ出棺となるが、出棺直前に「別れ飯」というのがある。現和の一例しか聞けなかったのであるが、枕飯同様、違うナベで少しだけ炊いて御飯とミソ汁を身内が一はしずつ食べる真似だけするというのである。これは死者本人でなく、周囲の人々の一種の別れの儀式といえる。棺を出すのは必ずといっていいほどの座の縁側からである。そのあとの儀礼にも、クラボウキで部屋を掃く、魚、大豆、塩ではらってから家を掃く。住吉では悪（ヨゴレ）を掃き出すために、葬式組である七人組の二人が竹でつくったほうきで掃き、その後ほうきは柱に立てかけておく。そして棺を庭に下ろす時

は、ごぎ（これは奥の間に敷いたもの）を二つ折りにしたものを敷いてその上に置く。ここでも、二つ折りにしたゴザはかねては使っていないが、他に仮門の存在がある。安納では、特別に仮門とは呼ばれてはいないようであったが、カラタケで門のようなものをつくり、それをくぐって門から出かける。住吉では、門柱の片方にニガ竹をさし、ここに塩、水、焼酎をおき、竹の葉をちぎってもう片方の門柱に向かって投げる。伝承者が言うには、これには「二度と来るな」という意味が含まれているようだ。つまり、ニガ竹の葉を片方からもう一方へ投げることによって、この世とあの世の境界、壁のようなものをつくっていると考えられる。

このようにしてみると、一連の出棺の儀礼には死者に再びこの世即ち家に戻ってきてほしくないという気持ち強く表れている気がする。種子島ではみられなかったが、「魂呼び」のように一度死んだ者を何とかして生き返らせようとする儀礼があるが、それとの矛盾は日本人の「死」というものに対しての観念を学ぶうえで非常におもしろいところである。

⑦ 葬 列

一連の葬送儀礼の中でこの葬列が最も盛大であるように思える。実際は、葬家から墓までの単なる死体の移動にすぎないのである。しかし、昔の人々が死霊が何時遊離して何処かへ行ってしまうのではないかと恐れていたもので、それだけこの移動に注意を払ったのではないかという考えもある。

まず私が注目したのは、葬列での身内の服装、特に頭にかぶる布である。現和では昔は白い服であったが現在は黒い服、安納では昔からずっと黒い服、住吉では黒い着物とまぢまぢだが、どの集落も

身内は頭に白い布、もしくは手ぬぐいをかぶるという点では共通していた。住吉で聞いた話だが神道ではカサをさすそうである。この理由としてはどこも、忌中は日の光に当たらないため、ということであった。住吉でももう少しつっこんでみると、忌中は自分がケガレているから、おてんとう様からかくれるんだ、というふうに教えてくれた。今回の種子島実習の中で、私が最も気になっていることの一つに、この「太陽とケガレの関係」が挙げられる。それにはもう少し資料と、自分の知識が必要のように思われるので次回にまわしたい。

葬列に同行する人は、身内と集落の人全員の場合と、親せきだけの場合とあった。列の順番においては次のとおりである。

現和の例——先頭には葬式旗とよばれる赤白の旗がきて持つ人は身内である。二番目には写真で持つ人は二番目の身内、三番目が位はいで持つのは一番近い身内、現在火葬の場合このあとには骨壺で、四番目にお膳がくるが、これはメシカンメと呼ばれる死人の長女が頭上運搬していたそうであるが、現在では死人の看病をしてくれた人、主に嫁が運ぶ。五番目にお師匠さん、六番目に白い布をまかれた霊屋で、これは身内でない若い男四人でもつ。そのあと親せき、集落の人々が男女の順で続く。

安納の例——まず葬式旗で集落の人が持つ。二番目に写真で喪主、三番目が位はいで次に近い身内、四番目が骨もしくは棺おけ、五番目に白い布をまいた霊屋で一番近い子供が持つ。そのあと親族、集落の人々が続く。

住吉浜之町の例——まず葬式旗で孫あるいは集落の人が持つ。二番目に写真、三番目に位はい、持つのはこの順に近い身内で、四番目にお師匠さん、五番目に棺桶、霊屋もその上にのせてある。その

あと親せき、集落の人と続く。

事例が不十分なため、この三つから葬列の傾向ともいふべきものを指摘するのは困難であるが、敢えていうなら、葬式旗―写真―位はい―棺おけの順はどれにも共通していることである。興味深いものとしては、現和の例に出てくるメシカンメで、他の資料を見てもそれを運ぶのは女性である。女性に何の意味があるのだろうか。その他依り代としての位はいの重要性、また今回の実習では聞けなかったのだが、タイマツなどの火と葬列の関係もこれから調査していきたい。先に述べた服装に含まれると思うが、ワラぞうりがある。今は買っているそうだが、昔は集落の人や葬式組の人で作り、履くのは身内に限られている。そのあと、墓においてくるとか墓穴になげこむなど、すべて墓場で処理している傾向がある。これも死のケガレを忌む気持ちからであろう。さて、葬列が墓につく前までの間に必ず師匠さんが、辻や三文字ごとにカネをならす、これには、死者への道案内の意味が含まれている。死者が迷わず、確実にあの世へ行けるようにという気持ちからである。住吉の例に葬列は休んではならないというのがあるが、これも同様に考えてよいだろう。これ以外に神道の例に金を三六五日分まきながら行くというのもあった。

⑧ 墓葬礼

これは葬列が墓についてから埋葬するまでの間に行われる作法のことである。現和ではまず列がロクロウのまわりを三回まわりお経をとなえてから、お師匠さんがタマヤの上を三回たたき、それから戸を開け、お膳をそなえ、お経をとなえる。この墓の周りをまわる習俗は数多くみられ、一般には死霊の目くらましという理由があげられているが、実際のところはわからない。またこの三という数字

のもつ意味は何であろうか。住吉の浜之町では、二つ折りにしたごぎを墓で敷き、その上に棺をおく。

墓穴を掘るのは、集落の若者か葬式組である。住吉では掘る前に焼酎、塩、米でまつてから、掘る場所に「この宿を借ります」といってカマで印をつけるそうである。カマや刀は一般に無縁仏が死者へ入り込むのを防ぐ、一種の悪霊防御の策と考えられているが、ここでは、「宿を借ります」という言葉から、その土地の神のような存在に土地を貸してもらった様な意味ではないかと思う。その他にも浜之町には、集落の人が墓穴に棺を入れた後、一番近い身内が鍬を後手でもって、二回土をすくって入れ、そのあとは組の人が同様にする。また組の人は海岸から、ガル石とよばれる石をひろってきて、墓のまわりに敷きつめるなど興味深い点が多い。ここにてくるガル石は、神社の境内にも敷つめてあるのをよく見かけたのだが、聖の域を表すものである。

⑨ 野がえり

葬送儀礼の中で最も人間の死霊を恐れる気持ちが強く表れている儀礼といえるだろう。今回種子島で聞けた事例は、家に帰ったとき塩で手を洗う。又は塩と水がセットになって塩で手を洗い、水をかけてから入るというような平凡なものだけだったが、他にも米や酒を使うところもある。また塩のかわりに海水を使うところもあるし、ザルや箕に塩や米を入れて使うところもある。おもしろい例としてコマアシをまたぐというのがあるが、これはコマアシそのものがあの世とこの世の境界になっていて、葬列参加者がそれをまたぐことによって、あの世に死者の世界からこの世に生者の世界へ戻ってくることを意味している。それと同時にその境界は、死者の霊がまちがって家の中へ入ってくるのを防ぐ役割も持っているのでは

る。つまり野がえりの儀礼は、周囲の人々にとっては死者の世界からの分離儀礼であり、生社会への統合儀礼であると言える。

⑩ 葬式組

現和、安納においては特定のものではなかったが、集落の若者や、(直接の縁故ではないが)一族の人がその仕事を担っているようだ。住吉の浜之町においては、「七人組」という葬式の時だけだけでなく産育の時にも協力を得られる組が存在した。その役割においては、葬具の製作、墓穴掘り、棺桶の担い木切り、その他の雑用などがそうである。葬式というのは人手も、費用もかかるものなので、この葬式組の存在は葬家にとって心強いものであるに違いない。またそのような実務的なものだけでなく、忌のかりやすい立場にある身内のものが出来ないような役目を肩がわりしてくれる貴重な存在ともいえる。その他にも葬式によって集落内の結束が強まるといった効果も忘れてはならない。葬式組の仕事の中心「二人使い」といって関係者に「死」を知らせる使いがあり、二人一組というのが原則である。現和でも師匠さまを呼びに行くのに縁遠い他人が必ず二人で行かねばならないというのがあった。しかしその一方で住吉では身内が一人で呼びに行くといったふうに全く逆の立場をとっている。これは前者が本来の形であったが何らかの理由で今の状態になったのではないかと推察される。二人、それも身内でない人が選ばれていることから、これは死の忌がかかるのを避けるためと考えてよいと思う。

⑪ 禁忌

死者本人と同年齢の人や、妊婦の人は一般に忌にかかりやすいと言われている。そのためその忌を逃れるためには何らかの予防策が必要である。現和では同年齢者の禁忌として棺おけや納骨堂に人形

をいれるといった習俗が残っていた。妊婦においてはどの集落も、本人はもちろんのこと、その夫も葬式には関与しないということであった。また安納では、友引きの日の葬式には、虫(コオロギ)を生きたまま棺桶に入れるということだった。現和の人形にしても、安納の虫にしても、身がわりという面では共通している。自分にもかかりやすい忌をその物に移しているのである。

⑫ その他

霊屋についてすこし触れておきたい。調査結果は十分ではないが……。霊屋とは墓をおおう木製の屋根型のほころのようなものである。安納では死者がでるたびにつくっていて、墓石をたてるまで一年、長くて三年ぐらい墓にまつてある。住吉では棺を埋めた上に霊屋を設置し、三年忌もしくは十三年忌のときに墓石にかわる。

2 埋葬以後

墓参りと称して遺族は命日、お盆などに墓に行く。法華宗ではだいたい四十九年忌をすぎると死者は神となるという考え方が一般的である。これ以降は墓参りだけになる。年忌祭りとは、言わば霊が先祖神となって自分たちを見守ってくれることを期待しての行為といえる。

3 異常死

異常な死に方をした者に対しては、そのあたりを強く恐れる気持ちから、何か特別な方法をとったと思うが、種子島では、安納での伝染病の死者の墓に石灰をまいて真白くしたという事例以外は聞くことができなかった。

三、結 論

葬送儀礼とは、人々の死霊感とも言うべきものを集大成してできたと言えるのではないか。一見何の意味もないような儀礼にかくさられている真の意義を探り出すことが、葬制を学ぼうえでの重要なアプローチになるだろう。しかし、古い時代から今日までに社会的背景の変化から、葬制にも合理化の波が押しよせ本来あったであろう儀式や、考え方が姿を消していつているということは考慮にいれなければならぬと思う。

伝 承 者

- 現和 下園 ヨシエ(大正7・1・18生)
安納 日高 実秋(大正15・11・15生)
住吉浜之町 大木 ハナ(明治39・5・4生)

参 考 文 献

- 井之口章次著「葬式」『日本民俗学大系四』(一九五九年)
武田明著『日本人の死霊観』(一九八七年)

葬送習俗の調査

濱田綾子(旧姓 黒木)

一、はじめに

私は、今回の種子島実習のメインテーマを「種子島の葬制」というものにした。演習で使っている『日本の儀式』を読んでいて日本の葬送儀礼の数多さを知って、少し興味を持ちました。そして一月の最初の時間に発表をすることにもなっていたので、どうせ調査するなら関係のあるものがないと思いい、このテーマに決めました。

『種子島の葬制』といっても、島内は、西之表市、中種子町、南種子町と大きく三地区に分けられていて、とても全地区は調査できないと思えました。

そこで、宿泊所が法華宗の日典寺だということもあったので、西之表市の川迎地区について詳しく調査し、その他の地区では、話を聞けたらできるだけ、わかりやすい質問事項についてだけ調査しようと思えました。

二、見学の感想

種子島についた当日、種子島家の墓地や河内家の墓地などを見学しましたが、いろいろな形態が一ヶ所に集まっていて、しかもそれ

らが、大切に保存されていたことに驚きました。そして、種子島開発総合センターでは大切な資料なども見せていただいたりして、文化の発展に力をいれているんだなと思えました。

二十五日は種子島全島を一巡しましたが、中種子町の民俗資料館で甕棺の実物を初めて見て崔先生の質問の鋭さに驚きました。それとガロイヤマに入って菊面石に触ったとき、ふと祟りませんようにと拝んでしまいました。宝満神社などを調査したあと、西海の浜でのいきなりの先生の聞き取り調査には、本当に驚いてしまいました。何気ない質問をしながらそれでも人の気持ちをしっかりと引きつけて、いろいろと聞き出してしまうテクニックはさすがプロだと思いました。

二十六日は、現和の榎本さんのお宅にうかがって、みんなが榎本さんみたいだったら、古い民具などがもっとたくさん残っていただろうなと思ったりしました。そして浅川での初の聞き取り調査はとても良い方に会えてまずは安心しました。

二十七日は、納官坂元の御山が一番印象的でした。その他にサブテーマの聞きとりが、月夜のせいで住吉地区で全然できなかったのがとても残念でした。

二十八日は、集団行動の最後の日ということで気合いを入れていたのですが、歩くこと歩くこと、ほんとに体力の必要性、重要性を実感しました。浦田神社のスケールの大きさには圧倒されてしまいました。

集団行動で見学したのは、神社がとても多かったです。どの神社もそれぞれ特徴があって、いつまでも残されてほしいと思えました。それと、やはり文化財の多さに驚きました。

三、調査内容

1 葬制について

西之表市下西川迎の山田永順氏に協力していただきました。

宗教は法華宗である。昭和四十年代までは、土葬が行われていたが、それ以後は火葬になってきた。

死者が出ると、そのいとこの男性二人がきちんとした服装で寺に知らせにくる。この人達のことを公示、または公使と言う。

土葬をしていた頃は、密葬だったので死後二十四時間勝手に葬式をしていた。例えば、朝六時に亡くなったら、その日の夕方四時には葬式を出してしまうということだ。

葬式をする前の死者の扱いは、湯灌をするまではそのままで北枕にして置く。そして湯灌は死者の息子など血縁の濃い男性二〜三人で新しいふんどし一枚を身につけてする。湯灌をする部屋は大体が横座と呼ばれる寢室で、びょうぶを逆さに立てたり、障子を横倒しにしたりしてその内側で水に湯を入れて適温にしたもので行う。その後は、身内の一番の大年寄が着物を縫い、お坊さんが、法名、法号と曼陀羅と俗名などを書いた経帷子を着せる。そして畳の上に新しいゴザを敷き、棺に入れる。この湯灌をする男性は魔よけのために左肩からしめなわをする。妊婦はこの席には立ちあつてはいけなると言われている。湯灌の前には、枕経というものをあげる。すると死者の硬直していた関節が柔らかくなるという。

湯灌が終わって死者を棺に入れるときは、出家をする時と同じような考え方で、ずだ袋を入れる。ずだ袋には、お米一袋、茶の葉一袋、お茶菓子一回分と半紙に包んだお金、あの世でお金にかかわると言われているしきびの花を一枝入れる。その他マダケで作った一尺

程の杖を入れ、ぞうりを履かせる。坐棺のフタには悟りの世界に入るという意味の文字を書き、その場で縄でしばってしまう。屋内でする準備は以上だが、家の外には花輪などの弔旗を出す。

棺を床の間に置き、いよいよ葬式が始まる。

葬儀委員長はたてないのが普通だが、時には長老、もしくはある程度しっかりした年長者に頼むことがある。喪主は家督を持った人になる。

ここで、葬式とは亡くなった人へ引導文を渡す儀式であり、告別式は、遺族、親族、集落の人との別れであつて両者は全く違う性質の式であることを明記しなくてはならない。

出棺の儀式のときは、霊前とお坊さんと親族（いとこ、はとこまで）に四品の霊膳と焼酎を出す。これを別れの盃（杯）と言う。この儀式のとき長男の嫁が縁側で御霊膳をあげ、その他果物なども一緒にもろぶたの中に入れ頭の上にのせることがある。このことをメシカンメムスメという。野辺送りのときはもろぶたは男性がもつていくので、これは今ではただの儀式である。

野辺送りに出発するときは、草履のヒモをま結び又はたて結びにし、縁側で履いてそのまま下におりる。棺は近所の人四人位にかつがれて縁側から出て、男の人が作ったマダケの仮門をくぐってその家を出る。仮門はくぐったあととは途中のどこでもよいが放り投げて捨てる。

野辺送りの葬列の順序は、灯明、導師旗、お坊さん、喪主、霊屋、親族、近所の人である。

導師旗は一本の竹に紅白の題目を書いた布をさげたもので魔よけになる。

墓地につくと入口にある六道四生法界萬靈之塔のまわりを霊屋と

お坊さんは右回りに三回まわる。

その後、あらかじめ掘っておいた深さ六尺の穴に棺を納め、土をかぶせ、その上に霊屋をのせる。

以上の様なやり方は七歳以上の人だけで、六歳ぐらいまでは親族だけで簡単にすませる。

忌明けについてはいろいろな段階がある。三日祭り、大祭りとも言うがミツカノコトというのが一番よく言われる。この日は親族を集めて祓い祈禱をする。これは重い忌をおとして仕事に行くなど日常に戻ることの意味している。精進おとしの料理には白身の魚、イカ、ナガラメ、もしくはダシザコが使われる。この祓い祈禱の祓いとは神道の言葉であり、種子島独特の神仏混合が見られる。

初七日には香辛料を使わずにごちそうをする。この日はお菓子がおみやげである。

四十九日、ナノカと呼ぶがこの日は親族を招待してソーメン、ハルサメなどを使った料理を出す。このソーメン等は、死者があゝの世に渡る橋になると言われており、この時の食事は追膳供養の意味がある。

四十九日の法事が終わると一周忌、三回忌、七年忌など三と七の年に大きな法事を行い、三十三年忌が一つの大区切り、そして四十九年忌が最終年忌となっている。

死後四十九年経つと墓台を捨ててしまい、墓石を一番古い先祖のところに持ってくる。このことをヨセバカと呼ぶがヨセバカをするのは相当丁寧なやり方である。

棺の周りを掘ってそこに木を入れて火をつける。焼け残った骨を足の部分から一〜二つぐらいずつ普通のつばに入れていく。このことを取り上げ法要という。これは先祖の霊を神格化する意味があっ

て仏よりも神が偉いと考える神仏混合が見られる。洗骨をすることではなく、掘り出したら焼酎をかける。

お盆行事について。初盆のときは、十四日の午前二時に家から家族全員でろうそくをともしてお墓に精霊を迎えにいく。そのとき孫もしくはひ孫がちょうちんを十個ぐらい木に下げて二人でかついでいく。家に帰ってからは一日七回霊膳を出す。

初盆でない普通のお盆のときも、霊膳は出すが、御本尊に、はしを二本立てた飯と汁物と豆あるいはソーメンと煮物の四品のをを出す以外は、位牌の数だけ飯と茶を供えればよい。

床の間にはバショウの葉を敷く。これは人の命を、一度弱るといふダメになるかわからないバショウに例えたのと、アリがこないようにするといふ二つの意味がある。線香立ててもバショウの茎を切ってきて作る。

この時の精進料理は、吸い物、油揚げ、ソーメンなどだが、今でも西之表市では盆の期間中には精進料理を守っているのである。

無縁仏を祀る施餓鬼棚は縁側にバケツをおき、その上にスノコを乗せ、お米とバショウの茎をきざんだ水の子というものをのせ、それに水をかける。日典寺では八月二十一日に施餓鬼供養をする。ちなみに施餓鬼供養が一番盛んに行われるのは南種子町の平山であり、集落で供養するのは湊泊地区だけである。ここでは、公民館で畜生や魚介類の供養もする。

精霊迎えのとき、川迎地区では、お墓に参り、六道に参り、日典寺の住職の歴代墓に参る。そして日典上人を拜殿からではなく本殿の前から拜み最後に下西校区の慰霊塔に参る。何故だかわらないがみながそうしているようだ。

最後に、死者の布団などの処理の仕方であるが、布団は塩で清め

る。着ていた着物は喪主が夕方うす暗くなってきたとき川に持って
いって洗って清める。そのときにはカマを持っていき、家に向かう
とき後ろを切るようにふり回しながら帰ってくる。これは一種の魔
除けである。

以上が法華宗の葬制ですが、神道の人の話も少し聞けたので書い
ておきます。協力して下さったのは西之表市現和浅川の小平田守清
さんです。

まず、通夜の仕方については、一晚中集落の人が集まってきて、
お菓子を食べたり、酒を飲んだりして故人をしのぶ。そして、葬式
の日の午前中に身内の一番の老人が死者に着せる着物を縫う。

納棺については血の濃い男の人が三人ぐらいです。出棺のとき
は、縁側から出していく。昭和五十年近くまでは土葬だったが、今
では火葬になっている。

忌あけについては明確にはわからなかったが親族
のケガレが百日でぬけるといふことだ。

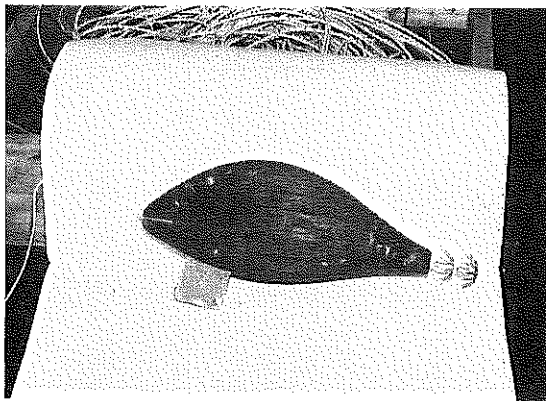
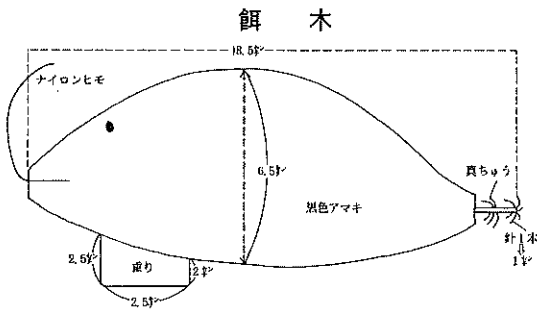
年忌まつりについては、十三年忌で一応おわって
しまうそうである。

以上で葬制についてのレポートは終わります。

2 イカ漁について

中種子町浜津協の浦元信義さんに協力していただ
きました。

どういう捕り方をするのか質問したところエギを
使ってとるのが一番多いそうだ。しかし、以前は、
満月の夜に海面に油をおとして海底が見えるように
して網で捕ったり、箱メガネが普及してきたら、箱



エギ(餌木) (中種子町浜津協にて)
アマキを切って、形を作る。竹をもやして黒
くこがす。重りと針をつけると出来上り。月
夜に、エギを船から海に落とし、水深10位
のところまで釣る。何十年も同じ道具でイカつ
りをしてきたのはすごいと思った。

メガネで水中を見て三ッ股のモリのようなものでついたりし
ていた。

エギで捕れるのはほとんどが水イカであって、モリで捕れるのは
コウボシ(甲イカ)である。エギは、アマキというやわらかい木
で、シカなどの動物がカジってある木を使う。その方がおいしくて
イカもよくとれるそうだ。

作り方は、自分たちで竹を焼いてそれでエギを黒く焦がすだけ
である。針の部分は真ちゅうをおりまげて作る。

一番長く捕れるのは満月の晩だが、月が出ている日は夕方から朝
にかけてよくとれる。

とってきたイカは、以前は自然乾燥させてスルメにしたり、お互
いに売り買ひしたりした。最近ではほとんどが冷凍して保存してい
る。

漁の期間は二月下旬から八月下旬で、十一月～二月まではあまり捕れない。他の期間は禁漁されたりしている。

以前よりもイカ漁をする人が増えてきていて、イカは減ってきてしまったと残念そうにしておられた。

3 葬制・イカ漁についての研究結果

まず葬制についてですが、山田さん一人からしか、詳しく聞けなかったのですが、今までの自分の考えていたものとはいくらか違っ点がありました。

まず、行示が二人であること、霊膳の品が四品であることなど、偶数が基本になっていることです。演習などでは、三という奇数がよく使われるということだったのでとても意外でした。行示が二人というのは死のケガレに二人で対抗するという意味があるそうです。

経帷子に書く行年は満年令ではなく、数え年で書きます。だから死産や流産をしてしまった赤ちゃんには、経帷子などには当歳と書くそうで、何だか不思議な気がしました。

北枕というのは縁起が悪いとよく言われていますが、実はそうではないということを知ってとても驚きました。それは、北枕はオシヤカサマの姿であり、人間は頭寒足熱が一番理想の状態だということから、頭を北に向けて寝かせておくことと少しでも生き返る可能性が高いということです。意外なことばかりが多く、予習不足というか、自分の勉強不足と、地域性の違いの大きさを感じました。

種子島はもともと神道が多かったせいもあって神社において神仏混合がとてよくみられたが、神と仏の観念がいつのまにかごちゃ混ぜになってしまっているのはおどろきました。でも、それがと

ても自然に混合されているので、気付かないということもよくあるのではないだろうかと思いました。

禁忌については、四十九日までの間は、結婚式だけでなく、お見合い、結納もしてはいけない。結婚式については他人のにも出席してはいけないことは知りませんでした。祝いごとに参加してはいけないことから、集落の祝いごとに出いけないのはよくわかるが、七五三など身内の子供の祝いはしてもよいという点に少し疑問を持ちました。しかし、よく考えてみると、子供については、元気に育ってほしいという願いの方が強いのでそうなるんだらうなあとと思いました。

納棺をするときには、「残っている人の病気も持っていってくれ」と言ったりすることがあるそうだが、これは死体に話かけているのではなく、死者の魂が部屋にいて、それに話かけているそうであります。ここでも、魂のある場所を問題にしていますが、この問題は、いつまでたっても結論は出ないと思います。この問題は、四十九日を迎えるまでは墓でなく、家のそばにいないではないだろうかと思えます。四十九日というのは仏教の考え方から生まれたものですが、浅川では神徒だったので、百日でケガレがはれるということから、百日までは魂が地上にあると考えているのではないだろうかと思いました。しかし、話を聞いている間、魂の話は一つも出てこなかったのが神徒では、もしかすると魂というのはあまり重要な意味を持たないのかも思っていました。

山田さんにいろいろ聞いたわけですが、さすがお坊さんだけあって、お経とか、題目など専門的というか、宗教的なことをとてもたくさん教えていただきました。

例えば、施餓鬼供養について、人間は六道をくり返し生き、卵

生、胎生など四生によって生まれる。これは、生き物は全部集まっ
ていて植物以外の生物には全て仏性があるとして大切にまつらな
く
てはならないということだそうです。ちなみにお坊さん達は昔は、
松子(ほっす)というやわらかい毛で作られた蚊などをはらう道具
を持っていたそうで、絶対に殺生はしていなかったそうです。

葬制とは少し見当はずれのことになりましたが、宗教の厳しさに
も驚きました。

イカ漁のことについては、何もかもが初めて聞くことで感心ばか
りしていました。

○ アマキを材料に使うことの原因など、信じられないほどあたり
前で何かすごくおかしかったです。

○ イカ漁の仕方については、昔からほとんど変化していないとい
うのには驚きました。

○ 捕ったイカの利用法が変化してきているのは、やっぱり時代だ
など思いました。

四、全体のまとめ

種子島には、両親がいることもあって、よく行ってはいたんで
すが、あちこち見てまわるのは初めてなので、とても楽しみにしてい
ました。

ついた当日、いきなり調査に行ったときは、「さすが実習だ」と
思いましたが、石敢当など、普段なら見むきもしないことまで詳し
く気を配って調べる。そして、実測もするという点は、驚き感心す
るばかりでした。

一日目は、何もかも珍しくて、写真を一本分ぐらいとったんです

が、巻いていたら、フィルムをひきちぎってしまい、一本ムダとい
うかダメにしてしまつて、とてもショックでした。でも、いい勉強
になったと思つてあきらめました。

二日目からの集団行動のとき、神社をすごくたくさん調査しまし
たが、それら一つ一つに全て特徴があつて、御神体を実測したりす
るのは、はつきり言つておそろしかったです。いくら勉強だと思つ
ても、万一祟つたらと考えたりして複雑な気持ちでした。

いろいろ調査していくうちに、石を見るとそれが力石に見えてし
まつたり、石塔を想像したりで、そのうちに夢にまで見るようにな
りました。

聞き取り調査については、榎本さんをはじめいろいろな方に会い
ましたが、なかなか難しいなと思ひました。最初は、とても気さく
な方に会えてたくさん聞くことができたけどあとはほとんど中途半
端とか、時期が正月前ということがあつて葬制について聞きにくい
感じがしてなかなかうまくいきませんでした。サブテーマにしても
浜津脇ではよく聞けたのですが、住吉では、月夜で、イカがつか
れるからということイカ漁に出て行って一人もいなかったで、何一
つ聞くことができなくてすごく残念でした。そう簡単には、いかな
いということを実感しました。

サブテーマは、何だか全然うまく行かず、伝承者に会えても、時
間切れでほとんどきけなかったのに対して、メインテーマは、その
道のプロの山田先生にいろいろ聞くことができてとてもうれしかつ
たです。二十八日の夜から二十九日は図々しいかなと思いつつほと
んど一日中お話しを聞かせていただきほんとなによかつたなと思ひま
した。

でも、一人からだけしか話しを聞いていないので、比較をすると

いうことができないのが何となく残念というか、物足りなかった気がします。

もし自分がもう少しよく下調べをしていたらもっとたくさんの人から話を聞くことができたのではないだろうかと思うと何かすごく恥ずかしい気がしました。

今回の実習で、聞き取りの難しさと下調べの大切さを身をもって感じました。

次回、実習に参加するときは、もっとたくさん勉強をしてからにしようと思いました。

葬墓制

斧淵 和 永

はじめに

種子島を訪れて調査するのは去年に続いて二回目である。今回のテーマは葬墓制である。種子島は石塔の多い文化をもっている。その中に、先祖供養の石塔と墓と供養するものが二つあるという両墓的なものが見られるおもしろい所である。

このような島でどのような葬制習俗が行われてきたのか、興味のあるところである。

それでは今回の調査における事例と若干の考察を試みたい。

一、各集落の比較

1 庄司浦

伝承者 下園イワ(66)、下園ヨシエ(71) 宗教 法華宗

(1) 死にまつわる人々の心意

① 死の予兆

シラセという。

カラスが北を向いて鳴くと縁起が悪い。

何か物が落ちた音がする。

② 魂呼びなど

魂呼びのような再生の儀礼はみられない。

(2) 死亡の確認から納棺まで

① 死後直ちにすること

奥の間で枕を外して、北枕にしておく。そのとき、死体の手を組ませて足も曲げさせておく。枕飯は、家の中で空鍋で、鍋の中に残らないように少量の米を炊く。それを死体の頭の上において、箸を立てておく。

奥の間には屏風を立て、畳を同じ方向に向けるように敷き方を変える。また、神棚はひっくりかえしておく。寺への死亡の通知は必ず二人で行く。行く人は必ずしも身内のものでなければならぬとは限っていないようだ。

② 湯 濯

二つの鍋で湯を沸かして、それを併せて使う。奥の間は畳をはぐと竹ばりになっており、その上でする。身内の者で行われ、まず長男から順に始められる。使い終わった湯は、家の裏側、つまり家の北側に捨てられる。湯濯の後は薬のほうきで縁側の外に掃き出す。

妊婦は湯濯はしてはいけないと言われる。

③ 通 夜

集落内で死人が出ると、集落の人が手伝ってくれる。通夜の時も集落の人が集まって、死人との別れを惜しむのである。食べ物や酒などが出るが、騒いだりはしない。又この時、坊さん(師匠さん)がきて、枕経をあげる。しかし、早朝に死人が出たときはその日のうちに葬式を出すので通夜はしない。

④ 納 棺

棺桶のことをクワンオケという。死人に最も近い人が棺桶に遺

体を入れる。死体には、本人の最も上等の服を着せる。頭には白布をかぶせる。数は決まっていない。かぶせたい人の数だけ載せるのである。座棺なので、足を曲げ、手を組ませ棺桶に入れる。棺桶には昔は十二文、現在では一二〇円入れる。外出、夏、冬、遊びのときの着物、作業着を入れる。友引のときは、死人と同年齢の人は人形を入れる。

(3) 出棺から埋葬まで

出棺は二時か三時になる。出棺の前に参列者は別れの飯を食べる。みそ汁とご飯を少しずつ食べるまねをするのである。これは普段使っているものではなく、別の鍋で炊いたものである。

葬列の順番は、①葬式旗、②僧侶(師匠さん)、③写真、④位牌、⑤靈屋、⑥遺族となる。葬式旗は赤色か白色のもので、本数は決まっていない。位牌は最も故人に近いもの、例えば夫が亡くなればその妻が、両親が亡くなればその長男が持つ。靈屋は、だいたい一坪二〇坪か四〇坪くらいの長さのもので、周りには白い布が巻いてある。靈屋の後に続く遺族は、血の濃い順からで、男性が先で女性が後になる。また、メシカンメといって枕飯を頭のうえに載せて歩く娘が参列する。この娘はヨメで、ヨメが責任を持って病人の看護をしていたのでこのメシカンメはヨメがしなければならぬと言

う。

遺族は黒色の喪服を着る。昔は白い浴衣を着ていたようだ。特に身内のものは「カサをさす」と言って頭に白い手拭いを被る。また上には「衣をかける」と言い、僧侶が書いた(何と書いてあるかは不明)白い布を肩にかける。それに、集落のおじいさんが作った草履を履いていく。

墓地に行くまでの道は決まっている。僧侶は墓地に行くまでの

間、鈴を鳴らしながら行く。三文字のところに差し掛かると鉦を鳴らす。帰る道も同じである。履いて行った草履は墓地にあるロクロウ(六道)において来る。

(4) 埋葬以後

① 忌明け

ヒトナノカ(初七日)、フタナノカ(十四日)、ミナノカ(二十一日)と連夜、四十九日、この日には魚など生臭い物は使わず、そうめんや菓子、餅などの精進料理を出す。連夜には僧侶が来て、お経を上げる。

② 年忌祭り

一周忌、七年忌、十三年忌、三十三年忌、四十九年忌まである。その後、その霊は神様になると言われている。

③ その他

戦死したと思って、葬式までした人が実は生きており、家に帰って来たそう。そのときはお寺に行き、お祓いをしてもらったという。

(5) 墓制

未調査

2 安納

伝承者 日高実秋(63) 宗教 法華宗

安納の約三〇割は法華宗で、後は神道系である。

(1) 死にまつわる人々の心意

① 死の予兆

一番先に鳥が死臭を嗅ぎ取る。

鳥が変な鳴き方をすると人が死ぬ。

② 魂呼びなど
魂呼びはない。

(2) 死亡の確認から納棺まで

① 死後直ちに行われること

遺体は納戸に北枕にして寝かせておく。

② 湯 灌

現在は水道水を使用している。二つの鍋で沸かしたお湯を併せて使う。湯灌を行う人は身内の男性二人で、荒縄の縄轡をかけている。残ったお湯はどこに捨てるというものではない。

③ 通 夜

通夜は本通夜と二晩になることもあるという。しかし、必ず一晩はおく。

④ 納 棺

棺桶は一家で作る。大体高さは二尺くらいである。一家でと言ってもその家族の意味ではなく、例えば、ここ安納での話者の日高さんのところでは、日高家、つまり一族のことである。遺体には本人の一番良い着物を着せる。納棺の際に、冥途の小遣いとして十二文の小銭や、故人の身の回りのものを、夫が死んだのであれば妻の帯を、友引のときには故人と同年齢者のものはこおろぎなどの虫をいれる。蠟燭やタイマツの火を灯した中で子供達がいれる。棺桶の蓋をするときに釘を打つときは、金づちなどの金物は使わずに石で打つ。

(3) 出棺から埋葬まで

縁側から棺桶を出す。出した後、納戸はワラボーキで掃く。屋敷の門にはカラタケを両方から結わえた門を作り、その門をくぐって出る。

葬列の順番を示しておく、①旗、②僧侶(シショウ)あるいは神官(ホイドン)、③喪主、④位牌、⑤霊屋、⑥親族と続く。旗は集落の人がもつ。霊屋には白い布を巻き、一族の者が担ぐ。霊屋の後に親族が続く。故人に近い順に並ぶが、男女の別は関係ない。近親者の喪服は、女性が紋付き、男性がリャクデーリーという黒い服である。それに、親族が作った草履をはき、頭には白い布を被る。墓地に行く道は決まっておおり、つくまでの間、僧侶は辻々では鉦を鳴らす。墓地の前に神社があるので、位置の関係上、神社・仏閣は関係ない。

墓地に着くと、法華宗だけ以前は墓の周りを六回あるいは七回僧侶だけ回っていたという。墓穴は一家の者の男性が掘る。棺桶を墓穴に入れるときに、膳の物も一緒に入れる。履いて行った草履は墓地においてくる。

(4) 埋葬以後

本葬の後、公民館の安納の村人約二百人で三日祭を行う。

① 着物洗い

故人が死んだときに着ていたものを安納川の海岸に近いところで洗った。これを日の当たらない所でキンチュクにかけて干す。

(5) その他

伝染病で亡くなった人は、石灰をかけて埋めた。

本蓮寺というのは元々安納にあったのであるが、軍場に移転された。そのときに一緒に石塔が五塔ほど移されたのであるが、その中に法華宗に関しては種子島で最も古いものがあるという。

(6) 墓 制

未調査

3 下石寺

伝承者 大瀬正雄(68) 宗教 法華宗

(1) 死にまつわる人々の心境

① 死の予兆

特にない。

② 魂呼びなど

魂呼びはない。

(2) 死亡の確認から納棺まで

① 死後直ちにすること

北枕にして、ツギノザに寝かせる。遺体の頭のうえには枕飯をおく。枕飯をここでは靈膳という。靈膳は、まだ誰も手を付けていないものを使う。昔は家の中の釜は使わずに、外で別火にして作っていた。他の人にオモテの間から見られないように屏風を立てておく。遺体の手は組ませておくが、足は伸ばしたままにしておく。

② 湯 灌

ツギの座は畳をはぐと竹ばりになっており、その上です。身内の男女ですが、男性はフンドシ一つに縄で纏をかける。特に順番は決まっていない。お湯は二つの釜で沸かしたのを併せて使う。

③ 通 夜

通夜の席では葬式を手伝ってもらう親族や集落の人と飲食する。

④ 納 棺

棺桶のことを下石寺ではユカンバコという。ユカンバコは集落の大工がシュミの木で作った物である。身内の男性の手で遺体は入れられる。遺体は手を合わせて足を曲げた状態にした、座棺である。以前は、土葬の時も寝棺にする人はいたという。ユカンバコにはお金十二文、米、茶の葉などを一緒に入れる。遺体には故人の最も良

い着物を着せ、頭のうえには白い布をかぶせる。ユカンバコの蓋は石で打ち付けた。

(3) 出棺から埋葬まで

三時か四時頃、縁側から出棺する。ユカンバコは家の中で靈屋に入れられる。屋敷の入り口には竹を結び合わせた門を作りそれをくぐって出る。

葬列の順序は、①旗、②僧侶(師匠)、③位牌持ち、④靈屋、⑤遺族となる。一番目の旗は、『南無妙法蓮華經』あるいは、『の靈』と書いた紅白の旗である。本数は決まっておらず、その旗を献納する人の数だけある。子供が持つと良いという。位牌は故人の最も近い人がもつ。靈屋は葬式を手伝ってくれる親族あるいは集落の人に作ってもらう。靈屋には色布をかぶせる。その布は葬式が終わった後でも捨てないで取っておく。遺族は故人に近い順に男性から並ぶ。この葬列にはメシカンメと呼ばれる団子などをもって行く役目をする人がいる。この役目は必ずムスメでなければならぬのであるが、ムスメがいなかった場合は近所のムスメを借りてきてする。

喪服は黒色で近親者は白い布を被る。

下石寺では墓地の事をハカという。ハカに行く道は決まっており、神社を避けて集落をぐるっと回って通る。墓穴(イケ)は集落の人が掘る。ハカから帰るときは近親者は履いて行った草履をハカにおいてくる。

ハカから帰って来ると身内のものはヒガかかるといって、お祓いを僧侶からしてもらう。他の者は玄關で塩で清める。

(4) 埋葬以後

忌明けの三十五日間は魚は食わずに、精進料理で済みます。

① 年忌祭

年忌祭は、一周忌、三周忌、七周忌、十三周忌、二十一週忌、三十三周忌、四十九周忌まであり、その後は先祖様になるといふ。

② その他

一年間は神社の祭りには参加しない。

死後に巫女(モノシリ)を訪ねるようなことは無い。

(5) 墓 制

未調査

4 上石寺

伝承者 石村秀芳(59)、石村吉彦(84) 宗教 法華宗

十四、五年前まで土葬であった。

(1) 死にまつわる人々の心意

① 死の予兆

鳥が鳴いたら死人が出る。

人霊を見たことがある。

② 魂呼びなど

魂呼びの伝承は聞かれない。

(2) 死亡の確認から納棺まで

① 死後直ちにすること

北枕にしてヨコザに寝かせる。ここでは枕飯のことをニゴウメシと言う。年寄りの女性が作っていた。神棚は掛け軸を外しておき、祝い物はのけておく。

② 湯 濯

身内の男性が三人位でズボン一つに縄を纏がけにした恰好で行う。ヨコザの畳を半分開けて、竹ばりの上でする。二つの鍋で湯を

沸かし、それを併せて遺体に湯をかける。残った湯は北の口から捨てる。

③ 通 夜

未調査

④ 納 棺

納棺はカミンザで二つに曲げたゴザのうえでする。遺体は手を合わせ、足を曲げてその状態で帯で縛る。手には数珠を持たせる。死者の服は年寄りの女性が作った。故人に近い人が男性女性に拘らず遺体を棺桶に入れる。棺桶には小銭十二文、茶、米など身近な物を入れる。蓋をする時は釘などは使わずに、棺桶と蓋に穴を開けて紐で結ぶ。

(3) 出棺から埋葬まで

霊屋は縁側から出す。屋敷から出るときは竹の門をくぐって出る。葬列の順序は、①旗、②僧侶(オシショウサン)、③位牌、④棺桶、⑤遺族となる。一番目の旗は子供に持たせる。棺桶は下石寺の集落の者が四人で担ぐが、そのときに故人の子供が二人持ち上げてから担ぐ。また、この葬列の中に親族の女性で小さいモロブタにゴーの団子というのを持って行くのがある。

墓に行く途中は静かである。神社は避けて通る。

墓地に着くと、ロクロウの石塔の周りを、わかるかことはしとらん”と言いながら三回廻る。埋葬するときにゴーの団子も一緒に入れる。墓には遺族が履いていった草履をおいてくる。

親族は墓から帰って来ると、僧侶に南無妙法蓮華経を唱えてもらい頭にお経の本を当ててもらってお祓いをする。他の人は門の外で塩を振り掛けて清める。

(4) 埋葬以後

① 着物洗い

葬式が終わったその日の夕方に、故人に近い女性が二人で鎌を逆手に背中にもって川に行く。川につくと「これだけください」と言っ
て故人の服を洗うのに必要な範囲だけかまで切る。服は、故人が
死んでいたときに着ていたものである。服を洗うと、絞らずにもっ
て帰る。帰るときに、後ろを振り返ってはいけない。その着物はも
って帰ってモウソウダケにかけて干す。

② 忌明け

初七日（ハツナノカ）から七十七日（ナノナノカ）までである。そ
のとき、ご飯、つゆ、おかずの精進料理をもって行く。これは女性
の役目である。また、霊屋の中のホトケといわれる、薄い板の表に
は、南無妙法蓮華經、裏には、法○院、男性の場合は、〴〵紳
士、女性の場合は、〴〵仲女と書いたものを、初七日から七十七
日まで霊屋のなかに一本ずつ入れる。

③ 年忌祭

一周忌、三年忌、十三年忌、二十三年忌、二十七年忌、四十九年
忌までする。一周忌の時にはオシシヨウサンを頼んで、オキヨウ
（お経）をあげてもらう。三年忌の時には霊屋を取って、シシヨウ
サンから貰った名前を書いた石塔を立てる。石塔の下には石（どこ
から取って来たか不明）を盛る。取った後の霊屋は山の中に捨て
る。そして、四十九年忌を過ぎるとトイアゲといって墓を捨てる。
その後は霊は神様になって氏神様としてまつられる。その日はシシ
ヨウサンを呼んで、オキヨウを上げてもらう。料理は精進料理では
なく、魚を出してもかまわない。

④ 異常死人について

水死体の葬式は同じである。
一才あるいは二才までを水子という。
まだお腹の中に子供がいて死んでしまった女性の場合は、薬人形
を作って抱かせて葬る。

5 国上、奥

伝承者 春山助直（89） 宗教 神道

(1) 死にまつわる人々の心意

① 死の予兆

特にない。

② 魂呼びなど

特にない。

(2) 死亡の確認から納棺まで

① 死後直ちにすること

ナンドにゴザを広げて北枕にして寝かせるが、枕は敷かない。手
は組ませる。頭のほうには花と枕飯を上げる。枕飯はニンゴウメシ
と言われ、鍋の中に残してはいけなさとされ、椀に大盛につぐ。ニ
ンゴウメシは外で炊いていた。

神官に死の通告に行くときには必ず二人以上で行く。

神棚は白紙を張って閉める。

② 湯 濯

ここ奥では湯濯はしない。

③ 通 夜

ツーヤと言う。親族、奥集落の人が集まるが、騒いだりせず夜遅
くになると帰る。

④ 納 棺

棺桶のことをクワンオケと言う。大きさは高さが二尺六寸で、大工が作る。遺体を棺桶に入れるときは近親の男性が二人で、裸で縄をかけた恰好とする。遺体には生前大切にしていた貴重品を抱かせる。数珠は持たせない。他に、三角の袋に入れた米を二合（ニンゴウ）、茶の葉、お金が十二文、現在では二〇〇円、特に使っていたものを入れる。

遺体にはケサという襟の無い白い布でできたものを着せる。年寄りのばあさんが作る。これを着ないと先の世に通してもらえないと言う。これに、白い扇子を持たせる。

(3) 出棺から納棺まで

三時から四時頃に出棺する。神官（ホイドン）が祝詞を上げて縁から外に出す。出棺の前に別れの膳（ご飯、つゆ、酔の物等）を食べる。屋敷から出るときはカラタケの門をくぐる。葬列の順序は、①タイマツ、②旗、③ホイドン、④位牌、⑤棺（クァン）、⑥遺族と続く。旗は白、赤、紫色で、奉納する人の名前が書いてある。本数は決まっていない。霊屋のまわりには、赤、白、紫色の布を巻く。遺族の服装は男性は黒の袴、女性はヤクエーテという着物と頭に白い布を被る。それに草履を履いていく。その草履には白い紙を鼻緒に練り込んでおく。また、頭にご飯だけ載せて歩くメシカンメというのがある。このメシカンメは年を取ったヨメがする。

墓地に着くまで休んではいけない。

墓地に着くと、墓地の隅にあるロクロウという石塔の周りを近親者の人だけ三回廻る。

墓穴に棺桶を入れるときホイドンが棺桶に祝詞を上げてから入れる。そのとき白い紙切れを投げ込む。土をかけるときは、さよなら

と言う。帰るときに履いて行った草履を墓の入り口に置く。

帰って来てから、近親者はホイドンにカラシビと呼ばれる椎の木の枝にシビをつけたもので三回被ってもらい、厄落としをする。その日は墓掘りの人などにごちそうをする。

(4) 埋葬以後

① 死人のアライ

ケナイウチ（身内の人）の女性が一人で故人の衣服を洗いに行く。そのとき後ろを鎌で切りながら、人に見られないようにして行く。後ろを見てもいけない。洗ったものは胸の開いた方を北向きにして夜、人の見えないところに干す。普段「夜干しはするな」と言われる。

霊屋の中には茶や花などを入れておき、次の日に行ってきたいかに並べて供え物をする。一週間は毎日朝夕親戚中で行って煮たものなどを上げるといふ。

② 忌明け

初七日、二十七日、三十七日、初速夜（三十日目）〜五十日目まである。この日にはホイドンを呼んで祝詞を上げてもらう。

③ 年忌祭

一周忌、三周忌、五周忌、十周忌、十五周忌、二十周忌、二十五周忌、五十周忌までする。五十周忌には、トイアゲ祭を行い、墓を倒し、位牌を焼いて始末する。その後霊は先祖様になり神様の一番上の位になるという。

④ 異常死人について

腸チフスで死んだ人は八尺程深く掘って埋める。

二、考 察

1 死にまつわる人々の心意

(1) 死の予兆

数としてはあまり多くは聞けなかったのであるが、やはり烏あるいは人霊といったものがあつた。その中で、正月明けに女性が死ぬとその集落に悪いことが起こる。という伝承があつたが、正・五・九月に死者が出ると良くないとする所は多いようである。ここは死の穢（黒不浄）によって生じる共同体や家の混乱を防ぐためであると見られる。

(2) 魂呼び

今回の調査では残念ながら聞くことができなかったので、考察は控える。

2 死亡の確認から納棺まで

(1) 死後直ちに行われること

死体を置く場所というのはヨコザ、ツギノザと決まっているようだ。納戸の重要性は坪内洋文も指摘しているが、納戸というのは自己の帰属や役割が移行する中間的な家庭にあるときの空間である。

ここで言えば、死の現世から他界へというような具合である。納戸はある特殊な空間をもっていることが伺える。

枕飯を別の鍋で炊いたり外で作ったりする、と言うのもおもしろい。忌の火に食ひ交じる事を恐れたためであろう。誰も手を付けていないものを出す、あるいは鍋に残らないように椀一杯につぐというのも同様な事が言える。

庄司浦の畳をすきかえるというのには非日常性が伺える。

屏風を立てて外の人には見えないようにするという伝承があるが、本土には蚊帳を張る習俗がある。これは死霊の蘇生を防ぐためだといわれるが、蚊帳にしても屏風にしても近年のことであり、はっきりしたことは分からない。

死亡の通知には必ず二人以上で行く。奥ではケガレが無いようにしている。少しでもケガレを分散させようということであろうか。墓穴（イケ）を掘るときは五人から七人であるというが、このとき「ハを合わせる」といって偶数の人数でさせる。これは、湯灌をするときや霊屋を持ち上げるときにも二人ですが、偶数という数字には何か異常性があるようである。

(2) 湯 灌

だいたい、納戸の畳をはぐと竹ばりになっており、裸で繩襪をした男性が二人ないし三人です。二つの鍋で沸かしたお湯を併せて使う。残りのお湯は家の北口に捨てる、というものである。裸で繩襪をするというのは全国的に見られることで、死体に残っているかもしれない靈魂が移って来ることを恐れているからであろうと井之口は指摘している。残ったお湯を家の北口に捨てるのは、ケガレたお湯を太陽の下に出さないためであろう。

(3) 通 夜

ツヤあるいはツヤと言う。通夜にはその集落や親族が集まって飲食をするのであるが遅くまでは残らない。赤田光男は通夜は蘇生を願う儀礼でこの風習はもがりや喪屋生活の名残であったが、次第に遺体に邪霊が入らないように見守る意味になり、特に仏教が関与しだしてからは通夜は蘇生よりも鎮魂に重点がおかれるようになってきたとしている。

(4) 納 棺

棺桶のことを大体クワンオケというが、下石寺ではユカンバコと言う。その集落の大工が作る。遺体を棺桶に入れるのは身内のものとするのであるが、奥では身内の男性が二人で裸で縄纏をかけた恰好ですると言う。これは湯灌のところでも示したとおり死体に残っているかもしれない靈魂が移って来ることを恐れているからである。死体を帯で縛るといふ事例は一つしか聞かれなかったが、これは死霊に対する恐怖の現れであるという考えがあるが、ここでは帯で縛ることによって棺桶に入れ易くするという解釈のほうが当てはまると思う。

死装束は故人の最も良い衣装を着せるというものと、上石寺あるいは奥のケサのように老人の女性が作るものがある。死装束の背中の上の方にあてものをするという伝承があるが、これは赤ん坊の産着にも見られることで、そのあてものは靈魂の出入りを妨げているものであると見られる。奥のケサを着ていないと先の世に通してもらえないと言うのはおもしろい伝承である。法華宗は手に数珠、神道は扇子を持たせる。

棺桶に蓋をして釘を打つときに金づちは使わずに石で打ち付けるという。金づちを使わないのは金物を嫌うからであるという。では、金物を嫌うのは誰か。ここでは、棺桶の中に入っているものと見るのが妥当であろう。ということとは、棺桶の中に入っているものはこの時点では死霊とは見ていないということである。

3 出棺から埋葬まで

出棺までの儀礼には蘇生儀礼が多く見られるのに対して、葬列に見られる儀礼には殆どに絶縁儀礼がみられる。別れの膳という食

別れの儀式があり、また出棺の際に竹の門をくぐるというのもそうである。上石寺では竹の門の理由を『三途の川を渡ってもう帰って来るな』という意味であるとしている。このような竹の仮門を作り、この世とあの世を分けているのである。

奥では、葬列は休まずにさっさと歩くという。途中霊屋を担ぐ人を交代させるがそのとき、霊屋を地面に降ろしてはいけないという。それは、霊がそこに残ってしまうからだといわれている。ここでは死霊の存在ということを認めているのである。

葬列の時、神社は避けて通るがこれは死の穢から神社を遠ざけているのである。家の中の神棚も隠したり、ひっくりかえしたりして死の穢から遠ざけている。近親者が頭に白い布を被って葬列に参加しているのも太陽をそれから遠ざけているのである。その白い布を庄司浦では「カサをさす」と言っていたがカサをさして守られるのは太陽のほうなのである。

メシカンメといって頭に膳の物を持って墓地に行く役目の女性がいるが、これは集落によって違うのだが年を取ったヨメがするのが古い形態ではないか。これをどうしてヨメがするのか女性の靈力によるものなのか分らないが、葬式と女性の関係を解く何かになるのではないかと思うのである。

墓地に着くとロクロウという石塔の周りをまわるが、上石寺ではそのときに「わるかことはしとらん」と言われてまわる。これは石塔に言っているのであって、つまりこの石塔には先祖の霊がいるとみている。

墓地から帰るとき、草履をおいて来る。こうすることによって、死霊や死の穢が寄り付いて来ないようにしている。しかし、おもしろいのはこの草履を履いて漁に行くと言ったマンが良いと言った大漁にな

るということである。これは別の事例であるが、葬式旗もフンドシなどにしてはくと良いことがあるというのがある。これは異界の物の力の為であるとみられる。

着物洗いであるが、その伝承は先に上げたとおりである。鎌で切りながら歩いたり後ろをみてはいけない等というのは死の穢の恐怖の現れである。この伝承を聞いていると着物を洗うことに重点が置かれているようであるが、実はこれは願もどしであるという。着物洗いの伝承は全国的にみられるものであるが、井之口はこの伝承について、よれものを洗濯することにさまざまな合理解釈が加わったものでなくて、着物を陰干しにして水を掛けることが真意を失つてのちに、洗濯という実務に定着しておもかけを留めているのである。としている。つまり、願もどしという概念より前からあったものとしている。靈魂が衣服に宿るという考え方があつたが、着物に水を掛けることにより靈魂を更新することが本来の目的だったのであろうということである。また、この伝承は成仏儀礼の一つでもある。

4 埋葬以後

忌明けは法華宗は初七日、二十七日、三十七日、四十九日とあり、一カ月目にはターヤがある。神道は初七日、二十七日、三十七日、五十日までで、三十日目にターヤがある。

年忌祭は法華宗は四十九年忌までやるが、その間の年忌祭は各集落毎に違い、一定していない。神道は一周忌、三周忌、五周忌、十周忌、十五周忌、二十周忌、二十五周忌、五十周忌までである。四十九年忌あるいは五十周忌が終わるとトイアゲ祭を行い、墓を倒し、位牌を焼いて捨てる。その霊は先祖様になると言われている。

忌明けあるいは年忌は追善儀礼としてとらえられる。忌明けは死靈をあゝの世に送り込むことが中心になっているのに対して、年忌は霊の祖霊化という事が中心になっている傾向にある。

5 異常死人について

ここでは事例をまとめて記す。

伝染病にかかって亡くなった人は、石灰をかけてから埋めた。

(安納)

水死体の葬儀は同じである。

妊産婦の場合は、薬人形を抱かせて寝かせた。(上石寺)

腸チフスで死んだ人は八尺程深く掘った。(奥)

6 墓制

墓制の調査は資料が少ないのでひかえる。

まとめ

種子島の葬制について、二、三気付いた点を述べるとまず、非常に本土的である。本土の葬制の古い形態が残っており、周圍論的に述べても当てはまる部分が多いのではないかと思う。

神道と法華宗ではたいして差は認められない。種子島の歴史的背景から、これは領けるのである。

葬列の儀礼を調べて、死霊あるいは死の穢というものにかなり敏感なものがあるというように感じた。

今回は資料が思うように集まらなかったことと、深く聞けなかつたために、種子島の葬墓制についての外観と、若干の考察に止まっ

てしまったが、この調査に協力して下さい下さった皆様方に深く感謝を申し上げます。

参考文献

- ・坪井洋文著『民俗再考』(S 61 日本エディタースクール出版部)
・井之口章次著『日本の葬式』(一九八七 叢書)
・赤田光男著『祖霊信仰と他界観』(一九八七 人文書院)
・『九州の葬送・墓制』(S 54 明玄書房)
・『沖繩・奄美の葬送・墓制』(S 54 明玄書房)

伝承者

(庄司浦)

下園 イワ(66才)

下園 ヨシエ(T 7・1・18生、71才)

(安納)

日高 実秋(T 15・11・15生、63才)

(下石寺)

大瀬 正雄(M 34・9・15生、88才)

(上石寺)

石村 秀芳(S 4・9・25生、59才)

石村 吉彦(M 2・2・2生、84才)

(奥)

春山 助直(M 34・8・11生、89才)

春山 キヨ(60才)

エビス・葬列・門松

松村利規

一、はじめに

大隅半島の南方に浮かぶ島、種子島は年間平均気温が鹿児島市よりも約三度高いという。実際、今回の実習中は年の暮れとは思えないような暖かい日々だった。この気温は、種子島に住む人々の生活そのものに大きな影響を及ぼしていると思われる。そしてもう一点、島の最高地点が標高三〇〇呎にも満たない地形も、人々の生業から信仰形態に至るまでの民俗に直結してきたことであろう。また、このような特徴的な自然環境にも増して、この島の歩んできた歴史そのものが、種子島というひとつの日本民俗の宝庫を育んできたのであろう。この島の民俗を調査することによって、日本民俗の総合的理解に役立てたい。

二、見学の感想

この種子島実習は、非常に短時間で多くのものを見ることのできた反面、時間の短さを痛切に感じた日々であった。その中で特に印象に残った見学を幾つか挙げ、それについての感想を述べることによって見学の感想にしたいと思う。

1 種子島開発総合センター

ここで印象に残っているのは一枚のパネルである。これは、漂流瓶の調査に基づく海流図で、種子島から一旦北上した黒潮が関東沖で反転して琉球列島にまで戻ってゆくことを示していた。この図は今まで漠然と考えていた、黒潮は南から北へと向かって流れるのだという固定した概念を打ち砕くものであったと共に、より広い視野を求めているもののような気がした。

2 中種子町立歴史民俗資料館

強烈な印象があるのは、ここで見た甕棺が、基本構造はおろか殆どの部分が弥生時代の甕棺とそっくりであることだった。弥生そのままの甕棺が、つい最近まで実際に使用されていたという事実に直面したとき、文化の残存性にと、古代人の高い文化水準について、いろいろな思いが心に渦巻いて、しばらくはじっと甕棺を見ていた。

3 宇宙センター

古代より綿綿と続いてきた文化を物語る物の間を通り過ぎてきた者にとつて、この場所の科学技術は驚異の一言である。ところが、科学という信仰に浸りきった現代という時代を同時代的に観察し、考察してゆくことの必然性を、ここにしていると感ずることができるような気がするところでもある。

4 エビス

海の方こうに屋久島を望む海岸線の岩の上に、海から拾い上げてきた石を祀り、豊漁を祈る。海岸ぞいの小さな船だまりごとに、こ

のエビスが続く。種子島の民俗というものの持つ意味について考えることを迫ってくるような光景だった。

海岸近くの山の上に海を望む恰好で建つエビス祠。塩釜神社裏のエビスの位置から海を見ていると、不思議な気分になってくる。人々は豊漁の祈願に加え、この海の持つ不思議な力を感じとり、それに惹かれていたのではと思えてくる。

5 まとめに

幾つかのことを挙げてみたが、全体を通して、漠然とした感想を持つ、あるいは漠然とした興味を抱く見学が多かったように思える。直感的に感じたこれらの感想が持つ雰囲気、匂い、そういったものを今後に生かしていくことが、今の最善の策であると考えるのであるが、果たして、匂いをどのように表現していけばよいのか、それが今後の課題になってこよう。いずれにせよ、初めての練習で感じとったことは人間の文化の面白さであったにちがいない。

三、調査内容

1 メインテーマ

浜之町と田之脇におけるエビスについて 今回の実習では、種子島各地のエビスを見る機会が多かった。そこで、その中から西之表市住吉浜之町のエビスと、西之表市田之脇のエビスについて述べていきたい。

まず、浜之町のエビスについてであるが、伝承者（話者）は浦添孫七氏（五十五歳）は浜之町漁業協同組合の役員である。浜之町の調査においては、トビウオとの関連を中心に聞き書きしている。

浜之町では、トビウオ漁を五、六年前までおこなっていたというが、エビスは漁の神様として祀るほかに、氏神としても祀っている。しかし、エビスが漁の神様としての性格をはっきりと表している事例に、馬毛島のエビスがある。トビウオの漁場は馬毛島周辺である。そこで浜之町の人々は馬毛島にもエビスを祀ったのである。この行為は浜之町のみならず、周囲の集落も集落単位で馬毛島にエビスを祀っていた。馬毛島近海で漁をするたびに、供え物をしてエビスを拜んだ。そしてトビウオ漁をおこない、時には船が沈むほどのトビウオを捕ったのである。

漁が終わると、船主はトビウオを船霊様に供える。供え方は、まずトビウオの首を折る。次に、トビウオを二匹ずつ合わせたものにくくる。そしてそれを二組、船の機関室に供えるといったふうである。いったん船霊様に供えられたトビウオは、その後船主が持ち帰ることになっている。

捕れたトビウオは集落のエビスにも供えられる。ただし、このトビウオを持ち帰るのはベンザシである。

さて、ベンザシであるが、浜之町のベンザシは漁業の世話役としての性格と共に、エビス（氏神としても良いかもしれない）を祀る祭祀者としての性格も併せもつ。任期は一年で、漁業組合員が交代で受け持つ。十月三十一日の交代の際には人に逢ってはならず、新任者は早朝などの暗いときを選んで、また、進路の先方に人をおいて人払いしながら交代に臨むという。交代のときに前任者から新任者へと渡されるもの一つに「オマンダラサマ」がある。これは一幅の掛け軸で、日典上人直筆の書であると信じられている。これは年に一回、元日だけ開かれる。また、数年前、この「オマンダラサマ」を鑑定に出そうという話を持ち上がったが、組合員の反対が

あつて見送られた。

ところで、先にトビウオをエビスに供えたと述べたが、そのときにもう一ヶ所、必ずトビウオを供える場所があるという。そこは、住吉神社の鳥居から一〇〇坪ほど北、国道五八号線沿いにある大きなテツであるのだが、その理由、由来は全く不明であるということである。今回は実際に行ってみることはできなかったが、この事例はエビスを考える上で興味ある事実を示してくれる可能性を秘めているといえそうである。

浜之町のエビスは大晦日に祭りがあるという。また六月灯もおこなわれるということで、氏神との関係で面白い。

次に田之脇のエビスについて述べてみたいと思う。伝承者（話者）は、小川登氏（五十七歳）である。

田之脇のエビスは公民館のそばにある浜松神社に祀つてある。しかし田之脇には、もともと上山と下山と呼ばれる二つの神社があったという。このうち上山は今の浜松神社であり、古くから集落の氏神の役割を果たしてきており、下山はエビス神の役割を果たしてきた。立地的にも、上山は海岸ぞいではあるけれども、本殿が拝殿の裏山の中腹、高さ約一〇坪の斜面にへばりつくように建っている。いっぽう下山は、上山の南、海岸と集落の間の防風林のなかにある。しかし、現在は既に集落から下山へと通じる道は藪におおわれ、無くなつてしまつていゝという。このことから分かるように、現時点において集落のエビス神の機能は上山に移行し、上山が氏神とエビスの両方の機能を集中して持つている。

田之脇のエビスには、その縁起由来、その他の諸事を記した巻物があり、それを神主が保管しているという。今回は実際にその巻物を見ることはできなかった。

上山の拝殿は八畳程度の広さがあり、正面の棚には供え物と共に大漁祈願の旗が、そしてその上の壁には「大漁記念」と書かれた船給馬が奉納されている。棚の向こう側に開いた窓からは本殿へと上つてゆく細い階段が見えている。

本殿の裏へ回つて階段を上つてゆくと、そこには交叉した旗上部に丸に田の字の紋のある祠が建っている。その中には、更に三つの小さな祠が配置してあり、向かつて左側の祠には長径一〇呎、短径八呎の卵型の石が置いてある。中央の祠には長径五呎、短径三呎の石が二個並べて置いてある。右側の祠には小豆大の小石が一個だけ置いてあつた。左側の祠の後方には高さ約五〇呎、幅約一八呎の柱状石が、右側の祠の後方には高さ約三五呎、幅約一五呎の柱状石が置いてある。またこれらすべての石の下には幾らかの布、または綿が敷いてあり、他の集落よりも神体の取り扱いが丁寧であるようである。

実際にエビスの神体のことを聞いてみると、なかなかはっきりとは言ってもらえなかつた。「神体が何かとは言えないけれども、それは綺麗なものだ」という答えが返ってくるばかりであつた。「よその集落では海から拾ってきた石である場合が多いが」といったことを言ってみると「まあそのようなものだけでも、我々は年に一回しか本殿を開くことはない」ということであつた。

田之脇の漁業の中心はカマス漁である。浜之町のトビウオに相当するものが田之脇のカマスである。いきおい、田之脇ではエビスへの供え物としてカマスをを用いることが多い。供え物をするのは年に二回、一月十五日の「エビス誕生」と旧暦九月一日の頃に行われる「カケナイオ」である。カマスは二匹を腹合わせで一對にして、それを葉で作つた紐で縛りあわせて用いるという。二匹を合わせて一

対にするとところは先の浜之町の事例と同じであるが、田之脇の場合、浜之町でみられた魚の首を折るといふ風は見られない。

浜松神社は神主と呼ばれる役の者が、これを祀る。神主は集落の人々が交代制で任じられている。神主はベンザシとは異なった職であり、神主は祀り事の執行、ベンザシは漁業の世話役といった役割分担が、ある程度明確になっている。これは浜之町とは対照的であるといえる。

これらの人々が中心となっておこなわれるエビスの祭りは、年に三回一月二日、一月十五日、旧暦九月一日におこなわれる。一月二日は船祝いの日であるが、船祝いがおこなわれる前に「袋祝い」という行事がおこなわれる。これがエビスの祭りのひとつなのであるが、言わば豊漁祈願の祭りである。一月二日の朝、集落の人々は浜松神社の拝殿へと集まってくる。そしてベンザシを代表としてエビスにその年の豊漁を祈願し、いったん家に帰り、再び船祝いをおこなうのである。一月十五日の「エビス誕生」は文字通りエビスの誕生を祝って祭りをするのである。

そして、旧暦九月一日の「カケンイオ」である。これは漁期の終わりにあたって、エビスにその年の漁の感謝をする日である。そのため、年によってはカマスの漁期が延びることもあって、必ず九月一日に「カケンイオ」がおこなわれるとは限らない。

2 サブテーマ

田之脇の葬列 今回の実習においてもっとも幸運な偶然は、田之脇で葬列を実際に見ることができたことである。田之脇の公民館に近い浜辺で休息をしていると、公民館から黒い喪服を着た人々が次々に出てくるのに気づいた。

葬列は、黒く文字の書いてある白い布を、竹から掛け軸状に垂らしたものを持つ五人の人々が先頭を歩き、次に神官、親族、霊屋、更にその他の人々が続くという順番であった。

先頭で幡を持つ人々はみな男性で、一番前の人のみ喪服を着ていた。また、持つ幡の本数は、前から順に一本、二本、三本、二本、三本であった。

この葬儀は神式であったので、次に神官が続いていたが、仏式の場合はこの位置に僧侶がくるということである。田之脇では一般に仏式（法華宗）でおこなわれる事が多いという。

親族は、頭に白い布を被り、小さな藁ぞうりを履いているのが目立った特徴であって、印象深い。

霊屋は基本的に四人の人によって担がれているが、その脇には一人ずつ補助する人がいた。担ぐ四人は二人ずつ肩を組み、二本の棒で担いでいる。棒には紐が結び付けられており、その紐の先端はそれぞれ霊屋の足に繋がれている。また霊屋は、扉を前にして運ばれている。

公民館から数百メートル離れたところにある墓地に葬列が着くと、神主によって神事がおこなわれる。霊屋を取り囲んで親族が、そして他の人々が墓地の至る所に座り、墓の間が人で埋まる。幾つかの神事を終えて、親族は霊屋に手を合わせ帰ってゆく。帰るときに、道と墓地の境目のところで親族は履いていたぞうりを脱ぎ、用意していた別の履物に履き替えて帰っていった。

霊屋の上には神専用の神が、横にはむしろが無造作に放り出していた。

中目と田之脇のカドマツ 西之表市国上中目と西之表市田之脇で、門松と注連縄のことについて聞いた。まず、中目について述べ

る。伝承者（話者）は高石友好氏である。

門松はモウソウチク、シイ（マテ）、マツを一本ずつ合わせたものの下部を、マテの割れ木で巻いて縛る。このときこれらの木は自分の山から採ってきたものを枝の付いたままで使用する。このうち一番高いものはモウソウチクで、次にシイ、次いでマツである。

これらの木の下には、モロバ、ユズリハ、シダを敷き、周りに砂を撒く。このときに撒く砂は小浜おびなと呼ばれる海岸から採ってくるという。これは何のために撒くのかと聞いたところ、雪のようにするのではないかと言われていたが、これは清めの砂であると考えられる。また、カドマツ自体は何の意味があるのかと聞いたところ、悪魔を中に入れないためにあるのだと言われていた。

注連縄は何本垂れをもっているかと聞いたところ、高石氏宅では七本編みの垂れを五本垂らすと言われていたが、それぞれの家で異なるらしい。しかし必ず七・五・三の組み合わせで編むということであった。

注連縄の中心にはモロバ、ユズリハ、ダイダイ、米、炭をつける。このうち炭を付ける意味を聞いたところ、暖かい正月が過ぎせるようにであると言われていた。

門松と注連縄は十二月三十日、もしくは三十一日に立てるということであったけれども、実際は三十一日に立てることが多いようである。このとき注目したいことは、門松、注連縄のような縁起ものは必ず午前中に立てて、午後には扱ってはいけないと言われていることである。

一方、注連縄は、三日に一度外し、六日に再び張り、七日に外し、最終的には二十日に外してしまうということであった。

次に田之脇に移る。伝承者（話者）は小川登氏である。

門松は、タケ（以前はカラタケを使用していたが現在はコサンダケ）、マテ、マツをマテの割れ木で巻いたもので、中目との相違点は、ユズリハとモロバをこれらの木と一緒にマテの割れ木で巻き込んで、下に敷いていないということである。砂はすぐそばの浜からもって来たものを撒く。また門松のことをカドギともいうが、別にカドギというものは無いということであった。

注連縄は全て七・五・三の法則で作るということで、実際に見たものは、垂れが片側に三本編みのもの三つ、五本編みのもの七つであった。

注連縄を張るのは三十日以降で、特に決まっていないという。また外すのは七日以降である。夜だけ注連縄を張るものはいないかときくと、そのようなものもいるということであったので、興味深い。

3 テーマについての考察

まずエビスの神体について考えてみたい。今回は、田之脇のエビスの神体についてと、庄司浦のエビスの神体についての計測結果を示したが、そこに見られる石の大きさを問題にしたい。今回訪れた集落の中でも、多くのところで、神体の石は海に潜って一番最初に手に触れた石であるということが言われてきた。ところがその場合、田之脇に於いて見られたような小豆大の石がはたして（もし本当に最初に手に触れたとしても）潜った人の手によって持ち上げられるであろうか。まさか、小指の先程にもならぬような石をもって上がってくるようなことをするはずもあるまい。そこには、人為的な力の作用が強く感じられてくる。マナの力の象徴としての海石が、純粹な形としてではなく、その変化した形として、縁起を担ぐ

対象といった感じを受ける。集合体として特別の力を持ったエビスとして考えられないだろうか。

次にエビスと氏神について考えてみたい。浜之町においても田之脇においても、エビスと氏神が同じ神社に祀られていることは興味深い。これは、一つの神社（神）が氏神とエビスの二つの機能を併せ持つのではなく、田之脇に見られるように、もともと別々の神社（神）の持っていた機能が時間の経過にともなって一か所に集中したものであり、二つの機能が並行して一つの区域に存在し、状況に応じてどちらかの機能を選び出すというシステムであると考ええる。ただ、このときに氏神区域へのエビスの移入という構図のみが成り立つのか、それともエビス区域への氏神の移入という逆の構図も成り立つのかということは分からないが、浜之町、田之脇の事例を見るかぎり、氏神区域へのエビスの移入という形が一般的であるように思われる。しかし、どちらにせよ氏神とエビスの関連は非常に興味深い問題である。またこのことは信仰形態の変遷を考えるうえでも重要であろう。

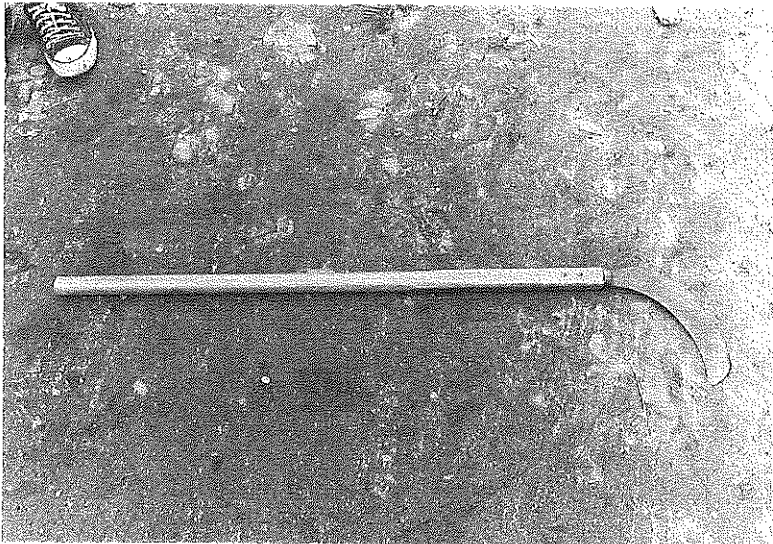
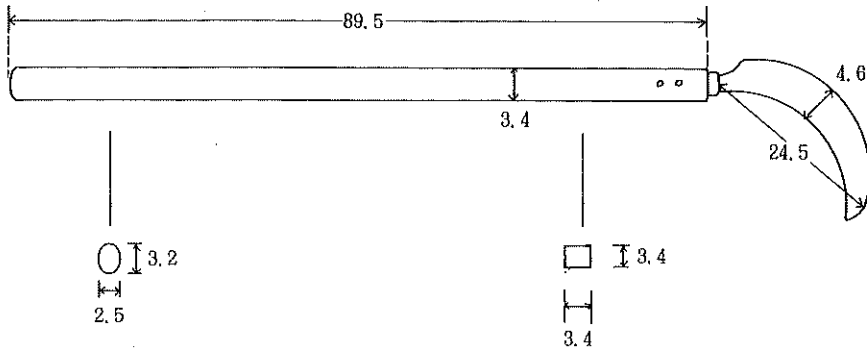
四、全体のまとめとして

今回の実習を終えて、いろいろな感想を持ったが、ここでは、これから先の調査において重要であると思われることを、肝に銘じるつもりで記しておく。

先の考察において、エビスの神体を考える上で、数値によるデータが非常に有効な資料となっている。実際にフィールドワークをおこなっているときには、余りに細かく、多すぎるように思える数値の群れも、後にデータをまとめるときには、余りにも少ない数字の

集合にすぎない。資料としての情報は、できうるかぎりの繊細さをもって収集してゆく必要があるといえよう。細かなデータが、考察を進めてゆく上で非常に重要な意味を持つてくることも考えおかねばならない。そういう意味からも、今回の種子島実習で、データの意味というものを考える機会が持てたということ、その意義は非常に大きいものであると思う。

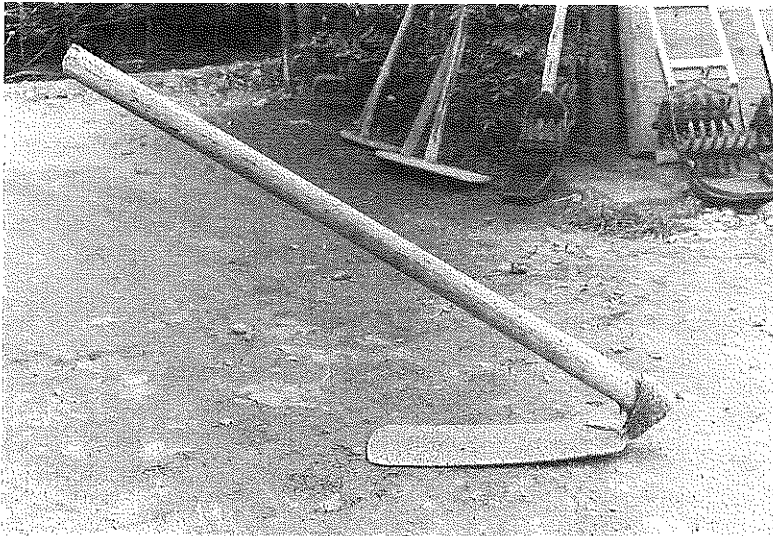
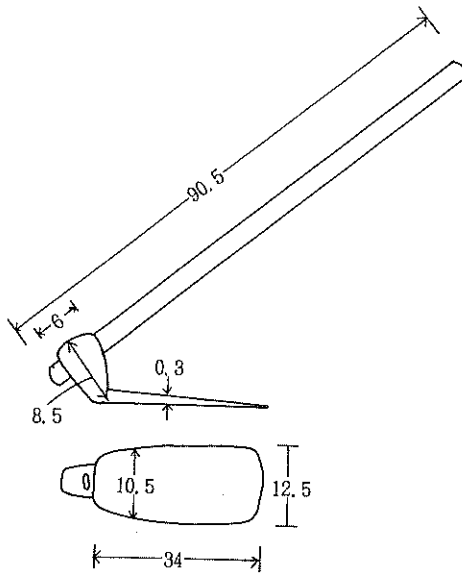
ナタガマ（西之表市現和下之町）



ナタガマ（西之表市現和下之町）

使用地等の条件によって柄の長さや刃の形態が微妙に異なっていると思うので、その分布等を調べても面白いと思う。草刈り，畑，園地の管理に使う。

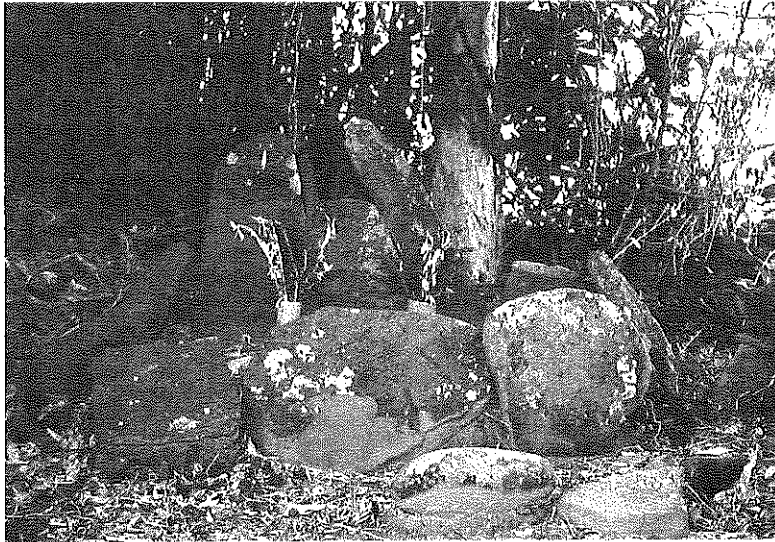
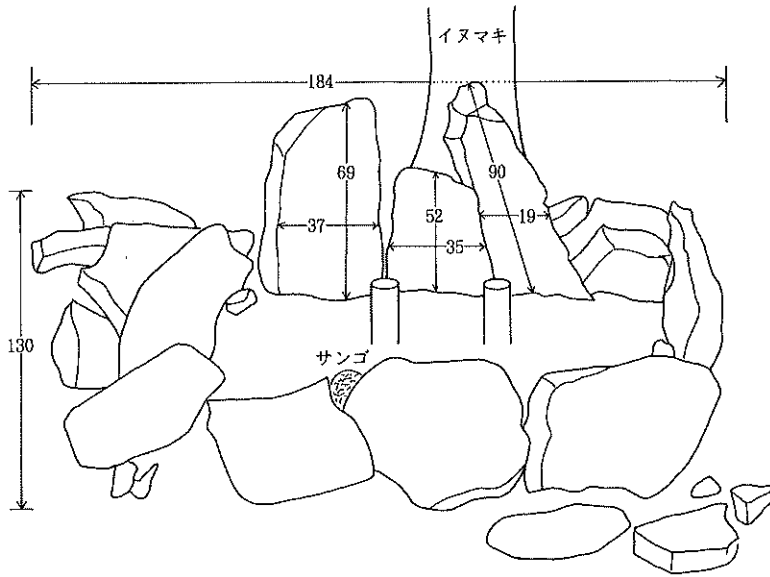
タヒラキグツ（西之表市現和）



タヒラキグツ（西之表市現和）

「タヒラキグツ」の他にも「ヤマグツ」、「カイコングツ」等、多くの種類のクツがあり、興味深かった。かための土地を拓くのに使う。

石 塔（中種子町納官竹之川）



竹之川の石塔

石塔の多い種子島の中にあつて最も印象深かつた石塔。毎年盆の16日に拝む。自然石をあつめて祖霊塔としている点、石の配置に興味深いものがある。サンゴが1個置いてあつたのも印象的だつた。

墓の研究

竹野 功

一、序

「墓」とは何をさすものであろうか。ほとんどの人にとって、その認識、識別は容易であって、その定義など考えるまでもないであろう。しかし、墓（もちろんそのみに限らないが）を民俗として、調査・研究対象としてとらえようとすると、その概念を規定せずにおくわけにはいくまい。では、「墓」を如何に定義するか？ 深く追求すれば種々に解せられるところではあるが、ここではそのような深い考察は必要としない。そこで「墓」は死者の遺骸または遺骨を埋葬した（あるいはそのような遺骸や遺骨を埋葬しない）所へ石塔その他の標識を置き、故人の霊を何がしかの願いをもって祀るようなものである（註1）とすればここでは充分であろう。しかし、一つ注意すべきことは、納骨堂はその定義に含まれるか、という点である。多くの人々の意識下では納骨堂は墓として認識されているが、それが明らかに建築物であり、また時には中人が立つて歩ける程の建物であることを考えると、安易に先の定義に含むことはできないように思う。この問題についてはより多くの事例と、いまま少しの時間が必要であるように思われる。もっとも、それでは本稿は先に進まないの、一応納骨堂は墓であると考えて論を進めることにする。

さて、今から今回調査することのできた幾つかの集落の墓制について述べていくわけだが、その前に種子島の墓制について全体的な概観を把握しておきたい（註2）。種子島では墓地はハカあるいはハカショと呼ばれ、納骨堂の流行以前は一集落に一ヶ所、または二、三ヶ所に集められた共同墓地がほとんどであった。数年前までは土葬が残る集落も多かったが、現在ではほとんど火葬にされる。霊屋は法華宗では平入り、神道はツマ入りとされる。また墓地内の霊屋の周囲にはカル石、あるいはガル石と呼ばれる一〇センチ程度の大きさのサンゴ石が多くみられる。墓石は古くに建てられたものはほとんど自然石や山川石だが、比較的新しいものになると、急速に御影石が多くなってくる。納骨堂についてはほぼ例外なく御影石が用いられるのは言うまでもない。



サンゴ石が置かれただけの墓

さて、種子島の墓に付随する習俗のうち、特筆すべきはトリアゲと埋葬地（埋め墓）以外の所にたてられた石塔である。トリアゲは葬式から四十九日あるいは五十日目の忌明けをさす言葉である。が、それよりもトリアゲと混同されて使われることもある。四十九年（五十年）目の改葬の習俗が興味深い。ここでは前者のトリアゲと区別するためトリアゲの語を用いる。トリアゲマツリは多く、

四十九年目に行われ、埋葬してある遺骨を掘り出し、オミキをかけ、脇に小さく寄せる改葬である。テーアゲした後は墓石は倒しその場に置いておくか、墓地内の片隅に置く。そしてテーアゲした後の死者の霊を祀るのが、先にふれた埋葬地以外に立つ石塔である。

それは墓地内であったり、墓地から離れた所であったりするが、数個の自然石を立てて、そのそれぞれに、一つあるいは複数の一族の先祖の霊を祀る、という点で全て共通している。つまり詣り墓ではあるが、即両墓制であるとはいえない。完全な両墓制の墓も、下野敏見氏により報告されている(註3)が、それは種子島においては非常に特殊な例である。

二、各集落の墓地の特色

1 現和本村

現和本村の墓地は近年になって増加しつつある共同納骨堂の典型的なものである。昔は集落内に四ヶ所の墓地があったが、一九八四年に一ヶ所に共同の納骨堂を建造した。この場所を選んだのは、単に広かったから、とのことである。納骨堂に遺骨を納める際、古い墓を全て掘り返して集めたが、自分からみて三代上(祖父父母)まではウエサンダアと呼び、別々の甕に入れ、それより上のヨングア以上の骨は一つにまとめて納めた。これはウエサンダアまでの人は自分に関わってくるからだそうである。同様にシタサンダアまでには自分が関わっていく。

昔から葬列の先頭には旗が立ち、人々はゾウリをフンデ(履いで)行ったと言い、現在でもその習俗は残っている。ただし、旗は二本と決まっており、ゾウリをフンデ行くのも故人の家族の者だけ

である。また、納骨堂の周囲はコンクリートで固められている為、旗を立てておくわけにもいかず、早々に持ち帰るようである。

2 現和田之脇

田之脇は火葬になったのも五年程前からであり、墓地も納骨堂はみられず古い形態の墓地が残っている。昔は葬式のことをソウレイ、墓地のことをハカシヨと呼んだ。墓地は一ヶ所に集まった共同墓地であり、そこは官有地である。しかし墓地の面積が限られている為、年々増加する一方の墓に対応できないようである。何度か拡張した跡があり、元々はあった一族ごとの区画も、今やはっきりとはわからない状況である。

納骨堂はないので、葬列などに関してもほぼ普通通りと考えてよい。ただ、野辺の送りの先頭に立つ旗に十年程前から新しく加わった習俗がある。この集落の老人は六十才ぐらいになると集落の老人会に入るの、そういった人が亡くなると老人会からの旗が野辺の送りの一番先頭に立つというのである。それは一本だけであるが、幅が五〇センチぐらいのもので他の旗に比べると一回り大きい。また持つのは老人会に入っている老人だが、旗竿は若い者が山から取ってくる。霊屋は現在でも造るが、火葬にするようになってからは霊屋の中に遺骨を入れて野辺の送り出すようになっていく。また、霊屋を造るのに大工に頼まず葬儀屋から買う人もいるようである。ゾウリをフンデ行くのは田之脇でも同じである。

忌明けは、特に呼称を聞くことはできなかったが、四十九日目だということである。それまでは忌中で、家族にはヒがかかっているから、神社や寺などに参ることはできない。四十九日が過ぎると墓地の旗などを焼き捨てる。一週間目、三週間目にはマツリと呼ぶ供

養をする。年忌マツリは一、三、七、二十三年目に行う。そして五十年目にテアゲマツリをして墓石を倒し、位牌などを焼き捨てる。なお、墓石は普通三年目くらいに建てるが早いときは一年目に建てることもあるという。

最後に、ここでは墓地内に数個の自然石を立てた石塔群がみられ、その意味を尋ねたところ、無縁者の墓ではないかとのことであった。正確な意味は伝承されておらず、またそれは現在の集落民にとっては必要ではないということだろう。

3 現和武部

武部の墓地は、わずかに一、二の納骨堂がみられるが、大部分は古い型の墓である。墓地はハカあるいはハカシヨと呼ばれ、ただの「ハカ」と「トバタノハカ」の二ヶ所の共同墓地である(註4)。ハカは元は防風林であったといい、実際、今でもその面影を残すかのような樹々をみることができる。そして、その中でも特に立派な一本の巨木の下に、今までたびたびふれてきたような石塔が立っている。ロクロー(六道)と呼ばれている。これは、先の田之脇のものなどに比べると石塔自体は小型であるが、その意味は明確に伝承されている。いはく、それぞれの家が参るべき石塔が決まってい



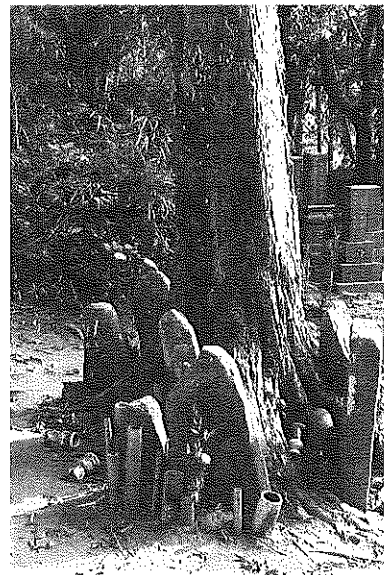
田之脇の石塔群

て、その家族は墓参りのたびごとに必ずその石塔に先祖を祀るのである。そして、その先祖とは四十九年忌のテアゲマツリを終えた霊である。トバタノハカにも二、三の石塔が存在する。

葬列によって墓地へ持ち込まれるものも他の集落と大きな違いはみられない。霊屋や旗、ほうきなどである。やはりゾウリをフンデ行く。旗は一週間前後でたんで霊屋の中におさめる。また、野辺送りの際にロクローを三回りしてから埋葬するという。

忌期間としては、その日一日仕事を休む程度で、ほとんど意識されていない。墓石を建てるのは三年目が普通だったが、今は早くて一、二年で建てることもある。年忌マツリは三年目、七年目に行う程度で、あとは四十九年目あるいは五十年目のテアゲマツリを行うくらいである。テアゲの方法としては、墓の下を垂直に掘り下げていき、出た遺骨に焼酎をかけ、マツリをして、横に小さく掘った穴に寄せる。

なお、ここでは、サンゴ石をガル石と呼び墓の周囲に置くだけでなく、墓の前に置き、洗米を置く台として使用している例が幾つか



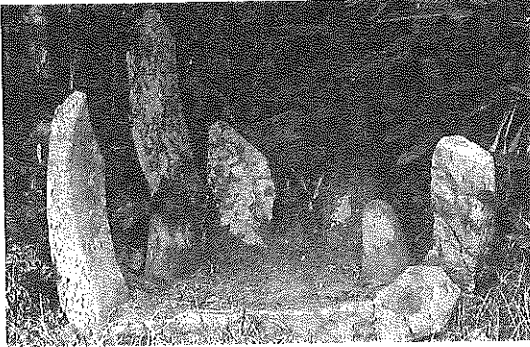
武部の石塔群

みられた。サンゴ石を洗米を置く台として用いているのはこの集落だけであった。

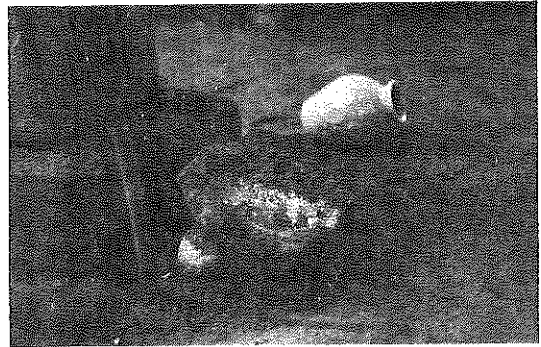
4 大崎

大崎の墓地は一ヶ所に集まった共同墓地で、納骨堂は全くみられない、古い型の墓地である。が、一九八六年度には集落共同の納骨堂を造るかもしれない、とのことであった。古い型の墓地によくみられるように、ここもまた非常に多くの墓地が密集しており、ほとんど余裕のない状況である。また、墓地にむかう道の途中に六個の石塔が立っている。尋ねたところ、昔の先祖を祀っているのだろう、とのことであった。

葬列については、やはり旗や霊屋などを野辺の送りとして出すもので、特記すべきこととはない。霊屋は普通三年忌まで建てておいて、その後墓石を建てるが、経済力によ



大崎の石塔群



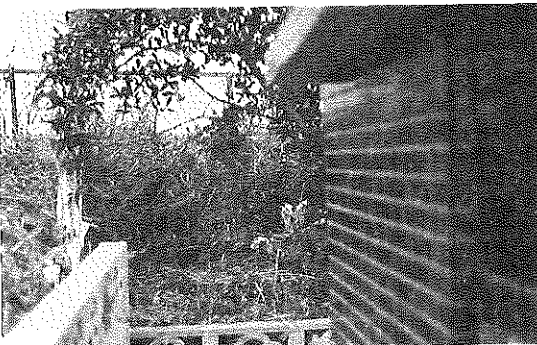
洗米を置いたガル石 (武部)

てもっと長く霊屋を建てておく場合もある。また、この墓地にはサンゴ石はほとんど見られなかった。海に面した半農半漁の集落のことであるので、興味深い。

5 住吉中之町

中之町の墓地は集落からやや離れた所にあり、浜之町との共同墓地である。一九八四年にほとんどの家が納骨堂を完成したそうだが、集落で一斉に造ったものではなく、個々の家が造ったものなので形はそれぞれ違っている。また、墓の向きについて、本来は法華宗は北向き、神道は南向き、さらに少数ではあるが浄土真宗では西向き、とそれぞれ決まっていたはずだが、これらの納骨堂は実に様々な方向を向いていて、方角の禁忌は守られていない。地形的なことを考えて、参るときに都合の良い方向に建てたようである。場所は昔から墓地であった所なので、古い墓を倒してその上に納骨堂を建てた、ということになる。また、昔は墓地内にロクロー(六道)と呼ばれる場所があり、共同で祀るための石塔があったが、納骨堂を建てるために撤去した。それを聞いた古老達は激怒したという。

納骨堂であるため、墓地への葬列も若干の変化をみせている。まず、野辺の送りの先



奥の土手に旗が見える

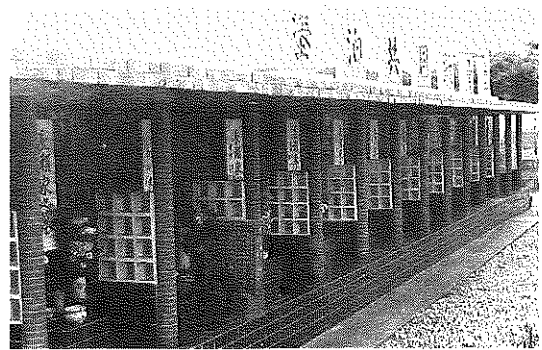
頭に立つ旗だが、七、八年前から寺（本成寺）に供えつけの旗が数本有り、それは何度も繰返し使う。その他に親戚筋の用意する旗が有り、これは納骨堂へたてかけるようにして墓地へ置く。ゾウリは隣保班の人が家族の分だけ、つまりは四、五足作り家族がフンデ行く。

日常の墓参りについては、納骨堂建築以後、以前よりもひんぱんに参るようになった。納骨堂は石塔の乱立をする墓地をすっきりとした美しいものに変えたため、チリや汚れ、枯れた花などが目立つからだそうである。三日に一度くらいは花などを供えに行くという。忌明けは、法華宗では四十九日目、神道では五十日目だが、「トリアゲ」という言葉は聞かれなかった。年忌マツリは、法華宗は一、三、十三、四十九年目で、神道では一、三、十、五十年目で、それぞれ昔は四十九年目と五十年目にトリアゲをしたが、今ではもちろんしない。

なお、納骨堂以前は、埋葬の折りには必ず靈屋を建てていたわけだが、靈屋の周囲には海岸の砂を敷きつめ、それが流れないように、囲うようにガルス（サンゴ石）を置いたという。今では海岸の砂もガルスも全くみられない。

6 溼 泊

昔は二ヶ所に共同墓地があったが、近年、一ヶ所にまとめて共同納骨堂を建てた。これは完全に区画されたもので、長屋風の外観を見せる。屋根及び背面は一面で横につながっていて、隣の堂とは一枚の壁で仕切られているのみである。横に十四、五連だったものが三列にならんでいる。なお、溼泊では全戸に法華宗であるので納骨堂は全て北向きで統一される。



溼泊の共同納骨堂

したがって現在では全く靈屋は造られない。旗も墓地には立てられないと考えるのが普通だが、ここでは納骨堂の隣に旗を立てる為の筒がある。納骨の折には、親戚の数により六、七本から十五、六本の旗をその筒に立てるそうである。そして、その旗はフタナヌカに焼き捨てる。フタナヌカは三十五日目や四十九日目でその期日は一定していないようである。

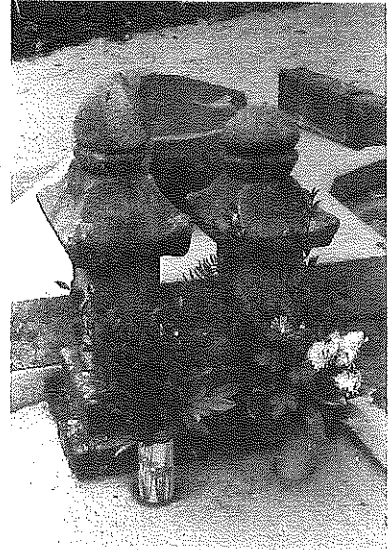
亡くなってから三十五、四十九、百日目にマツリをする。年忌マツリは一、三、七、十三、二十三、三十三、四十九年目で、一、三、周忌にはごく近い親戚を呼びマツリを行うそうである。

7 寺 之 門

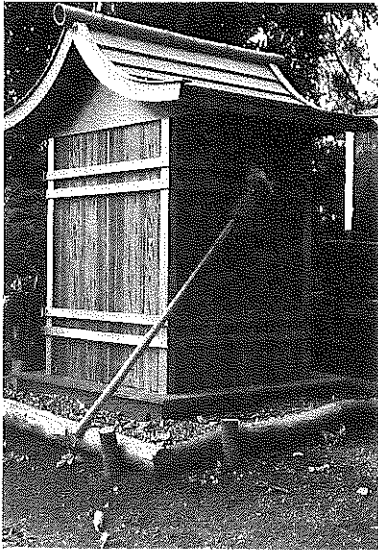
集落内に一ヶ所の共同墓地を持っている。古い墓石も多く残っているが、すでに相当数の納骨堂を見ることが出来る。集落で一斉に造るのではなく、個々の家で建てているのでその形は多様である。納骨堂建築にあたっては、その区画内の地面はコンクリートで固められるわけだが、古い墓石として立っていたと思われる石塔と一緒に固めたものがあつた。これは、今回調査した中ではここだけにみられた例である。また、納骨堂ではないが古い墓を全て倒して新しく一つの石塔を建てることがあるそうである。その折には遺骨

をテーアゲる人もテーアゲない人もいたそうだが、遺骨をテーアゲなかつた人は後にバチがあつたという。

埋葬時には、納骨堂でない家は霊屋を造る。旗やソウリに関しては通常のものとは変わりはない。埋葬してから一週間は墓参りを行うが、その後は一週間に一度墓参りをする程度である。後々の供養については葬制において詳しく扱われると思うが、ここで記しておくきたいのは、この集落でも四十九年目をテーアゲマツリと呼ぶが、それ以後も墓石を立てたままにしておくことがしばしばある、という



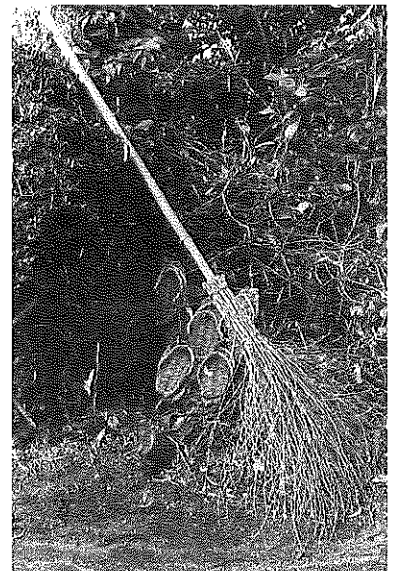
納骨堂の石塔



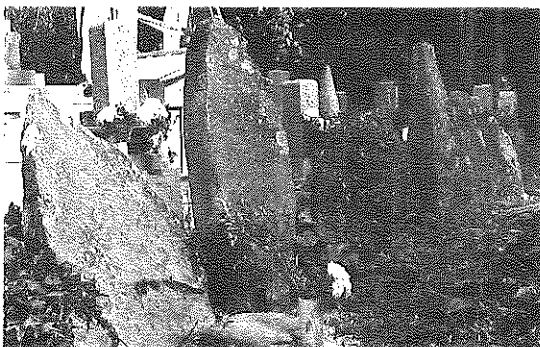
霊屋にくくりつけたホウキ

ことである。テーアゲが過ぎても墓石は倒さず、命日にはトムライ(墓参)をするという。

なお、墓地内にロクロー(六道)と呼ばれる場所があり、五個の自然石が立てられていた。昔は、埋葬の前に師匠あるいは神官がロクローでマツリを行っていたが、今はしない。この石塔の意味を聞くことはできなかったが、おそらくテーアゲた後の先祖の霊を祀るものであることは他の多くの事例からみて間違いなからう。そして、それは九〇戸以上の家に対してわずかに五個である。あるいは、その石塔の割り当てを持たない——他所者の——家はテーアゲマツリの後も墓石を倒さない、と考えることはできないだろうか。



ホウキとソウリ



寺之門の石塔群

三、納骨堂の型式

今回の調査で西之表の各地で様々なタイプの納骨堂がみられた。一定の大きさの「堂」の中に火葬にした遺骨を納めるという点では共通するが、その型式によって、それが持つ意味は若干異なってくる。そこで、今まで調査地別に述べてきた納骨堂を三つに分類して、それぞれについて考えていきたいと思う。なお、納骨の墓地（雲之城私有墓地）については聞き書きができなかったのだが、以下の分類には必要があるので、その外観に限って例としていきたい。

1 アパート型

湊泊は全てがこの型であり、納骨にも一部にこの型がみられる。先に少しふれたが、屋根及び背面が一面でつながっている。従って、少なくともその一列に限っては同時に作らねばならず、方角についても統一することが必要である。また石塔を持たないうえ、資材も最も少なくすむ合理的なもので、費用も比較的安いのではない。そして、その地域で一斉に造ることが絶対不可欠の条件であることは、小地域共同体の結集の再確認であり、且つ平準化の原理をも満たしている、といえるのではないか。

2 分譲住宅型

四角柱を、薄く平たいものの上に、細く高いものを何段か積み重ねたもので、形としては近代の一般的な墓石に似ているが、はるかに大型である。高さは二層前後、上方から見たとき最も広い部分が約一・二五層四方である。また、多くはその周りを三層前後の区画が囲む。個々の家で造ったものにもしばしばみられる型だが、「分

譲住宅」のように区画がそれぞれ接し、土地割りが整然となされているものに限定する。つまり1と同じく集落で一斉に造ることが必要条件となる。現和本村や川迎などにもみられる。現和本村のものは、堂内部の地面に海岸の砂を一〜二層の深さまで入れてある。遺骨を置いてある棚が
いっばいになった時、古いものを底部に埋められるようにしてあるのである。しかし、

全体的には底部もコンクリートで固めたものが多いようである。1の型とは形こそ違うが、その意味はほぼ同じと考えてよい。が、1の型は方角が統一されるが、この型は方角は自由に決めることができる。現和本村では三十八の納骨堂のうち、北向きのものが十七、南向きのものが二十、西向きのもが一であった。

3 その他

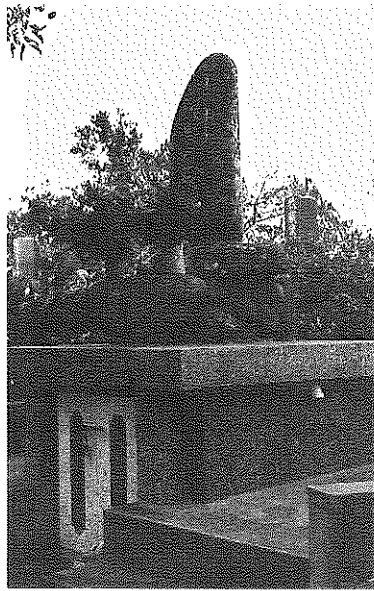
共同納骨堂では、1、2以外の型はみられないので、ここでその他に分類するのは全て個々の家で造ったものである。が、個人で造ったものでも、形としては2と同じものが最も一般的である。もっとも、その費用にはかなりの差がある。普通は五、六十万円で作れるのだが、人によっては二百万円を費やす人もいるという。これは小地域共同体の平準化の原理とは全く反するもので、「ムラ」内部で



川迎の納骨堂

のかんりの反発が予想されるはずである。にも関わらず突出して華美な納骨堂を建築するのは、その個人の意識の変化か、それともムラ内部の意識の変化であろうか。どちらにしても、価値観が都会化していると言えそうである。

さて、ほんの数例ではあるが独特の形を持った納骨堂がある。一つは、御影石で造った堂部の上に御影石の四角柱を建ててのではなく、おそらく以前は墓石であったと思われる自然石を建てて納骨堂としたもので、納骨にみられた。寺之門にみられた、古い石塔を含



自然石の納骨堂

めて納骨堂とする例とあわせて考えねばなるまいが、費用がかからない、という点が重要であろう。次に、先程と同じく納骨の墓地にあった一例だが、入口のない納骨堂である。形としては堂部の上に「〇〇家之墓」と書いた石板を置いたものだが、納骨堂における堂部にあたる所には入口はない。したがって、納骨堂と呼べず、慰霊碑と呼ぶべきものだが、外観が納骨堂そっくりであるので、何かの意味合いを持つものかもしれない。例えば、その家の家族は現在地の地に住んでいるので、納骨には遺骨を納めるものは要らない。あるいは要らなくなった、などと考えられないだろうか。



この納骨堂には入口はない

最後に、寺之門にみられた、古い墓を倒し新しく慰霊碑を立てるのは、納骨堂とは違った一つの変遷の型として考えられるのではないかと思う。

四、納骨堂の民俗

本稿は一九八五年に行った西之表市における民俗調査を基に墓制について述べてきたものである。墓制の現状と課題を考えることをテーマとしたので、過去の民俗について記すことを控え、できるだけその現状について述べるよう努力した。その結果として、大部分を納骨堂とそれに付随する習俗が占めることとなった。古い墓が急速に納骨堂へと移行しつつある今日、納骨堂を民俗としてとらえ考えることが必要である。そこで、最後に納骨堂の民俗について自分なりの考えを述べることでまとめに替えたい。

まず、納骨堂を建築する理由だが、次の様に幾つかの要因が考えられる。

1 経済的理由

納骨堂がない場合、葬送、埋葬にはかなり多額の費用が必要である。霊屋と墓石だけをとっても、莫迦にならない金額となる。それを死者が出る度に捻出する家族の負担はかなり大きいものである。納骨堂であれば、それ自体は高価なものだが、一度造ってしまえば墓石を建てる場合に比べてはるかに出費が少ないといえる。

2 地理的理由

田之脇や武部など、古い型の墓を残す墓地では、まさに墓石が乱立する状態で、死者が出ても埋葬地に悩まねばならないような現状である。そこで寄せ墓をしようとする時、この際だから、納骨堂を……と考えるのは自然の成り行きであろう。

3 流行化

調査地において、「隣の集落も納骨堂を造ったから」「ここも早く(納骨堂を)つくらないと……」などの言葉を耳にしたことが何度かあった。これらの言葉から、「納骨堂でない集落はおくれている」といった意識があるのではないか、という感じを受けた。納骨堂を造ることが集落間において一種の流行と化しているのではない。またそれは集落内において流行化することもあろう。端的な言い方になるが、納骨堂を一種のステイタス・シンボルとすることもできるのではないか。

4 集落民の転出入の増加

多くの集落では依然としてムラとしての団結は強固であるが、その一方で集落民の転出入が増加しているのも事実である。先祖累代

の墓がある地を離れて移り住むとき、遺骨を埋葬せず納骨堂へ納めておけば、墓の移動もまた可能となる。

5 祖霊観(信仰)の変化

死者を埋葬し、墓石を建て、ひんばんに供養を行うことが死者を迷わせることなくあの世へ旅立たせる儀式であった。しかし現在、それは『面倒』であるとの意識が大きくなっている。もちろん、立派な納骨堂を建てることは死者への供養ではあるが、納骨堂は手間がかからない、という意識があることも否定できない。

以上の五つの理由で納骨堂への移行については説明できると思う。では、これからはどうなるだろうか。そう遠くない時期に——例えば十年以内という数字を挙げてもよからう、種子島でも全島的に納骨堂がみられるようになると思われる。また、その発展型として、いずれは「高層建築」が出現するかもしれない。しかし、それは民俗学にとって、決してフィールドの減少ではないのである。納骨堂の民俗を見つめることによって、祖霊観の変遷、そして共同体としての地域をみつめなおすことができると思える。

(昭60・12・26～昭61・1・3調査)

註1 共著『葬送墓制研究集成四』(一九七九 名著出版)

註2 下野敏見著『南西諸島の民俗Ⅰ、Ⅱ』(一九八一、一九八二

法政大学出版局)

註3、4 (註2に同じ)

下野敏見著『種子島の民俗Ⅰ』(法政大学出版局)

墓制について

渡辺 一 弘

一、はじめに

今回の種子島実地調査は、初めての経験だったのだが、調査において得られた知識は、机上のものよりも多くのものが得られた。私は墓制に関する調査を担当したのだが、私のお墓に対するイメージは、尽き崩されてしまった。

墓石、つまり石塔のことだが、それには多数の種類があり、埋墓と詣墓が、主な分類である。現在の墓制に関する問題点としては、墓地の納骨堂化である。また、それに伴う葬制の変化も関連して、問題の一つであろう。詳しい葬制に関する研究はその項に譲るとして、ここでは、石塔における変遷過程を見ていきたい。

二、実地調査の概要と特色

1 墓地

種子島においても、墓地は共同になっている集落が多かった。田之脇、夏田、湊、浜之町においては共同で一ヶ所に、深川では四ヶ所、立山でも分けておかれていた。納骨堂を自分の家の敷地内に置くという所がまだ数は少ないが一部に見られた。

今年中には、納骨堂に変えるという集落がいくつかあり、数年の

うちにはほとんどが、納骨堂に変わるだろう。

納骨堂に変える場合、ほとんどが共同であるが、敷地内に統一した形のものや自由な形の石塔を各家によって建てるといったものがあった。

納骨堂に変える理由は、いくつもあるが、やはり沢山の石塔を詣るのが大変だということと、お金が安くてすむ、敷地が足りない、というのが主であった。

なかには納骨堂に反対する老人もいた。

ただし、この納骨堂化も、合理的な埋葬形態であることは確かである。この点に関する推論は後で述べたい。

2 埋葬方法など

この点に関しては、葬制と重なる点が多いので詳細は、割愛させてもらう。

① のべのおくり——葬式

家族が主体となり、集落中が参列する。ホイドン（神官）、シシヨウ（坊さん）は金がかかるという理由でたのまないところもある。

主に土葬において行われるが、湊では、火葬においても行う。

参列においては、旗をもつところ、ろうそくをもつところがある。

田之脇では老人会から寄付された赤い旗。

立山では、血縁の人から赤か白の旗をもらい、特定の参列者は、白布を首にまく。四十九日が過ぎると旗をとり、燃やしたりはせず大切にする。それを巻いて海につかると、大漁になるという話もあった。

湊では、一層三〇杓ほどの旗に親せきが名前を書いたものと、ろ
うそくを二つ、燃やした松を持っていく。参列者の一部はゾウリあ
るいはわらじをはいて行って、その履き物は、墓地に置いて帰る。
つまり素足で帰るのだが、今では履き替えて帰る。

田之脇では、そのゾウリを履いて漁に行くとか大漁になるとい
う話があった。

② 六道参り

土葬の場合に、のべのおくりのあと、墓地の入口にある六道の石
の周りを回るといふ儀式である。

三回まわる所と一回だけまわるという所があったが、数字的な意
味は不明である。

昭和十〜二十年頃からなくなってきたようだ。しかし、湊では、
去年から再び、六道参りを始めたらしい。六道の石は、現在、納骨
堂の真ん中にある。

六道参りの意味は、先の世に行ったんだから、もう戻ってこなく
ていい。つまり死んだ人が、幽霊となって出てこないように、とい
うことである。

ほとんどの集落では、六道参りは行われていないが、六道の石に
は、花などをあげ参っているようだ。

③ 棺

昔は、カメ棺を使っていたようだが、貧しい人は、タルをタンコ
屋(桶屋)に作ってもらっていたそうである。今は、木の板でつく
った箱を大工に作ってもらう。

棺の中には、共通して昔は十二文をいれていた。その他食べ物、
衣類等、いろいろなものを入れていたようだ。

お金のある人は、せんだんの木で、棺をつくったという集落もあ

った。

④ 年忌祭り

のべのおくりの後、大工さんが奉仕でつくってくれた霊屋をたて
るのだが、三年忌の時、この霊屋を除いて、石塔をたてる。これを
石たて祝いといい、三年忌祭りをする。

都合によって、今では、一年後にたてたり、バラバラになってき
ている。

田之脇では、四十九日、百日、初盆、三年忌、五年忌、七年忌で
最終年忌を迎える。立山では三十三年忌、深川では三十三年忌が最
終年忌と集落によって違っている。しかし、基本的には、仏教は四十
九年忌、神道では五十年忌が、最終年忌のようである。

⑤ トリアゲ

トリアゲあるいはテリアゲといい、最終年忌になると、埋めてあ
る遺骸を掘りだし、その横に埋め直す。その際、石を倒して、それ
以後はその墓を詣る必要はないのである。

立山では、坊さんをたのんで、洗骨し、焼酎をあげて、石を横に
倒す。

深川では、インボウを使ってホイドンが掘りおこし、火葬で、骨
だけにし、また埋める。

湊では、簡素なもので、遠縁の人も集まり、神道の場合、祝詞を
あげ、行列になって移動した(葬式と同じ)。

浜之町ではカキアゲという。

笠のある石塔の場合、石は倒さない。

3 石塔

宗教によって向きが決まっており、法華宗は北、神道は南、真宗

は西であった。

田之脇では、男は東、女は西、子供はいいなかと言われていたが詳細は不明である。集落で最初の墓というのがあったが、名前、年代は書かれていなかった。

立山では、霊屋は西向きにたてる。ここには、両墓制につながる、集落共同の石塔がお寺にあり、お盆の八月十五日に石塔参りをする。

深川では、大きな石塔が四つ公民館の入口にたっていたが、坊さんの供養塔だった。また同じ人のものらしい石塔が、納骨堂の横に残されていた。この集落においては、一軒だけ真宗で、他はみんな神道であった。種子島においては、ほとんどが法華宗であるので、非常にめずらしい集落である。廃仏毀釈以前はやはり法華宗だったらしい。

男の墓石は、左側にたてることになっていた。姓を持つことのできてから、庶民も石塔をたてはじめたという話もあった。

湊では、霊屋は大工が、奉仕でつくる。集落への入口のところの石塔が供養の為の石塔で、四年に一度だけ、神官(坊さんではない)が来て供養する。神道の場合は祭りというが、仏教の場合、追善供養という。

ここでは、去年、納骨堂に移した。その時に神官・坊さんもそれでよいということ、石塔の向きを西に統一した。

昔は、東から順に先祖がまつてあったそうである。

丸い石がおいてあったそうだが、それは、赤ん坊の墓か、あるいは貧しい人の墓だそう。昔も、浮浪者らしき人がいたそう。

浜之町、昔は墓の向きは決まっていたが、納骨堂になってから、場所、土地の関係で今はバラバラになってしまった。

小さな子供の墓は、おばあちゃんの脇に石をすえた。

石材に関しては、いろいろなものがある。

昔はほとんどが山川石であったが、近年はほとんどみかげ石になっている。山川石は、黄色の石で、きれいではあるが、崩れやすいものである。種子島では種子みかげという石がとれて、昔はそれが使われていたが、最近では輸入物が多くなってきている。韓国、台湾、アフリカなどいろいろなところから輸入しているらしく、また集落の人も、それを自慢しているようだった。

今回の調査においては、前もって詳しく勉強をしなかったので、細かなところまでは、話を聞くことができなかった。

三、比較研究

いわゆる「お墓」というものは、石塔のことであり、仏教に関係のあるものである。

つまり単に死んだ人の印だけではなく、死者を供養する為のものである。しかし、時代が変わるにつれて死者の供養のためにたてるという考えは次第に薄れて、ただの記念碑の意味が強くなった。従って、法名、妙法もなく向きもバラバラなただのハカジルシとなったのが、今のお墓ではないだろうか。しかし、お盆、お彼岸、年忌祭りにおいてその石塔をお参りするところを見ると礼拝の対象として見ているのではないだろうか。次々と納骨堂化していく過程において、どの点で意味が薄れ、どの点において意味が依然として残っているのかこれからも調べていきたい。

村落の神

鹿児島民具学会員 砂田光紀

一、はじめに

昭和六十年（六十一年）の野外実習の際に、西之表市内の七つの神社についてその形態（空間構成）を調査した。その結果、祭祀空間或いは神の降臨の場としての神社が、ごく原初的な形で信仰の対象となっていることに驚き、興味を持った。今回の調査では、こうした「神社」を中心に、その他の様々な村落の神について、その機能とそれを信仰する人々の捉え方について調査を試みた。また、種子島に特徴的な「マキの神」についてもその現況を調査したが、祟りのモリである「ガローヤマ」については、今回の調査対象となった村落に例がなく、割愛した。後述の深川の屋敷神については、家の神の性格が濃厚であるが、他地域ではみられない特異な例でもあるので参考までに記録したものである。

二、概論

1 村落氏神としての神社

調査したすべての村落に神社が存在し、地域氏神として信仰されている。各小字村落には、地元の人々が「部落の氏神様」と呼ぶ小字村落専用の神社が存在するが、各大字村落にもそれ全体を包含す

る広域対象の神社が存在する。大字氏神はその名称がわりとはつきりと認識され、全国的に伝播した神社信仰の色彩が強いのに対し、小字氏神の場合は神社の名称すら地元の人にも明確には認識されていない場合が殆どで、身近な氏神様として概念づけられている傾向がある。

前述したように、大字村落氏神と小字村落氏神の神社はその性格を微妙に異にしているものの、それぞれが集落の人々に強く信仰されていることも事実である。それは以下に示す祭祀の状況にみられ、人々の信仰観が大字氏神と小字氏神という二重構造を違和感なく受け入れていることを示すものといえよう。

〈事例1〉

現和浅川には小字集落の氏神様として浅浪神社が村の中央に祀られている。浅川は昔、製塩の盛んだった所で、今でも村の人々は浅浪神社を「シオの神様」として捉えており、神社の下に「浅川製塩元祖之碑」と刻んだ石碑もある。毎年二月二十八日にガンタテ、十月二十九日にガンジョウウジを行うが、双方ともホイドンをたのむ。浅浪神社の神主は交替制で、毎月一日、二十八日はそうじをしたりオシユエイ（潮井）をまいたりする。神主交替の折、或いは九月のコメの節句、五月のムギの節句、三月の節句には初を二升（九月）、表を一升（五、三月）神主に納める。神主はそれを自家用とするが一部を神供とする。以前は師走に神主の家で夕方から朝までおつやをしていた。その際は、不幸のあった家の者をのぞいて集落全員が参加していたという。

浅川と田之脇の境界のあたりに、現和一円の大字氏神として風本神社が祀られている。浅川の人々は先に述べた浅浪神社の祭祀とともに風本神社の祭祀にも参加し、信仰している。風本神社のガンタ

テは二月二十八日と、浅浪神社と同日であるが、ガンジヨウジは一日ずらして十月二十八日としてある。浅川の人は誰でも、心配ごとなどのある際は二つの神社とも参拝し、祈禱するという話も聞いた。

〈事例2〉

安城川脇にも小字氏神として「天照皇大神」を祀った神社が村の北の入口付近にある。もともとは海岸の塩釜から五〜六間しかない所であった。塩タキの火の神様であるという。モノシイドンの進言で、元の神社の場所には石を立ててあるという。この神社のガンタテは一月二日に行われ、オトウミヨウ(ろうそく)、オゴシイ(御神酒)、オサンシエン(さい銭)、チカライシ(十二月三十一日朝、小鳥のおきないうちに波打ち際から拾ってくる石)、オドリの五ギヨウをたてる。そして十二月三十一日に神供として供えておいたモチと、マキの神にあげたモチを集落民の頭数でわり、朝から晩までかかって村中の家をすべてまわる。一年で最大の祭りであるという。この時、ホイ(ホイドン)も呼ぶ。ガンは十月二十六日にほどき、やはり五ギヨウをもっていって拝むが、この時にはホイは呼ばないという。神主は交替制で、毎月一日と十五日に花を枯らさないように取り替え、そうじをする。

同じく安城の大野にも神社があり、四月二十七日にガンタテ、十月二十七日にガンジヨウジを行う。双方ともホイドンを呼ぶ。

安城には大字氏神として諏訪神社が存在し、前述の二つの小字村落の人々にも信仰されているという。

〈事例3〉

南種子町下中真所には、有名な御田の森を持つ下中八幡が下中の大字氏神として祀られている。ところが、面白いことにこの下中八幡はもともと真所八幡と呼ばれる真所の小字氏神であったという。

そして次第に下中の他の小字の人々から強く信仰され、結果的に下中全体の氏神となってしまった。そこで真所の人々は大正十二年に以前墓地であった所に神社を設け、ハマノサト神社として祀っている。

下中八幡では旧暦九月十五日にダイサイが行われ、午前中に祭典、午後は一番ニワから三番ニワまで、小字(真所、里・山神、夏田・郡原)毎の踊りが奉納され、その順番は毎年ローテーションしている。また、三月末にはシオマツリが行われる。これは一年中の祈願祭であり、「風とシケ、シナン(台風、大シケ)がないように」祈る。真所は海岸近くに水田が広がっており、南風が吹けばシオがそのまま飛んできて稲が黒くなって枯れてしまったことからこの祭りが始まったという。ハマノサト神社では、旧暦九月二十二日に祭りが行われ、祭典、踊りが奉納されるが、これは真所の人のみで行われる。

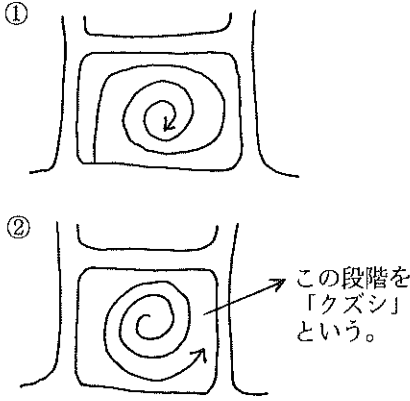
以上の例からもわかるように、大字氏神、小字氏神の二重構造は村民の信仰感覚、地縁感覚の基礎をなし、また、小字氏神の機能は、各村落間の境界観を示唆し、大字氏神の場合は近接村落の統合、接触の場として重要である。昨年調査した国上付近の神社にもこれらのことがあてはまる。血縁を基礎とする一家氏神の発達が少ない種子島農漁村においては、これらの村落氏神が強く支持され、特に小字氏神の機能は強力であるという印象を持った。

2 マキ(マキバ)の神について

製塩の盛んだった東海岸の村落を中心に調査した為か、献上塩の代わりに薪とり用にもらった山を開いたマキバに関する伝承が多く、マキの神の事例が豊富であった。

図① ホイトウの例 (安城川脇)

1つの田に3~4頭
5畝程の田では9~10頭



- 6月頃共同で行う。
- 水田は1戸あたり30~40aあった。
- 明治30年頃までやっていた。
- 馬は共有。
- かけ足のごとく歩ませるだけ。
- 1つの田を2~3回まわした。

安城川脇のマキは二町歩程もあった。ここのマキでも馬のみを放し飼いにしており、ホイトウのみに使っていたという。ホイトウの要領は図①のとおりである。マキの神はこのマキのそばにあったが、今の神社下の山中に移した。レキ岩が神体であり、一月二日に祀っている。

〈事例2〉

現和浅川のマキは赤尾野付近にあったという。その神様はフダウチマツと呼ばれ、二月二十八日にマキギトウを行う。その際にホイドンが書いた札を松の木に奉納するのでこの名称がついたという。マキギトウにはホイドンの他に、集落で交替に二人ずつ定められる係がついて行き、注連縄を作ったり、ホイドンの接待をしたりする。マキバは馬だけを飼っていたが、今では牛馬の神としてフダウチマツを祀っており、その係は牛馬を持たない人にもまわってくるといふ。

〈事例1〉

〈事例3〉

住吉深川のマキの神の祭場には二つの小祠が祀ってある。左側のものはアコウの巨木の前の高い所に祀られ、深田家所有のマキバの神である。右側の低い所、タブの巨木の前に祀られているのは牛の神様で、集落の共有である。深田家のマキの神を管理する深田シマさんは、それをバトウカンノンの神様と呼び、そこを荒らしたままにすると馬にかみつかれるような夢を見るといふ。右側の牛の神様は今でも牛を飼う人々に強く信仰され、牛が病む時は、全快を祈って五円程のさい銭や酒をそなえて祈禱するという。マキバの馬はホイトウに使っていた。

〈事例4〉

国上湊のマキバは十四~十五名の株主によって運営されていた。ここでもホイトウウマを放し飼いにしていたが、近接集落の馬の耳はタテギリ、湊のものはヨコギリにして区別していたという。マキの神はバトウカンある或いはウマノカンと呼ばれ、マキのあったオーサカという山中にある。しかし、ここが遠いので湊村落の小高い丘の上に飯のバトウカンが祀られている。マキギトウは八月に行われ、氏神の係がカンヌシさんをつれて祀りに行く。以前は、家族皆で行き、拜んで酒をのみ、遊んでいたという。今でも牛を飼っている人が、正月に酒を飲みに行くという。

以上の例から、マキの神が現在でも信仰されていることがわかる。但し、マキが存在した頃、馬の神であったものが、畜産形態の変化にもなつて、牛馬の神となつていたり、仏教の影響で、馬頭観音となつていたりする。いずれにせよ、マキとともにあった神が、マキの消滅とともに消えることなく村落の神として機能していることは注目に値する。

3 エビスについて

〈事例1〉

現和浅川の浅浪神社拝殿裏に、エビス様がある。二つの小祠が祀られ、神体は複数の丸石である。何故二つにわかれているのかは定かではない。浅浪神社のガンタテ、ガンジョウウジの際に参拝し、ホイドンが祀るが、係は神主とは別にいる。漁業をする人だけが信仰しており、魚とりの前に朝暗いうちにシユエイを持ってゆき、ガンタテをする。魚とりの後、とれた魚を奉納する。

〈事例2〉

安城川脇には二つのエビスヤマがある。一つは海岸近くにあり、ウラを守る。もう一つは川脇の神社の裏にあり、こちらは高台にあって沖を守る。共に神体は複数の丸石で、魚とりのオオアミ、ウチアミ、エビアミ等にかかって、再度かかったり三々四回かかったりした石を祀ってある。旧暦十月十日にウラガンを行う。魚とりの後、エビス様に魚をあげてまわるが、係の人はカミノアタリをもらう。このエビスは、大野、川脇、上之町、下之町の共有である。田之脇(現和)のエビスは、ここから盗んだものだという。神様は盗んで良いからである。

以上の他にも数例のエビスを見た。エビスに関しては漁業の神として共通であるが、小祠が二つであったり、川脇のように二カ所にわかれた例もある。その理由については、残念ながら今回は解明できなかった。川脇の例だけはその機能がはっきりしている。

4 深川の屋敷神

屋敷神に乏しい種子島において、今回調査した村落の中で住吉深川だけは例外であった。ここには古くから伝わる地神的性格の屋敷

神が存在する。

〈事例1〉

ヤマノカミと呼ぶ。もともと山であった所を宅地にしたので祀っている。畑の中にヤマノカミがあって道を通す時などはホイドンにたのんで移す。激しく祟る。

〈事例2〉

ウジガミサマ。住宅地の土地の神様。祖先を祀ってはいない。住宅地の悪魔祓いである。

〈事例3〉

トチノウジガミサマ。今から六代前の人が祀ってから守ってきた。正月、盆、吉日、一日に花をあげて祈る。米、しょうちゅう、ろうそくをあげ、宅地を守ってください、と祈る。祖先ではない。

〈事例4〉

深田家本家の神様。今は上妻家となっており、羽生家が管理しているが、殆ど手をつけてなく、荒れている。古刀と、古文書、オマングラらしい巻物が祀ってある。正月三々四日と、盆前に祀っていたという。

〈事例5〉

道路ができたのでホイドンをたのんで移したが、もとはササヤブのクリにあった。デガミサマと呼ぶが、チリンサマという坊主の神と聞いている。神道ではないのに何故坊主の神様があるのか不思議だという。

〈事例6〉

デガミサマ。毎日祀る。祖先は祀っていない。一日の無事を祈る。

〈事例7〉

名称不明。山中の大きな松の木の下にあったものを移して家を建

てた。祖先を祀ったものではない。

〈事例8〉

ドーヂ（土地）のカミ。この屋敷の土の神といって祀っている。六十年前からここに居るが、昔いた親も祀っていたので自分もしており、くわしくはわからない。

事例1は村の人の話で、この人自身の家には屋敷神はなく、ヤマノカミという名称もはっきりしない。事例4は木製の祠である。他のすべてが庭先のイヌマキの木の下などに丸石を祀ったもので、ソテツに抱かれたものもある。地神的要素が強いが、事例5、事例7のように畑や山の中から移した例もあり、疑問が残る。

三、比較

種子島の神社が、大字氏神と小字氏神として信仰され、意識されていることは先に述べた。ここで氏神という言葉をいささか濫用しすぎた気がしないでもないが、事実村落の人々はそう呼ぶ。ここで事例を見てわかるように、これらの氏神は地縁集団の祭祀対象として存在している。小字氏神でさえ、それは村落全体を氏子として包含するもので、一家氏神として血縁集団が祀ったものではない。前述のとおり、種子島の在来農漁村には屋敷神の例が極めて少なく、深川の例にみられるとおり、それは氏神ではない。むしろ種子島の特徴として、血縁集団の神概念をストレートに持つ場合が少なく、地縁的集団における神の形をとって村落に祀られている集約的な信仰形態を指摘し得るだろう。但し、これは氏神に限ったことであり、ガローヤマ、マキの神等においてはその限りではない。これは下野敏見先生著の、『種子島の民俗』等に顕著なものである。

ところで、大字氏神は諏訪、八幡、住吉等（昨年調査済の大花里伊勢も同様）の、我が国の神道大系のメジャーな系列を得ている。ところが、小字氏神はその分化したものと見るにはあまりに名称があいまいで、村落民の意識においても決して大字氏神の分社的感覚といったものではない。あえていえば、ホイドンが両方に関わる「かけもち」であるが、小字氏神には村落民が交替制でうけ負う神主という役職があり、日常の管理はいわば自治的に行われている。そういった事実には、昨年調査した七カ所の神社をオーバーラップさせて考えるとき、神社という概念に隠れた、祭祀空間の本来の姿が見えてくるのである。本殿のない神社、種子島に顕著なこの奇妙な神社形態は、本土から流入した神社文化以前の村落祭祀を示唆している。しかもそれが、各小字村落に深く根ざしていることは、地域的結束の強さを示すと同時に、そうした祭祀空間を中心に村落の文化が発達していったことを示すものである。そして何よりの証拠として、シオガマが消滅した現在でも、シオの神、火の神は村の氏神として機能し、村の豊穡と安全の為に存在しつづけている。ここに於いて、神社の名称などは意味を持ち得ないのである。大字氏神の場合は、かなり統制がとれたはっきりした神社体系の中に組み込まれた傾向があり、小字氏神とは祭祀こそ似ていても、その内容は全く異質であるといえる。その祭祀すら、ガンタテ、ガンジョウウジという共通の言葉は、どう考えても後から統一されたような感じである。真所八幡では、今回訪れた際に鳥居にサトウキビがまきつけであり、本村（西之）の小字氏神には同様にサツマイモが巻きつけであった。新嘗を思い出させるこれらの風習もまた興味深い。それぞれの氏神は、格式ばった古事にとらわれることなく、生業に密着している。

さて、不思議に思うのは血縁集団の氏神はどうなっているのか、ということである。屋敷神として一家氏神が祀られていないということは、それが発達して村落氏神となったとは考えにくいのではないのか。このあたりは多少の追加調査をしなくては明確にはならない。

桜井徳太郎氏は『民間信仰』の中で、民間祭祀について述べ、それが中央勢力に攪乱されない辺境において、ことにヴィヴィッドに見られるとして、在来信仰と伝播して来る既成信仰について触れている。この接触面こそが、種子島の大字氏神と小字氏神の間に見られるということは、どうやら明確になったような気がする。

マキの神について驚くべきことは、その存続である。マキバが消滅し、馬もいなくなった現在、何故マキの神は存在するのだろうか。牛を家畜として重視し、マキの馬の神が牛馬両方の神として機能しはじめたことにその原因はある訳だが、馬頭観音の概念が与えた影響も見逃せない。マキの神と、早馬、その他の牛馬信仰を比較する時、御神体の形態も重要である。小野重朗氏は『民俗神の系譜』において、島の牧神がすべて松の木を神体としていることは重要であろう、としているが、今回の調査ではフダウチマツの例をのぞいて石が神体であったし、その周囲にはソテツが多かった。松は枯れやすく、その為に神体に変化したことも考えられよう。馬頭観音の流入こそあれ、その形態が著しい変化をみなかったのはやはり神道の影響が考えられる。ホイドンがマキギトウに関与する限り、そこはやはりマキの神であり観音にはなり得なかったと思われる。また、いくつかの事例にあったようにマキの神はマキバ跡ではなく村落に移されたりしている。当然、家畜として牛馬を飼った結果である。今後は牛が飼われる限り、村の家畜の神として機能しつづけ

るものと思われる。

エビス信仰ほど生業に密着した特定の神観念は他に見られなかった。エビスは今日、商業神や農業神としての性格も持つが、本来は海人、漁民の間に発生した信仰である。従って、種子島で今回調査したものは、その祭祀に漁民しかタッチしないことから、本来の姿を保っているものといえよう。事例にあったように「ウラのエビス」と「沖のエビス」を機能的に分離した例は珍しい。また、エビスヤマという言葉にも検討の余地がある。

深川の屋敷神の呼称はあいまいだが、その性格は地神に近い。ところで、事例の中にあつたように山の中や畑から家へ移したという事実は何を意味するのだろうか。山の神として祀られていたものを家の宅地の神としてしまったとも考えられる。屋敷神の成立そのものに迫る大切な事例だと思いが、もう少しくわしく調べなければならぬだろう。いずれにせよ、氏神的な性格のものではなかった。

四、まとめ

神社の解明、それが今回の調査の最大のテーマであつたと思う。何故なら村落の神の代表たる氏神であり、それでいて最も実体のとらえにくい神であつたからである。ここで少しわかつてきたことは、単なる大字、小字の神として二重に神社が存在するのではないということである。これは本土の地域氏神や民俗信仰を見る際にも今後常に気をつけておくべきことで、よい参考になつたと思う。マキの神、エビスに関してもその特徴については少しづつわかつてきたが、深い意味での信仰観や実態に触れる時間的余裕がなかったのは残念であつた。

(昭61・12・昭62・1調査)

伝 承 者 (1987)

(敬称略)

氏 名	生 年 月 日	住 所
榎 本 貞 彦	M 3 6. 4. 1 6	西之表市現和下之町6283
長 田 守 保	M 3 9. 1 0. 2 9	" " 浅川8552-2
	M 4 0. 3. 2 2	" "
川 原 時 文	T 6. 1. 2 6	" 安城川脇2022
長 野 担	S 9. 4. 2	" 安城大野2486
長 田 実	S 2. 1 0. 5	南種子町平山浜田
山 野 チ ヨ	M 3 4. 1. 2 0	" "
宮 里 重 治	M 3 9. 3. 2 8	" 茎永中之町639-2
羽 生 道 雄	M 3 3. 1 1. 1 6	" 下中真所
	(入籍 1 2. 2 9)	
徳 永 ス ス ミ	M 4 1. 1. 1 5	西之表市住吉深川7928
深 田 行 則	T 1 4. 5. 2	" " 7732
深 田 モ ト ム	S 2.	" " 7731
阿 世 知 エ ツ	M 4 0. 1 0. 1 4	" "
上 妻 喜 代 人	S 4. 7. 1 0	" " 7755
大 河 ケ サ	T 4. 1 1. 2 0	" 国上湊1218
南 重 徳		" 柳原公民館長(当時)
上 妻 子 エ	M 3 9. 1 1. 1 4	" 住吉深川8158
長 野 ヒ ナ	M 3 8. 5. 6	" "
瀬 川 キ ヌ	M 3 6. 1. 2 9	" "

神社を訪ねて

日高文仁

一、はじめに

鹿児島に二十年近く暮らしているが種子島に行くのは、今回が初めてであり、実習という形で種子島を見た訳だが、そこは、正しく文化の坩堝であり、目にし、耳にしたもの全てが新鮮で興味深く思われた。

大隅半島の南海上に浮ぶ、種子島はその位置から、ヤマト文化圏と、琉球文化圏の接点にあたり、周圍論的に見ると、両文化の最も古い形が残っていると思われる。そのため、この種子島をはじめ、近隣の南西諸島の民俗文化を研究することによって、両文化の深層に迫ることができるのではないだろうか。

今回は、初めての实習ということで、あまり、自分自身納得できる結果を得ることはできなかったが、これからの視点を決める、貴重な体験であった。

二、見学の感想

初めての实習であった、今回は、下野先生について、種子島全島を見学して回った訳だが、その感想として、種子島島民の民俗文化に対する認識の深さに驚かされた。中でも、種子島開発総合センタ

ー、中種子町立民俗資料館など、町や島を上げての民俗資料の保存には、目を見張るものがあり、その他、集落単位で見ても、非常に興味深いものばかりであった。その中から幾つか抜粋して書いて見たい。

まず、南種子町平山の徳瀬、向井里の両ガローである。うっそうとした小丘の中に初めてその信仰を見たとき、何とも言えない、感慨が胸をついた。概説の授業でその容姿は聞いていたが、実物というか、本当にそのものの中に立って初めて、納得できるものとなったと言える。徳瀬ガローで幾十にも積み重ねられた菊面石を見ると、古くからその地が、重要な場所であったことがうかがえる。そして、向井里のガロー山を見たとき、先生の言われた素朴な、森（木）の信仰から、その前に小祠を建て、やがて、立派なコンクリート製の社殿ができる様になるという説に、改めて、民俗学的論証ということを考えさせられた。

次に、宝満神社、浦田神社の、赤米、白米であるが、島の南端と北端における、この女性と男性、赤と白、ひいては、海と陸との対比というものが非常にむしろ思われた。ここに、先にも述べた様な、種子島の両極性というものが見られるのではないだろうか。また、米、稲作の渡来経路もあわせて考えられる。そして、浦田神社の巨大な三つ石を見てその大きさに驚き、自然の造形に愕然とすると共に、先生が言われる様に、三つ石が、かまど神であり、火の神であるならば、そこに太陽信仰があり、稲作との関係も深く、日本人と稲作という問題についても深く考えさせられてしまう。

また、西之表現和の榎本貞彦さんの御宅では、色々な民具を見せていただいただけでなく、お茶や、さつま芋を御馳走になって、民生と伝承者との信頼関係の深さをまざまざと目の当たりにして、民

俗学を行う者のありかたを改めて認識し、自分もかくありたいと思つてやまなかつた。それと共に、先生の言われた「民具を通して、民俗を見る。」という言葉を大切に行きたいと思うのである。

色々書いて来たが、やはり今回の実習は、貴重な体験であり、これから先自分が、民俗学をずっとやって行くかどうかという点については疑問であるが、この様な視点に立って世の中を見るのもまた、おもしろいことであろう。

最後に、武部で墓地に行ったとき、祖霊石のうしろで、蔦にかくれた、田の神石を見つけ、先生に「これを探していた。」と言われたことが、強く心に残っている。

三、調査報告

これまで、今回の実習について概要的に述べて来たが、これより、自分自身で調査したことについての報告に移りたいと思う。

私は、テーマとして村落神について調査した訳だが、調査そのもののしかたを良く分からず、下準備も不十分であったため、満足のない結果は得られなかったが、種子島島民の温かい情に支えられて、なんとか、調査らしきものを作ることができたようである。

村落神について、西之表市の大崎、大広野、浅川、国上の四地区をまわったが、国上については、伝承者探しに手間どり、村落神については、調査できず、興味深く思っていた供養の石についてしか聞けず、実際には、三地区になってしまったが、その三地区について書いていきたい。

まず、最終日に行った西之表市の大崎についてである。大崎は、種子島における、製塩業の草分け的地であり、火の神である天照大

神を祀る、大崎塩釜神社（集落民は、大崎塩屋神社と呼んでいる。）を集落民全員で祀っている。塩屋神社境内には、本殿、拜殿のほか本殿横に山の神、拜殿左手前に牧の神を祀る小祠があるが、牧の神は、十年程前、道路拡張工事のため現在の位置に移されたものである。

塩屋神社について書く前に、これらの山の神、牧の神について見てみることにする。先に述べたように大崎は、製塩の地であり、その集落構成員は塩戸（塩焚き人）であった。このことを大前提とし、種子島におけるマキに注意して見る必要がある。塩戸にとつて、そのマキは、製塩に欠かすことのできない焚き木と、塩を運ぶのに必要であった牛馬を供給してくれる非常に重要な土地であり、彼らの生活は、製塩によって支えられ、製塩はマキによって支えられていたと言えるのである。したがって、そこからマキの信仰が発生しうる訳だが、それが、焚き木（あるいは、製塩に限らず、生活全般におけるものかもしれない）を供給してくれる山に対する山の神信仰とまた、塩を運び、その他自分たちのために働いてくれた牛馬のための供養を司る牧の神とに分化し、現在の様な、様相を示していると言える。その牧の神であるが、その小祠はたいへんおもしろく、塩屋神社より南に約百餘程行った所にある。祖霊石といふしよに一体の石塔で祀られる。牛馬供養の石の本殿的性格を帯びており、以前、この小祠が塩屋神社境内でなく、さらに北、百餘程の所にあったときは、いったいどうであったか、あわせて考えさせられた。

これらの小祠における、祭り、その他は、塩屋神社のそれと同一であるため、後で述べるとして、これより塩屋神社そのものに移りたいと思う。種子島に初めて製塩技術が伝えられたのは、六代島

主、時充の時代であり、鎌倉より連れて来た、貝太郎、貝次郎、貝五郎の三兄弟によると伝えられており、大崎集落には、三人の子孫と称する家がある。(墓地が三つに区分されているのは、そのせいだと言っ人も居た。)

大崎集落民は、大崎塩釜神社建立以前、塩焚きを始めてから、明治三十三年二月に、その幕を下ろすまでずっと火の神をお厨子に入れ、塩釜のそばに安置していたが、明治三十四年には、釜地の跡に、社殿をつくり、火の神である天照大神を祀るようになったが、現代の社殿は、大正七年に共有地の一部を売って、改築したものである。

大崎塩釜神社には、特定の神官は居らず、一年交替の持ち回りで、神主(カンヌシ)、釜司(カマジ)を選出し、祭り、清掃など、神社の全責任を神主に一任し、昔は、塩焚きの全責任を釜司に一任していたが、現在では、神主の補佐として、祭りの進行を手伝っている。神主は、以前は隠居した人であったが、現在では、五十以上の年輩の人を選び、釜司は、二十代後半から三十代と比較的若い人を選出している。このことから考えられることは、塩焚きの労働力というものが大変なものであり、若い人の力が必要であったということと、集落を上げての製塩であり、塩を焚くためには、集落が一つに成らなければならず、そのため、年輩の者と若い人にそれぞれ役割を与えることによって、その年代、世代の違いから起こる、摩擦を未然に防ごうとする、分権の思想であると思われる。

神主、釜司とも、その禁忌として、一年間四つ足のものは食べない様にし、いつも、身の清めという点に注意していなければならぬ。神主、釜司の年季は、一年と書いたがこれはあくまで、基本的なもので、その年季途中に、不幸があった場合は、すぐ次の人と交

替しなければならず、知り合いの人に不幸があった場合でも、身内以外の葬式への参加は認められず、もちろん、葬式の御馳走も食べられないとされ、そのケガレの範囲外に居なければならぬとされている。では、神主、釜司に関係なく、集落に死人が出た場合はどうするかというと、塩屋神社の入口に真竹を張り、だれも入れない様にし、一週間そのままにしておくそうである。

神主の主な仕事に、社殿の清掃があり、その際、神体が上がって掃除することが許されているが、釜司には、これが許されず、集落民も神体に乗ることを禁じられているため、これを見ることができないのは、神主のみということになる。では、その清掃であるが、毎月一日に行われ、この日神主は、だれにも会わぬよう、朝早く、まず海岸に行き、海水を手で奇数回身体にかけ、身の清めをした後、シュービンに海水を入れて神社に行き、ケダの葉を用いて、その海水を拝殿の隅々に振り掛け、清めをした後、行くとされている。この家から海岸、そして神社まで行く間に、だれかに会ったり、見られたりしたら、最初からやりなおさなければならぬとされており、こういった例は、崔先生が言われた、韓国の事例と共通のものであると言えよう。

このように一日には、神主が社殿の清掃を行う訳であるが、集落民も、この日参拝の義務があり、一日、十五日、二十八日の月三回は、欠かさず参拝している。これは、特異な例であるが、私が御伺いした伝承者の一人である、平原末治さんのお宅には、この塩屋神社の代わりとされる神棚があり、毎朝それを拜んでいるそうである。この神棚は、集落中探しても、他の人の家にはなく、ここだけである。種子島には、養い親というものが戦中まで、盛んに行われていたが、この平原家は、島主種子島家の養い親をしたことがあ

り、当時の種子島家の産着を見せてもらおうという、大変な幸運に恵まれた。

話が横道に逸れてしまったが、ここで塩屋神社に戻りたいと思う。

つぎに、祭りであるが、祭りは、春、夏、秋の年三回行われる。

春は、旧二月十三日に行われ、所謂、春祭りであり、祈願祭である。夏は、旧七月十三日、夏祭り、六月燈であり、秋は、旧十一月十三日、秋祭り、願成就祭であるが、その他、新十二月三十一日には、餅と御酒をもって塩屋神社に参拝したのち、釜司宅によって宴会が行われ、明けて、一月二日には、三十一日に、御供えした餅を、皆で平等に分けて食べる、塩屋祝（系図祝）が行われる。いずれの場合にも、国上より神官を呼び、神主、釜司を中心に、その祭り行事を行っている。

最後に、この大崎塩釜神社に纏わる話に、「酒樽の話」というのがあるが、これを紹介しておくことにする。大正六年のとき、大崎甚之助という釜司が、早朝、清めのために海岸に降りたところ、樽が打ち上げられているのを見つけた。樽には、長崎県彼杵郡樺島新町、杉田増次の名が書かれていたため、問いあわせてみると、難病で苦しんでいたら、白髪の老人から天照大神に祈願すれば直るので、樽に酒を入れて流しなさいと言われたので、その神社に奉納してほしいと言ったことだったので、甚之助は、言われた様に奉納し、この樽は、今でも本殿に安置してあると言っていることである。

大崎について長くなりすぎたが、続いて、大広野に移りたいと思う。大広野は、大崎から南に徒歩で五分程の所にある土族集落であり、オオヤマズミの神とウケモチの神の両神を祀る。大広野神社は、奥神社の分社であり、オオヤマズミの神は山の神、ウケモチの

神は穀物の神である。

大広野神社建立に纏わる話に、カワグチヘイイチという者が、夜イカ捕りに浜に降りたところ、あとから、大炬火で道を降りてくる者があった。明朝確かめに浜を見に行ってみると、そこには、大きな馬の蹄の跡があり、巻物があったため、そこを祀る様になった、というのがある。

大広野神社も、大崎塩釜神社同様、特定の神官は居らず、祭りのたびに、国上から神官を呼び、その手助け、および、神社の清掃などを受け持つ班長を、一年交替で選出している。この班長は、戦前まで神主（カンヌシ）と呼ばれており、その性質も、大崎のそれと同様であり、やはり、年季は一年と言うものの、途中で不幸があった場合はすぐ交替しなければならぬ。

祭りは、毎年旧一月七日に行われ、餅、魚、大豆などを供え、国上から呼んだ神官に祝詞を上げてもらっている。

大広野神社は、二、三十年程前からあまり祭りも行われないようになっていそうであるが、隣接する集落である大崎においては、塩屋神社がしっかりと伝承されており、この両集落の信仰伝承の差が、興味深く思われてならなかった。

次に、大崎同様塩戸集落である浅川についてであるが、浅川においては、浅浪神社を集落民全員で祀っており、浅浪神社は、火の神である天照大神を祀っている。

浅浪神社においても、上記の両集落同様、特定の神官はおらず、祭りのたびに、安城から神官を呼んでおり、集落における神社および、神社本殿横のえびす神社の責任者である、神主（カンヌシ）、釜司（カマジ）を、漁協の中の六人組から一年交替で選出している。戦前は、巫子さんで神主をしていた人が居たが、その人が死ん

だため、今のようない形体になったということである。

やはり、神主、釜司は、禁忌として、四つ足の物は食べないようにしており、年季途中で身内の不幸があった場合はすぐ交替しなければならぬ。

祭りは、旧三月二十九日の祈願祭と、旧十月二十九日の願成就祭の年二回であるが、以前は、一月十五日に、破魔祈禱と、コノミヤジョウが行われていたらしい。そのほか、えびす神社には、毎月十五日と二十八日の二回、えびす様係の人が一人で行き、清掃などを行っている。

この浅浪神社における調査は、初めて自分自身で行った聞き書きであったため、突っ込んで聞けないのが、非常に残念である。

メインテーマの村落神については以上の三地区で終わりであるが、それに合わせて、供養の石についても調査しているので、上記の三地区に、国上を加えて書いてみたい。

供養の石とは、神道によって広められた、農作業中に過って殺してしまった虫に対する、供養のための石であるが、これに地域によって、長い年月の中、独自の発展と意味付けがなされている。この顕著な例が浅川の供養の石である。

浅川の供養の石は、その祭りを神官によって行うところは本来通りであるが、その性格というものは、祖霊石化している。この地で三人の伝承者に話を聞いたが、三人とも、あの石は、何もなかった浅川集落に、昔の人たちが、塩焚きという苦勞をして、田や、畑の土地を島主から貰ってくれたことに、感謝して、その昔の人たちを祀ったものである、と言っていた。これは明らかに、供養の石そのものの意味が薄れ、浅川の人々の考え方で発展し、浅川化していると言える。

つぎに、大広野の供養の石があるが、ここでは、集落の出入口に三体の石塔が立っており、二十年から三十年程前までは、旧十月頃、虫けらの祭りというのを行っていたそうなので、その意味的变化はないと言えるが、ここで、この石を祀っているのは、神官ではなく本願寺の僧侶であった。このことから、この供養の石は、神道の手を離れたといえる。しかし、現在では、この信仰はなくなりつつあり、この石がどこにあるかも知らない人が増えて来ているそうである。

続いて、大崎、国上と見て行きたい。

大崎の供養の石は、祖霊の石と牛馬供養の石が同一になったものの隣りに立っており、その石が何であるのか知っている人も少なく、特定の祭りなどはない。(隣の祖霊の石を拝むついでに拝む人がいる程度である。)管理者が神官か、僧侶かも分からなかった。

国上における供養の石も村の出入り口に立っていて、その意味としては、虫、動物の供養と共に、伝染病が村に入らない様にといわれており、祭りは、神官が司どって一年に一回、餅をついて行っていたが、六十年程前に無くなったそうである。おそらく伝染病大流行のときに、その意味付けがなされたのであろうが、どちらが最初からの信仰であったかは分からない。

このように四地区だけでも、供養の石は多様な変遷を見せており、たいへん興味深いものであった。

以上をもって調査報告を終わりとするが、この調査において、民俗調査の大変さと、おもしろさを理解することができたような気がする。

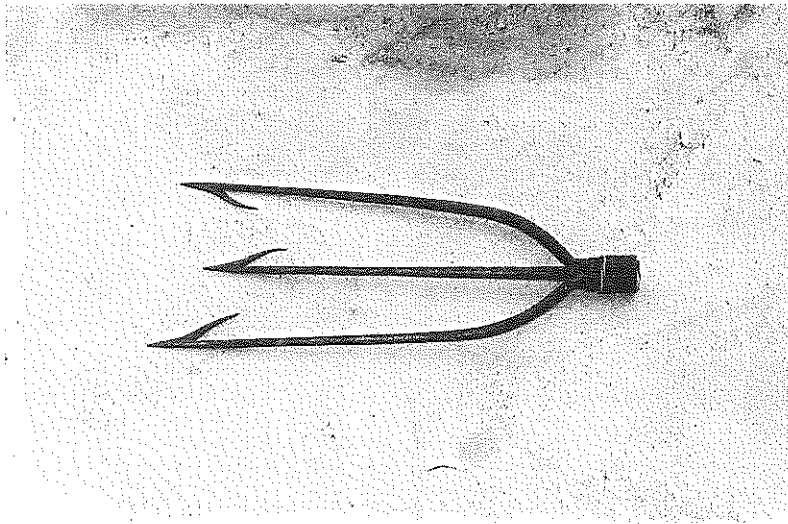
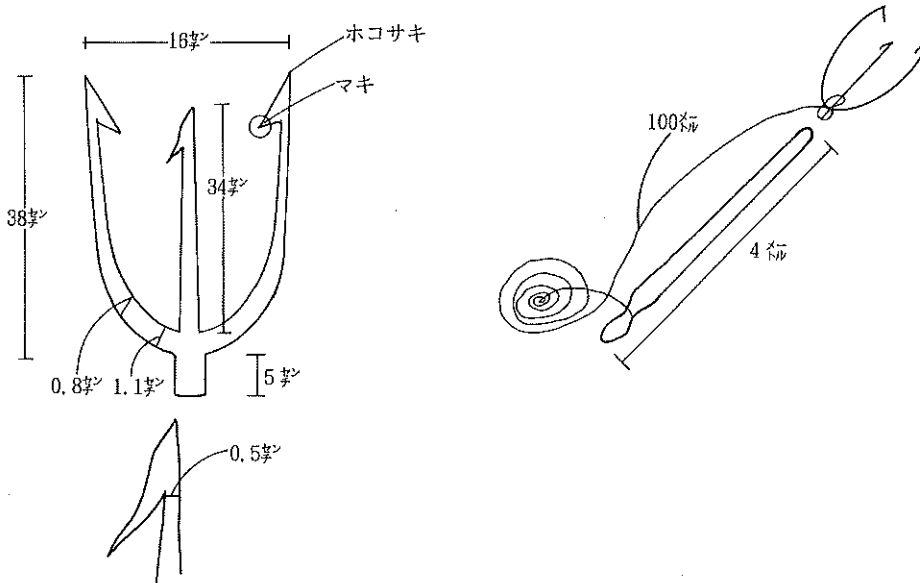
四、結びとして

今回の実習において、種子島の村落神について調査した訳であるが、いったい村落神とはどういうものなのかという疑問が常につきまとっていた。その集落全体で祀っているものが村落神であるとすれば、その集落にある神社のみならず、祖霊の石、供養の石、そのほかにも、えびす神などもその範疇に入る訳であり、非常に多様なものであるといえよう。しかし、今回の調査においては、ただ、神社の紹介に終わってしまい、もっと広く、しかも突っ込んだ調査の必要性というものを痛切に考えさせられてしまった。

ここで、この調査の難しさというものを痛感する訳であるが、また、先にも述べたようにそこには、非常におもしろい一面も同居している。先生と伝承者の人々の関係を見てもそうであるし、自身、今回の実習で御世話になった人々に礼状を出したのであるが、それに、大変丁寧な御返事をいただいて、何とも言えない思いであった。

最後に文化とは、人と人の交わりであり、この学生時代に、その人を対象とした民俗学を学習できることを誠に楽しく思う。

サワラオーツキのホコ先 (中種子町浜津脇)



サワラオーツキのホコ先 (中種子町浜津脇)

サワラとりに使う。まず、その大きさに驚かされたとともに、とても保存状態がよかった。

西之表市東北部の神社

鹿児島民具学会会員 田中 勉

一、はじめに

本稿は平成元年十二月の調査報告である。

種子島には、牛馬を放牧していた牧(まき)が非常に多かった(注1)。牧のうち、塩を生産する集落に与えられたものを塩屋牧という。種子島の製塩方法は海水を直に煮る海水直煮製塩(注2)である。製塩集落は、海水を煮るための薪を牧内の木々を切つて充て、牧に放していた牛馬に負わせて運搬した。

『種子島家譜』には「初めて塩竈を建つ。第一は西ノ村の立石、第二は国上村の湊、或いはいふ、第一大崎、尼泊、第二久志、瀬戸、竹之川なり」という記事がある。西之表市の北部にある湊は、古くから製塩集落であったようだ。今回は、湊の他の製塩集落の調査を目的とする。製塩集落の特徴を際立たせるために、その他の生業の集落も比較の対象として扱うことにした。しかし、調査期間の関係で、神社の調査、比較をするのが、精一杯であった。しかも、地域を西之表市の東北部に限定することになった。

以下に報告を記すが、先に調査箇所を列挙しておく。

- ① 安納(軍場(ぐにわ))
- ② 伊関(浜脇)
- ③ 伊関(伊関)

④ 伊関(沖ヶ浜田)

二、調査報告

1 安納(軍場(ぐにわ))

軍場は、士族が多く住んでいた地域であるが主として農業を生業とする集落である。

集落の神社に大山津美神社(おおやまつみ)がある。

大山津美神社

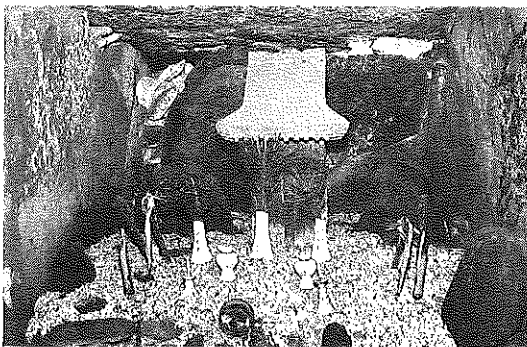
〈所在地〉

集落の中心を緩やかに曲がりながら南北に走る道路を東側におれ、住宅の間を抜けた所にある。鳥居の全面は広場になっている。秋祭りのとき、この広場の東側の少し高く作られた舞台の上で踊りが奉納される。

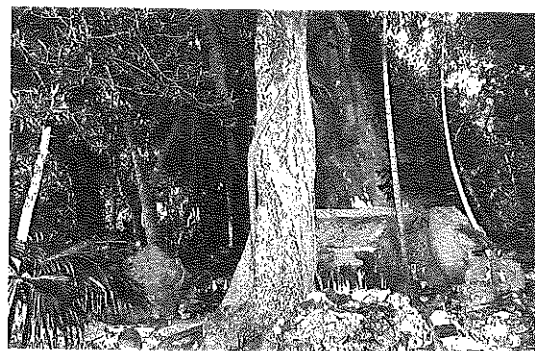
〈祭 神〉

大山祇命、木花咲耶姫。

神社の本殿は拜殿の北側に位置する。大山津美神社の特徴になるが、本殿に辿り着く



大山祇



大山津美神社 (安納(軍場))

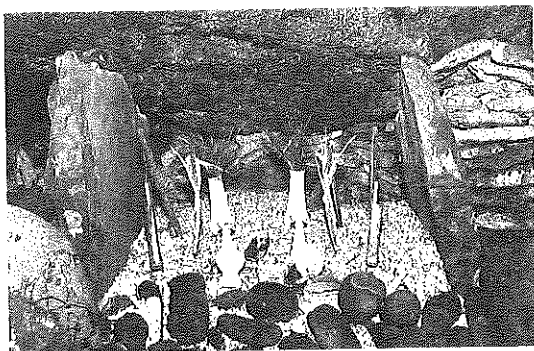
までに一つの谷を越えなければならぬ。険しい道程を何時間も踏査しなければならぬ程のものではないが、拝殿から北側に向かって階段を下り、小川に架けられた、これが橋だと気づかないくらいの小さな橋を渡ってから階段を登り、さらに道を下ると本殿に行き着く。本殿への下り坂の途中で右（東側）におれ、細い道を下ると水の湧き出ている小泉がある。この小泉は禊場として機能している。

本殿には大山祇、木花咲耶姫が安置されている。大山祇は左右と上を大きな一枚岩で囲まれ、木花咲耶姫は左右を一枚岩で上を珊瑚で囲まれている。両神とも岩や珊瑚によって囲まれた空間に、びっしりと貝殻が敷きつめられている。本殿の周囲は珊瑚、小石の垣があり、垣の内側は白砂が敷かれている。その周囲には鬱蒼と木々が生い茂っているため、異様な雰囲気を感じさせている。

〈役員〉

◇神主

集落民（一人）が一年交代で行う。正月二日に交代する。二日の朝、新旧の神主は一緒に海岸に向かい、新神主にこれから毎月の一日と十五日に行わなければならない拝礼までの所作を教える。昼から旧神主（年が明けるまで神主として働いていた人）の家に新旧神

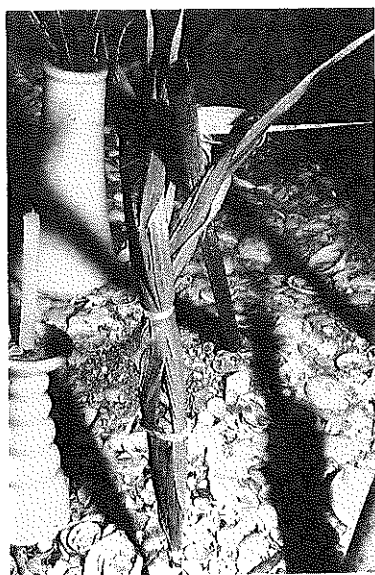


木花咲耶姫を祀る

主と氏子総代、集落三役が集まり交代の儀式を行う。この時、神主の家の床に飾られる神社の系図が書かれた巻物や祭祀道具一式が新神主に渡される。その後、巻物を持った新神主を先頭に新神主の家に向かい、一同で酒宴をはる。この巻物や祭祀道具は神主の家の床に祀られ、神主は朝夕、必ず手を合わせる。そして、巻物の前に置かれた三方の盃に注がれた水を毎朝換える。

部落費（種子島では差別的意味合いなく集落のことを「部落」という）を納めれば、集落民として認められ、神主になる資格が与えられる。家に不幸、例えば同居者の死亡があった場合、次の年の神主には選出されない。また、神主をしている家で不幸があった場合は、途中から氏子総代と交代する。

神主になった人は毎月一日、十五日に大山津美神社の供え物を交換する。朝四時半ごろに海岸に出て潮水と、浜砂（砂利）をとってくる。潮水は竹筒に入れて供える。砂は竹笹に包み、笹苞にして供える。本殿下の小泉で松を差す花立ての水を換える。



笹苞

秋十月の願ほどき（願成就ともいう）の前日に海岸から貝殻を集め、大山祇、木花咲耶姫の安置場所に散布する。最近では海岸に貝殻

がなく、浜脇まで取りに出掛けなければならない。

◇氏子総代

軍場の集落民のほとんどが大山津美神社の氏子になっている。氏子のなかの二名が氏子総代になる。一年毎に交代で行う。氏子総代は大山津美神社に関する集落の代表者になる。神主の代行としても機能する。

◇集落三役

会長一名、副会長一名、会計一名の三人が集落三役である。大山津美神社に関することだけでなく、集落の全ての行事に参加する。集落民が一年交代で行うことになっているが、実際は同一人が何回も勤めている。

〈祭り〉

祭りは春四月の願たて、秋十月の願ほとき・秋の大祭の年二回ある。

◇四月の願たて

世間願、疫癘願を行う。世間願は農作物の豊作を祈願する。疫癘願は集落に疫病の侵入を防止することを祈願したことから始まったが、現在は集落民が健康できるように祈願する。

集落の神主、氏子総代、集落三役の六名のみで祭りが執行される。詳細な日程はその年毎に決められる。現在は執行者の都合のよいように、日曜日に行われている。

◇十月の願ほとき・秋の大祭

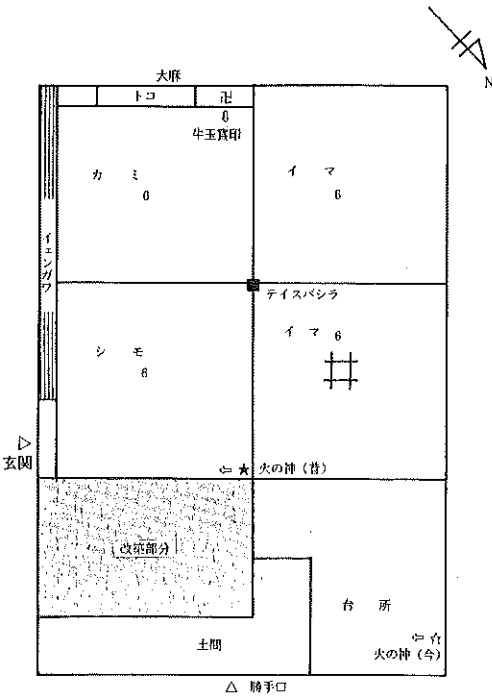
願ほときは願成就ともいわれる。四月の願たての祈願をほどく。願たてと同様、集落の神主、氏子総代、集落三役の六名のみで執行される。前日に神主は、海岸から貝殻を集め、大山祇、木花咲耶姫の安置場所に散布する。当日の早朝に集落民総

出で、海岸の白砂をとりに行く。この白砂は神社本殿、拝殿の周囲に散布する。昔は白砂を集落民が担いで運ぶ、とても辛い作業であった。

願ほとき(願成就)が終了すると、秋の大祭が行われる。この行事は集落民が総出で行う。神官を招いて祭りが行われる。この時、神社に願成就の旗を奉納する。古くなった願成就の旗は神社の注連縄としてなわれる。

神社の系図が書かれた巻物と祭祀道具一式が集落の神主の家でどのように保存され祀られているのかを、平成六年の神主である平原美良さん(昭和六年六月二十五日生)のお宅で見よう。八十年位前に百二円で購入した家である。

玄関を南東に面して建てた田の字型の家。玄関を入れてすぐの土間は改装して大きくしている。各部屋の名称を、以下に列挙してみ

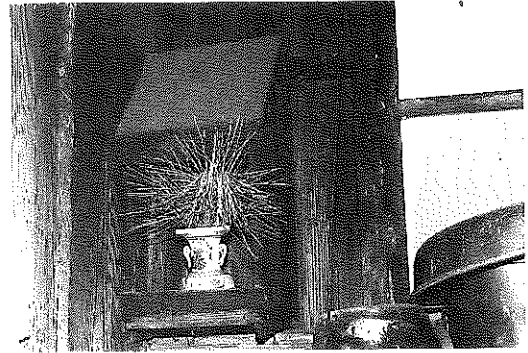


平原美良家の略図

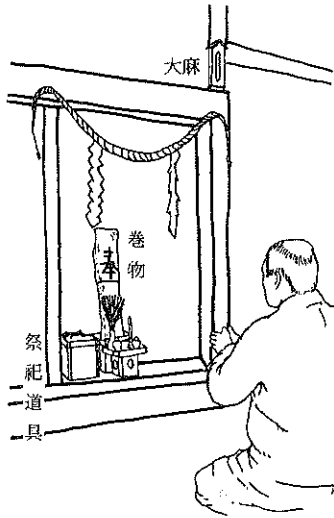


床に祀られる巻物

よう。テイスバシラを中心に南側の部屋はトコノマ、その西側はオク、トコノマの北側はシモという。オクの北側はイロリがあった部屋（名称不明）。この四つの部屋の中心の柱をテイスバシラ（亭主柱）という。法華宗の家では（種子島のほとんどが法華宗）、テイスバシラには家を守護してくれる年札を貼る。トコノマには、床、仏壇がある。床の柱には大麻が飾られている。大麻はなかに天照皇大神と書かれた札が納められている。供え物などは一切しない。正月毎に新しいものと交換する。



平原美良家の火の神



〈所在地〉
浜脇神社

2 伊関〔浜脇〕
浜脇は、製塩を主とする製塩（塩屋）集落である。塩炊きの神様が祀られる浜脇神社がある。

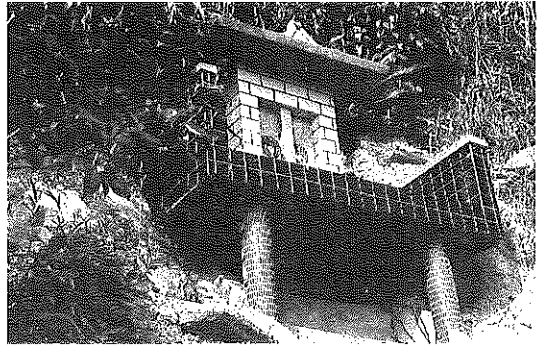
台所と風呂の境の柱に火の神が祀られている。火の神は松の葉をいれた花立だけが祀っており、神体はない。願成就の旗でくるまれ、前面に奉納と書かれた箱のなかに神社の系図が入っている。その前には三方に乗せられた供え物（御神酒、盃に注がれた水、花立てに挿された松葉、蠟燭立て）がある。その一郭には注連縄が張られている。神主の家では巻物が祀ってあるトコノマとシモノマの襖をきっちり閉めてはいけない。必ず、数センチ開けておくことになっている。

集落を南北に走る道路を北上し、集落の中心で東側におれ、海岸沿いの細い道をさらに北上すると西側（左手）に見える。

〈祭神〉

天照皇大神。

拜殿は道より少し高くなったところにあり、階段を数段上り鳥居を潜る



浜脇神社本殿〔伊関(浜脇)〕

とすぐツマ入り屋根の拝殿に

あたる。鳥居の後ろには自然石をくり抜いただけの手水鉢があり、西側(拝殿に向かつて左側)には、井戸がある。

拝殿後ろの急な階段を上ると黒タイルを貼った台座に白タイル貼りのコンクリート製の本殿が安置されている。神体は不明。

拝殿の左奥には六つの石塔、右奥には六つの石塔と小祠が一つ安置されている。神社の周囲は石垣で囲まれているが、右の一郭だけ珊瑚で囲まれているところがある。ここには「濱脇始祖之奥津城」と刻字した石塔に注連縄をはったものが安置されている。これは、浜脇集落の開拓者を祀った石塔で、現在は浜脇集落の守護神として機能している。

製塩集落である浜脇集落が塩焚きの神様として天照皇大神を祀っている神社である。大正九年に現在見られるような立派な本殿と拝殿を造った。

〈役員〉

◇神主

集落民が一年交代で行う。新暦の一月五日に神主が交代する。この日、新神主は旧神主から神社関係の書類と巻物を渡される。その書類と巻物は床に飾り、朝夕拝む。現在は集落三役が交代する三月五日に神主の交代も行われている。神主の補助として手伝い人所帯

が二人いる。神主の交代と同時に交代する。

◇氏子総代

集落民の全員が氏子になっている。そのなかから氏子総代が五人選出される。現在は班長と兼任である。

◇集落三役

公民館長(部落会長)一名、副公民館長一名、会計一名の計三人が集落三役である。集落の行事の日程や内容などは全てこの集落三役によって決められる。

〈祭り〉

春祭りと秋祭り(願成就)の年二回行われる。

◇春祭り

春祭りは四月に行われる。詳細な日程は毎年変わり、集落三役が決定する。平成六年の春祭りは新暦四月二十七日に行われた。五穀豊穣、豊漁、無病息災を祈願する。神前には洗米、魚、野菜、大豆、塩、焼酎が供えられる。現在は供えられなくなったが、昔は波打ち際の清い白砂を笹の葉に包んで供えた。祭りは集落の神主と手伝い所帯二名、氏子総代の五名、集落三役の三名の計十一名で執行される。

◇秋祭り(願成就)

秋祭りは九月に行われる。春祭りと同様に祭日を集落三役が決定する。平成六年の秋祭りは新暦九月二十二日に行われる。

午前中は春祭りを執行した十一名と伊関の柳原の役員が参加して行われる。春祭りの願をほどく。これを願成就という。秋祭りは春祭りの供え物に餅を加えたものを供える。願成就が済むと、浜脇神社右奥の浜脇集落の開拓者を祀った石塔の前で祭りを行う。これを先祖祭りという。

この二つの祭りが終了し、午後になると国上から神官を招き、氏子総出で秋祭りが行われる。

浜脇の共同墓地には、浜脇集落の開拓者について刻まれた碑文がある。少し長いがここに記しておこう。

鎌倉平兵衛氏の追歴

濱脇地域の元祖であり、又鎌倉家の元祖でもある平兵衛氏の遺骨は鎌倉家の此の納骨堂の中に納骨安置されております。平兵衛氏は濱脇地域の開拓先駆者として寛暦三年の四月初めて塩炊きの道を教え給い其の他凡ゆる仕事と取り組み濱脇地域発展の為につくされた業績は多大にして其の功績を讃え其の名を永遠に後世に遺す為に大正十年十一月一日濱脇神社拝殿敷地内に平兵衛の濱脇元祖の奥津城として濱脇住民一同謹んで碑を建立して濱脇地域住民の守護神として敬神敬祖の崇拝のもとに、先祖祭りを執り行っている。この度碑石を建立し子々孫々に伝えようものである。

平成三年十二月十五日

子孫代表 鎌倉政則

濱脇神社の秋祭りには願ほどき（願成就）と先祖祭りが行われていたことがわかる。しかし、この記述からは先祖祭りを秋祭りと同時期に行うようになったのは大正十年だと推測はできるものの、それ以前に単独で先祖祭りが行われていたのか、といった大正十年以前の状況はわからない。濱脇で最も年長であり鎌倉平兵衛氏の子孫代表でもある鎌倉政則さんが大正六年生まれで、大正十年以前の伝承を聞くことはできなかった。

3 伊関〔伊関〕

伊関は土族集落で、半農半漁の集落である。伊関には伊関神社がある。

伊関神社

〈所在地〉

沖ヶ浜田から北上して柳原に抜ける道の西側にある。道に面して木製の鳥居がある。本殿からは伊関集落が一望に見渡せる。

〈祭神〉

大山祇神。

鳥居を潜り山頂に向かって一〇〇段の真っ直ぐな石段を上ると拝殿がある。拝殿から急斜面に造られた石段を百十二段上ると本殿がある。拝殿、本殿ともに南東を向いて建っている。周囲を珊瑚の垣で囲まれた本殿はツマ入りのコンクリート製である。本殿のなかには鏡が一枚納められている。

伊関神社は伊関集落だけではなく、伊関校区全体の氏神



伊関神社本殿



伊関神社 〔伊関（伊関）〕

が祀られている。また、国上の奥集落にある奥神社の分神であるという。

〈祭り〉

祈願祭、春の大祭、夏祭、秋の大祭（願成就）で年に四回行われる。

◇祈願祭

祈願祭は新暦二月十一日の建国記念日に行われる。校区全体の豊作と集落の無病息災を祈願する。

◇春の大祭

春の大祭は新暦三月二十六日に行う。祈願内容は祈願祭のときと同じなので、これといって大きな祭りは行わない。集落内で小さく行われるのみである。

◇夏祭

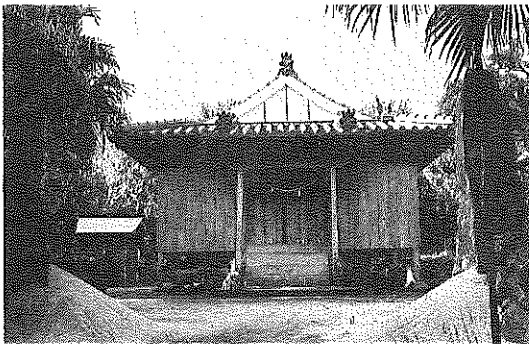
一時、中断していた時期があるが、現在行われている。

◇秋の大祭（願成就）

秋の大祭（願成就）は新暦十月二十六日に行う。祈願祭は願たてをし、この祭りで願をほどこ。

4 伊関（沖ヶ浜田）

沖ヶ浜田は塩屋牧を与えられ、塩を生産していた製塩（塩屋）集落である。集落の神社、沖ヶ浜田神社は塩焚き



沖ヶ浜田神社（伊関（沖ヶ浜田））

の神様と考えられている天照大皇神を祀っている。

沖ヶ浜田神社

〈所在地〉

軍場から沖ヶ浜田に抜ける道を西側に少し入った所に沖浜田神社がある。

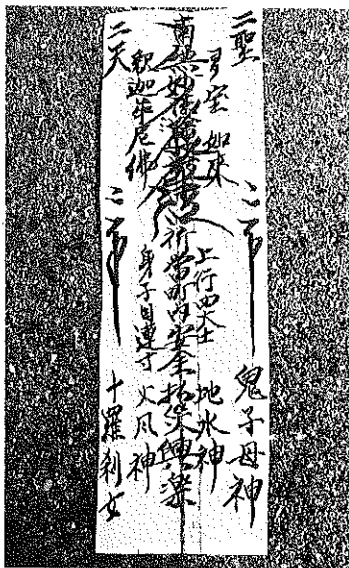
〈祭神〉

天照大皇神。

拝殿前には根元に白砂が盛られた二本の石柱がある。白砂は集落の神主が海岸の砂を運んでくる。両石柱の後ろに自然石の手水鉢がある。拝殿の周囲は石垣で囲まれ、その空間には白砂が散布されている。この白砂も海岸の砂を撒いたものである。本殿は拝殿のすぐ後ろにある。

拝殿の東（右側）には石柱があり、竹に挟んだ札を立てている。

この石柱は沖ヶ浜田神社と直接関係はなく、軍場の僧侶が集落安全を祈願するものだという。札には如来、釈迦牟尼佛に始まって、鬼子母神、地水神、火風神、十羅刹女といった神々の名が記され、當町内安全私災興樂の祈願が行われている。



札

また、拜殿の西（左側）には井戸がある。神社で使用する水は必ずこの井戸の水を使用することになっている。井戸の脇には白砂を小さく盛ったものが三つあった。これは井戸の水神様の祭りである。

集落の神主が海岸に出て、波打ち際の濡れた砂を取ってきて供えたものである。

〈役員〉

◇神主

集落から一名、一年交代で

神主が選ばれる。神主は必ず集落の全戸を巡るようになっていて、平成六年十二月現在、沖ヶ浜田の全戸数は五十六軒であるから、一生に一度神主をすればよいことになる。神主には世話役として所帯が二人つく。

親族に不幸があった家は神主をしない。また、神主を勤めているときに不幸があった場合、集落の総会を開き、交代する人を選ぶ。一月五日に神主の交代が行われる。氏子総代四名と所帯二名、集落三役の三名と新神主が旧神主の家に集まり、一年の労をねぎらって祝いをする。ここで旧神主から新神主へ神社の系図が書かれた巻物や缺などが入った祭祀物一式が手渡される。祭祀物一式を開封したものではなく、何が入っているのかよくわからない。その後、旧神主を含めた十名を新神主が家に招き、この一年よろしく頼みますと祝いをする。旧神主から受け取った祭祀物は新神主の家の床に飾る。



井戸脇の盛り砂

神主になると神社だけでなく集落内にある牧神の祭りを行わなければならぬ。このことについては後述する。

◇氏子総代

沖ヶ浜田の集落民のほとんどが沖ヶ浜田神社の氏子である。氏子のなかの四名が氏子総代になる。一年交代で行う。氏子総代は沖ヶ浜田神社に関する行事執行の際、集落の代表者になる。

◇集落三役

部落長一名、副部落長一名、会計一名の計三名が集落三役である。集落民の間を一年交代で役が回る。集落三役は集落の行事の決定権をもつ。例えば、神主の交代の際の総会の開会や神社の祭りの日程を決定する。

〈祭り〉

祭りは春秋二回行われる。春の願たて、秋の願ほどきである。

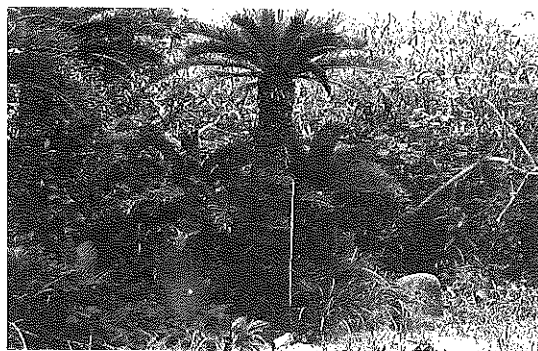
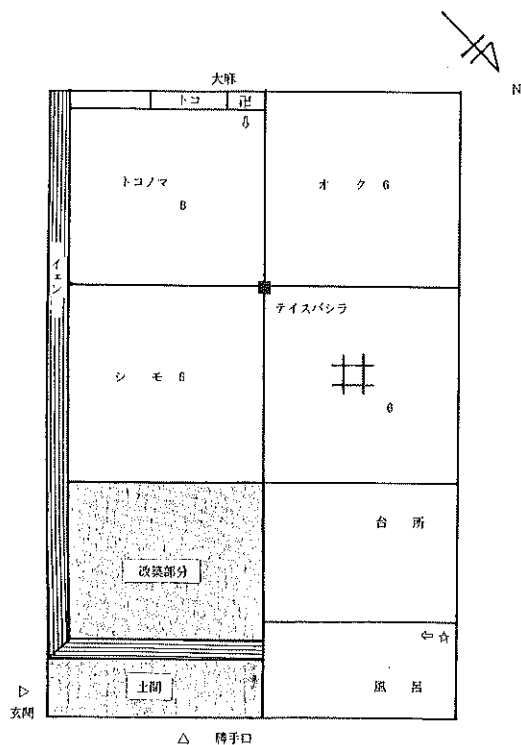
◇春の願たて

旧曆三月二十四日に行われる。五穀豊穣を祈願する。この祭りは集落の神主と所帯二名、氏子総代の四名、部落長の一名で行われる。

◇秋の願ほどき

旧曆九月二十四日に春の願たてと同様の執行者で行うが、国上から神官を迎える。春の祈願をほどこく。

平成六年の集落の神主は沖田栄さん（昭和十二年二月十八日生）である。神主になった栄さんは、神社だけでなく集落内にある牧神の祭りも行っている。牧神の祭りは牧祈禱という。牧祈禱は旧曆六月十五日に軍場の本蓮寺（法華宗）の僧侶を招き牛馬の安全祈願をする。集落からの執行者は神主だけである。祭りの当日、海岸から波打ち際の濡れた砂をとってきて牧の神の周囲に撒く。塩、洗米、

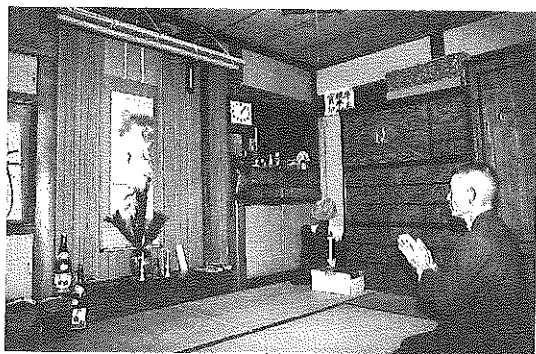


牧の神 (伊関 (沖ヶ浜田))

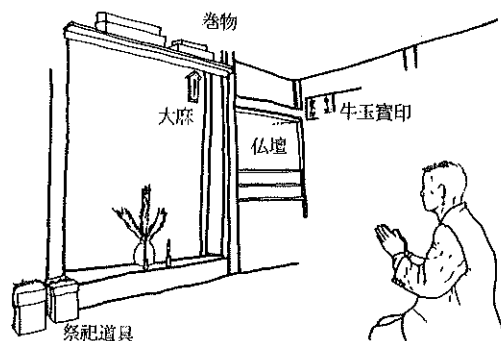
大豆を供える。
 沖ヶ浜田集落は、終戦前まで塩を作っていた。牧内の薪を採って塩を焚いた。塩釜跡が現在も残されている。神社から石垣の道を南に下り、民家を抜けると開けた土地にでる。ここが塩釜跡である。さらに南側には海に通じる細い道が続いていた。海水を汲み、運んだであろう道は既に防波堤によって寸断されているものの、塩釜跡のすぐ前

沖田栄家の略図

は海が広がり、豊富な海水と牧の薪材、人々の労働によって塩が生産されていたことを容易に想像させる。
 栄さんの家は父の代から使用しており、昭和四十五年に柱を新しく改装した。南東を向いた玄関から北側は改装時に増築した部分で、それまでは田の字型の家であった。玄関から入ってすぐの部屋がシモ、その奥(南西)がカミ、カミの隣がイマ、イマの北東もイマという。この部屋にはイロリがあった。中心の柱(大黒柱)をテイスバシラ(亭主柱)という。テイスバシラの北東の柱には、小さな盃と花立てだけがあり、神体のない火の神が祀られていた。カミにある床には、神主が祀る巻物がある。床には大麻が飾られ、その左には仏壇がある。カミとイマの境の鴨居には半紙に「牛玉寶印」と墨字で記された札を貼っている。この札は年末に軍場



床に祀られている巻物



の本蓮寺の僧侶から買う。

巻物は床の上の棚に納められている。朝夕には必ず手を合わせ、拜む。

三、まとめ

①安納〔軍場（ぐにわ）〕の大山津美神社は集落の神社として軍場の人々から厚く信仰されている。報告をした神社のなかで軍場の神社組織は最も機能している。③伊関〔伊関〕の伊関神社は伊関校区全体を守護する神として考えられ、伊関集落の人々はもちろんのこと伊関校区の人の信仰も集めている。

②伊関〔浜脇〕と④伊関〔沖ヶ浜田〕の両集落は製塩（塩屋）集落で、そこにある神社の浜脇神社と沖ヶ浜田神社は製塩の神様として天照大皇神を祭神としている。製塩に携わる人々の信仰を集める神社は塩釜神社が多い。塩釜神社は一般的に、武甕槌神、経津主神、塩釜六所明神〔塩土老翁を祀ったもの〕（注3）を祭神としており、塩土老翁に代表される海の神様としての要素が強いようである。

しかし、西之表市東北部の製塩集落の神社は天照大皇神を主神として祀っているものが多い。また、南種子町の場合も同様であり、種子島の特徴としてよいのではないだろうか。これはおそらく製塩方法の差異から生じてきたものと考えられる。塩釜神社の本尊として知られている宮城県塩釜市では入浜系塩田による製塩が行われ、「この神が全国に分布するようになったのは入浜塩田が各地にひらかれ、その守護神として勧請されるにいたったことが大きな原因となった」（注4）といわれている。

先に述べたように、種子島の製塩は海水直煮製塩が主であった。この製塩方法は入浜系塩田とは異なり、火を扱わなければならない。そのため祭神には、火の神の要素が強く反映しているものと思われる。日の神である天照大皇神を火の神として祀ったと考察される。

現在、製塩集落の神社も他の神社と同様の祭りを行っており、南種子町で聞くことのできる火入れ祈禱のような、製塩集落に独自の祭祀の伝承を聞くことはできない。製塩集落において塩が作られなくなると、製塩に関わる神への信仰は変容し村落の守護を祈願するようになった。もしくは、古くは集落の守護が祈願対象として存在し、そこに製塩の神としての信仰が結びついた、と考えられる。もともとあった信仰に製塩の神の信仰が結びついた時点で祭神が天照大皇神と変容したのかもしれない。そうすると現在の状況はもとの信仰に戻ったということになる。しかし、決定的な資料を提示することができないので、その可能性を示唆するに止めておく。

牧の神と沖ヶ浜田神社との直接的な関係は認められない。牧の牛馬や薪を使用して製塩をしていたが、牧の牛馬の安全を祈願するのは牧の神で、製塩を司る神は沖ヶ浜田神社に祀られ、信仰は全く別々に扱われている。

〔注〕

- 1 大山彦一著『種子島マキの研究』鹿児島県農地部農地管理課 一九五二

- 2 下野敏見著『トビウオ招き』八重岳書房 一九八四 一二〇頁

〔日本塩業大系〕特論民俗 日本専売公社 一九七七

3 宮本常一著「塩と習俗」

(『日本塩業大系』特論民俗 日本専売公社 一九七七) 八一―九頁

4 宮本常一著 前掲書 八一―九頁

伝承者一覽 (敬称略)

安納〔軍場(ぐにわ)〕

・平原 美良(ひらはらみよし) [S 6・6・25生]

伊関〔浜脇〕

・鎌倉 政則(かまくらまさのり) [T 8・3・6生]

伊関〔伊関〕

・榎本 清実(えのもときよみ) [T 8・7・26生]

伊関〔沖ヶ浜田〕

・沖田 進(おきた すすむ) [T 6・12・15生]

・沖田 栄(おきた さかえ) [S 12・2・18生]

聖域としての神社形態

鹿児島県民具学会員 砂田光紀

私たちが神社という二文字からイメージする一般的な姿は、鳥居、参道、鎮守の森、手水舎、そして神殿（社殿）といったいくつかの空間構成要素であろう。中でも本殿は社殿建築の最も奥まったところに据えられるのが普通であり、神々を鎮め祀る場所として神聖な空間を形成する。このような本殿を中心とする神社の建築構造と空間構成は現在では極めて一般的であるが、小祠や社殿を擁する神社が一般化する以前は祭神の拠り所は建築構造物ではなかった。神は定期的に降臨するものとする観念が、神の常在を求め信する信仰形態へと変容したときに、館としての社殿の必要性が生じたのである。では、神の降臨する場所、神社の旧態とはどのようなものであったのか。先史時代の遺跡にさえ鮮やかに甦る私たち日本人の聖域の感覚は、神を畏怖敬虔する基本思想のもとに俗世と神とを結果によって分断することから始まっている。しかし、同時にそこは人間と神との交信の接点として位置づけられていることも見逃せない。聖域としての神の居場所と俗世界との接点には、本来の神社の姿が見いだせるはずである。では、プライマリーな祭祀空間の姿とはどのようなものであったのだろうか。国家を代表する神宮の神々の姿がすべてを物語ってくれるのだろうか。

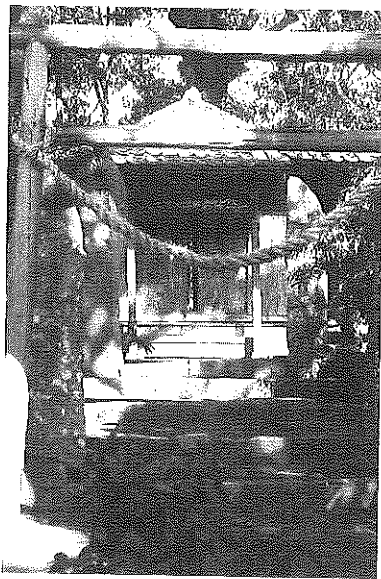
西之表市内のいくつかの神社を訪ねたのは昭和六十年。当該地域の神社には、ほとんどの場合、本殿建築は存在しなかった。木造の

拝殿が神社としての表情を見せているものの、この地域における神社の構造は多彩かつ特異な様相を呈している。神社調査がサブテーマであったために農村中心の調査報告になってしまいが、参考までに漁業も盛んに行われている浦田の浦田神社や住吉の住吉神社も対象とした。これらのうち、社殿建築として本殿を持つのは住吉だけである。寺之門の場合も拝殿裏に真新しい小祠が建造されていたが、拝殿と分離した位置に最近建立されたもので、空間構成としては本殿というよりも、本来の祭祀空間に新たに祠を被せた程度のものであった。

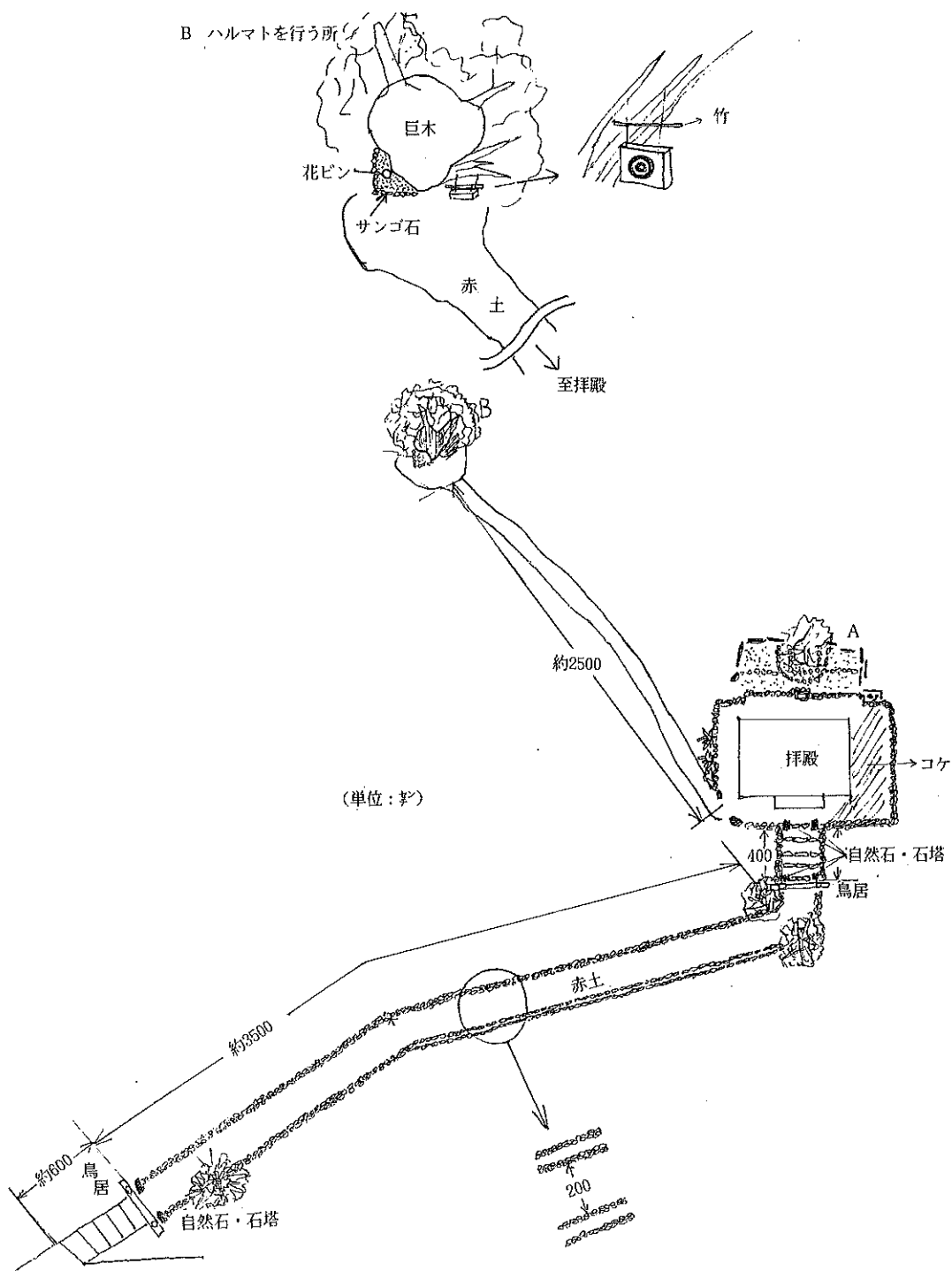
それでは、他の神社の場合にはどうなっているのだろうか。調査した神社のすべてに拝殿が存在した。その奥に広がる神社の中樞の空間構成について個々の事例を取り上げながら、西之表市の神社たちが物語る、神の領域の姿を検証してゆきたい。

事例一 中目神社

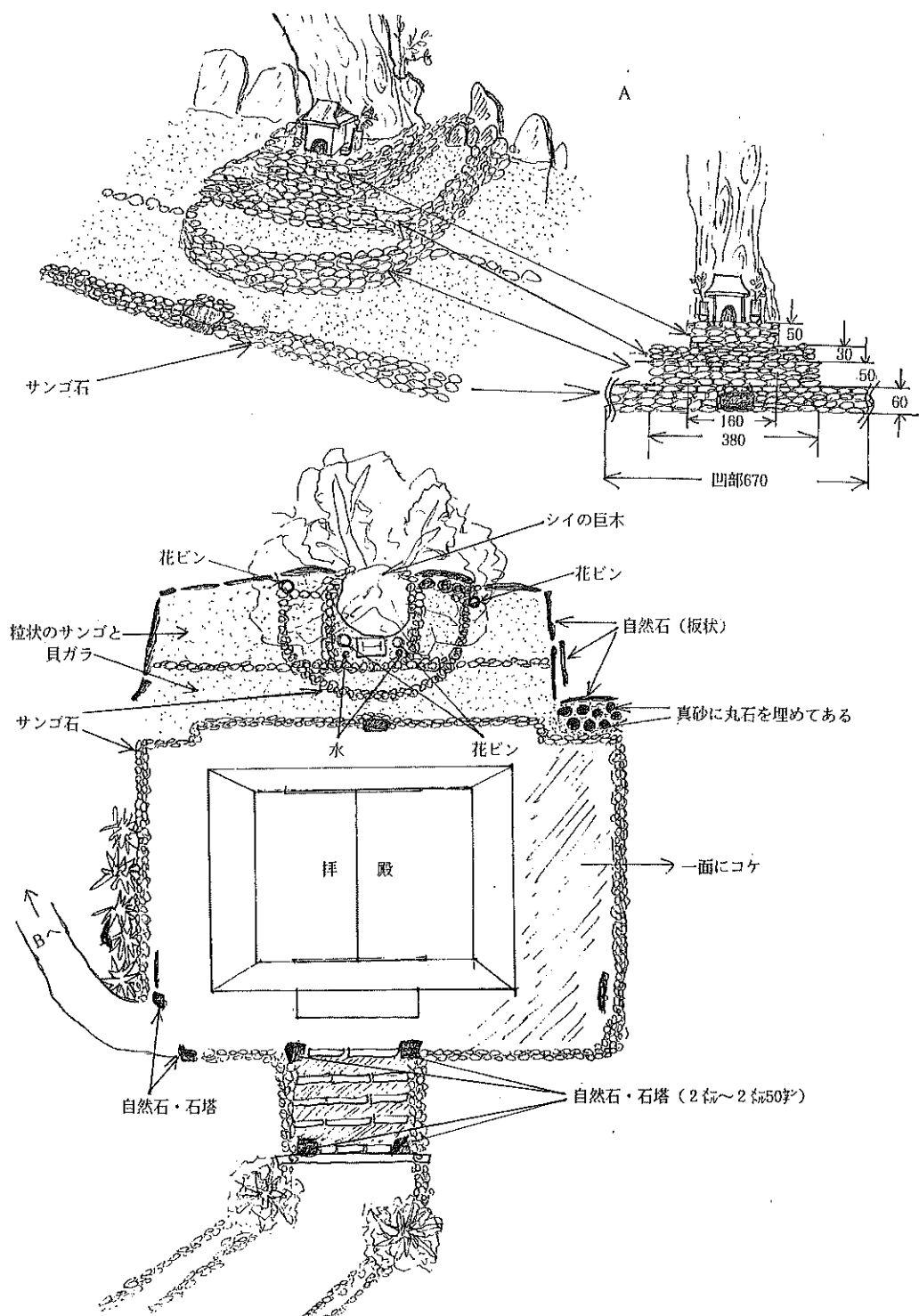
図①に示すのは、西之表市国上、中目の中目神社である。近接す



中目神社・拝殿・石塔・鳥居
(西之表市国上中目)



図①-1 中目神社 (西之表市国上中目)

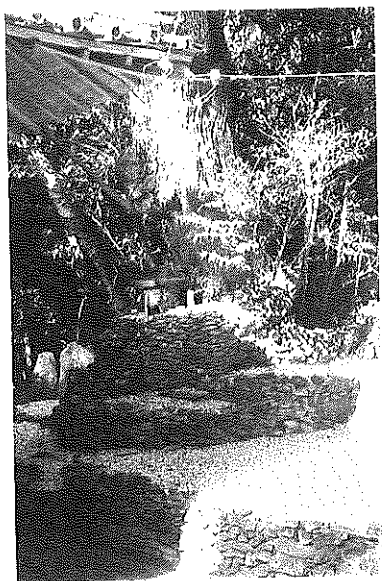


図①-2 中目神社 (西之表市国上中目)

る道路から鋭角に取り付けられた参道は二層ほどの幅員を持ち、拝殿前まで伸びる。参道の両側には丸石が二列に積まれており、参道脇の空間と完全に分離している。参道は途中でくの字型に屈曲している。また、拝殿前で角度を急に変えており、拝殿に向かっては緩やかな数段の階段によって接続している。拝殿正面に至ると、左右に高さ二層〜二・五層をはかる細長い自然石の石塔が立ち、階段の上下で合計四本が神社の入口にゲート性を持たせている。鳥居は木製のものがその石塔の直前に立っている。参道入口の鳥居はコンクリート製でまだ新しい。

拝殿の周囲は参道と同様に石積みによって周囲と遮られているが、拝殿正面に向かって左側に一箇所途切れた部分があり、ここから約二・五層ほど森が切り開かれている。ここには大木があって、その根元にサンゴ石を敷き詰め、花瓶が供えられている。大木の低い枝には木骨紙貼りの的が描かれた箱が下げられており、ここはハルマト（春的）が行われる場所であるという。

拝殿の裏側に回ると一本の椎の巨木を中心に、ステージ状の構造物を見ることができる。椎の巨木を軸に何層にもサンゴ石が積み上

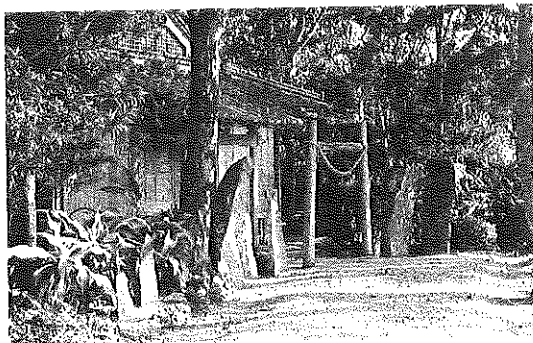


中目神社の拝殿裏
(西之表市国上中目)

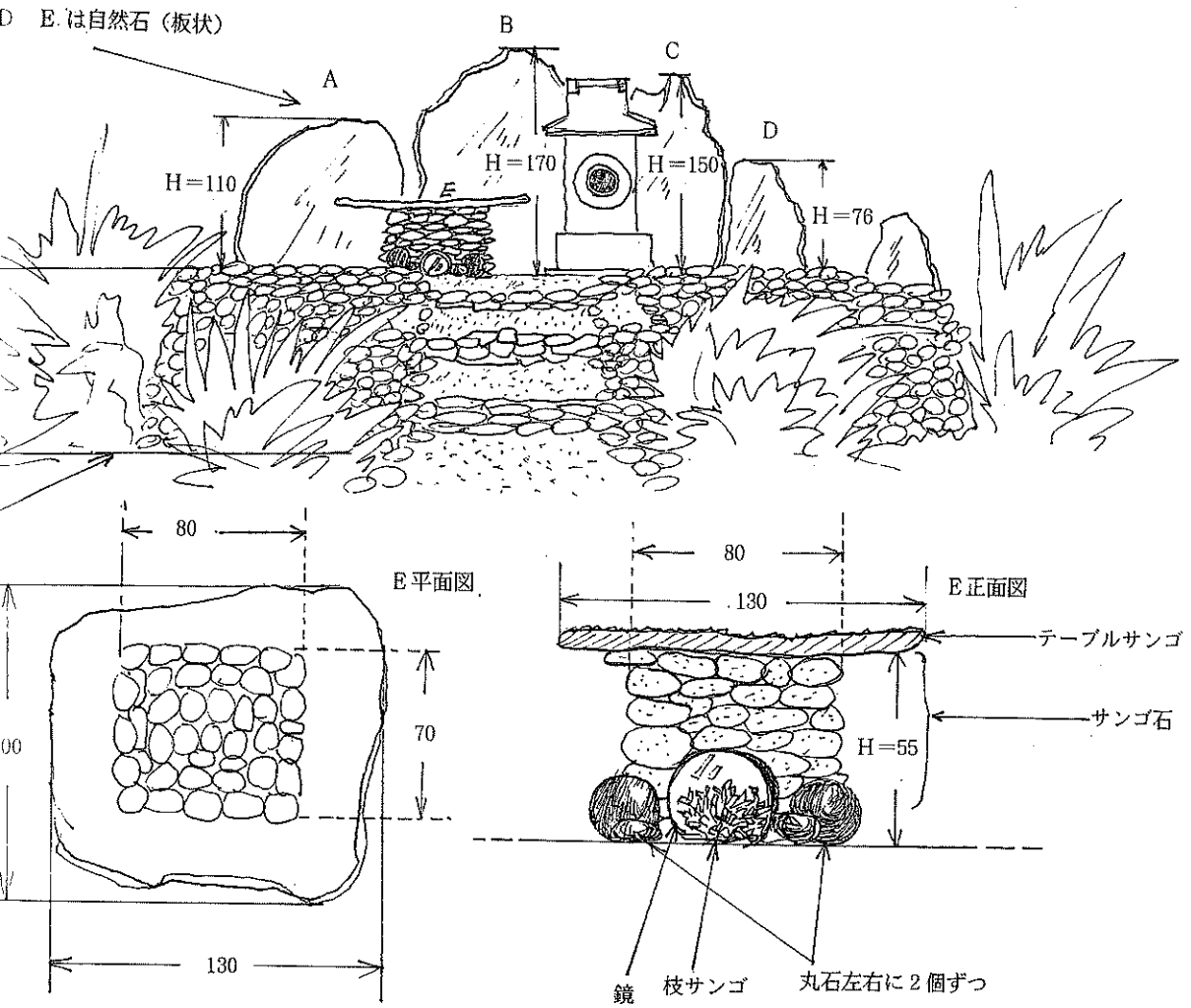
げられ、最も高い部分は拝殿の建築面から一九〇センチをはかる。一段下がると左右を固めるような層があり、さらに一段下がると拝殿の方に迫り出すように弧を描いた層がある。最も低い層が長方形のステージ空間の基壇を形成しているが、ここでも拝殿建築面から六〇センチの高さを確保している。このステージへのアプローチは拝殿裏から見てほぼ中央に位置し、自然石をおいて石段としている。これらステージのサンゴ石積みの内側表面はすべて粒状サンゴと貝殻によって覆い尽くされており、美しく白く輝き、清浄かつ神聖な雰囲気を出している。さらに、このステージ状の構造物の背面には板状の自然石が立てられ、あたかも椎の巨木とサンゴのステージによって形成された清浄な空間を背後から包みながら演出するホリゾンツトのような役割を担っている。椎の木に向かって最右端の一角には、粒状サンゴではなく、真砂を敷き詰めた場所があり、数個の丸石が半分ほど埋まって並べられている。椎の巨木の懐には小祠が置かれ、左右に花瓶が配されて、この木が神の宿る神籬であることをはっきりと物語っている。

事例二 奥神社

図②は西之表市国上、奥の奥神社である。この神社は長い参道を持たないが、近接する道路から拝殿に向

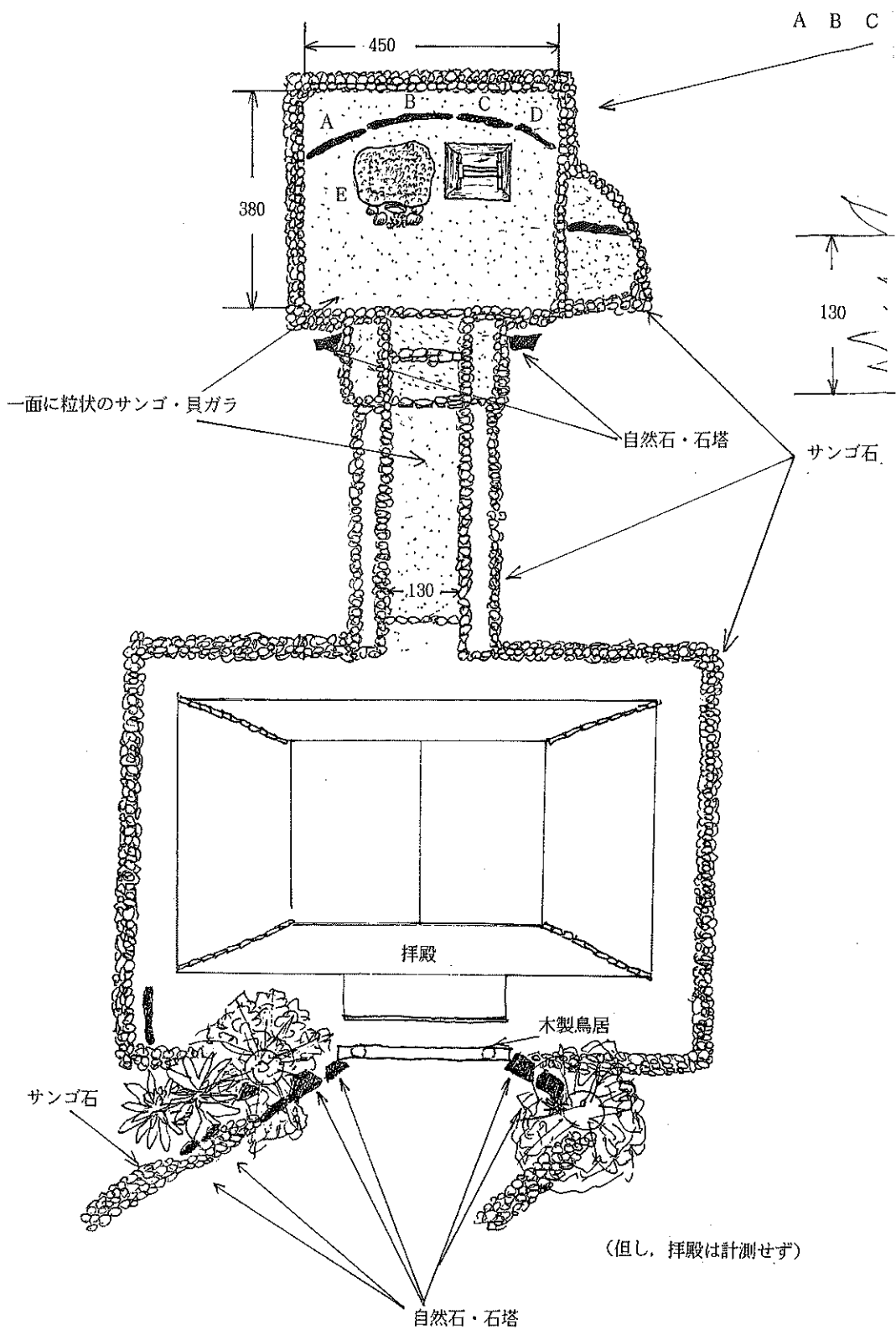


奥神社・拝殿・石塔・鳥居
(西之表市国上奥)

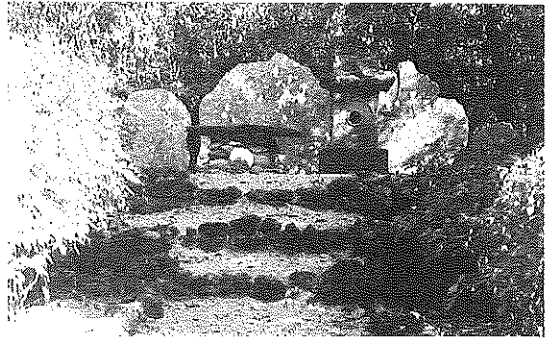


(単位：釐)

図② 奥神社 (西之表市国上奥)



かって鋭角に参道が築かれ、拜殿直前の木製鳥居の左右には中目神社の場合と同様に自然石の石塔が立てられている。左右に二本ずつ、計四本の細長い自然石である。拜殿の周囲はサング石の石積みによって囲まれ、外界と分断されている。拜殿の裏へ回ると、そこには事例一で紹介した中目神社の場合とは異なった形のステージ状の構造物を見ることできる。拜殿裏からこのステージに至る通路でさえサング石積みで二重に仕切られ、その内側には粒状サングと目殻が敷かれている。三段の階段によってステージに至るが、その左右には自然石の低い石塔が立っている。ステージ部分は奥行き三層八〇センチ、横幅四層五〇センチの広がり、四方をサングの石積みによって囲まれており、その高さは拜殿建築面から一層三〇センチに及ぶ。正面より向かって左側には方形に積み上げたサング石の上にテーブルサンゴの板を冠したサング祠がある(図中E)。これは喜志賀美権現を昔、勧請したものであると伝える。このサング祠の前には正面に鏡が一面置かれており、その左右に形の整った丸石が大小各一個ずつ合計四個配されている。また、鏡の前には枝サングも置かれている。このサング祠の右側には石製の祠がある。ここには奥山正観音、中山千手観音、山口十一面観音と刻んだ鉄板と、柄付きの青銅



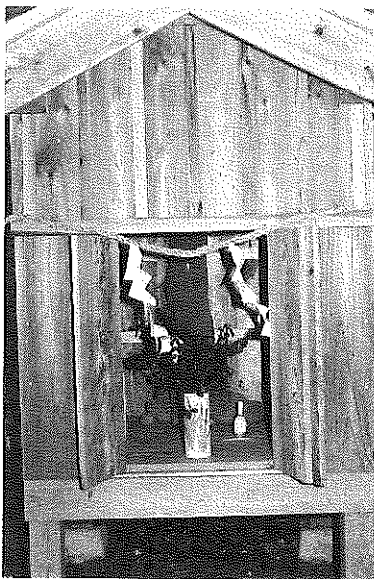
奥神社・拜殿裏の構造物
(西之表市国上奥)

鏡二面を御神体としたと伝える。ステージの後方にはこれらの祠を包み込むように四枚の大きな板状自然石が立ててある。この板石の最も大きなものはステージ地表から一七〇センチの高さを測り(図中B)、二つの小祠の背景として美しく配置されている。ステージ上はすべて粒状サングと目殻によって覆い尽くされている。また、ステージから右側に一部張り出したようにサングが積み、板石を立てた部分があるが、この部分についても美しく調えられ、板石が背景として立てられている。

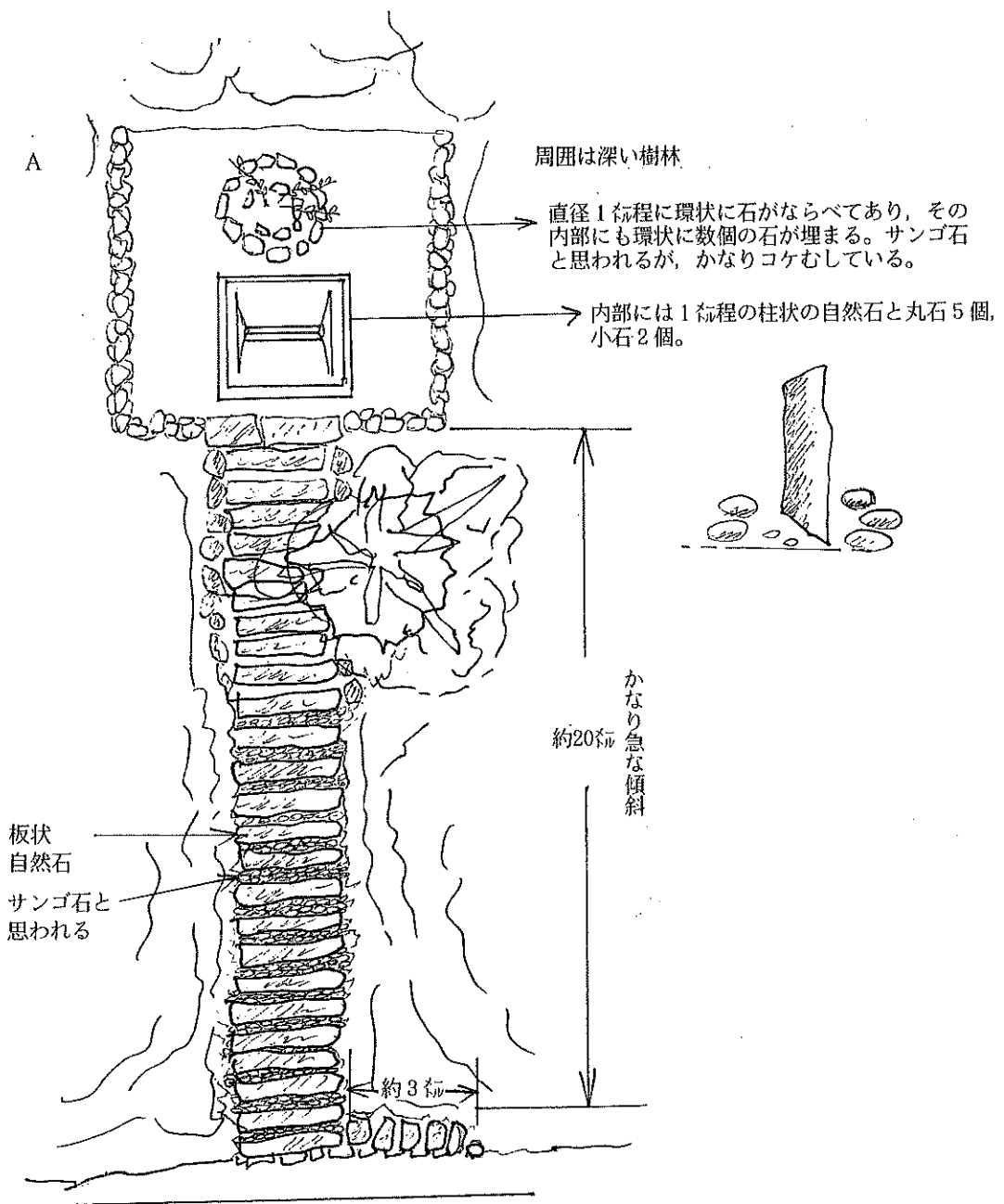
奥神社の拜殿奥の構造物は巨木を祀る中目神社のものとはその内容が異なっている。しかし、同時にまたサング石で形成されたステージと背後に立てられた板石の醸し出す清浄な雰囲気とその空間構成には類似点も多いことに注目せねばならない。

事例三 大山神社

図③は西之表市現和、西俣のものである。この神社は集落の氏神であるが、大山津美神を祀っていることから付近の人々からは「大



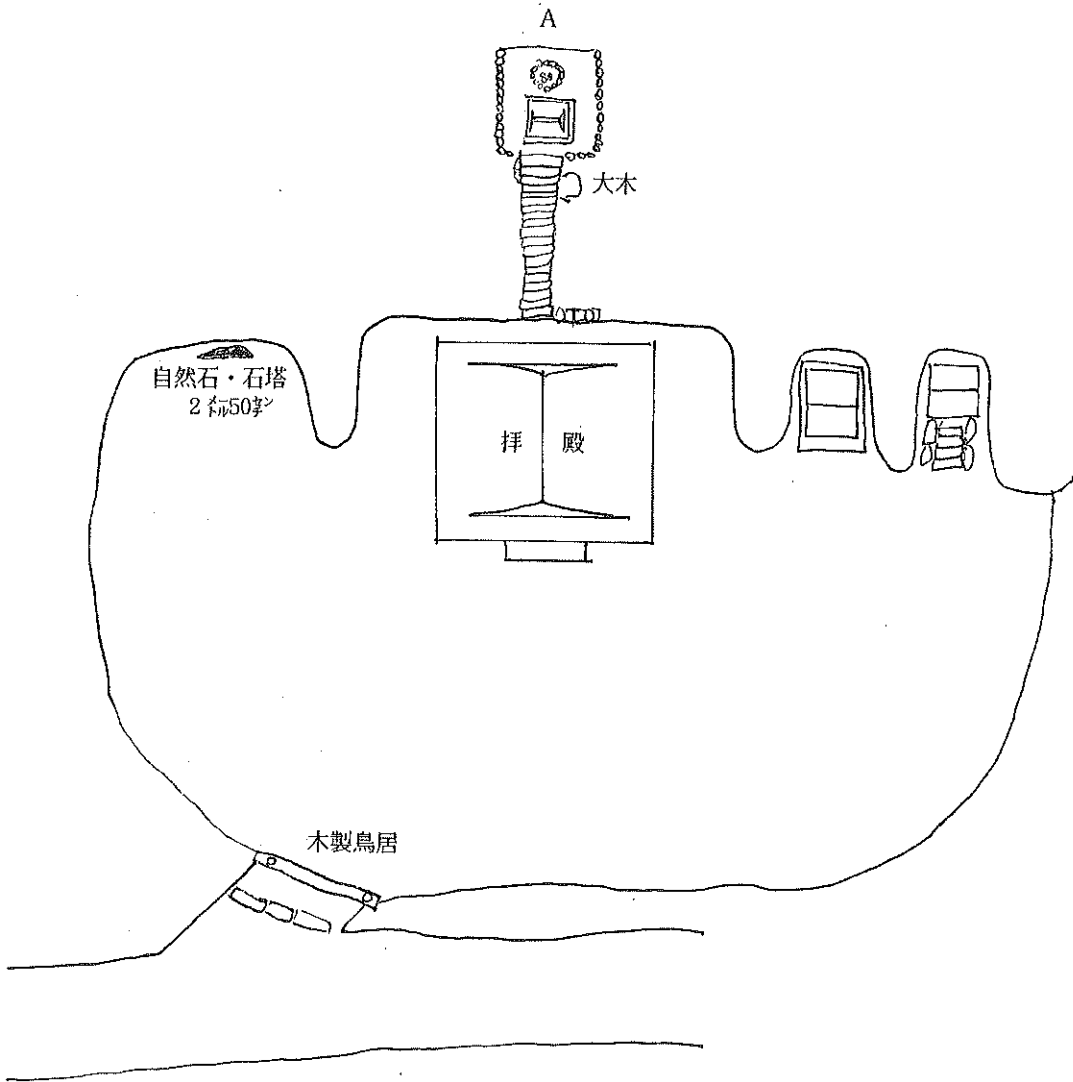
大山神社・拜殿裏山の祠
(西之表市現和西俣)



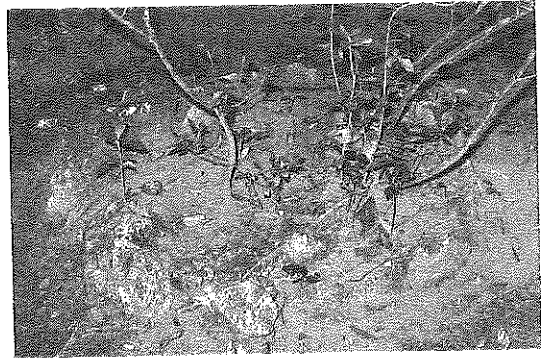
拝 殿

図③-1 大山神社 (西之表市現和西俣)

(神社の正式な名称は不明、土地の古老によると「大山神社」と集落民は呼ぶらしい。)



図③-2 大山神社 (西之表市現和西俣)

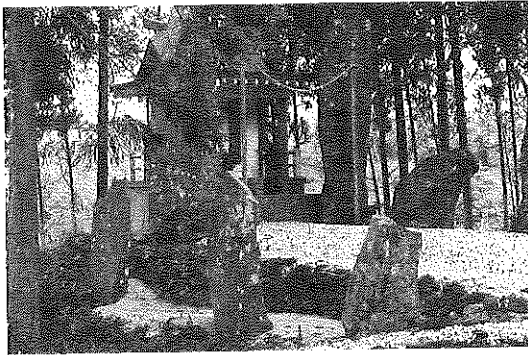


大山神社裏山の環状の列石
(西之表市現和西侯)

山神社」と呼ばれている。拜殿前は広場になっているが参道はなく、直接道路に接している。但しここにおいても鳥居は道路から斜めに拜殿に向かう位置に配されており、地形的な制約が無いにも関わらず、拜殿正面には設置されていない。鳥居は木製である。拜殿の裏は急峻な斜面になっており、自然石による石段が設けられている。この石段は神官以外の者が登ることを禁じられており、ここから先は禁足地であるという。登り詰めた所には鬱蒼と茂る森の中にまだ新しい木製の祠がある。中には一層ほどの柱状の自然石と丸石が納められており、柱状の石が御神体と思われる。祠の裏側に回ってみると足元の赤土に環状に埋められた石を確認できる。コケむしており、自然石かサンゴ石かも判別できないが、円は二重に描かれており、何らかの構造の痕跡とも思われる。御神体が祠に納まる前の施設であろうか。現状から判断できるものではないが、小祠、列石ともに積み上げられた石垣によって囲まれていることから、いずれも神社の最も神聖な場として機能していることがわかる。

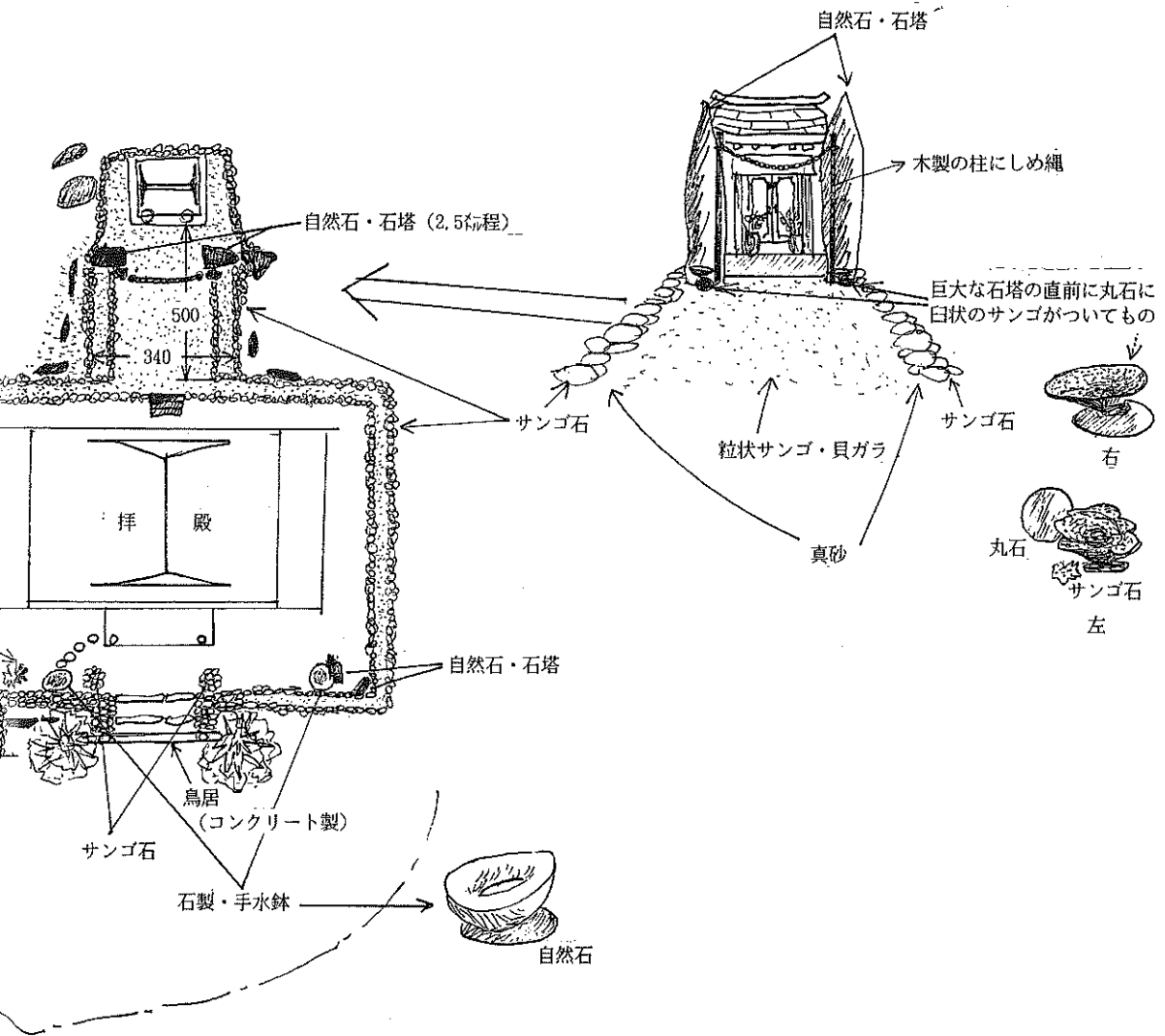
事例四 寺之門神社

図④は、西之表市国上、寺之門の寺之門神社である。長い参道を持つこの神社は、その鳥居がコンクリート製であることや、参道を形成する二列の石積みが他の部分と異なる自然石で、その内部に並木が植えてあることなどから、最近になって整備、手入れされた神社と思われる。神社から数百メートルの所に古井戸があり、神社の清掃に利用されているという。拜殿前までのびる参道はくの字型に屈曲し、拜殿前向きを変えながら途切れている。そしてそこからは、拜殿周囲まで全てサンゴ石を積んで仕切られている。拜殿前左右には、サンゴ石を円形につんであり、手水用の鉢らしきものも自然石でつくられている。また、潮井筒や潮井用のヒシヤクも完備されている。自然石の石塔は、鳥居周辺にはないものの、拜殿敷地内の左右の隅に二層程の細長いものが二本ずつ立っている。

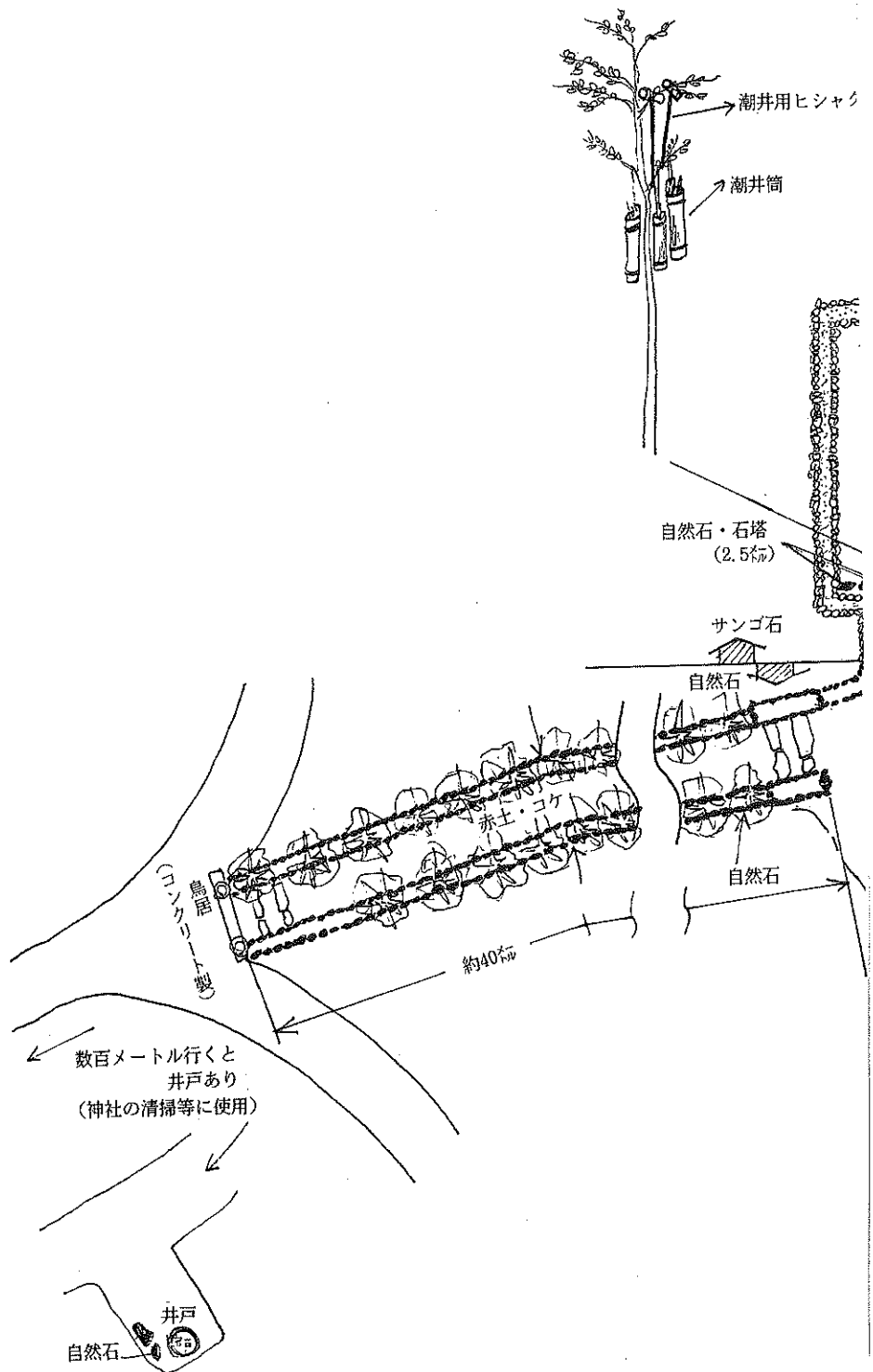


寺之門神社拜殿裏の石塔・祠
(西之表市国上寺之門)

拜殿裏には、中目神社、奥神社の場合と同様に一段高い所にステージ状の構造物があるが、その内容は前述の二社とは大きく異なる。拜殿裏から自然石の石段によって通路へ登り、五層程先には新しい形の彩色された祠がある。祠の前左右には、二・五層程の高い石塔があり、その下に丸石にサ



図④ 寺之門神社 (西之表市国上寺之門)

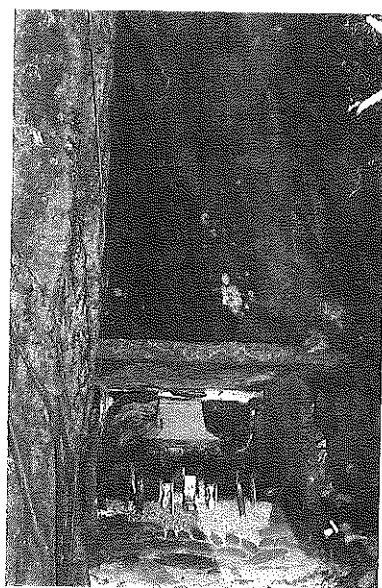


ンゴがついたものを一個ずつ配してある。石塔前には木製の柱が立てられ、しめ縄が結ばれている。ステージ状の構造物は、やはりその表面を粒状サンゴと貝ガラによって覆われており、非常に清浄な雰囲気である。中目神社や奥神社と比較したとき、様々な面からみてこの神社は新しい手が入っている。祠の中に何が祀られているのかは不明であるが、かなり近代化された神社の形とみてさしつかえないであろう。

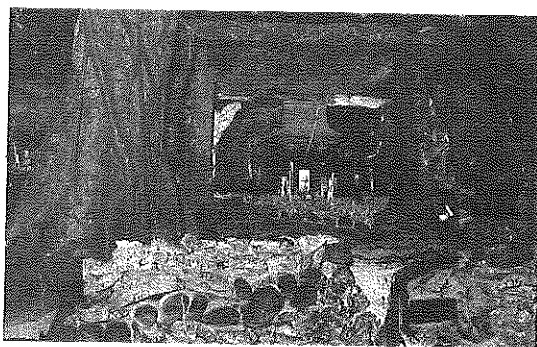
事例五 軍場神社ぐにわ

図⑥は西之表市、軍場の軍場神社である。この神社は拝殿裏に本殿もなければ、先にあげた幾つかの神社にあったようなサンゴ石と自然石、巨木等による構造物もみられない。ところが、拝殿裏から小さな谷を渡って階段がのびており、それを登りつめた所にまさに圧巻というべき神聖な空間を形成している。拝殿と、この聖なる空間を隔てる谷は、まさに聖域と外界との境界である。現に、この神社の清掃は谷から拝殿側を毎月十五日に老人会が行い、谷向うの聖域は月一回、神主が行う。たとえ祭りの時であっても谷から先の聖域には氏子総代二名と神主以外には立入ることができない。この谷向うの聖域を、土地の人は「オク」と呼ぶ。この清浄で神聖な空間は、うっそうと茂る亜熱帯性の植物に囲まれ、昼間でも薄暗い。拝殿から続いた参道は階段を登りつめてから二手にわかれる。右は下りになっており、しばらく行くと湧水があり、ここを水源として小川が流れている。この水はオクの清掃等に利用するという。左側へ進むと参道は行き止まりとなり、左手に五〇センチほどの高さでステージ状の構造物を見ることが出来る。周囲はおびただしい数のサンゴ

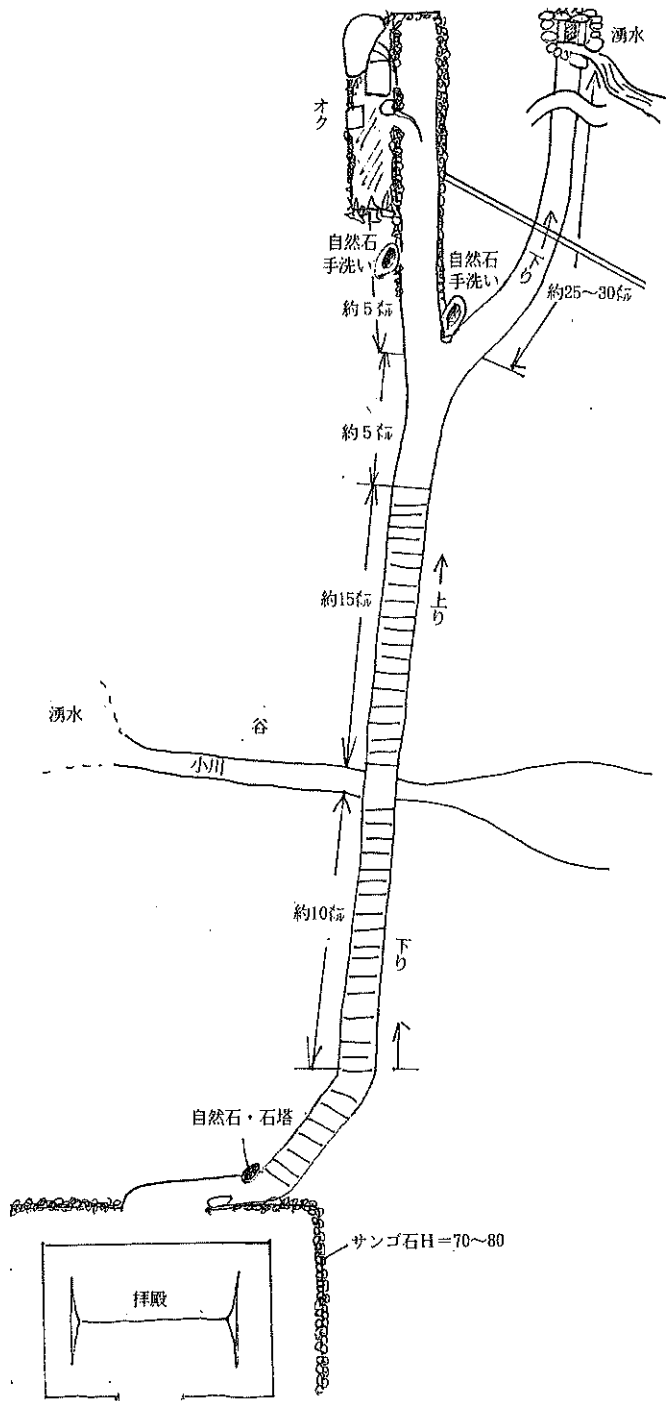
石によってしっかりと境界をなし、アコウの巨木が覆いかぶさるように頭上にそびえる。この巨木は図太い気根をステージ中央に落とすが、その気根すらむしろ一本の太木のような大きさである。巨木からも、この気根からも、太い根が地表を走っているが、それらは参道の方へと延びており、そこがこのステージへの登り口として利用されている。このアコウの巨木に抱きかかえられるようにして、自然石の板石を利用して、自然石の板石を利用した祠状の構造物が存在する。正面以外の三面には壁がつくられ、上部にも天井として板石がのせてある。内部は地表より三〇センチ程高くサンゴ石が積まれており、粒状サンゴで覆われて



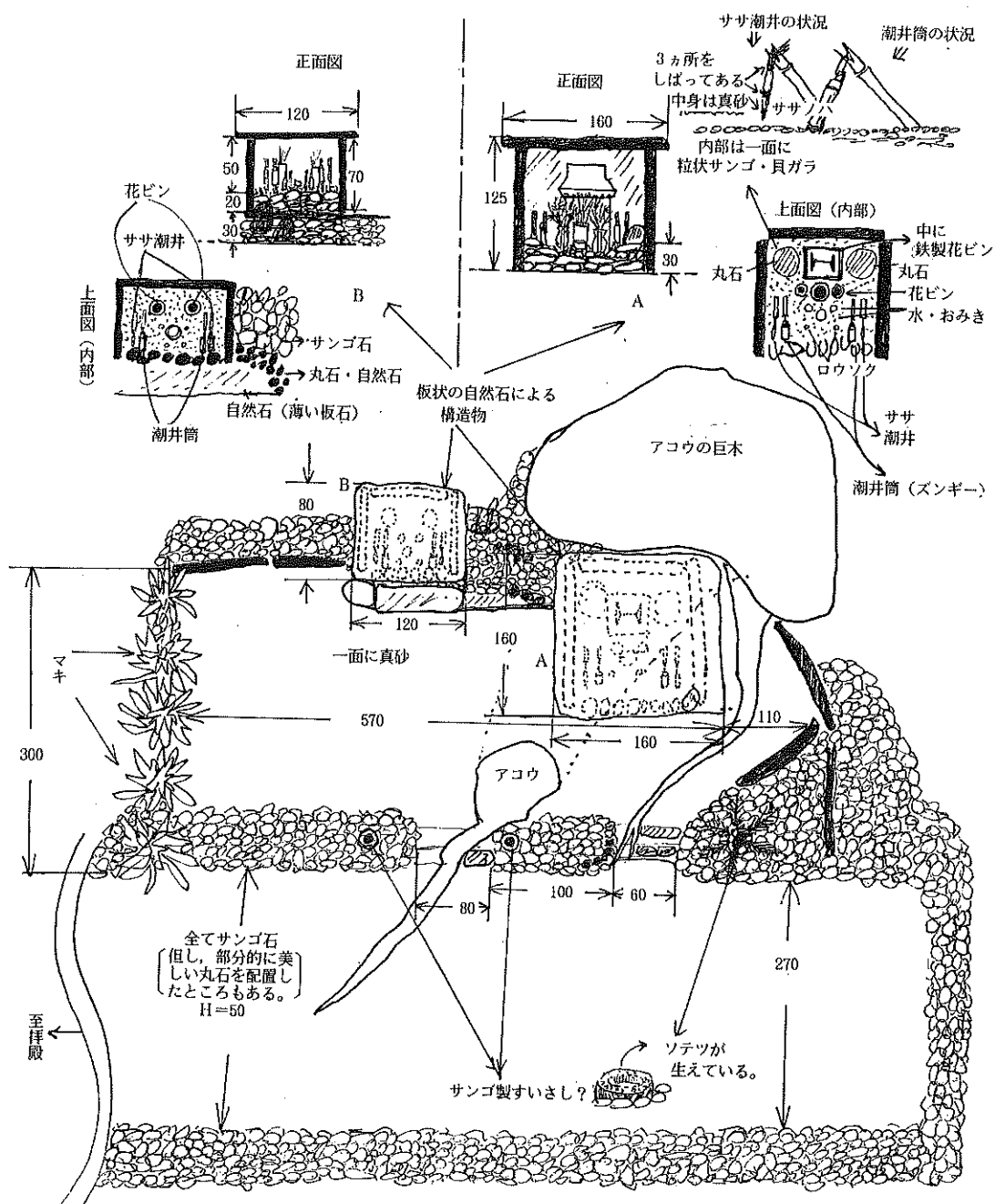
軍場神社オク
(西之表市安納軍場)



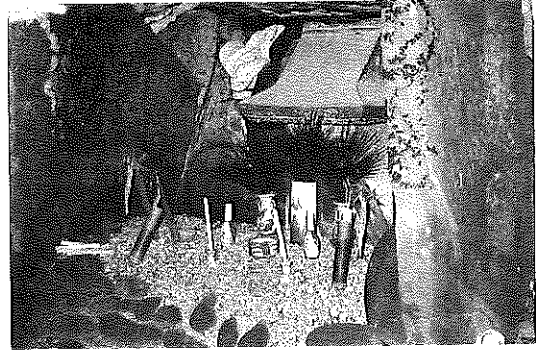
軍場神社オク
(西之表市安納軍場)



図⑤-1 軍場神社 (西之表市安納軍場)



図⑥-2 軍場神社 (西之表市安納軍場)



軍場神社オクの石による祠の内部
(西之表市安納軍場)

いる。その上に奥の方から小祠、花ビン、水、御神酒、ロウソク等が供えられ、左右に一对ずつ外側からササ潮井、潮井筒の順に吊り下げられている。小祠の内部には鉄製の花ビンが入っており、ササ潮井の中には真砂が入っている。ササ潮井は、三カ所をしぼつてある。ササ潮井と潮井筒は、斜めに差した竹からつり下げられている。また、

小祠の左右には丸石が置いてある。この祠状の構造物から向かって左側にも同様な形態の、しかしながら多少小さめの板石による構造物が存在する。前述のものと内部の状況はほとんど同じではあるものの、小祠はない。これら二つの板石による構造物は、一面に真砂を敷きつめたこの聖なる空間において極めて神秘的に、静かに祀られている。アコウの巨木を見る限り、その様相は無気味で恐ろしくさえあるが、この空間はサンゴ石や板石によって囲まれている為かひたすら清浄な印象を与える。

この聖域の周囲には湧水も多いようである。拜殿とオクを隔てる谷も、ごく小さな水流によってつくられていることから、近い所に水が湧いているものと思われる。

軍場神社は今でも集落民全ての氏神として、その機能を果たしている。

事例六 浦田神社

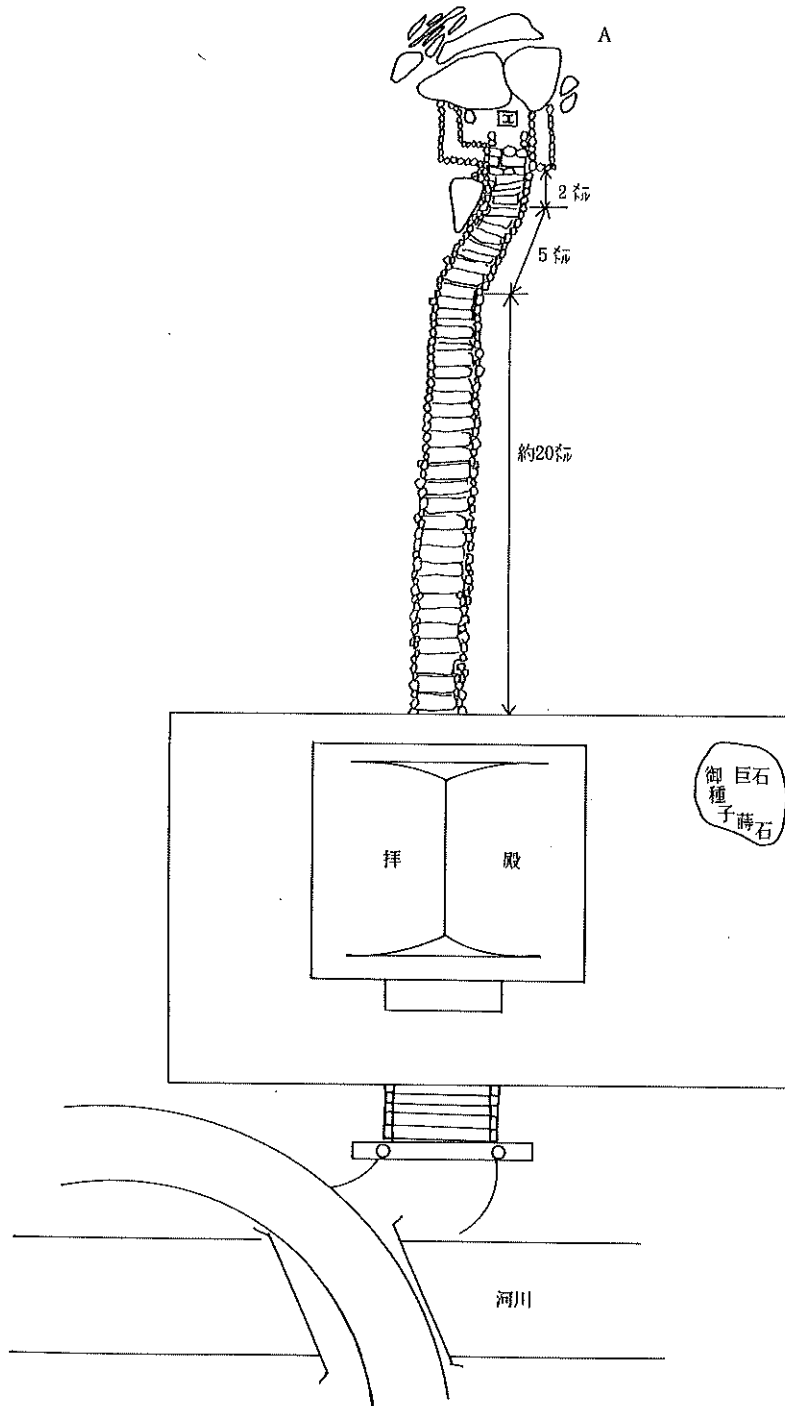
図⑥は、西之表市浦田の浦田神社である。この神社は漁港の近くにあり、美しく彩色された拜殿やコンクリート製の鳥居を持つ。これらの構造物はかなり新しい。拜殿裏には神山と呼ばれる森があり、石段がのびている。この石段を登りつめたところには、御神体である巨石が立っている。夫婦岩と呼ばれるこの岩は、正面から見ると二個の石に見えるが、実際には三個の巨石と幾つかの岩塊をと



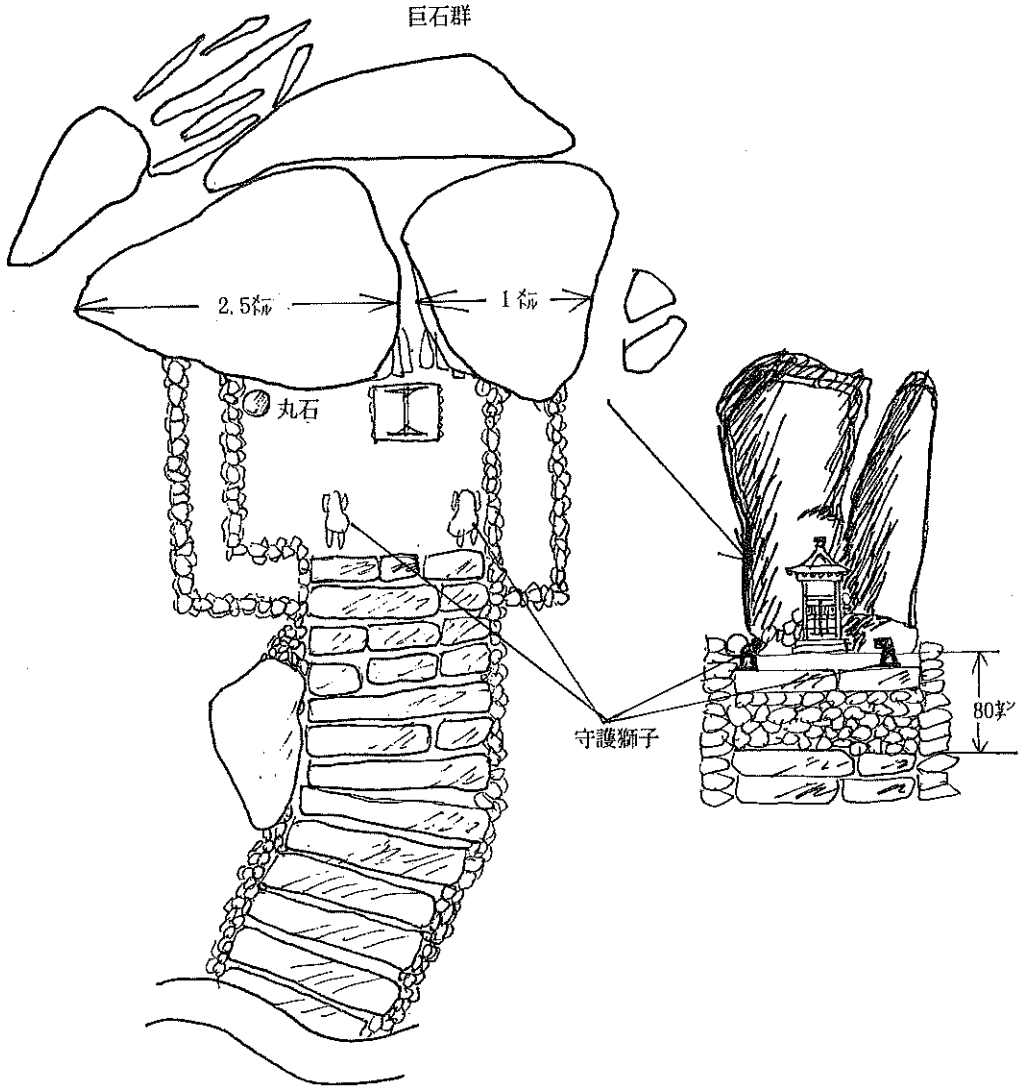
浦田神社・神山の巨石
(夫婦岩)と石祠
(西之表市国上浦田)



浦田神社・神山の石祠内の銅鏡
(西之表市国上浦田)



図⑥-1 浦田神社 (西之表市国上浦田)



図⑥-2 浦田神社 (西之表市国上浦田)

もなう。巨石の前面にはサンゴ石で囲んだ部分があり、小祠が奉られ左右に一对の守護獅子を配してある。小祠の中には御神体のかわりといわれる銅鏡が納められている。巨石を御神体として祀った場所は、拜殿からは見えない。

事例七 住吉神社

図⑦は、西之表市住吉の住吉神社である。今回調査した神社の中で、この神社は最も新しい形態を呈している。それは本殿の存在、そして本殿と拜殿を通路で結んでおり、その部分が幣殿として機能している点による。この形態は全国に一般的である。但し、住吉神社の本殿はその周囲を高さ一丈二〇センチまで積み上げたサンゴ石に囲まれている点で特徴的である。幣殿、拜殿の周囲は、一部が自然石に囲まれている。住吉神社は小高く茂った森の中にあり、かなりの長さの参道を有するが、参道は左右へ一回ずつ屈曲しながら登っている。

以上、西之表市内の七つの神社について見てきたが、これらの神社について総括的に考察してみよう。

図示した神社の殆んどが本殿を持たない点は前述したが、注目すべき点は、本来本殿があるべき位置に存在するステージ状の構造物である。中目神社の場合は、シイの巨木を中心にまさに祭壇の形態を示しているし、奥神社の場合は、サンゴ祠等を板石で囲み、軍場神社のオクにおいても、アコウの巨木を中心に神聖な空間が造られている。これらの構造物は全て露天であり、まさに自然の中に溶け込むように存在している。サンゴ石や粒状サンゴ・貝ガラ、そして

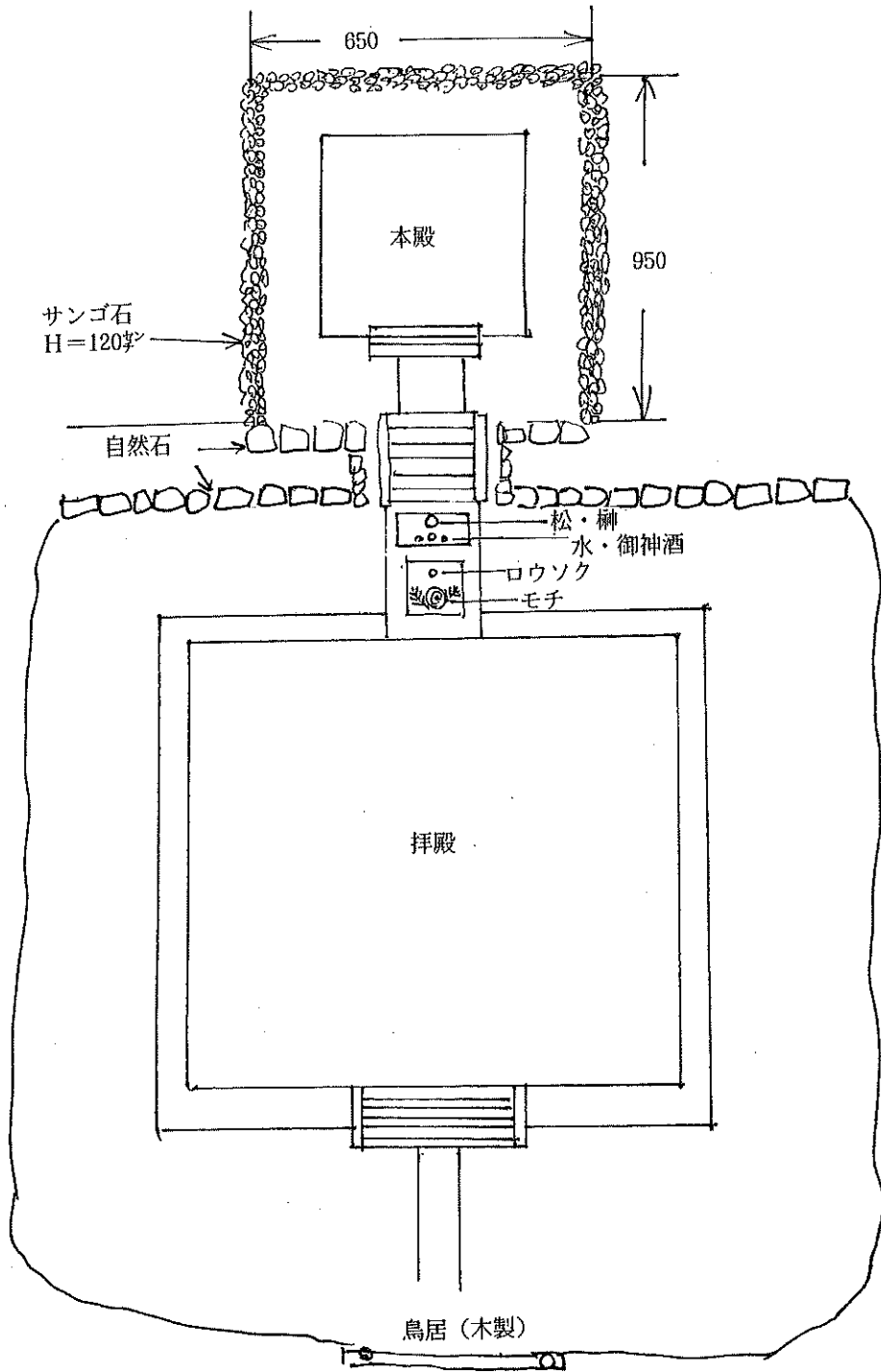
真砂は、その白さ故にこれらのステージに清浄な印象を与えているが、その清浄さの演出を海が担っている点も見逃せない。潮井はそもそも海水であるし、ササ潮井の中身も真砂である。海が清浄なものであるという感覚は、おそらくこれらの素材全てに通じるものであるうし、聖域の形成においては十分に条件を満たすものであったに違いない。自然石も豊富な種子島において、あえてサンゴ石を利用してこれらの構造物を築いたことはまさに聖域と外界との境界をシンボライズするに最適な素材であったからにはかならない。軍場神社の裏に奉られる真砂の採取の方法は、徹底的に清浄さを保とうとしている。

「真砂は集落の各班の班長が代表として採ってくる。春祭りと秋祭りに採りにゆくが、当日は朝風呂に入ったあと、水をかぶり、裸足で沖浜まで行って採る。その際の容器は、拜殿のものは再利用が可能であるが、オクのものはその都度新しいものを用意する。現在では裸足ではなく長ぐつをはいて行くが、拜殿より内に入ってから裸足で歩く。」

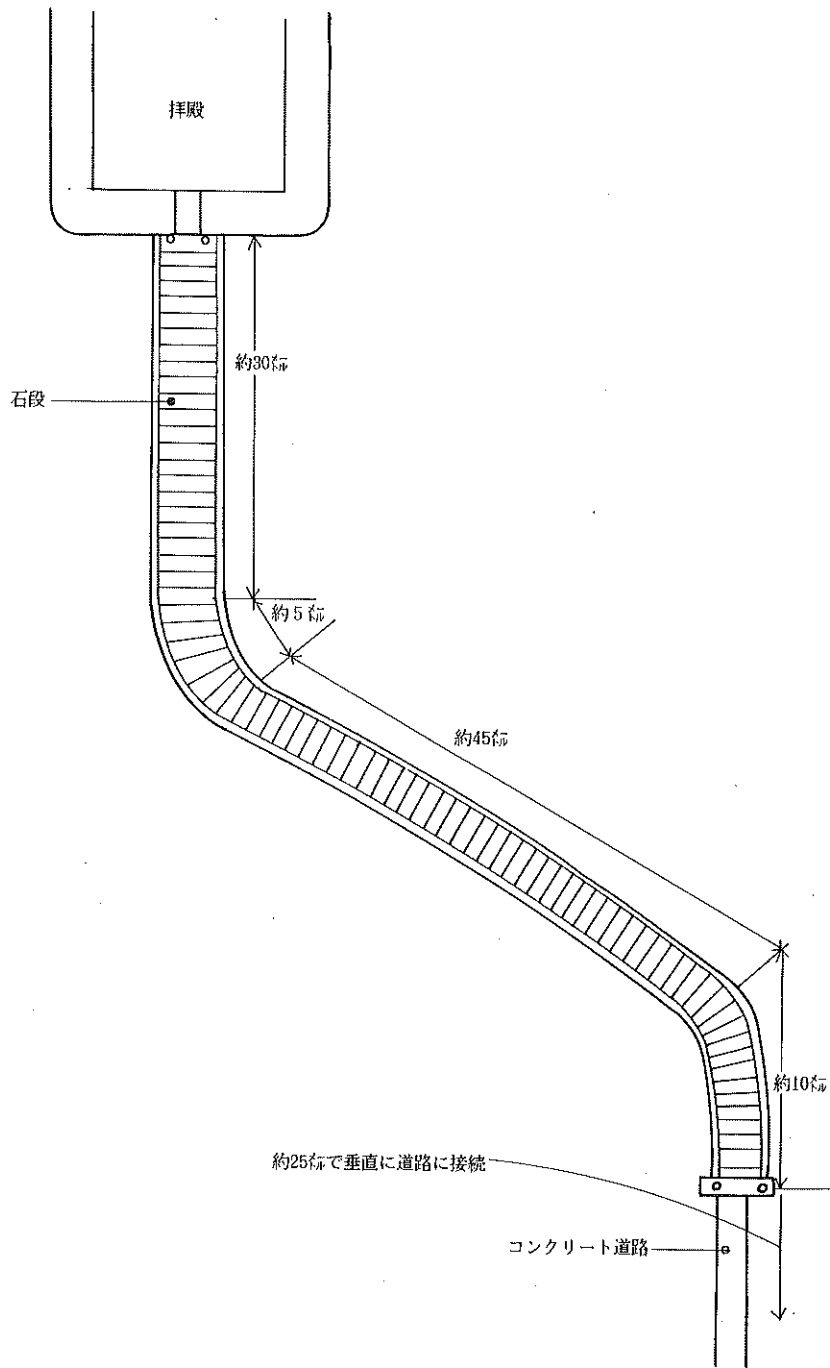
この事実からも、海から得る清浄さを大切にしようとする感覚を知ることができる。

ここで先史時代の祭祀形態について多少触れておこうと思う。

縄文時代中期頃までは、一般に人々は計画的な生産手段を持たなかったと考えられている。これは食物の確保を狩猟、漁労、採集にたよっていたことを示唆するが、それ故に、人々の生活は常に自然条件によって支配される不安定なものであった。ここで生じる豊穡・大漁を祈る感覚は、民間信仰の最も原始的な姿であろう。呪術的な宗教観と埋葬状況にみられる靈魂観は、この縄文時代においてすでに確立されていたと考えられるだろう。



図⑦-1 住吉神社 (西之表市住吉)



図⑦-2 住吉神社 (西之表市住吉)

本格的に稲の栽培が行われるようになった弥生時代には、農耕に関連する様々な問題から、日本人の「祈る感覚」は大きく進歩する。すなわち人々は、生活と直結する自然現象に畏怖敬虔の念を抱いてゆくのである。ここにおいて、日本人の神観念はその概観を明らかにしてくれる。古墳時代を迎える頃、農耕の発展は急速に進む。それに伴って人々は定住を余儀なくされ、地縁、血縁の感覚が生じる。人々は氏族の長を墳墓に葬り、靈魂に対する祭祀が行われる。農耕儀礼と古墳祭祀はこのようにして発生し、人々の生活の一部として重要性を増す。祭祀の一般化に伴って、祭祀をとり行う神聖な場所が必要となる。ここにおいて磐座、神籬は、信仰の対象として成立をみる。水、太陽、火、その他の自然発生的祭祀対象もまた、神聖さという点において祭祀の場を聖域に求め、人々は野外に聖域を設けた。この状態は、八世紀頃に神仏習合が始まり、神殿建築が始まるまで続いてゆく。この時期には「神」の姿は象徴的なものであり、具現化されない。ただ、実態を把握できないが為に、依代という形が生じてくる。

今回調査した西之表市内の神社において拝殿の裏に存在した空間は、感覚的にはこの太古からの祭祀の形態を引きずっているように思えないだろうか。構造物そのものは、歴史の新しいものである。しかし、その構造は神社が本殿を持つ以前の聖域感覚に準ずるものと思われる。西俣の大山神社(図③)の拝殿裏の山中にある環状の列石も、あるいは磐座と関連するものであるかもしれない。

ここにあげた神社は、その殆んどが農村の氏神として機能してきた。それらは集落の神であり、人々の生活、生業、年中行事と深いつながりを持っている。当該地域の方々の素朴で信仰心の厚い人柄と、美しい自然との触れ合いを考えると、その感性に、本来の神

の抛り所の姿を求めることに深い意義を感じたのである。

種子島の神社のうち、西之表市内の数社について拝殿裏を中心に見てきたが、それ以外に各神社に共通する、或いは特徴的な部分について触れておく。図示したように、中目神社、寺之門神社等はその参道がくの字型に屈曲している。また、参道をもたない神社においても、拝殿への入口は正面ではなく、斜めの位置にある。鳥居も拝殿正面から見ると角度をつけて建てられている。これはやはり、辟邪の意味をあらわすものであろう。

次に注目したいのは石塔である。拝殿、拝殿裏ともに、左右に石塔を立ててあるのは種子島独自の石塔信仰の感覚と結びついたものと考えられる。狛犬、守護獅子、鳥居等と同様に聖地への入口をシンボライズし、邪悪で不浄な者どもの侵入を防ぐものであるに違いない。自然石のふんだんな種子島では、それを実に有効に利用して祭祀空間が造られているという印象を持った。

拝殿は、浦田、住吉以外はかなり老朽化しており、彩色もない。ただ、正面の梁に象の頭部を模した木鼻が一對彫られている。それぞれの拝殿は形態が似かよっており、一定の期間に、同様の建築技法で造られたものと考えられる。

以上、西之表市内の七つの神社について外観から見



奥神社・象の頭部を模した木鼻
(西之表市国上奥)

た調査結果を報告した。何分にも初めての野外調査であったために、実測図、報告文ともに稚拙な内容であるが、ご容赦賜りたい。尚、図版はすべてスケッチであり数値を記入したもの以外の寸法は実測に基づくものではない。
(昭60・12～昭61・1調査)

参考文献

- 『日本宗教事典』(一九八五 弘文堂)
金井典美著『湿原祭祀』(一九七七)
景山春樹著『神像——神々の心と形——』(一九七八)
山崎 誠著『日本神話と考古学』(一九七八)

神社の構造と機能・形態

— 聖と俗の視点から —

大石 和也

はじめに

聖なる空間は、人を引きつけてやまない。それは神秘的なものに對するあこがれだろうか。または、恐怖の感情だろうか。いずれにしろ、人々は聖なるものとして神々を祀ってきた。

種子島は民俗の宝庫である。よって古くからの民俗神信仰が今なお引き継がれている。また、法華宗の影響も強く、寺院の建築様式が神社のものに取り入れられている。

私は聖なるものと俗であるものの関わり合いはどのようになっているのか、主に神社の外観からとらえていった。また、伝承者の方々の情報によって、目に見えない方向からの神社の機能・構造・形態について考察することができた。

聖なるもの

ルードルフ・オットーは、聖なるものに対して、その本質的特徴を、恐ろしい神秘・圧倒的威力をもつかの神威に對する恐怖の感情を見出し、これに敬虔な畏怖を見出している。

神を祀るとは、このような感情を具体化したものである。

信仰の対象である聖なる物とは、具体的には大石、大樹、鏡等である。神社においては、御神体としてあがめられている。

1 深川の大石

西之表市深川にある巨石（高さ五呎、周囲約二三呎、巾五・九呎）、祠（一・三呎）が安置され、石には経が彫つてある。

むかし、メン（妖怪）がたびたび出現しては地域の住民を困らせていたものを、法華宗の僧が妖怪封じのために、念仏の字を彫り込み、村民とともに大祈禱を行ったところ、それ以後、妖怪は出なくなったという。法華宗の伝道のために用いられた（写真①）。

2 中目神社（写真②）

西之表市国上中目にある。御神体は椎の巨木。椎の根元には、がる石（さんごしょうの石）が敷きつめられ、真砂がふつてある。また高さ三六呎の石の祠が安置されている。

3 西之表市国上の寺之門神社

昔は近くに寺が建っていたため、このように呼ばれる。このカヌシ（神主）の話によると、以前は松の大樹があったが、白蟻にやられ危険なので処分したという。本殿の真後に大きな切り株がある。御神体は鏡。

この三者の場合、御神体が、神そのものを表すのか、神の一つの出現方式とみなされているのか疑問が残る。しかし、信仰の対象が巨樹から鏡へと移ることが可能だということは、やはり一つの出現方式と見るべきであろう。

聖なる空間

ガローや神社は、俗世と違った聖なる空間を作っている。この聖なる空間といえる条件は以下の通りである。

- (一) 聖なる物、または地があると信じられていること。
- (二) その聖の及ぶ範囲があると信じられていること。
- (三) 聖の及ぶ範囲と信じられている境界に目標めどがあること。

神社という御神体とは、聖なるものであり目標とは鳥居のことである。よって以下に、聖と俗の視点から、神社がどのようにとらえられているか、考察する。ここに分離・過渡・統合の概念を取り入れた。しかしその前に現実には神社の内部のそれぞれの機能を述べる。

本殿には神が鎮座し、拝殿では、神を礼拝し、さまざまな儀礼を行う。鳥居は神域への門に相当する。

聖と俗の狭間

鳥居は神社の境内に続く門であるが、これは特別に聖なる空間に開かれた門である。

ここで聖の世界と俗の世界が分離される、と同時に先に述べたように聖の世界の目標となる。鳥居は、すべての神社にあり、二つ以上立てている所もあることから、その重要性がわかる。

1 中目神社

入ってすぐに鳥居が立っているが、境界の五層前に一対、境内のちょうど入口にあたる所にもう一対の石塔が参道をはさみこんで立

っている。二層半足らずの石柱であるが、これも鳥居と同じような役割を果たしているのではないか。

2 熊毛郡中種子町増田向井町の清浄寺

法華宗の寺。ヌキモンと呼ばれる鳥居のような門をもっている。やはり、これも聖域に開かれた門であろう(写真⑧)。境内には石塔が七本並んで立っている。この前で盆には精霊の供養を行う。

この他に、門の形はしていないが、聖域を表す目標として、門松、しめなわも挙げることができる。

3 寺之門神社

門松は神主がだいたい十二月三十一日に作り、一月二十日に取り去る。木の種類は、カラタケ、マツ、ウラジロ、ユズリハ、マテを使い、下の方をマテの割り木でかこんでしぼる。鳥居の足元に一つずつ紐でゆわえておく。門松の形はカンヌシ(神主)にまかされていて決まったものはない(写真④)。

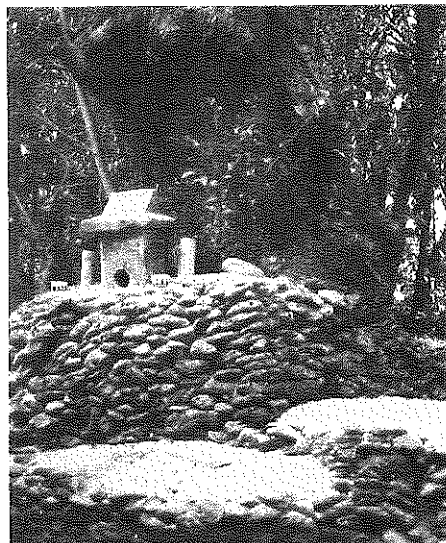
しめなわは十月二十九日の御願成就の時に、神主がわらを用意し、女性をのぞき村落の家から一人ずつ出て皆で作る。家が農家でない神主の時は、親戚からわらを譲ってもらい、神社に持っている。十二月三十一日に張り、一月六日に、はずし、作の祝い(一月十四日か十五日)の時に再びつける。一般の家庭でも、正月はしめなわを張る。寺之門神社の神主をなさった河内市彦氏のしめなわはウラジロ、ダイダイ、ユズリハが使っており、ダイダイに横に刺し通した二本の棒の両端にそれぞれ右にけしずみ、左に紙で包んだ米がつけてある(写真⑤)。

門などの、入口または目標は守護の意味もある。例えば、寺之門

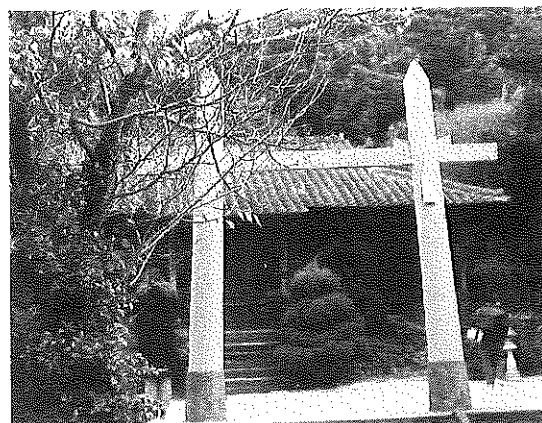
「島内各地の神社Ⅰ」



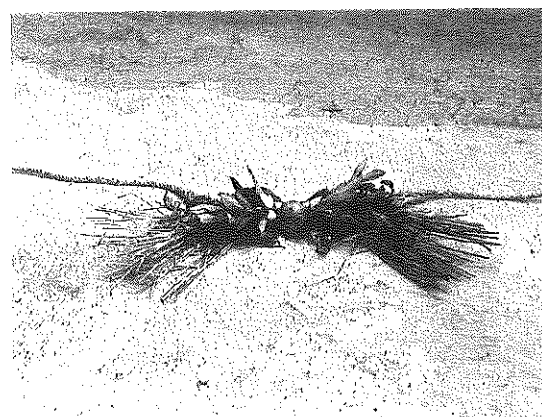
① 深川の大石 (西之表市)



② 中目神社の御神体
(西之表市)



③ 清浄寺のヌキモン (中種子町)



⑤ 河内氏家のしめなわ (西之表市)



④ 寺之門神社の門松
(西之表市)

「島内各地の神社Ⅱ」



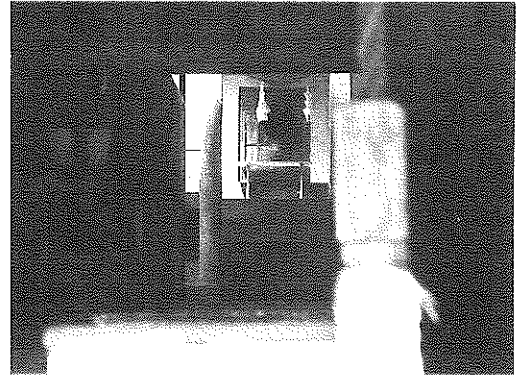
⑥ 住吉神社の参道と鳥居
(西之表市)



⑦ 住吉神社の参道
(西之表市)



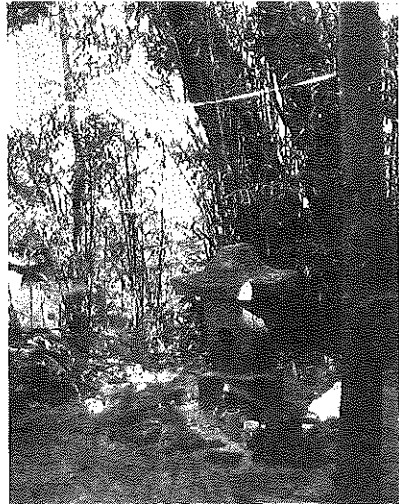
⑧ 寺之門神社 (西之表市)
鳥居と拝殿のしめなわ及び門松



⑨ 豊受神社 (中種子町)
拝殿からのぞいた本殿



⑩ 寺之門神社のシユエイツツ
(西之表市)



⑪ 向井里のガロー
(南種子町)

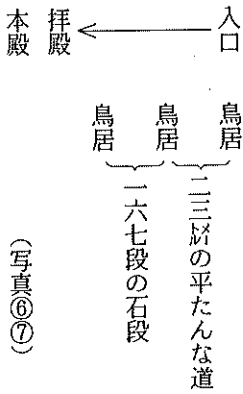
神社では、一月二十日は町祈禱の日で村落中が集まって神官を国上から呼び、病気が入らないように、また村落の安全を祈り、虫の供養を行う。この時、神主と神官は村落の入口三カ所に石が建ててある場所に行き、御幣を祀る。この時、この入り口は村落を守る役割を果たしているといえる。

聖なる地へ続く階段

聖書には、天国へ続く階段のことが述べられている。ハランへの逃亡中のヤコブは、夢の中で、はしが地上から天まで達し、神の使たちが上り下りしているのを見た。そして「ここは神の国である。天国の門だ」と叫んだ。俗の世界と聖の世界は対立するものであり、他の方に移るには過程が必要である。それがはしごとであり、神社の場合、参道が過程となる。

1 住吉神社

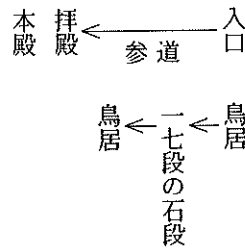
西之表市住吉にある。十月二十三日に源太郎踊りが住吉神社に奉納され、これは市の指定無形文化財とされている。小高い針葉樹木の丘に建っており、航海安全の神を祀っている。その形態は次のとおりである。



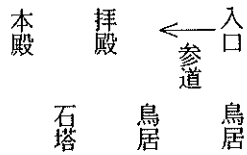
(写真⑥⑦)

2 豊受神社

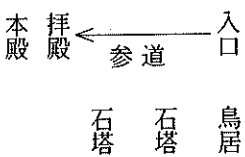
熊毛郡中種子町坂井本村にある。五穀の神、豊受大神を祀る。一四七七年建立。境内には樹齢七百年といわれる大蘇鉄がある。その形態は次の通りである。



3 寺之門神社



4 中自神社



四つの神社とも村落または神社の入口よりも高くなっている。また寺之門神社の場合、拜殿の後方の地面を拜殿よりもさらに一層ほど人工的に高くしてあり、その上に本殿が設置してある。これは高い方が神聖だという思想を示しているのではないか。

聖の段階

鳥居をくぐってから、そこは聖地であるが俗が入り込んでいく。聖と一体化するまでの過渡期においては、聖と俗とが混合されている。よってやはり、鳥居を二つ以上も上げることによって、段階的に、聖と俗を分ける境界線の目標をもつ。先に述べたようにしめなわもこのことを示す。寺之門神社では、二つの鳥居、拜殿、本殿すべてしめなわを張ってある（写真⑧）。住吉神社もまた、鳥居、拜殿、本殿すべてしめなわが張っている。人は一つしめなわをくぐることに、より神聖性の強い空間に入っていく。

聖なる物との統合

ミルチャ・エリアーデによれば、人間にとって聖なる物とは恐怖の対象であるが、同時に力であるため人はその事物のすぐ近くで生活しようと努めるといふ。これは神と統合し力を得ることを目的としたものだといえる。

この神との統合の方法に、参拝がある。また神主となることは荣誉であるように見うけられる。聖なる物にできるだけ近づくことによって、聖なる物との統合を果たそうとしているように見える。しかし、通常の場合、参拝者は拜殿の手前で止まる。そして、本殿は

薄暗い拜殿の向こうにかいま見ることしかできない（写真⑨）。つまり拜殿は、一般人にとって、神と統合できる限界である。その他に、寺之門の神主はシュエーやつんなめの木で身を清めるが、これは聖なる物との統合を、けがれをはらうことによって、よりよくできるようにするためではないか。

お供えをするのもやはり、より容易に神の力が得られると考えるからである。

寺之門神社では、いつもは神主が焼酎・米・塩を祀る。また祭りの時には、これもやはり神主が、米・焼酎・野菜・果物・大豆・昆布等、そして生きた魚を必ず供える。肉はけがれるので供えてはいけない。願うときには旗を供える。

聖を守るために

聖なる物を守るためには、けがれているものから離さなければならぬ。これがタブーである。寺之門の神主さんの話によれば、ふたいとこ以内の身内に不幸があったら鳥居をくぐってはいけない。シュエーを取りに行く前の晩に神主は肉を食べてはいけない。シュエーをくみに行く時は、人に会ってはいけない。会った時はもう一度くみなおさなければならぬ。シュエーを入れる青い小さな水筒（昔は竹筒だった）に女性はけがれているのでさわってはいけない等がある。

また、けがれているものを清める必要もある。神主は月に二度（二十五日と祭りの時に、水筒に海水をくみに行き、たけのつつ（シュエイツツ）で身を清める（写真⑩）。このシュエイツツは自宅に一つ、神社に三つおいてある。また、つんなめの木で身を清める。十

月二十九日の御願成就の時は、真砂と呼ぶ海の砂をとってきて、本殿の前の地面にかける。これは東海岸まで取りに行く。また中目神社の御神体の根元には、がる石が大量に積んである。がる石については、墓、ガローの御神体の根元にもいたるところにおいてある。これらも、清めの役割を果たす。

御神体を人の目から離すことも有効である。本殿が奥の方にあるのもこういった理由によるものであろう。これは同時に神秘さを深め、聖性を強めることにもなる。

以上のような、多くのタブー、しきたりが一見意味のないように見えて、これらが聖なる物の尊さを強めている。

神社の発生

熊毛郡南種子町平山向井里のガローは、向井里十三戸で祀っていた。氏神祭り、旧暦の六月燈を行い氏神化している。御神体は、二本のたぶの木で、この前に一桁高の石の祠が立っている。その二桁手前にちようど、祠に対する門のように、二桁の間隔をあけて細い木が伸びており、その二本の木の間に一桁ぐらいの高さで横に一本ひもが渡してある。祠の前には、がる石、酒等が置いてある。下野敏見先生によると、これは巨樹信仰から神社に移行する一過程を表しており、祠はやがて本殿へと発達し、分化し本殿と拝殿となる。二本の木は石塔から鳥居へ、または鳥居へと変化する。このため向井里のガローは非常に興味深い面を私達に見せてくれるという(写真⑩)。

なお寺院の本堂と神社の拝殿の発達の違いは、寺院の場合、夢殿等からわかるように、仏像の安置されている建物だけが作られてい

たが、次第に参拝する所に屋根がつき始め、現在のようない、仏像と人が一つ屋根の下で対面できるようになった。一方神社の場合は、参る側と御神体が離れていつているようである。これが本殿、拝殿の二分化につながる。これがどのような理由で異なる発達をしたのかはわからない。

共同体における神社

寺之門神社では神主を村落の中から選び、村落の年中行事のきりもりを任せている。以下は年中行事の月日と名称である(新暦)。

一月一日 正月

一月十四日又は十五日 サクノイワイ 皆で食べたり飲んだりする。

一月二十日 チョウギトウ(町祈禱)

神官と神主が村落のつじ(入口)に御幣を三カ所たてて、村落の皆が集まり、虫の供養、伝染病が入ってこないように、また村落の安全を祈る。

二月十一日 建国祭 日本国の建国を祝う 皆で飲み食いをする。

三月十八日 春祭り 一年間の五穀豊穡と村人の安全を祈る。

十月二十九日 御願成就(オガンジョウジュ) 秋祭り 戦前は、相撲を奉納した。また町内会対抗の運動会が九班に分かれて行われていたが、現在は小学校の運動会に吸収されている。朝九時に神社の境内に集まり、願ほどきをする。しめなわを女性を除いた全員で作る。

十二月三日 霜月祭り(霜月三日) 中目神社では四日に行う。

一年の中で、祭りは人々に生きるはりを与え、村落の結束を深め

ていったことと思う。現在でも、葬式の時と同区に住む同班の人と助け合い出している。昔はカミデンと呼ばれる神社の田畑があり、共同で、きびやいもを植え祭りに使用したが、現在では人に貸して、その貸し賃を祭りの費用にしている。また一回の祭りに使う飲み代は少なくとも二万円はするため、祭り廃止の声もあるという。また人の集まりも困難なようだ。経済・社会の変化に伴って祭りも変質していくのだろう。

まとめ

このようにして見ると、今まで空間的に聖と俗を、分離・過渡・統合の点から見ていったが、これは時間的にも区切れるのではない。時間的に聖であるのは祭りである。神前で相撲をとる、奉納する。このことによって聖なる時間を皆で共有したのではない。また宝満神社の場合、祭りにおいて甘酒を飲むことは、米が神によってもたらされた信じられていること、甘酒は米から作られていることを考え合わせると、甘酒を体内に取り込むことによって神と統合したのではないか。祭りにおける、聖と俗がどのようなになっているか、今後調べていきたい。

参考文献

下野敏見編『増田の民俗誌』（一九八三・中種子町立歴史民俗資料館）

M・エリアード著『聖と俗』（一九六九年・法政大学出版局）

下野敏見著『種子島の民俗Ⅰ』（一九八二・法政大学出版局）

大塚民俗学会編『日本民俗事典』（一九六二・弘文堂）

『聖書辞典』（一九六一・日本基督教出版局）

農漁村の信仰

原田 浩典

一、伊関・沖ヶ浜田村落

この村落は地理的環境から、海岸には面しているものの半農半漁である。漁業組合には全戸数のうち約半数が加入している。ここではほとんどの家が法華宗信仰で、あとは創価学会などがわずかにある程度である。

◆ 沖ヶ浜田神社

祀られていたのは天照皇太神である。以下は地元の古田晴雄・沖田三秋氏による記録である。

- ・ 神体は十年前に盗まれたらしい。
- ・ 神社の管理は一年交替で一人ずつ行う。
- ・ 毎年、旧暦の三月二十四日には五穀豊穡・家内安全を願った願立てが行われ、九月二十四日には願成就の祝いが行われる。この時、感謝の意を込めて踊りが奉納される。いずれも酒・果物・米などが神前に供えられる。
- ・ 拜殿の手前の柱にサツマイモの束が掛けられていた（我々が行ったときは年末だった）が、これは収穫物で年が明けた一月三日に村落の集会で煮て食べるらしい。

・ 境内に向かって右側に周りを石で囲まれた空間に高さ一拵ほどの石塔があるが、これは悪魔払いの目的で立てられたもので、毎年

一・三・九月の六日にここでお祭りをする。

◆ エビス

・ 神体は人形である。

・ このエビス神は歴史はそんなに古くはない。

・ 管理は漁業組合がしている。

・ 毎年旧暦の十月十日にお祭りをする。

◆ 火の神

・ 火の神に供える花は普通るときは松などの木花であるが、正月にはユズリハ、盆には萩の花を供える。また、色花は供えない。

◆ 田の神

・ 昔から田の神の像などもなく、もちろんお祭りもなかったが、沖田氏が幼い頃には田の隅に供え物をしていたことがあったという。

◆ 牧の神

・ 昔は上の牧・下の牧の二箇所に分かれていた。上のほうには今は塚が残っている。

・ 管理は一年交代で二人一組でしていた。

・ お祭りは主に初夏にしていたが、日時は決まっていなくて日のないときに行った。シシヨウさんに頼んで祈禱してもらい、団子などを供えた。

◆ 供養（家畜・魚など）

・ 毎年十二月二十五日に供養祭が行われる。

・ ある特定の場所で、昔は毎年、石を積み赤飯と線香をあげ、シシヨウさんが念仏を唱えた。現在は石を積み積むことはなく決められた「供養の石」のそばで供養が行われる。

◆ 講

・ 頼母子講があった。

二、西之表市・洲之崎村落

明治初期、十六〜十七軒はあった家のほとんどが法華宗信仰だったが、終戦後他の宗教が入ってきた。しかし現在も法華宗信仰が圧倒的に多い。

◆ 氏神（村落神）

・村落内に全部で三つ、いずれも個人の家にある。いつ頃からあるのかは全く不明。

・行船又吉氏宅の氏神は神体は幾つもあった。木でできた人形が三体（エビス・貴族男性の姿をしたもの・人の形をしたもの）と、いろいろな形の石が四つ棚の中に収められていた。朝晩お神酒をあげる。また、終戦頃まで共同で魚を捕ったときは、その魚を供えた。祭りはなかった。神棚には幾つかの箒のような形をした「しめなわ」がぶら下がっていたが、これは話によると、以前近所に住む山口うめ子さん（故人）というモノシリの人が稲刈りの後から生える藁を五〇センチほどに切り、陰干しにして作ってくれたものだという。

◆ エビス神社

・昔はこの村落には、水天宮（水神？）もあったが終戦後になくなったらしい。

・管理は昔は魚捕りの責任者が一人で行っていたが、現在では漁業組合の人が二人一組で半年交代でしている。

・供え物は焼酎と花であるが、花は絶対に枯らしてはいけないので頻繁にかえる。

・願立ては一月に行っていたが、元来は個人でするものだったらしい。今から二十五年くらい前までトビウオ漁をしていたときは、

村内の婦人たちが二組に別れて島中の神社に一日がかりでお参りをした。

・六月灯もあったが、いたって簡素なものであった。

・願成就は九月に行われる。魚と野菜を供え、ホイドンに祝詞をあげてもらい祝う。

・現在は廃れてしまったが、昔まだ漁師中心で祝っていた頃は最後に特別の踊りが奉納された。この踊りは、女達だけで踊った。化粧まわしを着け、相撲甚句のような言葉を口にしながら踊った。着物は昔は自前であったが、市制二十年のときに二十組作った。草履の帯は黒と決まっていた。また、草履は昔は藁草履だった。草履の鼻緒も赤で統一されていた。化粧まわしの上につけるしめなわは、藁ではなく布きりで作った。

・踊りの内容は、まず入場するときは右手に笹を持ち、右肩にかざしながら歩くが、踊るときは笹は使わない。踊りは輪になって踊る。歌詞は三番くらいまである。踊りが始まって終わるまで大体三〇分〜一時間くらいかかったらしい。

◆ 火の神

・供える花は柴で、色の付いた花は供えない。

◆ 船 神

・行船氏宅にあったが、詳細は不明。

◆ 供 養

・エビス神社の境内に魚供養の石が祀られているが、うるう年に供養祭が行われる。

・現在の測候所の近くに、十四〜十五年前まで家畜の屠殺場があったが、その跡地に供養碑が建っている。

・各忌ごとに寺から仏教語で「〇回忌法要」などと書かれた木札を

もらっていた。ちなみに土葬から火葬になったのは昭和四十年ころである。

◆ 講

・一月十一日に仏の法要が一晚中行われるが、これをヨミアカシという。

・ヨミアカシは本源寺において人々が集まって行われる。場の雰囲気としては、極端に敵かなイメージはない。

・出席者は昔は他の村落からきた人もいて三百人はいたというが、今では最後までいる人も少なく百人もいなくなってしまうたそうである。

・ヨミアカシでシショウさんに木の札にお経を書いてもらったものを、船につけておき魔除けとした。

◆ 霊異現象

・妖怪ⅡメンコウⅡアカメン

・大きな船の気配もないのに突然目の前に大きな船が現れた。

・山道を歩いていると、急に何か大きなものが立ちはだかったり、牛が通ったり（もちろん気配なし）してじっとしていると消える。↓キツネ・カッパ

・本源寺のそば（熊毛支庁近く）に小さな道があるが、昔はそこは木がうっそうと生い茂り、ヌレヨメジヨウが出るという怖がられていた。

・屠殺場そばの道も恐ろしかった。↓肝だめしの格好の場所

・バスターミナルの上に昔、ため池があったがその脇にガジュマルの木があり、そこはヌレヨメジヨウが立っていきそうな怖い場所で、その木々がガサツといっただけで背筋が凍り付きそうなど恐ろしかった。

◆ その他

・塩屋の神はなかったが、この村落では昭和十四年ころまで野元という人が百坪程度の塩田で塩を作っていたそうだ。

三、住吉・^{かみよきの}上能野村落

上能野と下能野の生業は半農半漁で、信仰は大方が法華宗で、残りの数軒は神道あるいは浄土真宗（甕島からの移住者）である。

◆ 神 社

・外から見ると、神社は一つだけのように見えるが近寄ってみると鳥居が二つある。向かって右側の大きな鳥居は天照皇太神を祀っている神社で、左側のそれはエビス神社のものであった。

・驚いたことに、エビス神社の鳥居をくぐり石段を登っていくとエビス神のほかに数種類の神が同じ空間の中に祀られていた。

◆ 村落神

・天照皇太神であるが、能野里にある椎の木神社から分かれてできた。

・またこれは塩屋の神でもあった。

・管理は村落の年長者から順番に一年交代で行う。昔、塩屋の株主の組織があったがもともとはこの神社も彼らの所有していたもので管理も彼らが一年交代で釜司（神主）となっていた。

・秋の願成就は村落長あるいは村の役員の家でホイドンを呼んで祝詞をあげてもらい、宴会をして祝う。余興として、子供達が神社の境内で相撲をとったりした。

◆ エビス神

・神体は丸い石だそうだ。

・管理はベンザシが一年交代でしている。

・豊漁・豊作祈願の目的で行われる六月灯は、下能野・能野里とは別の日にそれぞれ行われる。このとき、ここでは天照皇大神もエビス神と一緒に祀られる。またこの日、ブリひきが行われ、その利益は漁業組合の運営費に当てられる。

◆ 産の神

・瀬下家のもので明治の初めに祀られたそうだが、詳細は不明。

◆ 海神

・鳥居のそばの平べったいサンゴ石の上に、六〇センチの細長い石が乗っていて、それに「本天宮海神守護神」と刻字されていた。かなり荒れていたもので、見落としてしまいそうだが見る限りでは管理はもうされていないような印象を受けた。

◆ 山神

・祠があったが、「山神」「昭和十二年」という字のほかは読むことができなかった。

◆ 牧の神

・山神と対照的に位置していて、祠もそっくりだった。
 ・塩屋株主の頭をしていたという瀬下三郎氏によると、この村落ができたと同時に牧の神もできたそうだ。藩政時、戦馬を放牧していた。牧の株主というのもいたが、これは塩屋株主と同じ人々だった。

◆ 講

・終戦まで兵士の安全祈願を目的とした二十三夜待ちが個人で行われていた。
 ・昔は一月十一日に本源寺までヨミアカシに行った。もちろん現在も続いているが、当時は異性と知り合い、交流できる絶好の機会

だったので若い男女は競って参加したという。

・終戦頃まで十二月十四日には、各小学校で「四十七士のヨミアカシ」というのがあった。先生が義士伝を生徒に読んで聞かせ、夜明けになると神社に行つて参拝した。

◆ 霊異現象

・昔は一月十六日には山に入らなかったが、この日は山の神が集まつて酒盛りをするのでうっかり入ると邪魔になり祟りがあると言われていた。

・神社の後ろは山であるが、そこはガロー山である。昔は女性は立ち入ってはならないと言われていた。

・昔、あるホッポウモン（無鉄砲な人）がガロー山に入り、その木の枝を折るかどうかしたのかは不明だが、すると両足が腫れてしまった。当時、そのウトギ（中が空洞になっている木）に一匹の蛇が住み着いていて、村民はそれがガロー山の神様だと信じていた。しかしその男は、「そもそも守ってくれるはずの神が人に祟るのはけしからん」と言つて、コエタンゴに人糞を入れてそれを例のウトギの中の蛇にどっぷりとかけた。するとなぜか足の腫れが治ってしまった。それ以来、祟ることはなくなったという笑話にでもなりそうな今から百年以上前の話。

四、住吉・能野里村落

この村落は海から離れた小高い丘の上に位置していることもあり、農業専業である。信仰は法華宗がほとんどである。本立寺を境に「寺の里」「後の里」とにさらに分けられる。

◆ 椎の木神社

・祀られているのはオオヤマツミノミコトで、神体は丸い石だとい
う。

・年三回、ホイドンをよんで四月に願立て、七月に六月灯、十月に
願成就が、いずれも十八日に行われる。願立てには村落の役員が
列席し、豆・果物・野菜・塩・魚二匹・米などが供えられる。願
成就の後には昔は昭和十五年ごろまで相撲大会をしていた。

◆ 山の神

・昭和十年ごろまで祠もあって、年配者がお参りにきていたが、現
在はもうどこにもその名残は認められない。

◆ 氏神

・「寺の里」では昔は日高家と上畑家に氏神を祀っていたらしい
が、「後ろの里」では氏神を所有する家はなかったそうだ。

◆ 火の神

・供える花はケダバナ（正式名称不明）で、色のついたものは供え
なかった。

◆ 霊異現象

・山の中で太鼓の音などがして、大勢の人間が騒いでいるのかと思
って現場に行ったが誰もいなかった。
・森の中で大きな木の倒れる音がしたので、行って見たが何事もな
かった。

・山の中で大きな人影が横切ったのを見た。

・第二次世界大戦中、浜辺には多くの兵士の死体が流れ着いたこと
があったが、きちんと葬ってあげたのにもかかわらず、その後夜
な夜な浜にその幽霊が現れた。夜、海に魚とりに行くと誰もいな
いの足音が聞こえる。また、船で明かりを灯して漁をしている

と、船もないのに海上に火が灯った。

・夜、釣った魚を自転車の後ろに積んで帰っていると何者かが後ろ
から引張っているようだなかなか前へ進まず、やっこの思いで
家に戻ってビクの中の魚を見ると、目だけすべての魚がくり
ぬかれてなくなっていた。

◆ その他

・一月十一日に悪魔払いの破魔行事がアコウの木の下で行われる。

・この村落は地理的景観がシリキレバナ（海に向かって絶壁のよ
うになっていること）なので国道ぞいのガードレールのそばに石
敢当のようなものを建てた。そういう意味あいからも本立寺が建
立されたという。

・本立寺では年四回、魚などの供養祭が行われる。

家をめぐる信仰伝承と丸木舟

斧淵 和 永

一、はじめに

我々はよく「神」という言葉を耳にする。昔の人々は、家の内外はささやかながら神棚や石塔、祠を建て、事ある毎に拝み祈っていたのである。周辺に多くの神々が存在していたのであった。

ところが、文明の進んでしまった現在、そのような神様はほとんど我々の周辺から姿を消してしまった。神様が今も残存している地域は少数地域に限られてしまっている。今回訪れる種子島は、その限られた地域のうちの一つなのである。そんな種子島で私は様々な神を見聞し、特にその中で人間に最も身近に存在し、なお現在も信仰されている屋敷神について調べたいと思う。

二、見学感想

種子島は南北に細長い平坦な島である。北から、西之表市、中種子町、南種子町の三つに分かれており、昭和六十一年四月一日現在で四一、八一六人がこの島で生活を営んでいる。農業、漁業とも盛んであり、農業では主に甘蔗、甘藷、園芸作物、たばこ等が作られており、漁業では以前はトビウオ漁が盛んで、一時期トビウオ漁獲高が日本一のこともあったが、現在では沿岸漁業が中心である。

実際に種子島に上陸してあちこち回ってみる。国道をバスで走って、右手に目を移すと天気も良いせいも、静かな波が打ち寄せる海の向こうに馬毛島が見えた。そこは東シナ海である。かつては、漁船が船団を組んであの辺りまで行って豪快なトビウオ漁を打っていたのであろう。一路国道を南に下る。海岸沿いから内地に入る。周りには人家とサトウキビ畑が交代で目の前に現れる。高い山はあまり見当たらない。広大なサトウキビ畑の中に、大きな人工物が見えてきた。サトウキビの製糖工場である。島内一の生産量を誇る工場である。サトウキビは島の人々に重要な生活作物である。

やがて視界が開けて、真っ青な海が現れてきた。古代の我々の先祖の遺跡のそばで、自然の造形美を堪能しながらの昼食はまた格別であった。先程、右手に見えた東シナ海とはまた違い、今、左手に見ている太平洋は荒く、種子島の東海岸を激しく洗い、西岸では見せなかった変化に富んだ景色を見せてくれた。

このような豊かな自然の中で、種子島では古代からの様々な遺物、伝統が数多く残されているとともに、それらは非常にミステリアスであり、我々の心



カンザー（背負いザル）
（西之表市現和下之町）

中に強いミチシバやシュロの繩を使い、水に食べ物を入れているカラスにとられないことやいろいろな物を背負えるという人間の知恵が結果してできたものである。

を深くとらえる。南北に互いに対をなす宝満神社と浦田神社。宝満神社は南に位置し、女性的であり、海神を祀るものであるのに対し、浦田神社は北に位置し、男性を表し、陸の神である。そして、注意すべき点は、お田植祭の時、浦田神社は白米を祀るのに対し、宝満神社は赤米を祀る。これは民俗的にはかなり重要な鍵を握っており、これにより稲作文化のルーツが探れるかもしれないのである。

これはほんの一例にしか過ぎないのであるが、この他にも興味深いものがたくさんあり、現在でもこのような遺物や風習が残されているのかと思うと感慨深いものがある。

種子島は南西諸島の北端に位置するものであり、ヤマト文化圏の中に含まれているが、その位置の上で沖縄から琉球文化も流入し、琉球文化の特色も持ち合わせ、大和文化と琉球文化の混在が見られる島である。

わずか数日間の島内の見学ではあったが、その神秘性を見極めるには十分な時間であり、我々の好奇心を駆り立てるものであった。

三、調査内容

1 メインテーマ……屋敷神について

ここでは、種子島の屋敷神について触れる。

今回、私が調べた集落は、西之表納曾、国上寺之門、西之表城である。西之表に偏った調査になってしまったが、土族、古い集落、鍛冶屋等さまざまな集落や家を調査したので、興味ある資料や話などが集められたのではないかと思う。

① 西之表市 西之表 納曾 上妻紀夫氏宅

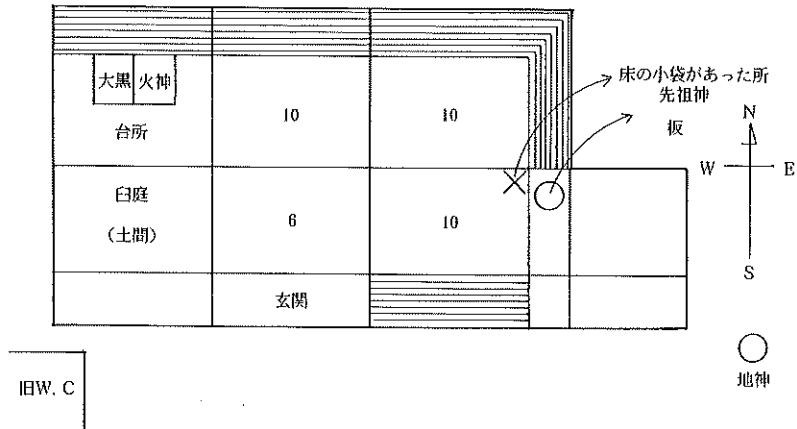
上妻家は種子島で由緒ある土族の一つである。私が尋ねた上妻紀夫氏はこの上妻家の本家であり、紀夫氏で二十九代目にあたるという。当然、家も立派な屋敷で、門もカズラの木をいっぱいに這わせたヌキ門であり、年末であるということでもちょうど庭師が枝葉などもきれいに切り揃えているところであった。向かって門の左側には、「石當敢」と彫られた石塔が壁に塗り込められていた。「石當敢」と彫られているが、実はこれは誤って彫られたとのこと、本当は「石敢當」と彫らなければならぬのである。実際、この周辺にはたくさん石敢當があるのであるが、それらは「石敢當」となっていた（一つは上部が崩れていた）。石敢當とは、三文字（三叉路）の突き当たり三文字を彫った立石で、悪霊というのは真っ直ぐにしか進めないものなので、三文字に入ると曲がり切れずそのまま石敢當にぶつかって散ってしまうというものだ。このような石塔があるというだけで、歴史のある家であると感じるのであるが、縄文後期住居跡でもあるのだと聞くと、その歴史の深さに呆然としてしまうのである。

では、ここで屋敷神に入ろう。火の神と大黒様は台所に並んで祀られている。先祖神（上妻氏は氏神様のことを先祖神と呼んでいらっしやっ）二体と一枚の字が施されている板が床の間に祀られていた。

まず火の神について。台所の戸棚の上に祀られていた。茶と榎が供えてあり、茶は毎朝代え、朝と晩、上妻さんは男も女も関係なく拝むということであった。木の厨子の中に札が貼ってあった。「火除守護」と書いてある。

大黒様にも、火の神と同様に茶と榎を供えてある。拝む日時、誰

上妻氏宅見取図



方には、大きな自然石がある。火の神、大黒様と同様に毎日朝と晩、夫婦とも拝むが、供えるのは榊だけで、果物を供えることもある。現在、この二体の先祖様の厨子は、床の間の上に祀られているが、以前は南向きに床の小袋に祀られていたとのことである。

もう一つ、杉の木の板に字が施されていた板についてであるが、それが何というものか残念ながら聞いていない。それに何が書かれ

が拝むのかも火の神と同じである。木の厨子の中には、大黒様を形取った石像と自然石があり、「出雲大神」と記された札が貼ってある。

先祖神であるが、これは二体ある。一方には、人が座禅を組んでいるのを形取った小さい石像が祀られており、もう片

が拝むのであるが、表にはたくさん文字が書いてあり、読みづらいのであるが、「南無妙法蓮華經」と分かる。裏には、

上妻源力衛門

藤原政止

維持安政四丁巳二月吉祥日

惣大工 柳田善助

と書いてある。表の字から、仏教の法華宗の影響があることは明白であり、裏の字からは安政四年（一八五七年）とあり、江戸時代後期のものであることが分かる。

地神は上妻さんの庭の池のそばで、家の西に位置する所に祀られている。榊を供えてはあるが、毎日拝まず、折目の日に拝む。

それでは、上妻家の屋敷神について、自分の考えを挙げてみたい。

- 屋敷神には色花は供えない。
- 上妻家が参拝する神社は菅原天神で、この祭神は菅原道真であるが、もともとは上妻家の氏神様であったものに、太宰府天満宮より勧請したものではないか。
- もとは、先祖神は南を向いていたということであるが、これは先祖神と南という方角と何らかの関係があるのではないか。
- 上妻家は神道であるが、木の札に「南無妙法蓮華經」と書かれてあり、やはり神道の土族でありながらも、法華宗の影響を受けていたことが分かる。
- 上妻氏の池のそばに地神が立っていたが、地神の性格からして、屋敷内に祀られていた先祖神よりも以前からその家の守護神的役割をしてきたと思われるのであるが、屋敷内に先祖神が祀られ、地神は文字通り土地を守る神になってしまったと思われる。

以上が旧士族上妻家の調査報告である。

② 西之表市 国上 寺之門 落合環氏宅

ある伝承者を探していたのだが、間違っ入っていった家がともおもしろい家系を持っていることを聞いて、その家のことについて調べてみることにした。

その家の人は、落合環さんといって、七十歳の女性の方であった。夫は西之表市の市議会議員までした人で、民俗的なものに非常に詳しく、自分の祖先についても調べたかったらしいのだが、惜しいことに亡くなってしまわれていた。

さて、この家についてであるが、この家の家系は、藤原鎌足の子孫である、ということである。家系図まであるそうだが、残念ながら拝見はできなかったが、恐らくは間違いないであろう。その後、宮崎に移り、数百年前、島津氏と戦い、負けて種子島まで逃れてきたのだそうである。この「落合」という姓は、種子島に逃れてきた時、浦田の小島についたが、この時伊藤さんという人に助けてもらったが、それで伊藤さんと落ち合ったという意味で「落合」という姓にしたという、おもしろい話も残っている。

それでは、調査結果に入ろう。落合家の氏神様は、以前は家の中にあっただけだが、今は近くの大山神社に移されている。家に置いておくと粗末になるから、とのことである。この大山神社というのは、その昔、園分寺があったのではないかと、この土地で言われているところである。

神棚には、天照皇太神の札が貼ってある。この札は、毎年町から配給されるもので、毎年取り代える。

火の神も祀ってあるが、榊が供えてあるだけである。毎朝、榊の水を代え、朝と晩女性が拜む。

納戸にも神様が祀ってあり、これはヨコザの神様と呼ばれていた。この家では、ヨコザの神様だけ石で作った像があり、木の厨子の中にある。この石像をよく見ると、俄の上に座っており、大黒様のようなのである。ここにも榊が供えてあり、毎朝水を代え、朝晩拜む。落合さんはこの神を産の神ではないかと言っておられた。もう一つ、サクの神というのがある。サクの神とは農業の神のことである。屋敷神とは別かも知れないが、この集落の特色を出していると思われるので、挙げてみた。ここでは正月のサクの神の祭りを列挙してみる。

正月 四日

鍛入れ

正月 十四・十五日

サクの祝い(コノミヤジョー)

ホダレヒキ

以上の事が、落合家の屋敷神、及びサクの神についての事例である。それでは、ここで私の考えてみたことについて述べてみたい。

● 落合氏は、移住民でありながら、自分の家の氏神を集落の氏神に移したということは、その集落の氏神の氏子になりえたということであり、この集落は比較的、開放的な集落であったのだろう。

● この家には大黒様はいない。その代わりに納戸に大黒様そっくりの石像がある。私は、納戸の神様の御神体というべきものを見たことも聞いたこともないのだが、この大黒様そっくりの石像はやはり大黒様であり、落合氏の誤りか？あるいは、大黒様と納戸の神様と関係があるのであろうか？

● 納戸の神は農民の神とも言われ、落合氏の言われた産の神ともつながる。土の問題とも関係するが、しばしば佐賀県のある地方ではお田の大黒といって、大黒様の田の神が見られる。また、大

黒を農村の神として祀ってある所もある。このことから、納戸の神と大黒様との関係もつながるのではないかと思うのであるが、どうであろうか。

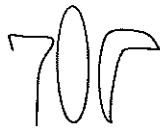
国上 寺之門には他にもさまざまな伝承が残っており、調べる余地は十分あると思われる。

③ 西之表市 西之表 城 野中隆信氏宅

野中氏は、日本では一人しかいないという炭火を使用する鍛冶屋である。「最後の鍛冶屋」として、日本国中の民俗学者の衆目を集め、野中氏の作る鍛の製作過程を記録した学者も多い中、私は鍛冶屋における火の神を調べようと思った。かつては、この辺りでも五、六件の鍛冶屋があり、様々な火の神を祭った行事があったのであるが、現在では野中家一軒になり、残された行事の一部を実際に演じてもらうなど、仕事の最中、話をしていた。以下は、鍛冶屋における火の神に関する行事であり、それを記すだけで私の所見は省かせて頂く。

● ふいご祭り 十二月二十日ごろ

七の字型、やり型、鎌型の三つの金で作ったものを柱に打ちつける。打ちつける所は、元、火の神を祀ってあった所であり、今は取り払ってある。野中氏もこれ



れが何を意味するのか分からないという。その日はホイドンをよび、魚・大豆・塩・米・野菜・大根を供えて祭る。

● 仕事初め 一月二日↓一月四日

もともと一月二日にあったもので、朝早く起きて、仕事を始める。その日の晩は、その日に得た収入で宴会をする。

● 金床が傷んだ時にする祭り

鍛冶屋の職人は、金床を非常に大切に扱う。金床の上に座るなどということは、もっての外である。その金床を何度も使い傷んだ時、近所の鍛冶屋の職人に手伝ってもらい、削るのであるが、これがなかなかの大仕事なのだそう。これを行う前にシユエー(潮井)を供える。その日の晩は、手伝ってくれた職人たちと宴会をする。なお、この祭りの名称を尋ねたが、不明である。

2 サブテーマ……種子島の丸木舟

現在、種子島で現役で活躍している丸木舟は九隻、使用されず保存されている舟は一三隻である。昭和四十三年当時は、全島で八三隻も数えたのに比べ、なんとも寂しい限りである。今回、中種子町浜津脇を訪れた際、浦元信義氏宅を尋ねた。浦元氏は、昭和五十六年十二月から昭和五十七年三月まで「最後の丸木舟」製作の棟梁として活躍された方である。この製作過程を克明に著した「最後の丸木舟」を参考にしながら、浦元信義氏の話も交え進めていく。

それでは、丸木舟の進水式の場面から進める。この丸木舟の進水式は三月三日の酉の日に決まった。進水式のことを「舟おろし」という。なぜ酉の日かという、酉(鳥)のように早く走れ、という意味を込めてであろうか。舟おろしは進水式であると同時に、舟大工が舟主に対する引き渡し式である。普通、丸木舟には舟霊は入れないが、この時には舟霊を入れた。供物には、塩・米・大豆を各一皿、神酒・三日月餅(月の輪)・日餅(日の輪)・丸餅二個・ゴ(小餅)三六五個各一对、墨つば・金づち・番匠がね・化粧品が舳先の方に供えられ、舟大工が、舟の中央に座り、かしわ手を打ち、「神々もろもろの神様に祭り申す。この仕事もけが人もなく無事に終わらせ頂きありがとうございます。これからの舟の安全と大漁

をお願い申し上げます。」と唱え、手で大豆と米を供え、神酒と塩をたらし、塩をまいて拜む。その後、舟大工が神酒を頂き、次に舟主が神酒をとりかわす。舟主と舟大工はゴーと丸餅を周囲にまく。まき終わったら皆で舟を押し出す。その舟にかなりの思いを入れて作った棟梁は、舟おろしの前の晩に、こっそりと舟に化粧を施す、という。舟には、舟主と関係者が乗る。沖へこぎ出し、適当な所で舟主、関係者を海へ投げ込む。これは、たとえ遭難しても無事帰ってこれるように、という願いである。そして、三回まわって港に帰ってくるのである。

現在、この舟は歴史民俗資料館に保存されている。この製作者、浦元信義氏曰く。完成当時は形も非常に良かったのであるが、丸太が十分乾燥しきれないうちに製作に取りかかってしまったため、時間が経って形がかなりくずれてきてしまった、とのことである。

種子島では、ブダイ・伊勢エビ・さわら等がよく釣れる。丸木舟で沖の適当な場所まで行き、いかりを沈める。いかりとはいって、ここでは石である。ブダイ等の魚は三〜五斤のさおで、カニをエサに釣る。エビ類は、海中に潜って、先が三つ股に分かれたモリで突く。また、木綿・麻等の網を使用して魚を捕ることもある。

漁師は、何枚も着物を重ねた「ポッター」という作業着を着て漁に出る。なぜ着物を何枚も重ねたものなのかというと、もし遭難した場合、海の中でもすぐ脱げるようにするためである。なお「ポッター」という名称の由来は、着物の「ポロ」からきているのであろうと浦元氏は言われた。

丸木舟の積んでいるものの中に、「アカトリ」と呼ばれるものがある。これは、舟の中に溜まった水を取り除くためのものである。丸木舟は製作過程において、やや舳先に傾くようになっており、前

部に溜まった海水をこれで取り除くのである。丸木舟は製作過程で舳先に傾くようになっていてと説明したが、このようになっていない丸木舟は失敗作なのだそうである。

舟の神様は女性である。だから舟に女性を乗せてはいけないのである。以前まではこの風習が強かった。しかし、浦元氏が家庭上の理由で奥さんに乗せたのがこの地域では最初であった。それから夫婦共に舟に乗って働く姿をよく見かけるようになったとのことである。

ここ、浜津脇にも恵比須神社があり、年に一度恵比須祭りが開かれる。ここでは、十月十日である。かつてこの日に大火事があった。その事を忘れないためであるようだ。この神社の御神体は楢円形の浜石である。目かくしをして、一度海の中から拾ってきた石をもう一度海の中に入れて持ってくる。不思議とまた同じ石を持ってくるのだそうである。恵比須祭りのこの日は、納官から神官をよぶ。御神体には野菜・海産物・果物・餅・米・大豆・塩を供え、踊り、メデタ節を歌った。もちろん、大漁後も恵比須様を祭り、その晩は居酒がくみ交わされる。この神社内には、イワシの供養碑がある。昭和十年にイワシがかなり大漁に捕れた時があった。その時の漁壺を祝ってあるのである。

正月二日には船祝いが行われる。ベンザンと呼ばれる管理者が指揮する。西之表市の住吉では一年交代で一軒の船主の家を選び、漁民全員がそこに集まって行われる。そして、法華宗の師匠さんが来て、祈禱の後、焼酎を飲み、船祝い歌を歌う。これは住吉の場合であるが、あまり距離の離れた集落ではないので、浜津脇とはそう変わらないと思われる。

浦元氏は、終戦当時、この浜津脇の集落にも約四〇隻の丸木舟が

あり、昭和四十年当初まではそれも現役で活躍していた。ところが、万国博覧会が開催される時、役人がやって来て、丸木舟を出展する、というのでそのほとんどを持って行かれた。ところが、万国博覧会が終わっても結局、島にはその丸木舟は帰らずじまいで、今はもう姿を消してしまった。あの丸木舟はどうなってしまったのだろうか。と、こぼしていらっしやう。温かい性格の浦元さんのあつげらんとした口調でおっしゃられた、その言葉を思い出す。

3 メイン・サブテーマについての感想・結果

メインテーマの屋敷神についての、①の西之表市 西之表 納曾と②の同市 国上 寺之門の両集落の屋敷神の相違点を挙げてみよう。

- 両方とも、屋敷神には榊を供え、色花は供えない。屋敷神は神という意識が強く、ここには仏教の影響を受けていない。
 - ところが、盆には屋敷神をいつも盛大に祭るといった仏教の影響を受けている神仏混合といったものも見られる。
 - 屋敷神において、納曾の方が寺之門よりも数が多く、しっかりした木の厨子に入れてあり、よく保存されているようであった。
 - 寺之門では氏神様を近くの神社に預けて集落民全体で祀るのに対し、納曾では集落で祀るものもあるが、各屋敷に氏神（先祖神）を祀っており、戸別で祀る感じが強い。
- 以上の事を今回の調査で感じた。

この調査を行う以前は、農村の集落と漁村の集落と土族の集落の三つの集落に行って調査し、その集落の屋敷神の特徴、あるいはその集落にしかない、例えば漁村に各個人の家にもエビス様が祀られていないか等、他集落との比較・検討・その神の性格などを調べ

たかったが、それを実行できなかったのが非常に残念である。また、今回行った集落でも、一軒ずつしか行けなかったため、その集落としての普遍性を割り出せなかった。その辺りを今後の調査の課題にしておきたい。

四、全体のまとめ

我々は、本や専門書等を読んで、「民俗学」というのがいかなる学問であるかを知っているかのようなものである。ところが、我々はまた机上のみでしか学んでいないのであって、実際に現地へ行き、そこの人々の生活状況を直視し、彼らの話を聞いたことはなかった。それなのにまだ「民俗学」というのを知ったことになるのか、と思っていた。

今回、実地調査というのを行い、直にその土地の老人の話を聞くことができ、ようやく民俗学という学域に一歩足を踏み込んだかな、という気がした。

ここで、「民俗学」がいかなる学問であるか、ということについて自分の口から言うのはあまりに日が浅すぎ、知識が薄すぎる、でもなんとなく分かったような気はするのである。

その土地の老人に「〴〵のことについて教えて下さい。」と尋ねると、少し照れくさそうな顔をして、昔の話を始めるのであるが、その表情には当時を懐かしんで、とてもいい表情をしているのである。

我々は、今回の調査を通して「民俗学」とはいかなる学問であるか、ほんの少し分かった。私は、その底流なるものは人と人との触れ合いから生まれるものではないかと思った。

最後に今回の調査にご協力して下さった方々に深く御礼申し上げます。
たい。

参考文献

- 小野重朗著『民俗神の系譜』 法政大学出版局 一九八一
西之表市編纂委員会編『西之表市百年史』 昭和四十六年
下野敏見著『タネガシマ風物誌』 未来社 一九七五
中種子町立歴史民俗資料館編『種子島最後の丸木舟』 昭和五十八年

屋内神・その他

古 林 昭 治

一、はじめに

種子島は今回で二度目の調査である。屋内神を考えるにあたっては、特に信仰を考える場合、世界観をふまえておかなければならない。種子島は周囲を海に取り囲まれた南北に長い一つの小世界である。その北端には浦田神社が位置し、南端には宝満神社が位置して世界観を構成している。

南西諸島は広域に見れば種子島から与那国島までを考えることができる。離島はいずれも海上交通が発達しており船を媒介として、さらに小世界が形成される場合が多い。柳田國男は『青年と学問』の島の話の中で、屋久島について、「こういう山路だけでつながれている海岸の村々は、外から観た目には一つの陸地であるが、内から考えると舟で往来する以上は、幾つかの小島と異なるところはなかった。」と述べている。「シマ」という言葉が南西諸島では村落を意味するのはまさにこのためで、舟を媒介として世界観が構成される以上、シマも村落も同じ共同体であると認識されていることをよく表現している。

種子島の場合、海上交通の発達も見られるが、陸路についても屋久島に比べると発達しており、「シマ」＝村落共同体と言う概念は、他の島々よりは希薄であると言える。

本調査は、テーマは屋内神としているものの、村落神を含めて広い視点で捉えた上で、聞き調査報告と見学調査報告、さらに最後に若干の比較と考察を行った。考察はまだまだ勉強不足であるが、先の屋久島・沖繩の調査をふまえて一つの指標として述べたものである。

最後に本実習でお世話になりました市役所の方々、博物館の先生方、日典寺の山田永順先生、協力して下さった伝承者の方々に心より感謝申し上げます。

二、聞き調査報告

本格的に村落に入り、伝承者を探して聞き調査をすることができたのは二十九日～三十一日の三日間であった。伝承者を探し出すという作業は、それでも種子島の場合は容易であると言え、年末の忙しい中にわざわざ質問に応じて下さった方々には心より御礼を申し上げます。

私のテーマは「屋内神」であったが、この間の聞き調査では特にテーマにとらわれず、伝承者の方々の話されるままに調査を行った。屋内神を考える場合、村落神やその村落の生業なども合わせて考える必要があり、又いかなる事例も何らかの形で人間の精神的活動が関与しているのではないかという、きわめて広い視点に立ったものである。

聞き調査は主として伝承者からの話による資料となり、学術研究としての資料としては信憑性に欠けることなどが問題とされ、又、その点が日本民俗学の弱みであるとも言われている。今回の聞き調査では、このような問題点を残してはいるものの原則としては伝承

者の話を尊重して明白な誤りがない限り、そのままの形で記録するものとした。よって同じ質問に対して伝承者によって答えが異なる場合もあったが、そのような場合も異なるままに記録しており、これらについては文献史料などによって考証しなければ、現在のところ資料としては不十分である点を予め述べておきたい。

1 西之表市現和(十二月二十九日)

現和の上之町、下之町を中心に、榎本貞彦氏、鮫島紀子さん、池田感氏にお話を伺った。以下項目別に見てゆく。

① 屋内神について

床の間がある部屋をオモテと呼び、オモテにはトコノマ、(オオドコとコドコ)、カミダナがある家が多い。すなわちオモテの床の部分を大きく三つに分割し、向かって左にカミダナ、真ん中にトコノマ、右にコドコを置く家が多いそうである。榎本さん宅ではコドコをオモテの向かって左側に作り、昔は飾り物などを置いていたが今はベニヤ板を張って改築されたそうである。コドコの機能としては、このように、主として飾り物を祀る空間であり、拝むということはあまりないそうである。

現和では村落の宗教は神道がほとんどで、家屋の多くはオモテの左側にカミダナを作り、拝む場合は最初にカミダナから拝む。注連縄をはって格式高くするのが本当であり、他のいかなるものよりも高い位置に祀らなければならない。神道ではあるが葬式などの場合は坊さんと呼んでくるそうである。

家屋内に「仏壇」は存在せずカミダナに位牌を置く。すなわち位牌を置く空間をカミダナと呼び「センソダナ」と言う言葉も聞かないそうである。カミダナは朝晩拝み、カミダナのみを拝む場合も多

い。

オオドコには、かけじく、マツの葉、その他飾り物や置き物などを置く。神社の札などはカミダナにはる場合が多い。

床の間の空間は柱によって区切られるが榎本さん宅ではカミダナとオオドコの間の柱の一部を切り込んで見栄えを良くしている。オモテにあるカミダナに近い柱(享主柱ではない)に札ははってあるが、これは今から数十年前に庄司浦の龍光寺という法華宗の寺の和尚からもらったもので、貞彦さんのおじいさんが死んでからはった札だそうである。札には、「南無妙法蓮華経折家運長久救」と書かれてある。カミダナにはキクやダイダイなどの花をあげるそうである。

鮫島さん宅は今年新築されたものであるが、以前の家は明治六年に建築したもので、新築に伴いそれまで祀っていた屋内神を新しい家宅に集約したような感じである。紀子さんは既に隠居しており、この隠居家も新築した。ここには現和の村落神である風本神社の分社をオモテに祀っており、祭時には風本神社の方の神官を安城から呼ぶそうである。分社やカミダナにはサカキの花を供えることが多いが、現在ではヤマケタなども供える。盆にはシキビを供えることも多いそうである。鮫島さん宅ではオモテの拝礼順位は最初に風本神社の分社を拝み、次にカミダナ、オオドコやコドコはあまり拝むようなことはないそうである。

ヒノカミ、ミズノカミは昔はどの家でも祀っていたが、ガスや水道などが入って来て、最近では希薄である。榎本さん宅では昔はカマドがあったが昭和五十年前後に取り壊され、現在はカマドあとと当時祀っていたヒノカミをそのまま祀っておられる。カマド神もヒノカミも同じでありシイシバなどをよく供えるそうである。鮫島さ

ん宅では現在の新築の家屋ではヒノカミは祀っておらず、その代用とも言ふべきものとして炊事場の棚に神社の御札を置き、台所に立った時は拜むようにしておられるそうである。この御札は福岡の親類の方が台所に貼るようにと送られたもので、「高良大社荒神守護」と書かれた二〇センチぐらいのものである。

昔は井戸の端にスイジンを祀るのが普通であったが、最近は上水道の普及で信仰もあまり見られないそうである。しかるに井戸は埋めてしまわず保存する場合が多く、これは水は生命のもとであり、埋めることを嫌ったそうである。

池田さんはかつて瓦焼きをされていたが、その当時のカマ跡に現在でもヒノカミサマを祀っておられる。このカマは感さんの父のゲンジロウさんが祀り始めたものであるが、能野焼の花びんにサカキ、シキビなどその時々の花を供える。神体の石塔はゲンジロウさんがカマで焼いたもので、花びんと合わせてカマの向こうの孟宗竹の繁みの中に置いてある。石塔の中に小さな丸石があるが、これを祀るときにゲンジロウさんはホイドンを呼んで来て招魂祭を行ったそうである。このヒノカミサマは瓦焼きのカマの神様であるが同時に家屋のカマドの神様でもある。まとめてカマの近くの繁みにヒノカミサマとして祀ったもので、感さんの屋内にはヒノカミは祀っていない。拜むのは男のみであり女性はあまり寄りつかず、又、寄りついてはいけない。ヒノカミサマは不浄を嫌うそうであり祭事の管理はすべて男が行う。花だけはいつも絶やさず飾り、赤花などもかまわないそうである。特に盆と正月はよく祀るようであり、屋外に存在するが職能神と屋内神を合わせた機能を持つ神である。ヒノカミは感さんが小学校の頃まで村落の至る家々で祀っていたそうである。

② 村落神について

現和の村落神と呼べるものに風本神社、天神様などがある。風本神社については未調査、天神様については、現在は現和小学校の隣にあるが以前はここには龍光寺という法華宗の寺があった。明治の廢仏毀釈に伴い龍光寺を取り壊し、その後菅原道真を祀る天神様を建てたが本殿の中の真中の神体は龍光寺の戸の部分だそうである。現在の天神様は昭和五十九年に改築した建物であるが、境内に墓石なども見られ神仏混合が色濃く見られる。

先の龍光寺は庄司浦に移り隠れて寺を建てたが、庄司浦の農民と和尚が敷地などをめぐりうまく行かず信仰されなくなったそうである。現在、天神は老人会で管理している。

③ その他

現和の宗教状況は現在ほとんどが神道であり、屋内の信仰に影響を及ぼしているが、家屋についても少し触れてみると、家屋建築に関して、

- ・ 寝る時は東か南の部屋で寝る。
- ・ 家は南か東に向けて建てる。朝日が差し込むような家が成功する。

- ・ 西、北向きの家はケガ人が多い。
- ・ ジロは三尺にする。

などとよく言われたそうである。榎本さん宅では母屋と家畜小屋の位置が本来は逆にすべきであったが、そうすると肥料などをオモテの前を通して表に出さなければならず不便であるので位置を替えたそうである。玄関は東向きである。

祭事はホイドンを安城から呼ぶが、昔は現和にもホイドンがいたそうである。祈禱などをしてもらう時は必ず注連縄を神棚にはる。

榎本さんの現在の家屋は昭和二十七年に建てた新しいものである。昔の家は茅葺き屋根に杉の丸太や長木を用いた巧みな技術で建てたが、現和には昔は大工がいなかったそうである。現在の現和小が明治十五年に設立された時に西之表の方から大工を呼んで学校を建ててもらったが、この時の大工が現和に定着して技術を人々に教えたのが現和大工の始まりであるとされる。この現和大工による家屋で、現和で一番古い家は明治十七年に建てられたそうである。

村落は現在には近代的な建築様式もかなり入り込んでいるが屋根が瓦になったのは、先の池田感さんの父、ゲンジロウさんがこちらで瓦焼きを始めたからだそうである。それまでは茅葺き屋根や藁葺き屋根が一般的であった。榎本さんが十四〜五歳ごろまでは茅葺き屋根が最も多かったそうであるが、茅は山まで取りに行くのに疲れ、また藁ならば手軽に入手でき、五〜六年は葺き替えをしなくても良いので藁葺きで屋根を葺く家が増えたそうである。戦後、池田ゲンジロウさんが入植して瓦焼きを始めることで、お金のある人が瓦屋根に替えるようになり、ようやく現和に普及したと言われる。

伝承者池田感さんに話を伺い、当時の瓦焼きを行っていた窯跡を見せていただいたが、感さんによれば、父のゲンジロウさんは慶応三年伊集院で生まれた。次男であり、しばらくは人夫などとして雇われながら生活していたが、内地で奥さんと結婚して明治三十三年に現在の現和下之町に入植した。この頃は麦藁や米藁の屋根が多く、特に米藁の方が入手しやすく多かったそうである。当時現和には瓦焼きはなく、ゲンジロウさんは入植してから住吉に瓦の製作技術を習いに行った。当時住吉には瓦焼きは二軒あったと言う。このようにして現和に瓦焼きが入り、瓦屋根が普及したが、ゲンジロウさんは昭和十年、数え年六十九才で亡くなり、瓦焼きは息子の感さ

んが続けておられる。

現和での瓦焼きはこのゲンジロウさんの他に、当時少し遅れて東市来のエグチノハマという所から入植したモトヤマタケシ氏の二軒で行っていたそうである。モトヤマさんの子孫の方々は現在ではこの土地を引き払って内地に移られたそうであり、感さんも現在では行っておらず、瓦は安城から取り寄せるそうである。

感さんの家は集落から少し離れた所にあるが、これは瓦焼きの粘土をこねるのに水が必要で水利の良い場所に立地したもので、又、窯を建てるのに風の入りにくい場所を選んだそうである。粘土は現和内の田から取り、ここで取った粘土で焼いた瓦は他の瓦と区別しやすく特徴的であった。窯に入れるマキが入手しにくくなったので昭和四十年ごろにやめたそうである。

感さんの現在の家屋もそうであるが、昔の家は六畳が三部屋で、主としてオモチを向いて左側が玄関、右側に炊事場をつくる事が多かったそうである。

2 西之表市住吉(十二月三十日)

住吉の浜之町、中之町を中心に、深田ミサさん、上妻利彦氏にお話を伺った。以下項目別に見てゆく。

① 屋内神について

住吉浜之町は漁村であり、農業はほとんど営まれていないが深田さん宅をはじめ数軒存在する。又、深田さんの家では御主人をはじめ学校の先生が多く、縁側の奥に棚を設けてハチマンサマとテンマングーサマを祀っておられる。

床の間はオモチにあり、向かって右側にホトケサマを祀る。左側はかけじくを飾ったトコである。床の間にはシババナやキク、ヤマ

ケダなどの花をあげる。

住吉の宗教状況については、日蓮宗（法華教）の信仰が厚いものであり、深田さん宅も日蓮宗である。先のハチマンサマ、テンマングーサマもオモテの近くに棚を設けて祀っておられるが、ホトケサマなどと比較して位置は同じであり、特に甲乙をつけるべき順位はないそうである。神様はその人の祀る心であり、人が祀らなければ忘れ去られてしまうのだそうである。

テーシユバシラにも札を貼ってあるが、これは本源寺からもらった札であり、札はこの他に住吉神社などからももらって来るそうである。

深田さん宅ではヒノカミを祀っておられるが、ヒノカミは三人姉妹であり、火の神、水の神、便所の神の三姉妹の長女だそうである。ヒノカミには色花をあげてはならず、イボタと呼ばれる木や、普通は花の咲かないものをあげなければならない。色花は大黒様が喜ぶのだそうである。大麻は深田さん宅では二枚貼ってあり、左側には寺からもらった札で、「奉勧請本門境内?大」と書かれており、右側には住吉神社からもらった札で「天御中主神御守護 高皇?靈神」と書かれてある。これらの札の配置は特に決まっていないうそうであり、札の上に花を置き祀る家もあるようである。

上妻さん宅は中之町であり、ここは農業を営む世帯が多いそうである。上妻さんは明治四年ごろに今の中之町に移って来られたが、それまで百年ぐらい住んでおられた家屋の建築材をそのままこちらに移して建てたそうである。現在住吉神社の神官をされており、床の間は神社の分社となっており拝みに来る人々も多いそうであるが、いわゆる神官の家の造りではなくて普通の間取りで建てられたそうである。

床の間はオモテにある。オモテノマは病人は寝ることができず、又、女性も不浄の時は入ってはならないとされる。上妻さん宅は神道であり床の間にはアマテラスオオミカミの札をはじめ、注連縄をはって格式高く住吉神社の分社として祀っておられる。花は本来はサカキをあげなければならない。これは日本神話でそのように決まっているからであるが、実際には類似したものはよろしいという考え方から、特に種子島ではヤマケダが多いそうである。この他にシバナやキクもあげる。神道では色花はあげてはならないそうである。

ちなみにこの床の間の分社に向かって拝む場合、本社の住吉神社は左斜後方に位置することになる。

上妻さん宅は神道であるのでカミダナに位牌を安置しておられるが、床の間と直角をなして右側に設けている。カミダナには位牌は順次安置していくので、古いものほど後方になる。拝む場合は一度にまとめて拝むそうである。

このように位牌を安置する空間はカミダナと呼び、センソダナやブツダンとは言わないそうである。上妻さん宅では柱に「住吉神社守幸札」を貼ってある。住吉村落では三割前後が神道であり、日蓮宗が多いそうである。

ヒノカミについては、土地の神、産土の神であると言われる。他の神々と比較して甲乙をつけることはできない神様だそうである。

② 村落神について

住吉では村落神と呼べるものに、浜之町のエビス、中之町の住吉神社がある。エビスは漁業の職能神で浜之町のみ管理となるが、住吉神社は住吉村落をはじめ、それまでの深川、能野、形之山などの神社を明治四十二年ごろに合社とした格式の高い神社である。

住吉神社は、島津氏が種子島を支配する以前の上妻氏の神社ということになっていて、神官の一代目は上妻宗寛と言った。住吉は昔は仏教徒が多かったが、明治の廃仏毀釈で神道化した。祭神は、先の上妻さん宅の古文書によると「住吉神社ノ御祭神底筒之男命中筒之男命表筒之男命……。」と記録されているが村落での巷の説では釣鐘を海から拾い上げて祭神としたと言われるのである。現在の御神体は鏡だそうである。

この「住吉」は、大阪の住吉に由来するようで、住吉神社は、大阪にある住吉神社を船に乗せて種子島まで運び、分社として祀ったのが始まりであると言いつた。深田さんの話では、住吉神社を大阪から運んで来た時に船を岸につないだとされる石が豊道の海岸の砂浜に残っていたそうであり、この石は海水の干満にもよるが、十年に一度現れるか現れないかぐらいのものだそうである。かつては住吉は天然の良港であり住吉は海神であることに由来するとも言われるが、漁業は専ら浜之町が行っており、漁業の職能神としての性格はほとんどないそうであり、又、浜之町にあるエビスも住吉神社とは全く関係ないと言われる。船祝いの時は国上から宮司を呼ぶのだそうである。

神社は、女性は境内に入ってはならなかったそうであるが、現在では関係なく入っている。

この他に、スイジンサマなどは村落で特別に祀っていない。住吉では船海神としての住吉神社と漁業神としての浜之町のエビスのみである。

住吉神社には源太郎踊りが奉納される。本殿は階段をのぼりつめた高台に位置するが、御長老など体の弱い人にとっては、この階段を登って参拝するのは苦勞するので、よく上妻さん宅の分社に参拝

するのだそうである。

③ その他

屋内神ではないがテッシュバシラ(亭主柱)は神聖視される。神社などの札を貼ることが多く、住吉神社の御札を二枚貼る家も多い様である。

村落は交通の便よりはむしろ水利の便から発展してゆく。昔の中之町の中心地は現在の出光石油配油所のところであり、かつてはここには井戸があったからだそうである。

深田さん宅ではザガミを屋敷神として庭に祀っておられるが、これは屋敷を守る神様であり、地神であるのだそうである。

屋敷を清める行事としては、一月一日に、茶碗の中に石を入れて塩を家にまく。この時「ナナウラヤウラニミツシオクミテ、ワガヤヲキヨムル。」と言いつながら、家屋の四方に塩をまいて清めたそうである。又、三十一日の夜には(トシノヨースと呼ばれる)便所の神様にろうそくを立てて祀ったそうである。便所の神様は特に御神体があるというわけではなく、普段は供え物や祭り事なども行わずに、三十一日の夜だけろうそくを立てるのだそうである。現在はこれらはいずれも行われていない。

浜之町では、スイジンサマは、特に神体を祀っているわけではないが、中之町との境のコウガワと呼ばれる川におられるそうで、「年の始めは、水をくまらずに黄金をくむ。」などと唱えながら祀った。物を供える時には、「エビスサマニアゲモース。スイジンサマニアゲモース……。」と言いつながら供え物をあげるのだそうである。

住吉浜之町は六〇〜七〇戸は漁業で生計を立てている。現在灯台が立っている火立ての峰からは島間、屋久島、硫黄島、馬毛島、佐多岬が一望できるが、昔はここで松明をともし漁船の目じるしと

した。昔はトビウオ漁もさかんに行われ、五月には馬毛島までトビウオ漁に出て、移住しながら漁をする場合が多かったそうである。住吉の方に魚がやって来てたくさん取れるようになると、港の入口に火を二ヶ所とす。こうすると馬毛島の方からも漁船がやって来たのだそうである。この火をとすのが一ヶ所の場合は、村落から死人が出たことを表すのだそうである。

3 西之表市国上寺之門(十二月三十一日)

国上寺之門にて、河内市彦氏にお話を伺った。以下項目別に見てゆく。

① 屋内神について

河内市彦さんにお話を伺ったが、未調査な部分が多いので次項と合わせて述べる。

② 村落神について

寺之門で村落神と呼べるものに寺之門神社がある。村落の人々によれば特に決まった名前があるわけではなく、通称寺之門の神社と呼ばれている。神社の配置は松の木の切り跡の前に本殿、その前に拝殿と鳥居、さらに右方に参道が続き数十段先に鳥居がある。本殿は森山に囲まれている所を切り開いたようである。参道は横にガルス石を積み、境内は至る所に海砂がまき清められている。拝殿の方の鳥居には既に正月の注連縄をはっているが、これは河内さんの話によれば新暦十月二十九日のオガンジョージュの時に、その前日に黒不浄や赤不浄のない人々が境内に集まり作るそうである。菓は神主が用意するが、かつては神社の供物を供える為の共有田があり、ここで菓を作った。この共有田はカミデンと呼ばれた。現在では行われていない。

現在の寺之門は約七〇戸からなるが、さらにこれらを九班に分けている。班の分け方も昔から決まっており、名称もそれぞれ班でさらに小さな神社を祀る班もあったそうである。現在の九班は、横峰、藪牟田野、小園、向江(？)、大田の五つの小字をもとにしている。その中でも横峰はカンノヤマと呼ばれる所に小字の小さな村落神としての神社を祀っているそうである。国上は浦田神社が最も格式が高く、横峰の場合であれば、(一)浦田神社、(二)寺之門神社、(三)横峰の神社と氏子が重なるが、これらの神社の行事はいずれも格式の高い方が終わった後に順次行われるそうである。

河内さんは今年度(昭和六十三年)の神主である。神主は新年の一月二日に交代するが、これには前年の神主、次年度の神主、次年度の神主(相板と呼ばれる)の四人に加え、これに神官が立合って神社で交代の儀式を行う。神主はこの時に次の神主に、紋付、袴、本殿や賽銭箱の鍵などを渡して引き継ぐが、呪文などの口承はないそうである。神主が現在行う事は、毎月一日と十五日にオシュエークミと呼ばれる潮くみを行うが、午前三時ごろ起床し湊の海岸まで出かけるそうである。毎月行うので神主は月当番(板?)とも呼ばれる。現在は湊へは車で出かけるが、昔はシュエーツツを持って歩いて出かける。この時人に会ってはならず、もし帰路などに人に会うと、もう一度くみ直してこなければならぬそうである。又、神主は肉を食べてはいけないそうである。現在これら行っていないがオシュエークミの前日だけは神主は肉を食べないように取り決めているそうである。

神社の拝殿の右側には洗い水とシュエーツツを置いてあるが、寺之門ではこれを神社に三つ、神主の家に一つ置くのが決まりだそうである。塩水をくみに行く時は神主の家のものをもってゆく。シュエー

ツツは普段は床の間などに置いておき、大切に保管しておくそうである。

河内さん宅は先祖代々神道であるが、寺之門では村落の宗教状況は、かつては法華宗が多かったが、明治の廃仏毀釈で神道へ変化し、現在は神道が五割、浄土真宗が三割、法華宗が二割程だそうである。

寺之門神社の年中行事は年間に六回ある。神主は先のオシユエークミと合わせてこれらの行事を取り持つ。この年中行事のうちの一つにオガンジョージュがあるが、この日に湊の海岸から真砂を取って来て境内にまき清める。又、神社の祭事には国上から神官を呼ぶそうである。

神社の細事はすべて神主(月当番)が取り持つ。鳥居には正月近くなれば門松を立てるが、これは神主個人の家に飾る門松と同じものであり、特に神社に飾るので変えなければならないということはないそうである。

門松はマテの木を九本割木として囲み、松、カラタケ、ウラジロ、ユズリハ、マテの葉などを使う。

③ その他

寺之門神社の年中行事についてさらに詳しく述べると、

● 町祈禱(新暦一月二十日)

部落安全や害虫供養などが目的であり、村落の入口の四つ角に御幣(シビと呼ばれる)をはる。村落の数ヶ所に供養石を立てて御幣を飾るそうである。

● 春祭り(新暦三月十八日)

五穀豊穡などを目的とした、いわゆる願かけである。

● 六月燈(新暦六月十八日)

鹿児島県内の六月燈と同じものだそうである。

● オガンジョージュ(新暦十月二十九日)

春祭りの時にたてた願をほくくもので、戦前は奉納相撲を境内に土俵を作って行ったそうである。神社の祭神にお礼を言うものである。

● 霜月祭り(新暦十二月三日)

詳細は未調査、寺之門では三日に行うので、シモツキミッカ、中目村落では四日に行うのでシモツキヨッカと呼ばれる。

これらの他に、新暦二月十一日に建国記念日が制定されてからは村落でも寺之門神社で祭事をするようになったそうである。各行事での供え物は、米・焼酎・野菜・果物・昆布など時々物を供えるが肉類はあげてはならない。ただし魚は必ず供えるそうである。

年中行事には親類に死者が出た場合、四十九日までは参加できない。死人に対してイトコ、フタイトコぐらいまでは参加できないそうである。

ちなみに寺之門神社の祭神はオオヤマズミノカミである。又、女の神であるとも言われる。神社本殿の後ろにある松の神木跡は、白アリに喰われたので村落で決めた上で切り倒したそうである。

正月近くになると門松を立てて注連縄をはるが、注連縄は三十一日の夕方には家がが多く、最終的には二十日正月に取り払う。一度七日の七草にはずすが、十五日のサクノイワイの時にもう一度はるそうである。サクノイワイの時は餅をついて祝う。

村落では一般に六日ごろまで、すなわち六日正月までが正月であるそうだが、寺之門では農業を営む世帯が多くサトウキビの出荷があるので正月二日ごろまで仕事をせずに休み、三日ごろからは仕事を始める家が多いそうである。

寺之門の地名の由来としては、以前はこのあたりに寺があったそうであり、寺の川など寺と名の付いた地名が多いそうである。河内さん宅の前にある田にはかつて石塔のようなものがあり、斧、石などの考古遺物も出土しており、国分寺が存在したのではないかと書かれているそうである。

三、見学調査報告

本年度も昨年度と同様に全島を巡検することができ、又、種子島での年中行事（正月行事）を実際に見ることが出来たことは有意義であった。

特に住吉の浦祝いでは、種子島の万能祝歌である、めでた節を採集することが出来、又、漣泊では伝統ある船祝いを見学することもできた。

万能祝歌である、めでた節は全島でも様々であり、種子島の風土に合うように変化している。民謡とは、もともと風土に合うように変化するのが本来の姿であり、行事に合わせて変わるべくして変わるものは風土の影響であり、民謡の真髄であると思う。

博物館などに集められている民俗資料についても実際に使用されるままに保存されるのが望ましく、専門の学芸員などをもっと増やすことが待たれる。

1 全島巡検、博物館見学の感想

～ 屋内神を中心に ～

十二月二十七日～二十八日には全島内を巡検する機会に恵まれた。巡検は昨年度と重複する場所もあるが、屋内神という視点をふ

まえていたので、又これまでの屋久島・沖縄本島などと比較しながらの現地見学であったので斬新であり、新たな疑問点も湧いて出るものであった。

ここでは主として屋内神を捉えるにあたって関連する事例と、それについての感想を述べたいと思う。詳細については様々な書籍が出版されているので深く述べないが、新たな視点と、それに対する若干の考察を述べたいと思う。これらについて見学者が種子島を捉えるにあたって、見たまま、感じたままを考えてみたいと思う。

○根本山日典寺の山田永順先生によると、昔の農家は土間と縁側があり、玄関がなかったそうである。冠婚葬祭などには縁側から入った。種子島では農民と士族階級ではっきりと家屋も区別され、特に農民階級では玄関が見られるのは最近になってからだそうである。

○能野、能野里、上能野は特に能野焼で全島の有名である。能野には現在でも当時の窯跡が史跡として残っており、ガジュマルの木の下にカマドの神（火の神）を祀っている。家形の能野焼の塔の中にある能野焼製の板が神体と思われる。この板には「天照……」の文字が刻まれている。

焼物のさかんな能野においては、このように能野焼が「火の神」を祀る時の媒介となっている。これは先に種子島開発総合センターでも土偶に類似した能野焼製の「カマドの神社」を確認することができ、この地域（全島にも大きく影響している。）においては特に職能神としてカマドの神様（『ヒノカミ』）を捉えることができよう。こうなると、本来炊事場のカマドに祀るヒノカミがどのように変化し得るか、又、その必要性などが問題となろう。全国的に窯焼きについては女性を不浄視する傾向が見られるが、職能神としてのカマドの神様が一般家庭の女性が管理するカマド神やヒノカミと同

一視される性格か否かなど疑問が残るところである。

○住吉は天然の良港が昔からあり、住吉神社は大阪の住吉神社から勧請したと言われる。神社の鳥居は境内の入口と参道の入口の二ヶ所に置かれている。この鳥居をよく観察してみると、この二つは形が異なることに気付く。鳥居は柱二本（左右）横二本の木で囲まれるが、境内の入口の鳥居には横二本のうち下側の木が柱を貫いていないもので、参道の入り口の鳥居はこれが貫いている。

見学調査後住吉を見聞調査に赴き、この鳥居の形の異なる点を住吉神社の神官さんに聞くことができた。それによれば、この二つの形の異なるのは建築技術によるもので、下側の横木が貫かれているものが高度であり、しかるべき技術水準に達しないものは貫かれていないそうである。神社建築の本格は横木を貫く型の方である。

しかし、少なくとも神社の拝殿や本殿を建築できるだけの技術があるとすれば当然鳥居も貫門型にするだけの技術は兼ね備えているはずであろうし、本格の鳥居の形にしたのに違いないと考えられる。増田向井町の清浄寺の貫門は現在はコンクリート製であり、横木を意識的に貫いてあり、先の鳥居の二つの異なる形は必ずしも建築技術のみによるものとは断定できないのではないだろうか。

○大塩屋にて金城樽氏、カマル夫人に間書きを行う。樽さんは大正末から昭和初めに宜野湾から入植された。漁業を行うために入植されたが、樽さんがこちらに来られた時には既に先住者があり、その一〜二年前に糸満から入植されたそうである。与論や沖繩本島から入植が大塩屋には多く、葬制なども現在は火葬であるが、終戦までは改葬が行われていたそうである。樽さんの家屋は種子島の家屋に倣って自分で設計されたそうである。樽さんの家屋は種子島の家屋「奥津比古神奥津比賣神火産靈神御幸札」と書かれた札を貼ったヒ

ノカミがある。又、カミノザに床の間を設けて向かって左側に仏壇を、床の間はオオドコとコドコに分けて設けてある。仏壇のことはオヤガミと呼ぶ。オオドコには掛け軸や増田神社の御札、能野焼の瓶などを飾る。家屋の内にはヒノカミとオヤガミの二つを祀っておられるが、この他に屋外に屋敷神と呼ぶにふさわしい、スイジガイと石を庭に置いてある。これについては詳しく調査できなかったが、スイジガイに対する信仰は明らかに入植以前の信仰をこちらに移住した後に続けたものである。

○平山徳瀬のガローヤマは岩坪家の裏山にあり、家屋から見ると北西にあたる。タブの木の神木にサンゴ礁石を積み石塔を置いて祀っているが、神木が神体であり樹木信仰である。ガローヤマは伽藍山であり屋敷の守り神であるとされるが防風林としての実用的な側面も持っている。

○平山仲之町向井里にもガローヤマがある。ここは、タブの木の前に石塔を置き中には石がある。この石塔の前にはイヌマキ(?)の木に縄が張っており、神社の鳥居のように見える。

ガローヤマは屋敷の守り神である。又、一族の守り神でもある。向井里のガローヤマの場合むしろ中間形態であり今後の村落の発展に伴い神格化するものと考えられる。

○中種子町立歴史民俗資料館には能野焼でできた石塔や甕棺が展示されている。石塔は南西諸島では山川石や屋久島ミカゲ石が多いが能野焼の勢力範囲を追ってゆけそうである。種子島では能野焼の製品は実用品から御神体まで広く利用される。資料館には能野焼の尿瓶なども展示されており、他方では神体を祀り保護する役目をもつ石塔と対照的である。聖に利用される材料が又、俗においても利用されていると考えることができよう。

2 年中行事（正月行事）見学にあたって

正月をはさんで、国上野木之平トシトイドン、西之表市住吉で浦祝い、壱泊で船祝いを実際に見学することができた。その詳細は様々な研究報告が出ているのでここで詳しく述べる必要はないが簡単に感想も含めて述べたいと思う。

① トシトイドン（西之表市国上野木之平）

野木之平は甌島からの移住村落で、このトシトイドンも甌島で行われていた行事であり、移住後も有志が続けたものである。甌島ではトシドンと呼ばれ、種子島ではトシトイドン、シウウガットンと呼ばれている大晦日の晩の来訪神である。

トシトイドンは大晦日の晩に空から下りて来る。首のない馬に乗って、鈴を鳴らしながら子供のいる家を訪れ、悪い子供は首を取って持って行ってしまうのだと言われる。普段は子供たちを空から見ているそうである。

実際に訪れる子供は小学校一年〜二年生ぐらいまでの家庭であり、子供とトシトイドンとの問答の時は両親も立ち会って手助けをすることもある。問答の最後には子供を近くに呼び寄せて後ろを向かせ背中に餅を乗せてやる。子供は恐れながら親元まで歩きトシトイドンも消え去る。トシトイドンが消え去る時には鈴を鳴らし、「ドードー」と馬声をあげて効果を出す。

子供に餅をやるのは昔は米は貴重品であり、子供にとっても大きな餅は宝物であったからだそうである。

このように実際に来訪神を見学して感じることは、トシトイドンの出現理由として何よりもまず村落内の子供の教育効果が挙げられ、昨今民俗学で言われる異人として来訪神を考えるのはこの行事では不適當ではないかと思う。親が子供を戒める場合、よく第三者

を設定することで効果をあげようとすると言われる。基本的に母子は一体であり、母はいかなる場合でも子供の行為を第三者の価値基準を挙げて改めさせようとする。これは日本の幼時教育の特徴であると言える。

季節の変わり目に仮面来訪神が出没するのは秋田のナマハゲを始めとして全国各地に見られるが、野木之平の場合、移住後も村落行事として行われる必然性は何よりも村落の精神的な共同体連帯感の確立であり、村落の子供の教育的効果という面を濃く見るものであると思う。むろん、この出現の十二月三十一日の夜という設定は先の教育的効果だけでは説明できない。昔は新年一月一日をもって年を取ることに、トシモチをくれることなどを考え合わせ、幼時が少年へと成長する時の一種の通過儀礼としての意味も何らかの形で果たしているのではなからうか。

② 浦祝い（西之表市住吉浜之町）

浜之町の奥村雄男氏宅で正月に行われる。床の間の前には、ろうそく・焼酎・鯛を二匹口を合わせて供える。日蓮正宗の巻物が一年に一度、この日だけ公開されるそうで僧を呼んで漁師がひとりひとりこの巻物で頭をなでてもらう。詳細は諸文献で紹介してあるので省略。

③ 船祝い（西之表市壱泊）

一月二日の午後より壱泊公民館で行われる。公民館にはエビスサマを祀っており、床の間には鯛を供える。ダイコン・ニンジンなどを切って先端部の突出た方を立てて供える。市長などの祝辞もあり、かなり儀式化している。船祝いの船歌については、船乗りたちが出船、入船の際にも歌い、入船の時には一里ほど先から「ツナザラエ」を歌いはじめ「ロウタ」が終わるころには港に入るようにテン

ボも調整されるそうであるが、風の強い時には早めに、又、まわりの景色などを見ながら入港と歌の終わりが合うように歌われるのである。となつてくると船祝い歌は、祝い歌というよりは労作歌の一種と言えるのではなからうか。これらは遼泊では座敷（公民館）で合唱されるが、他の事例を見てみると船の甲板の上で実際に櫂を持った音頭取りに合わせて合唱する場合も見られ、作業歌としての性格も帯びてくると考えられる。

四、比較と考察

以上調査見学をふまえて若干の考察を行つてみたい。

1 屋内神について

屋内神とは家屋に対して祀られる神々であり、村落神と共に村落共同体の一員がその社会の中で生活するために必要不可欠な信仰の対象である。ただ村落神に大きく影響されながらも、その最終的な管理者は家屋に居住する人々であるので信仰の表現は村落神と比較すると自由であると言える。家に住む者が生活を続ける上で納得のいくように信仰すれば良いわけであるし、実際の信仰は合理的になると考えられる。

聞書調査の事例のうちこれらを明確に示すものとして、(一)現和の池田感氏宅の火の神、(二)住吉の深田ミサ氏宅のハチマンサマ、テンマングーサマなどが挙げられる。

(一)現和の場合、池田さん宅のヒノカミサマは明らかに職能神となつており、それであるがゆえに女性の信仰を必要としない。というよりも女性は拜んではならないとする点などは、山の神などと同じ

性格を持つものとして信仰されているのであり、又、瓦焼きを生業とする家屋が生活を続ける上で、そのような信仰形態が合理的であると感じており、精神的な充足を図ることができるのであると考えられる。この家屋に住み、家事を扱う女性はカマドの神やヒノカミは信仰しないことになるが、これは信仰しないわけではなく、むしろ職能神であるヒノカミサマと覆い被さって信仰されることになるのであり、そうすることが許容されるのである。

(二)住吉の場合、テンマングーサマやハチマンサマはその家に住み屋内神を管理する者が先生であることによるもので、この場合もこれらは職能神の一種であると考えられる。管理者の精神的な充実を満たすべき要素をもつもので、信仰の方法も管理者にゆだねられている。菅原道真は字問の神様であるが、村落神として祀られる場合には御霊信仰による点が多い。(三)住吉の事例の屋内神としての菅原道真には御霊信仰の要素は皆無であると言える。これは、しかるべき要素は家屋に祀る必要がなく、又、別の神々が信仰の対象となることで屋内神が相互に機能するものであると考えられる。

伝承者自身も、「神様は祀る人の心であり、人々が祀ろうとしなければ、すたれていってしまうものである。」と言われたが、祀る人が祀ろうと思つているその背景には住居生活を営むにあたっての個人レベル、もしくは家レベルでの精神のよりどころを求める心があると言える。

屋内神の位置は正月のシメを飾る個所に、その主要なものが示されていると言われる。便所神について、(四)住吉の深田ミサ氏宅では、正月近くになると便所にもろうそくなどを立てることから、偶像としての便所神は認めないものの、信仰対象としては屋内神として位置付けられている。便所での禁忌も見られることから、屋内神

としての便所神は明白に信仰されていると言える。

火の神は主として女性によって管理される。それ以外は男女どちらでも良く、家の戸主であるのが一般的である。女性の不浄（月経や出産など）については、精神的なレベルでは現在でも固執し続けているが、実際の生活面では希薄化している。これは社会生活全体にそのような風潮が見られるからであり、すなわち精神生活面においても、このような禁忌を守り続けるに至らず、又、固執せずとも生活を営む上で精神的な充足を満たすものとして屋内神を位置づけているものであると言えよう。女性管理の火の神が、女性の不浄に影響されにくい点を見ても同様である。

西之表市住吉でも現和でも聞書事例として伺えたが、概して共通している宅地条件に水利の良い場所を挙げることができる。現在では上水道の普及の為、交通の便によって宅地が決定されるが、かつては第一に水利、第二に風が当たらず日当たりの良い場所となる。屋内神ではないが、このような視点から水の神を村落に祀り、水利の良さを村落の発展と同一視することができたのではないかと考えるものである。

屋久島では床の間をトコサマと呼び、床の間自体が一つの聖なる空間であり屋内神と同じ機能を持っている。種子島では、屋久島ほど神聖視されないが、屋内神の重要な配置場所として機能していると言える。床の間をさらにオオドコ、コドコに分けて機能も分化している。オオドコには主として掛け軸や大麻、その他に花などを飾り、聖なる空間であり、コドコはそれほど神聖視されず、オモテノマの飾り物を置く場所として機能している。屋内神が村落神に多大に影響されるのは特に神道の場合に顕著に見られ、神道では先祖の位牌を安置する棚を「ホトケダナ」や「センソダナ」と呼ぶ事例が

全く見られないことから分かる。種子島では法華宗の影響が強く信仰の至る所で見られるが、明治の廃仏毀釈後強制的に神道が導入された形跡もその残像は至る所で見ることができ、さらに面白いことに村落レベルや個人レベルになると合理的に解釈されて神仏混合となっっているのである。例えば、(一)住吉の場合では火の神を祀る家屋にその御神体として神社から持ってきた御札と寺院からの御札の二枚を合わせて貼っており、又、そのような祀り方をする事で火の神が信仰として形成されて精神生活の一部として充足しているものである。

屋内の諸神々の拝礼順位についても神道が影響している。神道の家ではカミダナを何よりも最優先させる。カミダナには先祖の位牌の数々を安置しているので、祖先崇拜が最優先されることになる。又、祖霊が神格化しており、他の屋内神とは性格が異なることになる。家の中の聖なる空間に神々を設けて信仰の対象とするのが床の間であるとすれば、家の中の暗黒、未知なる空間にも神々を設けて信仰の対象としているのがとりわけ便所神であると言える。その他に日常生活に深い関わりを持つ火の神などもむしろ聖なる空間の一部と見て良い。

先祖をオモテノマに祀るのは新しい習慣である。もともとは人々が日常生活上最も利用頻度の高いナカノマ、居間に安置されることが多い。その理由として、先祖は子孫を見守っており、又、先祖の霊が寂しがらないようにナカノマに祀るという事例を聞くことができる。床の間を設けているオモテノマは、その部屋自体が一種の聖域である。聖域に祖先の霊を置く場合、何らかの形で霊は神聖視されるもので、神道においては顕著に見ることが出来る。

床の間は神々のたまり場である。家の中に持ち込まれる神々は床

の間に集約される。職能神のほとんどはこの床の間に祀られていることから、普通は屋内神の順位として最も重視されるのは床の間全体に祀っている神々ということになる。神道でない場合、床の間や火の神と仏壇の先祖は根本的に性格が異なる神である。

この、床の間の由来については、一般民家で座敷の上座に床を設けるに至ったのは近世で、広く普及したのは近代に入ってからであると考え、室町時代の書院造に伴った押板が原形と言われている(註1)。香炉や花瓶、燭台などの三具足を置いたところであり、上流貴族の方から普及した産物である。床の間に合わせて、畳敷きが現れたのも近世に上流の邸宅や寺院からであり(註2)、上からの伝播である。

床の間を設ける座敷についても、このような来客の接待の部屋は書院造の形式が完成した後、江戸時代の初めごろから農家にも普及しており(註3)、さらにこれは生活の必要から生まれたものではなく、代官や村役人を接待するために取り入れ、それが波及したものである(註4)。

このように見ると屋内に座敷を設ける以前の信仰形体が問題となる。今日、オモテノマとして広く普及している部屋は、その成立においてほとんど必然性のなかったものであり、上流階級からの普及で設けられ、さらに付加して神聖なる空間として神々が集約されると言った信仰が誕生したと考えるのが妥当であろう。

一般の民家については「石山寺縁起」や「信貴山縁起」に描かれている家屋が重要な最古の史料となる。このうち「信貴山縁起」に描かれている、延喜加持巻の勅使が信貴山に向かう途中の風景の山中の民家を見ると、この家は屋根だけで壁が描かれていない。省略したものではないかと思われるが、他の絵巻などにも壁がないもの

もあり、又あってもきわめて低いもので、竪穴式住居であることがうかがえる(註5)。

それまでの信仰形体については、神聖なるものを屋内に持ち込むことがなく、又、そのような上で精神生活が構成されていたものと考えられるのである。

2 村落神について

村落で神々を祀り信仰の対象とする場合、村落が一つの共同体として強いつながりを持った上で成立する。共同体としての連帯感が前提となるもので、この意味で村落が漁村であれば職能神を兼ねて村落神としてエビスサマが祀られる。(一)住吉ではエビスサマを村落で祀っているが、住吉は昔から天然の良港であり職能神Ⅱ村落神であることがエビス成立の大きな要因であると共に、住吉神社の成立もこのような背景によるものと思われる。エビスは漁業の神様で、住吉神社は航海の神様である。いずれも住吉の村落神として漁業を営む者にとっては精神生活上なくてはならない神々である。しかし、聞き調査による限り、今日では住吉村落のエビスと神社は別々に機能している。漁師は主としてエビスを管理しており、住吉神社は無縁と行っても過言ではない。むしろ現在でも住吉に住む人々にとってはどちらも村落神である点が変わりがないが、村落内でも信仰される対象が異なっていると考えられる。明治の廃仏毀釈後は住吉をはじめ数村落の代表的な神社として広く参拝されることもあり、単に航海安全の神としての性格だけでなく様々な利益が付加されたのではないかと思えるのである。

住吉をはじめ、(二)現和でも、民家のオモテノマに村落神である神社の分社を祀っている事例を見ることができた。分社を祀る必要性

については実用的な側面を見ても、住吉神社は境内に至るまでの階段が長く小高い丘となっており、長老が参拝するには不便であること、風本神社の場合は集落から神社までの距離が長く、頻繁に参拝することができないことなどが挙げられる。分社を祀る家ではカミダナは神格が低く、むしろ先祖霊そのものの性格が濃くなると考えられる。

いずれにせよ村落神は、屋内神ほどではないにせよ村落の生業を色濃く反映しており、共同体としての強固な基盤の上に信仰が成立している。

参考文献

註1・2・3・4

大塚民俗学会編『日本民俗事典』（昭和四十七年 弘文堂）

註5

宮本常一著『絵巻物に見る日本庶民生活誌』（昭和五十六年 中公新書）

小野重朗著『九州の民家』（昭和五十七年 慶支社）

杉本尚次著『九州地方の民家』（昭和五十二年 明玄書房）

下野敏見著『種子島の民俗Ⅰ』（昭和五十七年 法政大学出版局）

『増田の民俗誌』（昭和五十九年 中種子町立歴史民俗資料館）

伝承者（敬称略）

（中種子町増田大塩屋）

金城 樽（M35・2・2生）

金城 カマル（M36・12・16生）

（西之表市現和武部）

榎本 貞彦（M36・4・16生）

鮫島 紀子（T15・2・11生）

池田 感（M42・5生）

（西之表市住吉）

深田 ミサ（M28・1・2生）

上妻 利彦

（西之表市國上 寺之門）

河内市 彦（S5・10・25生）

家の中の神仏

姫野 智雄

一、はじめに

今回の種子島民俗調査は、自分にとっては二回目である。調査のやり方も大体分かってきて、今回の調査では「家の中の神仏」というテーマで調査することとなった。

今回の調査地は、西之表市を中心に、中・南種子町を廻ったが、調査資料の中で、西之表市の調査資料を中心にみていきたいと思う。

また、農業・漁業それぞれの家の中の神仏を調査することができたが、その他に、鍛冶屋の家の中の神仏を調査することができた。そして宗教についても注意していかねばならぬが、今回の調査では、神道、法華宗の二つのみであった。

農業と漁業、神道と法華宗それらを混合してしまふことをさげ、西之表市を中心にみていき、全国的な視野の中でも、「家の中の神仏」を見ていこうと思う。

二、概要

まず、最初に収集できた「家の中の神仏」を、それぞれ種類別に事例をあげていき、簡単に感想を述べる程度にしたい。そして詳し

い考察は後にまわす。

収集できた「家の中の神仏」は、先祖棚、火の神、大黒様、船神様、福の神、テース（亭主）柱の紙札、オカドギサマの八つである。その他に、屋敷神ではあるが地神、それに水神もあげておく。

1 先祖棚

・ 事例 1

この家は、神道であり農業である。先祖棚は、カミダナ（神棚）と呼ばれ、上の座と呼ばれる部屋の床の間に厨子型の棚があり、そこに位牌を並べてある。左に古い位牌、右に新しい位牌というふうくに三つ並べてあった。正月には、餅や雑煮を供える。盆には、位牌を床の間に並べる。精霊はカミ様と呼ばれ、十三日の晩に来て、十六日の明け方帰るといふ。供える料理は、十四日の朝から十六日の朝まで一日三食分である。朝はご飯に、にしめ、酢の物で、昼は、小豆にそうめんなど、晩には餅、お菓子などをあげた。十五日の昼には、ユリの根を供え、晩にナガマキをあげ、そのナガマキをさげたあとにツノマキを供えるという。ユリの根は船のかわりでカミ様が船に乗って帰るようにと供えられ、ツノマキをおみやげにするという。

年忌は、一、三、七、十三、二十三、三十三、四十九年忌の祭りをする。葬式の際に位牌を子供の数だけ作っておき、分家の時に持たせると言う。

・ 事例 2

この家は、法華宗であり農業である。先祖棚は仏壇であり、厨子型のものが床の間の横の壁に作られている。位牌は位牌箱の中に納められており枚数は二枚である。新しい位牌が前面に見えるように

なっている。また、仏壇の中に天照大神の紙札を貼っている。

盆の時には、十三日は前準備で家の中を掃除し、十四、十五日に位牌を床の間に並べておき、十六日に精霊送りをし終わったとして仏壇にまいる。位牌は、十三日の夕方に出して並べ、十五日の夕方に戻す。

・ 事例 3

この家は、法華宗で漁業である。先祖棚は仏壇であり、精霊を祖先のカミと呼ぶ。位牌は右が古く、左に新しいものを置く。盆には床の間におろし、供花を飾り、ごちそうを供える。供花は、シキビに百日草など色花をつける。まず十三日の晩、正確には十四日の午前一時頃、米団子をしてお茶をあげる。これは祖先のカミが家に帰ってきた、その時に供えるというものである。その家の主人の奥さんだけが起きておいて、食事も供え線香をあげて寝る。翌朝、十四日の朝一番に家族全員で線香をあげるという。供える食事は、朝に団子、砂糖、お茶、昼にご飯、にしめ、夕方おやつとして豆、から芋、すいか、夜にはそうめん、ところ天などである。また、十五日の昼にはユリの根をだし、それだけ夜までだしたままにしておく。祖先のカミが船にして帰るのだと言う。十四、十五日のどちらかに師匠さんが来てお経をあげる。正月にはお餅を飾るだけである。

四十九年忌のテアゲの際に位牌を墓の横にうめ、墓石をその上に倒すという。年忌は、一、三、十三、二十三、三十三、四十九年忌であった。

以上、三つ主な事例をあげたが、神道では神棚、法華宗では仏壇であり、いずれも上の座の床の間の横にあった。位牌は四十九年忌がすむまでのものを先祖棚に置くのが古い形態らしく、四十九年忌以後のものを置いてある家は、その家の人が面倒くさがってしな

った場合と、分家した時に、今までの祖先の神を全てとする場合のみであった。よって、先祖棚の常在の霊は、四十九年忌の終わらない霊のことであろうと思う。

漁業と農業の家での差はそれほど見られなかった。法華宗の場合、その師匠による差があると考えてもいいように思われる。例えばテアゲの際、位牌の処理に墓の横に埋める場合と燃やしてしまう場合と、師匠さんによる違いが見られる。

先祖棚の管理者だが、家の主人の奥さんが主にする事例が多かった。家の主人が管理者であるという事例は一つしか見られなかった。調査の数が少ないので、確かな事はいえないが、古くは家の主人がそれであったであろうと思われる。女の人がするようになったのは、便宜上であろうと思う。

以上、簡単に感想を述べたが、先祖棚ほどの家にも見られるものでもあり、他の神様との関連からも考察していきたいと思うが、それは後にまわしたい。

2 火の神

・ 事例 4

この家は、法華宗で漁業である。台所のガス台の近くの柱に御札を貼り、その柱に花入れを置きマツをさしてある。この紙札を指して火の神と呼んでいる。紙札は法華宗の師匠さんから年一回、正月の時にもらう。正月と十五夜に餅を供えるという。女の人が管理し、火を安全に使うようにという意味でまっつてあると言う。

また、火の神にまつわるおもしろい話を聞くことができた。誰とどうわけではないが、ある日突然、頭や足が痛くなったりしたとき祈禱師に相談に行くと、山の神やら水の神などをひよんなことか

ら驚かしたために、山の神、水の神が怒ってそうしている。だから、火の神の前でことわりを言いなさい、と言われたということがあったそうだ。つまり、火の神を通して山の神あるいは水の神に謝りを入れるというわけである。

・事例5

この家は神道である。炊事場の柱に棚を設け、花を置き、神体はなく、札もない。普段はマツをさしてある。正月には餅を飾るが、花もマツも正月元旦に新しく供え、六日の日にとりかえ、イゲの木を二十日までさしておくという。イゲの木とは、よく理解できなかったが、タブの木の皮をらせんにまきつけ、火であぶる。するとタブの木の皮をまいていた所だけ黒くこげる。これを刀みたいになるといっていたが、それをイゲの木でやるようだ。詳しくは聞けなかったので自分の誤解であるかもしれない。管理者は女の人である。

以上、二つの事例をあげたが、火の神もどの家でもみるんことができた。祀り方としては、柱に紙札を貼るだけのものが多かった。神体のあるものは見ることはなかった。松の枝を供えるのがよいとし、正月の他に、十五夜、十三夜にも餅、団子を供える例も見られた。棚を作るところでは、シメナワを正月に飾る。管理者は女の人がほとんどで、昔は男の人が供え物をあげていたりしたという話も聞いた。

なお、事例5でイゲの木のことを述べたが、よく調べていないために述べるべきではなかったかもしれないが、今後、くわしく調べてみてよいものだと思います。

3 大黒様

大黒様についての事例は一つであり、しかもその家では、東京の知人から勧められて祀ってあるということ、その家の人も体の健康のため、ということと置いてあるという。船神様のように祀られていた。

4 船神様

・事例6

この家は法華宗で漁業である。床の間の端に小祠を作り、神体として網にひっかかった石を置いてある。また、紙札も置いてあった。正月に餅を供え、盆には床の間からおろしてしまう。もちろん、船を持っていく家であり、漁に出る時に、よか漁が出来るようにと押んで行く。また、正月初めて漁に行つて捕れた魚を供え、その後雑煮にして供えるという。

この事例の他にも船神様の例はあったが、神体は同じように網にひっかかった石であった。船神様あるいは船の神と呼ばれていたが浜辺や岩の上などにあるエビス様と同じ神様であろうと思う。船霊様とも似てはいるが、その神体からして違うと思う。

5 福の神

この事例も一つだけである。農業で神道の家である。ヨコザと呼ばれる奥の間にあり、神体はない。正月にシメナワをするだけで特に祀ることはないと言う。火の神と同じようにマツの枝を供えていた。

ヨコザと呼ばれる部屋は現在物置の部屋であり、古くは寝間であったそう、福の神は納戸神と思われる。

6 テース柱の紙札

種子島の家の間取りは、基本的には田の字型であり、その中心の柱をテース（テッシュ）柱と呼ぶ。この柱に、神道なら天照大神の紙札、法華宗なら師匠からもらう紙札を貼る。その意味として、家の中心の柱であり、家内安全という意味であるという。

家の中心にある柱をテース（テッシュ）柱と呼び、建築物である家の中心を住人である家族の中心である亭主と結び付けて考えている。そして、その中心である柱に紙札を貼ることにより、家およびその住人の無事を意味するというわけである。

7 オカドギサマ

この事例も一つだけであった。正月にこの家では床の間に、男の数だけ餅を二つ重ねて置くが、そのとなりに餅を同じように二つ重ねたものを二つ置く。これをオカドギサマに供えたとして、オカドギサマを祀る。オカドギサマは門松を祀ってある神様であると言ふ。

祀る期間は聞き忘れたが、正月だけの神である。たった一例しかないのははっきりとしたことは言えないが、オカドギサマは門木に神が依りつくところであるという考えがあり、その神は正月に来訪する神であるという思想があるのである。

また、別の家であるが、シメナワを二十日におろし取っておいて、田植えの時に水口に飾るといふ事例もある。前の事例とあわせてみて、面白い事例であると思う。

8 地神

実際、地神を祀っているのは一例のみしかみることができなかった。

た。しかし、地神という神様は人々の神観念のなかにしっかり存在しているようだった。

その家では屋敷内の隅に石塔をたてて祀ってあった。その石塔には何も刻まれてなく、正月と盆に拜む程度だそうである。

9 水神

水神、具体的には井戸の神という形である。水と関わることは、水神が宿っていると思われる。

正月に井戸にシメナワをはり、元旦の朝にオモチを二つ重ね、ダイイのせ、米をひとつかみ紙に包んで井戸の前に供えたという事例がある。

また、正月床の間に、水神様の分のお餅を飾るといふ事例もあった。

以上、収集できた家の中の神仏をあげてみたが、他に、水棚というものの事例もあった。現在では、もう行われなくなったそうだが、盆の時に縁側に水棚と呼ばれる臨時の先祖棚を設けたそうだ。これは、無縁仏のためのものだそうである。

これら、いくつか神を収集することができたが、それらの神がそれぞれつながりがあるのではないかと思われるものもある。次に述べてみたい。

三、考察

盆の時に、仏壇あるいは神棚に置いてある位牌を床の間に並べなおすという事例があった。床の間は上の座と呼ばれる部屋にあつた。普通、客が来ると下の座に通し、上客が来た場合に上の座に通

す。「中世武士社会の接客法が普遍化する以前、貴人を招くときは、別に仮屋が作られていたのであるが、やがて母屋に合併され、客舎が常設されるに至った」(宮田登著『女の霊力と家の神』)、つまりその一室が座敷であり、種子島の上の座である。そして、その部屋にある床の間は、本来は客人のための寢床になっていた。

この床の間に位牌を並べ、祖霊を迎える。ここには、床の間は客の座であると同時に、祖霊あるいは神の座であるという意識があるのではないだろうか。

盆行事の際に種子島では、水棚と呼ばれる無縁仏のための精霊棚を作る。水棚は、笹竹で作られ、芭蕉の茎を小さく刻んだものに洗米を混ぜた水の子と呼ばれるものを供える。この水棚を見ても想像できるように、古くは盆祭りの時に、特別に精霊棚を作っていたと考えられ、現在はその場所が客の座であった床の間にあるのである。

正月にやってくる神として種子島ではオカドギサマがある。このオカドギサマは全国的には歳神であると考える。そして、来臨してきた神は、床の間に通され祀られる。これは、床の間にオカドギサマのための餅を飾ることからわかる。この歳神であるオカドギサマは祖霊と同じ性格であると思う。

さらに正月に飾ったシメナワを二十日にとり下げたあと、しまっておき、田植の際に水口に飾るという事例があった。また、「今でも上西、現和、下西などで、ナンドの壁や土間の壁などにオーバンを飾ってある家を見かけるが、昔は全島的にやっていた。」このオーバンはシメナワと似た形状のものであるが、正月の際に張られるものである。「オーバンは正月後もそのまま飾っておいて春の彼岸の中日の種子播き祝いの時、田の水口に持って行って供え、餅も供

えて拜むという農耕儀礼に使用する」(下野敏見著「西之表市民俗誌」、『南西諸島の民俗Ⅰ』)。

つまり、家に来臨してきた神と、田の神とは同じものであることが推察できる。しかも、その神は村落共同体の神でなく、その家」との田の神であり、家の神と通じるものがある。正月に来臨した神、それは祖霊と結びつき、田の神として田植えの際現れる。

では、家の中の神でも中心的な神である火の神とのつながりはどうであろう。火の神に、旧暦八月十五夜に餅、団子を供えるという事例があった。十五夜は、稲作の収穫祭であるともいえる。また、別に正月十四、十五日には穂垂れひきという行事がある。「昔は五升炊きの大釜の上の、火の神を祀ってある所にスクボのついたススキを供えておき、春の彼岸の田の神祭りの時、田の水口に飾り、やがて田を耕す時に焼き捨てるものだった」(下野敏見著「西之表市民俗誌」、『南西諸島の民俗Ⅰ』)という事例もある。これらは、かなり田の神と火の神のつながりを示すことができるものと思う。

以上、述べてきたことをまとめると次のようになる。祖霊と歳神は同じ神である。その歳神は田の神と同じ神である。しかも、田の神は家ごとの神である。そして、その田の神は火の神と密接につながっている。つまり、祖霊―田の神―家の神(火の神)というように三つは同じ性格を持つものと思われる。そして、それらの祭場としての家が存在すると思われる。

今まで述べてきたことは、あくまでも農村のことである。では、漁村ではどうであろうか。漁村の家の中の神で注目するのは、船神様であろう。これは、浜辺やその近くの岩場に小祠を設けて祀っているエビスと同じ性格のもので、これも、祭場の移動として捉えることが出来ると思う。家が祭場として機能しているのである。

さらに、祭場という点を考えてみたい。今までに述べたように、古くは家の外が祭場であったのが、家の中に入ってきたということ考えたのであるが、家の居住空間における祭場を、主に表の間、裏の間に分けて考えてみたい。

表の間の神は、仏壇であり神棚である。裏の間では、火の神であり、福の神（納戸神）である。福の神（納戸神）は一体何の神であるのだろうか。前にあげたオーバンの事例をみると、田の神＝歳神とのつながりが見られる。石塚尊俊氏は「納戸神をめぐる問題」(『日本民俗学』二巻二号)(注一)の中で、納戸神の正体が穀霊だといっている。さらに納戸だけでなく、倉にも祀られた事例を報告している。

つまり、納戸(ヨコザ)が出産をする部屋であること、夫婦の寝間であったことと結びつけて考えれば、納戸は、稲の穀霊が毎年繰り返し誕生する場であり、そこには、「多産神」と作り神との存在を前提にして両神が合体した一神としてのナンド神(村武精一「家のなかの女性原理」、『日本民俗学大系10』)があるのである。

火の神を祀り、納戸(ヨコザ)の生殖機能を持つ福の神、納戸神(田の神・歳神)を祀る女性の存在が、裏の間において大きくクローズアップされる。

表の間をみてみよう。一般に男と関連する空間であるが、そこに先祖棚があり祖霊を祀っている。納戸(ヨコザ)は出産の場であり、死者を置く場所でもある。しかも前に述べたように穀霊を祀る神もある。本来なら、祖霊はこの裏の間にもってくるべきものではなかったのではないだろうか。

先祖棚は、本来は臨時に設けるものであり、位牌なども古くは、「日本の伝統的な斎木で、依代としての常緑樹の小枝だった」(宮

田登「女の霊力と家の神」)のが前型である。それらが、外来要素である仏教と結びつき、家の中へと入り込んでいく場合に表の間である座敷(上の座)で受容されたのであろう。

このことは、本来裏の領域で祀られるべき祖霊が、仏教の介入により、精霊棚から常設の、しかも表の間である上の座に祀られたことである。つまり、裏の領域であった精霊棚に祀られる祖霊が表の間の仏壇に移動したのであり、言わば、女の家としての世界が、男上の座＝仏壇に示される外来要素の拡大、伸張に侵食されているといつてよいだろう。この状況が種子島においても見られる。

四、あとがき

今回の調査をもとに、自分の考えるところを述べてきたが、自分だけの調査をして得た資料では足りず苦労した。本来なら、あらかじめ問題意識を持って調査に臨み、そのための資料を集めるという形が良いのであろうが、今回、自分は逆に資料をながめてみて問題を見つけるといった形になった。よって、資料が不足であることは否めなかった。

「家の中の神」というテーマは、大きな関心を自分に与えてくれたものと思う。今後とも、数多くの問題点を見ていきたいと思う。

注一 村武精一「家のなかの女性原理」、『日本民俗文化体系10』のなかの一文である。

参考文献

下野敏見著『南西諸島の民俗I』一九八〇年 法政大学出版局

宮田登著『女の靈力と家の神』一九八三年 人文書院
村武精一著『家のなかの女性原理』『日本民俗文化大系10』昭和六十年 小学館

伝承者名(敬称略)

下園ハルエ(T4・3・7)	庄司浦二五
下園コワ	庄司浦二八
平原ハナ(T39・7・9)	軍場二二三二八
アカサキ サダ(M31)	軍場
鎌田一雄(M42・11・20)	軍場二八一八
山口アキヒコ(M39・10・26)	軍場二八三七
寺内弥六(M35・7・30)	南種子町中之下、里
上妻宗美	里一一六四
野平隆信(S10・7・1)	中野一〇二二三
浜添 貢(T3)	池田東町一三一
中島周三	洲之崎
柳田喜平次(M32・4・10)	浦田一二
大川ケサ(T4・11・20)	湊一二二八
兼下アヤ(T9・9・8)	住吉里ノ町四六七九
長野ヒデ	住吉三二六三